

北陸新幹線関係発掘調査報告書 X VIII

南 押 上 遺 跡

2 0 1 1

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書ⅩⅧ

みなみ おし あげ
南 押 上 遺 跡

2011

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京駅を起点として長野市・上越市・糸魚川市・富山市・金沢市・福井県小浜市を経て、新大阪駅に至る総延長700kmの路線です。全面開通により、北陸地方と関東圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に伴って実施された糸魚川市南押上に所在する南押上遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、古墳時代前期の遺構・遺物が多く見つかり、集落が営まれていたことが分かりました。多数の遺構の中には、県内でも大型に属する竪穴建物や県内初例となる石囲炉もあります。また、遺物では多数の土器のほか、玉の成品・未成品や玉作の工具類が多く出土しました。このことからこの集落では玉作が盛んに行われていたことも分かりました。今後、古墳時代玉作研究の重要な資料になるものと考えています。

これらの発掘調査で得られた資料や本報告書が、地域の歴史資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に対し、多大な御協力と御理解をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元住民の方々、また、発掘調査から本書の刊行まで格別な御配慮をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局、同糸魚川鉄道建設所に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例 言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市南押上2丁目ほかに所在する南押上遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は北陸新幹線の建設に伴い、(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局(以下、鉄道・運輸機構)から新潟県教育委員会(以下、県教委)が受託したもので、調査主体である県教委は、財団法人新潟埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団)に実施を依頼した。
- 3 埋文事業団は、発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社吉田建設見附支店(以下、吉田建設)に委託して、平成20年度に発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料(含観察データ)は、一括して県教委が保管している。データの有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、南押上遺跡の略記号「ミナミ」とし、出土地点や層位を続けて記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 本書に掲載した遺物番号は種別を問わず通し番号とし、本文及び挿図・観察表・図版の番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用・参考文献は、著者及び発行年(西暦)を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 調査成果の一部は、現地説明会(平成20年8月23日実施)、広報紙「埋文にいがた」No.65(平成20年12月17日発行)、『新潟埋蔵文化財調査事業団 年報 平成20年度』(平成21年10月20日発行)、文化財保存新潟県協議会第11回大会(平成21年10月24日開催)等で公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。
- 10 自然科学分析はパリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 11 遺構の測量・図化は株式会社東北測量設計社に、また航空写真撮影はJ・T空撮にそれぞれ委託した。
- 12 石器・石製品の岩石名については、糸魚川市フォッサマグナミュージアム竹之内 耕嗣助事の指導を得て、水落が肉眼観察・同定した。
- 13 整理及び本書作成に係る作業は、吉田建設埋蔵文化財事業部員がこれに当たり、本書の執筆は、小池勝典・水落雅明・田代郁夫・有馬多恵子・植木紀子(吉田建設埋蔵文化財事業部)、高橋保雄(埋文事業団)が当たった。編集は小池が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第1章1・2A……………高橋 保雄	第II章1・2、第IV章3D・3F……田代 郁夫
第IV章3G・4B……………有馬多恵子	第IV章3E……………植木 紀子
第V章2D、第VI章2A～2D……水落 雅明	第VI章……………パリオ・サーヴェイ株式会社
その他……………小池 勝典	

- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。(敬称略 五十音順)

相沢 央 相田 泰臣 相羽 重徳 青山 博樹 赤澤 徳明 浅野 良治 甘粕 健
諫山えりか 石川日出志 伊藤 雅文 及川 良彦 加藤由美子 鹿取 渉 金子 拓男
川村 尚 菊地 真 木島 勉 笹澤 正史 高橋 浩二 竹之内 耕 田嶋 明人
土田 孝雄 寺村 光晴 栃木 英道 中嶋 義直 橋本 博文 久田 正弘 廣瀬 時習
深澤 敏仁 深田 浩 藤田富士夫 松本 岩雄 水澤 幸一 宮島 宏 宮本長二郎
山岸 洋一 横澤 真一 Simon Kaner 糸魚川市押上区 糸魚川市教育委員会
フォッサマグナミュージアム 鳥根県立古代出雲歴史博物館 富山県朝日町まいぶんKAN
(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線第二建設局 同糸魚川鉄道建設所

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘確認調査	2
B 現地発掘作業	3
C 整理報告作業	4
3 調査体制	5
A 試掘確認調査	5
1) 平成17年度	5
2) 平成18年度	5
B 現地発掘作業	5
C 整理報告作業	6
1) 平成20年度	6
2) 平成21年度	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の概要	13
1 調査区とグリッドの設定	13
2 基本層序	14
3 調査区の概要	16
第Ⅳ章 遺 構	17
1 概 要	17
2 記述の方法と遺構の分類	18
A 基本方針	18
B 遺構の種別・遺構名	18
C 遺構の形態及び規模の分類・観察表の記載	19
3 古墳時代の遺構	20
A 竪穴建物	20
B 平地建物	23

C	掘立柱建物	25
D	土坑	27
E	溝	36
F	旧河川 (SD04)・小ピット列	39
G	円礫集中遺構	40
4	そのほかの時代の遺構	40
A	弥生土器集中遺構	40
B	木材・杭集中遺構	41
C	祭祀遺構	42
D	自然地形の高まりとピット群	43
第V章 遺物		44
1	概要	44
2	古墳時代の遺物	46
A	古墳時代前期の土器	46
1)	分類	46
2)	各説	49
B	古墳時代中・後期の土器	59
C	土製品	59
D	石器・石製品	60
1)	記述の方法	60
2)	石器・石製品の分類	60
3)	石材の分類	64
4)	石器・石製品各説	64
E	木器・木製品	82
3	そのほかの時代の遺物	82
A	土器	82
1)	弥生時代の土器	82
2)	古代以降の土器	82
B	木器・木製品	83
1)	農具ほか	83
2)	杭・杭状木製品	84
C	金属製品・銭貨	85
第VI章 自然科学分析		86
1	はじめに	86
2	遺構・遺物及び堆積層の年代観	86
A	試料	86
1)	遺構・遺物	86
2)	堆積層	86
B	分析方法	86
C	結果及び考察	87
3	古環境及びびネ属の消長	88
A	試料	88
B	分析方法	89
1)	珪藻分析	89
2)	花粉分析	90

3) 植物珪酸体分析	90		
C 結 果			92
1) 珪藻分析	92	2) 花粉分析	93
3) 植物珪酸体分析	94		
D 考 察			98
1) 堆積環境	98	2) 古植生	98
3) 植物資源利用	100		
4 木材利用			101
A 試 料			101
B 分析方法			101
C 結 果			101
D 考 察			102
5 粘土の由来			103
A 試 料			103
B 分析方法			103
C 結 果			103
D 考 察			104
第Ⅶ章 ま と め			108
1 南押上遺跡出土土器の編年の位置付けとその特徴			108
A 土器群の編年の位置付け			108
B 器台・高杯脚部の透かし穴の変遷			111
C 底部に平行葉脈圧痕を有する土器について			112
2 南押上遺跡における古墳時代前期の玉作について			113
A 勾玉の製作			113
B 管玉の製作			116
C 棗玉の製作			119
D 小 結			120
3 総 括			121
《要 約》			123
《引用・参考文献》			124
《別 表》			129
遺構観察表			129
遺物観察表			133

挿図目次

第1図	北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置	1	第23図	包含層出土石器・石製品分布図(3)	79
第2図	試掘確認調査トレンチ位置図	2	第24図	包含層出土石器・石製品分布図(4)	80
第3図	調査・整理の経過	4	第25図	包含層出土石器・石製品分布図(5)	81
第4図	南押上遺跡周辺の主な道跡	9	第26図	杭の形態分類	84
第5図	調査区・グリッド設定図	13	第27図	2・3区土層対応模式図	89
第6図	遺構の平面形態と断面形態の分類	19	第28図	主要珪藻化石群集の層位分布	92
第7図	遺構埋土の堆積形状の分類	19	第29図	2区(2D区)における花粉化石群集の層位分布	95
第8図	1次炉・2次炉概念図	20	第30図	植物珪酸体含量の層位的変化	97
第9図	包含層出土土器分布図(重量)	45	第31図	重軽鉱物組成	103
第10図	古墳時代前期の土器分類図	47	第32図	珪藻化石	107
第11図	石器・石製品の計測位置	60	第33図	花粉化石	107
第12図	勾玉の長幅分布による分類	61	第34図	植物珪酸体	107
第13図	勾玉の長厚分布図	61	第35図	木材	107
第14図	勾玉未成品の作業進度による分類	61	第36図	重軽鉱物	107
第15図	管玉の長幅分布による分類	62	第37図	器台・高杯脚部の透かし穴配置	112
第16図	管玉未成品の作業進度による分類	62	第38図	器台・高杯脚部における透かし穴配置の時期別割合	112
第17図	葉玉の形態分類	62	第39図	ヒスイ原石の長幅分布	113
第18図	葉玉未成品の作業進度による分類	63	第40図	勾玉の製作工程	114
第19図	砥石の形態分類	63	第41図	管玉の製作工程	117
第20図	内磨砥石の形態分類	63	第42図	葉玉の製作工程	119
第21図	包含層出土石器・石製品分布図(1)	77			
第22図	包含層出土石器・石製品分布図(2)	78			

表目次

第1表	主要グリッド杭の座標	13	第14表	珪藻分析結果	91
第2表	遺構出土土器集計一覧表	58	第15表	珪藻分析結果凡例	92
第3表	出土石器・石製品総点数	60	第16表	花粉分析結果	94
第4表	SI01 石器・石製品出土量	65	第17表	植物珪酸体含量(1)	96
第5表	SI02 石器・石製品出土量	67	第18表	植物珪酸体含量(2)	96
第6表	SK34 石器・石製品出土量	67	第19表	植物珪酸体含量(3)	96
第7表	各遺構石器・石製品出土量(1)	72	第20表	樹種及び炭化物同定結果	102
第8表	各遺構石器・石製品出土量(2)	73	第21表	重軽鉱物分析結果	104
第9表	各遺構石器・石製品出土量(3)	74	第22表	遺構出土主要土器群の福年観	111
第10表	包含層石器・石製品出土量	75	第23表	勾玉・未成品出土数	113
第11表	3区出土杭の分類・法量一覧	85	第24表	管玉・未成品出土数	116
第12表	放射性炭素年代測定結果	88	第25表	葉玉・未成品出土数	119
第13表	暦年校正結果	88			

図版目次

[図 面]

図版 1	調査範囲と遺跡周辺の地形
図版 2	遺構全体図
図版 3	1区全体図
図版 4	2区全体図
図版 5	3区全体図
図版 6	2区分割図 (1)
図版 7	2区分割図 (2)
図版 8	3区分割図 (1)
図版 9	3区分割図 (2)
図版 10	遺構個別図 (1) SI01 ①
図版 11	遺構個別図 (2) SI01 ②
図版 12	遺構個別図 (3) SI02・03
図版 13	遺構個別図 (4) SI04・05
図版 14	遺構個別図 (5) SI06・07
図版 15	遺構個別図 (6) SI09・10・13
図版 16	遺構個別図 (7) SI08・11・12
図版 17	遺構個別図 (8) SB01・02
図版 18	遺構個別図 (9) SB03・04
図版 19	遺構個別図 (10) SB05・06
図版 20	遺構個別図 (11) SB07・08
図版 21	遺構個別図 (12) SB09、SK21・23・30・32・35・40
図版 22	遺構個別図 (13) SK12・18・31・34
図版 23	遺構個別図 (14) SK08・15・16・17・20・25・26・27・28・29・38
図版 24	遺構個別図 (15) SK04・07・09・10・11・39・48
図版 25	遺構個別図 (16) SK02・05・06・37
図版 26	遺構個別図 (17) SK14・19・33・49
図版 27	遺構個別図 (18) SK03・36・41・42
図版 28	遺構個別図 (19) SK45・46・47、SD14・24・50
図版 29	遺構個別図 (20) SD12・17・25・30・31・32・44・46・47・48
図版 30	遺構個別図 (21) SD06・08・10・27・37・38、P06・67・85・329
図版 31	遺構個別図 (22) SD04 (旧河川) ①
図版 32	遺構個別図 (23) SD04 (旧河川) ②
図版 33	遺構個別図 (24) 木材集中遺構
図版 34	遺構個別図 (25) 杭集中遺構
図版 35	遺構個別図 (26) 杭 9・23・25・42・46・52・54・56
図版 36	遺構個別図 (27) 杭 44・53-1・53-2・57・60・62・77・80・86

図版 37	遺構個別図 (28) 円礫集中遺構
図版 38	遺構個別図 (29) 弥生土器集中遺構
図版 39	古墳時代前期の土器 (1) SI01 覆土最上～上層・覆土中位
図版 40	古墳時代前期の土器 (2) SI01 覆土下層～床面直上
図版 41	古墳時代前期の土器 (3) SI01 屋内土坑・貼床内～掘形覆土・SI02・SI03 覆土最上～上層①
図版 42	古墳時代前期の土器 (4) SI03 覆土最上～上層②・覆土下層～床面直上
図版 43	古墳時代前期の土器 (5) SI04・05・06・07
図版 44	古墳時代前期の土器 (6) SI10・11・12・13、SB01・03・04・05・06・08
図版 45	古墳時代前期の土器 (7) SK18・21・23・35・40
図版 46	古墳時代前期の土器 (8) SK15・16・26・34・38
図版 47	古墳時代前期の土器 (9) SK07・08・09・10・11・27・28・31・48
図版 48	古墳時代前期の土器 (10) SK12 ①
図版 49	古墳時代前期の土器 (11) SK06・12 ②
図版 50	古墳時代前期の土器 (12) SK04・05
図版 51	古墳時代前期の土器 (13) SK33
図版 52	古墳時代前期の土器 (14) SK02・14・19・37・42
図版 53	古墳時代前期の土器 (15) SK36・49
図版 54	古墳時代前期の土器 (16) SK03
図版 55	古墳時代前期の土器 (17) SK45・46・47、SD14
図版 56	古墳時代前期の土器 (18) SD06・08・11・17・24・27・30・32・37・47
図版 57	古墳時代前期の土器 (19) SD04 (旧河川) 覆土最上～上層・川底付近、P06・329
図版 58	古墳時代前期の土器 (20) P18・56・57・58・75・104・145・174・295・299・379・380・403・405・512・594
	弥生時代の土器 (1) P435、3区弥生土器集中遺構
図版 59	古墳時代前期の土器 (21) 2区包含層①
図版 60	古墳時代前期の土器 (22)、弥生時代の土器 (2) 2区包含層②・3区包含層①
図版 61	古墳時代前期の土器 (23)、古墳時代中期の土器、弥生時代の土器 (3) 3区包含層②、古墳時代後期以降の遺物 (1)

- 図版 62 古墳時代後期以降の遺物 (2)・金属製品・銭貨
- 図版 63 古墳時代の石器・石製品 (1) SI01 ①
- 図版 64 古墳時代の石器・石製品 (2) SI01 ②
- 図版 65 古墳時代の石器・石製品 (3) SI01 ③
- 図版 66 古墳時代の石器・石製品 (4) SI02・03・04
- 図版 67 古墳時代の石器・石製品 (5) SI05・07・10, SB03, SK07・15・34・35
- 図版 68 古墳時代の石器・石製品 (6) SK04・05・06・08・09・12・31・33・37
- 図版 69 古墳時代の石器・石製品 (7) SK02・03・19・36・46・49
- 図版 70 古墳時代の石器・石製品 (8) SD06・08・24・30・37・47, P06・75・152・161・174・182・329・368・382・424
- 図版 71 古墳時代の石器・石製品 (9) SD04 (旧河川)、2区包含層①
- 図版 72 古墳時代の石器・石製品 (10) 2区包含層②
- 図版 73 古墳時代の石器・石製品 (11) 2区包含層③
- 図版 74 古墳時代の石器・石製品 (12) 2区包含層④
- 図版 75 古墳時代の石器・石製品 (13) 2区包含層⑤・3区包含層①
- 図版 76 古墳時代の石器・石製品 (14) 3区包含層②
- 図版 77 木器・木製品 (1)
- 図版 78 木器・木製品 (2)

[写真]

- 図版 79 2区近景
- 図版 80 3区近景
- 図版 81 2区・3区全景
- 図版 82 1区全景・SD04 東側拡張区北壁・3区包含層遺物出土状態・3区低地部木材等出土状態・各調査区基本層序
- 図版 83 SI01 ①
- 図版 84 SI01 ② 炉・屋内土坑
- 図版 85 SI02・03・04 ①
- 図版 86 SI04 ②・05
- 図版 87 SI06・07
- 図版 88 SI09・10・11・12
- 図版 89 SI13、2区ピット群、SB06・07
- 図版 90 SB08・09
- 図版 91 SK23・25・35
- 図版 92 SK12・34
- 図版 93 SK04・05・06・38
- 図版 94 SK02・19・33・37
- 図版 95 SK03・36・45 ①・49
- 図版 96 SK45 ②・46・47、SD14

- 図版 97 SD04 ①・08・30・37
- 図版 98 SD04 ②、P05・06・67・75・85・431
- 図版 99 木材・杭集中遺構
- 図版 100 杭 33・34・39・40・44・53-1・53-2・62・65・70・76
- 図版 101 弥生土器集中遺構、円礫集中遺構、2区包含層遺物出土状態
- 図版 102 遺物集合写真
- 図版 103 古墳時代前期の玉類製作工程別資料
- 図版 104 古墳時代前期の土器 (1) SI01 覆土最上～土層・覆土中位・覆土下層～床面直上①
- 図版 105 古墳時代前期の土器 (2) SI01 下覆土層～床面直上②・屋内土坑・貼床内～撮影覆土・SI02
- 図版 106 古墳時代前期の土器 (3) SI03 覆土最上～土層・覆土下層～床面直上・SI04・05
- 図版 107 古墳時代前期の土器 (4) SI06・07・10・11・12・13, SB01・03・04・05・06・08, SK18・21・35・40
- 図版 108 古墳時代前期の土器 (5) SK15・16・23・26・28・34・38
- 図版 109 古墳時代前期の土器 (6) SK07・08・09・10・11・12 ①・27・31・48
- 図版 110 古墳時代前期の土器 (7) SK12 ②
- 図版 111 古墳時代前期の土器 (8) SK04・05・06
- 図版 112 古墳時代前期の土器 (9) SK02・19・33・37
- 図版 113 古墳時代前期の土器 (10) SK03 ①・14・36・42・49
- 図版 114 古墳時代前期の土器 (11) SK03 ②・45・46・47、SD14
- 図版 115 古墳時代前期の土器 (12) SD06・08・11・17・24・27・30・32・37・47, SD04 (旧河川) 覆土最上～土層・川底付近、P06・104・299・329
- 図版 116 古墳時代前期の土器 (13) P18・56・57・58・75・145・174・295・379・380・403・405・512・594, 2区包含層①
- 弥生時代の土器 (1) P435、3区弥生土器集中遺構
- 図版 117 古墳時代前期の土器 (14) 2区包含層②・3区包含層①
- 弥生時代の土器 (2) 3区包含層①
- 図版 118 古墳時代中期の土器 3区包含層②
- 古墳時代後期以降の遺物・金属製品・銭貨
- 図版 119 古墳時代の石器・石製品 (1) SI01 ①
- 図版 120 古墳時代の石器・石製品 (2) SI01 ②・02 ①
- 図版 121 古墳時代の石器・石製品 (3) SI02 ②・03・04・05・07・10, SB03, SK07・15・34・35
- 図版 122 古墳時代の石器・石製品 (4) SK02・03・

04・05・06・08・09・31・33・36・37・46・
49

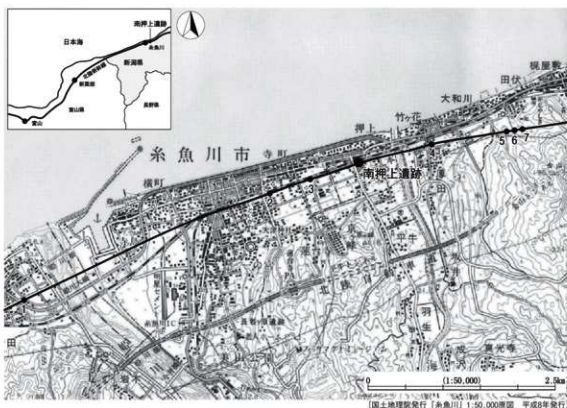
- 図版 123 古墳時代の石器・石製品 (5) SK19、SD06・
08・24・30・37・47、P06・75・152・161・
174・329・368・382・424、SD04 (旧河川)
- 図版 124 古墳時代の石器・石製品 (6) 2区包含層①
- 図版 125 古墳時代の石器・石製品 (7) 2区包含層②
- 図版 126 古墳時代の石器・石製品 (8) 2区包含層③・
3区包含層
- 図版 127 木器・木製品 (1)
- 図版 128 木器・木製品 (2)、石製品素材打点部・穿孔
当たり・穿孔はじめ・穿孔部断面拡大写真

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

北陸新幹線は「全国新幹線鉄道整備法」に基づいて建設される新幹線鉄道である。東京駅を基点として、上越新幹線高崎駅で分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・福井県小浜市などを經由し、新大阪駅に至る路線である。総延長700km（東京・高崎間の105 kmは上越新幹線と共用）のうち、高崎・長野間は既に平成9（1997）年10月に開業している。その後、平成10年3月には長野市を基点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長60 kmの工事実施計画が認可された。一方、上越市から富山市までの約110 kmの区間は、平成5年9月に糸魚川・魚津間が新幹線鉄道規格路線として工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越・糸魚川間及び新黒部・富山間の新規着工が認可された。

これを受けて、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。平成13年5月、鉄道・運輸機構から県教委が上越・糸魚川間の分布調査の依頼を受け、同年10月に埋文事業団が糸魚川市、西頸城郡青海町の調査を実施した。その結果、周知の大角地遺跡、須沢角地遺跡、姫御前遺跡を含む7地点で遺物を採集した。さらに地形的特徴や糸魚川地域の低地での遺跡の在り方から、遺物採集地以外の地点も含め、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等を知るため、試掘確認調査を実施して取り扱いを判断する必要があると回答した。



1 須沢角地遺跡 2 竹花遺跡 3 姫御前遺跡 4 反田南遺跡 5 田伏山崎遺跡 6 山岸遺跡 7 深谷遺跡

第1図 北陸新幹線の路線と調査遺跡の位置

平成17年2月、鉄道・運輸機構から糸魚川市押上地内の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成17年5月及び平成18年6月の試掘確認調査の結果、南押上遺跡は新発見遺跡として周知され、事業に係る3,970㎡の本発掘調査が必要と回答した。試掘確認調査の結果を受け、鉄道・運輸機構は県教委に対し、発掘調査の実施を要望した。県教委は平成20年3月に鉄道・運輸機構から受託し、同年4月から埋文事業団が本発掘調査に着手した。

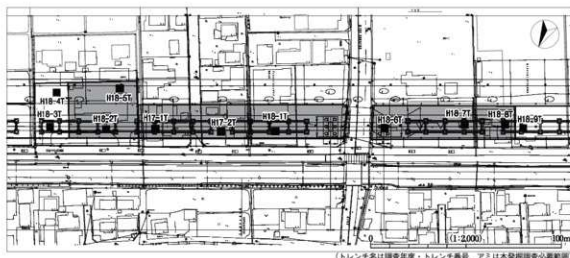
2 調査と整理作業

A 試掘確認調査

試掘確認調査は隣接地域も含め面積10,080㎡を対象に行った。現況は住宅地であることから、用地買収や住居移転の進捗状況により、平成17年11月16～29日と、平成18年6月8～23日の2回に分けて調査した。調査は対象範囲内に試掘確認トレンチ（以下、トレンチとする）を任意に設定し、バックホー及びび人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。トレンチは第2図のように、対象範囲内に11か所（平成17年は2か所、平成18年は9か所）設定した。

調査により、遺物はH17-1T・2T、H18-1T・2T・5T～8Tから古墳時代の土師器が出土し、遺物包含層も検出された。遺構はH18-1Tで古墳時代の土師器を含む土坑1基、ピット2基を検出した。一方、H18-3T・4T・9Tでは遺構・遺物が検出されなかった。

これらの結果を踏まえ、H18-2T～H18-8Tまでの本線部分、側道部分の3,970㎡を本発掘調査必要範囲とした。



第2図 試掘確認調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)

B 現地発掘作業

平成20年4月下旬から本格的な発掘調査に着手できるよう、4月7日から4月20日までの約3週間に事務所設置等の事前準備を行った。調査対象範囲を3区に分けて調査することとし、4月22日に1区から表土掘削を開始した。表土は、調査員の立会いのもと重機により掘削した。

1区では、試掘調査により遺物の出土量は僅少で、遺構の出土も希薄であることが予測されたため、調査区の南側約3分の1の幅のみ優先して重機で掘削を行った。予測どおり、出土遺物は古代の土師器小片がごくわずかであったことから、遺物包含層（基本層Ⅲ'層）についても重機で慎重に掘り下げた。並行して人力により調査区の壁面、及び遺構検出面と想定されたⅣ'層上面（Ⅲ'層の直下）の精査を行った。しかし、掘削した範囲内では遺構は全く検出されなかった。なお、齋申・枕状の木製品が出土した地点と、1区の西端部については、念のため本来の調査区の幅まで北側に拡張して掘削を行った。結局、いずれの拡張区からも遺構は全く検出されなかった。調査区壁面のセクション図作成及び写真撮影、調査区全体の写真撮影等を終了した後、5月31日に埋め戻しを終え、1区の調査を終了した。

2区は、1区の調査と並行して5月7日から表土除去を開始した。1区同様に調査員の立会いのもと、重機により西側（県道上町屋釜沢・糸魚川線）から東側に向けて表土除去を行った。2区では1区と様相が異なり、遺物包含層の直上（Ⅲa層直上）付近から古墳時代前期の土師器が多数出土したことから、機械による表土除去は遺物包含層のやや上方で止め、以下は人力で慎重に掘削した。5月13日に機械による表土除去を終了し、同日から調査区の壁面及びメインセクションベルトの整形を行う。5月15日から調査区周囲の開渠掘削を開始し、5月16日からホソ・移植ゴテ・竹ベラ等を用いて人力による遺物包含層（Ⅲa・Ⅲb層）掘削を開始する。包含層中からは大量の土器片とともに複数の玉作関連遺物が出土し、調査の初期段階から玉作関連遺構の存在が予測できた。したがって、遺物が特に多く出土する地点は遺物包含層の土壌を土嚢袋に入れて保管し、後に土壌水洗して遺物の抽出を行うこととした。なお、遺物の取り上げは2mごとの小グリッド（第Ⅲ章1参照）によるグリッド上げを基本としたが、主要・重要なものについては出土位置を光波測距儀による3次元データで記録しながら取り上げた。

遺物包含層の掘削が進むと同時に、遺構検出面（Ⅳa層直上）では土坑や溝など多数の遺構が存在することが明らかとなった。5月21日から遺構の発掘を開始するが、予想以上の密度・数で遺構を検出したことから、7月14日から調査員及び作業員を増員し、引き続き調査に当たった。なお、今回の調査では遺構番号は連番ではなく、想定された遺構の種類ごとに01番から順番に付した。また、遺構内出土の遺物については、小グリッド名と遺構名・層位名を付し、大部分は遺構ごとに光波測距儀による3次元データで出土位置を記録しながら取り上げた。本遺跡は玉作遺跡という性格上、主要な遺構覆土及び遺物包含層は水洗し、微細な玉作関連資料の抽出に努めた。土壌の水洗には、ウォーターセパレーション方式を採用し、最小1mmの網を用いて遺物を抽出した。結果、掘削時に見落とした微細な遺物も、発見・抽出することができた。8月20日に航空写真撮影及び報道公開を行い、8月23日に現地説明会を開催した。現地説明会には約200名の来訪者があった。現地説明会終了後も引き続き各遺構の調査を行い、10月3日に2区の遺構調査を終了、10月8日に埋め戻しを終えて、2区のすべての調査を終了した。

3区は、2区の調査と並行して6月30日から表土除去を開始した。途中、2週間程の中断期間を挟み、7月31日に表土除去を終了した。調査員・作業員を再度増員し、8月18日から3区の調査に本格的に着手した。当初、3区においても数多くの遺構が検出されるものと想定したが、東側にわずかな遺構を検出

するにとどまった。ただし、調査区の中央付近には自然地形の高まりが存在し、その高まり東側の低地部から大量の木片、及び杭等の木製品が出土した。この低地部及び自然地形の高まりの西側からは、遺構・遺物は全く検出されなかった。したがって、この低地部及び自然地形の高まり付近が玉作集落の西端部と想定され、集落の東西端部が明らかになった点で意義深い。11月14日に航空写真撮影を行い、11月29日に遺構の調査を終了、12月10日に埋め戻しを終え、12月12日にすべての現地発掘作業を終了した。

C 整理報告作業（第3図）

整理報告作業は、現地発掘作業と並行しながら行った。遺物は、現地で水洗・乾燥・注記作業までを行い、接合・復元・実測・写真撮影作業は古田建設で実施した。注記作業については、調査面積に比して多数の遺物が出土したことから、現地で注記マシンを併用した。玉類などの微細なものは人力で注記し、篩で選別した3cm角以上の土器片については大部分を注記マシんで注記した。

接合・復元作業については、多量の土器片が出土したことに加え、遺構に伴う遺物も多かったことから、細心の注意を払い綿密に行った。したがって、本遺跡で出土した土器類は小片が多いものの、遺構によってはかなりの率で接合・復元することができた。

実測作業は、大きく土器・木製品類と石器・石製品類に分けて行った。土器については、ある程度接合作業が進んだ段階で実測資料を抽出した。実測資料は、復元率が高く重要・主要な個体を優先して抽出したが、遺構に伴うものについては小片であっても重要度の高いものを抽出している。遺構外のもの、及び木製品については主要なもののみを抽出し、実測した。なお、杭類は多数出土したため、種類別に分類し、加工が明瞭で代表的なもののみを抽出して実測した。石器・石製品類については、玉作遺跡という性格を考慮し、小片も含めて可能な限り実測・図化に努めた。なお、実測図はすべてデジタルトレースとし、図版はデジタル編集とした。

遺構の図面・写真については、調査と並行して現地で基礎作業を進めた。現地作業終了後は、引き続き図面の整理を行うとともに、平成21年3月までは修正、及び遺構の事実記載を優先的に行った。遺構の個別図・分割図については、測量図面に基に編集し、断面図については2次元図作成後、デジタルトレースを行っている。遺構写真については、リバーサルフィルムで撮影した各種類別の写真をデジタル化し、その中から報告用の写真を抽出した。

原稿類は平成22年3月にすべて入稿し、校正を経た後、平成22年度に印刷、刊行した。

	平成20年度												平成21年度											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
現地発掘作業																								
準備工																								
調査																								
土器水洗																								
後片付け・搬取																								
整理報告作業																								
遺物水洗・注記																								
図面整理																								
遺物接合・復元・補強																								
遺物実測																								
遺構・遺物トレース																								
図版編集																								
原稿執筆																								
起案・校正																								

第3図 調査・整理の経過

3 調査体制

A 試掘確認調査

1) 平成17年度

調査期間	平成17年11月16日～平成17年11月29日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	長谷川二三夫（同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）
調査担当	寺崎 裕助（同 課長代理）
調査職員	尾崎 高宏（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係 主任調査員） 田中 一徳（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 専門嘱託員）

2) 平成18年度

調査期間	平成18年6月8日～平成18年6月23日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	斎藤 栄（同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）
調査担当	田海 義正（同 課長代理）
調査職員	田中 一徳（同 専門嘱託員）

B 現地発掘作業

期 間	平成20年4月7日～平成20年12月12日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	斎藤 栄（同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（同 調査課長）
指 導	寺崎 裕助（同 課長代理）
調査組織	株式会社 吉田建設見附支店 現場代理人 親松 勝（株式会社 吉田建設見附支店土木部）

3 調査体制

現場世話人	神田 史朗 (株式会社 吉田建設見附支店土木部)
調査担当	田代 郁夫 (同 埋蔵文化財調査部調査課)
調査員	有馬多恵子 (同 埋蔵文化財調査部調査課)
	小池 勝典 (同 埋蔵文化財調査部調査課)
	継 実 (同 埋蔵文化財調査部調査課) (平成20年7月14日～10月14日)
	水落 雅明 (同 埋蔵文化財調査部調査課) (平成20年8月18日～10月3日)
補助員	植木 紀子 (同 埋蔵文化財調査部調査課)

C 整理報告作業

1) 平成20年度

期 間	平成20年10月2日～平成21年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会 (教育長 武藤 克己)
整 理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総 括	木村 正昭 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)
管 理	齋藤 栄 (同 総務課長)
庶 務	長谷川 靖 (同 総務課班長)
整理総括	藤巻 正信 (同 調査課長)
指 導	寺崎 裕助 (同 課長代理)
整理組織	株式会社 吉田建設見附支店
整理担当	田代 郁夫 (株式会社 吉田建設見附支店埋蔵文化財調査部調査課)
整 理 員	有馬多恵子 (同 埋蔵文化財調査部調査課)
	小池 勝典 (同 埋蔵文化財調査部調査課)
補 助 員	植木 紀子、佐々木美紀、捧 美佐子、相田 祥博 (同 埋蔵文化財調査部調査課)

2) 平成21年度

期 間	平成21年4月1日～平成22年3月31日
整理主体	新潟県教育委員会 (教育長 武藤 克己)
整 理	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総 括	木村 正昭 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)
管 理	齋藤 栄 (同 総務課長)
庶 務	松原 健二 (同 総務課班長)
整理総括	藤巻 正信 (同 調査課長)
指 導	高橋 保雄 (同 課長代理)
整理組織	株式会社 吉田建設見附支店
整理担当	小池 勝典 (株式会社 吉田建設見附支店埋蔵文化財調査部調査課)
整 理 員	水落 雅明 (同 埋蔵文化財調査部調査課)
補 助 員	植木 紀子、佐々木美紀、櫻井美由貴、捧 美佐子、堀江理恵子、久保輝太郎、 相田 常美、矢部千栄子、北見 順子、路谷 容子 (同 埋蔵文化財調査部調査課)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

糸魚川市は新潟県の南西端に位置する。北は日本海に面し、周囲は急峻な山々に囲まれている。山地は姫川を境として、西は飛騨山脈の最北端に当たり、富山県との県境には、白馬岳 (2932m)、雪倉岳 (2611m)、朝日岳 (2418m)、犬ヶ岳 (1593m)、白鳥山 (1287m) などの連山がそびえている。長野県との県境には、小蓮華山 (2769m)、釧岳があり、分水界は蒲原山から姫川の谷に下っている。

姫川以東の西頸城山地は北部の海岸地帯では丘陵性の山地であるが、南部は急峻な山地である。長野県境の雨飾山 (1963m) から、さらに東には焼山 (2400m)、火打山 (2462m)、妙高山 (2446m) が連なっている。山地はこれらの高峰から次第に高度を下げ、1,000m 級の山々を含みつつ日本海に迫っている。すなわち、能生川と早川間の鈴ヶ岳山地、早川と海川間の阿弥陀山地、姫川以西の黒懸山地があり、これらは南から北に向かって更に高度を減じ、北縁には丘陵が形成されている。能生川と早川に挟まれた能生丘陵や早川と海川に挟まれた早川丘陵、海川と姫川に挟まれた水保丘陵、姫川河口の左岸にも小規模な丘陵が付随している。

山地、丘陵に囲まれた低地部には、能生川河口から早川河口にかけての海岸沿いの海岸段丘や、姫川右岸河口のやや広範囲に発達した河岸段丘、姫川河口に見られるデルタ性扇状地、焼山火山に起因する泥流地形の台地、各河川による沖積低地、海岸線に平行しつつ各河川により分断された砂丘が断続的に見られるなど変化に富んだ地形を見ることができる。このように、山地・丘陵は海に迫り、平滑な海岸線に沿う砂丘を含め、平野部は狭狭で、姫川河口付近に形成された扇状地が最も広い平野部となっている。

急峻な山地を開析する河川は、いずれも急流のまま海岸に達するため、各河川の氾濫原における巨礫、砂礫の堆積は著しく多い。そして、なによりもこの地域を特徴付けているのは、市域の南西部、姫川に沿ってほぼ南北方向に走る「糸魚川・静岡構造線」によって、東北日本と西南日本に二分される位置にあることである。前者の糸魚川市から上越市西部にかけての地域は、北部フォッサ・マグナ地域 (信越帯)、後者は糸魚川・静岡構造線西側地域 (青海-蓮華変成岩帯) に当たり、地質学的に重要な地域である。この構造線以東の地層は、主に新第三紀・第四紀の新しい時代の堆積岩・火成岩から成り立っており、一方、構造線以西の地層は、主に古生代石炭紀～二疊紀に至る青海-蓮華変成岩帯など、古生代・中生代の堆積岩・火成岩から成り立っている。この地質的環境がヒスイを生み出し、地形的環境による急流河川の浸食と礫運搬能力が相まって、糸魚川市域の縄文時代から古墳時代にいたる遺跡を玉作遺跡として特徴付けている。

南押上遺跡は海川の河口近くの左岸に形成されている。海川は糸魚川市を流域とし、流程は21kmである。今回、南押上遺跡で発見された古墳時代集落は、海川の河口付近の氾濫原に形成された三角州の一面、あるいは自然堤防上に立地する。東を流れる海川の氾濫の影響を避け得る微高地であったことは、集落を覆う古墳時代の包含層中に氾濫の痕跡をとどめていないことからもうかがえる。検出した古墳時代集落の広がり、集落の東側境の一部を2区東側で確認した。集落の境界部分では、集落の展開する微高地が傾斜角約45度で急激に落ち込んでいる。微高地直下で確認した旧河床面では、古墳時代の土師器片が出土している。この微高地の東端及び低地部は集落が営まれる過程で崩落と氾濫による堆積を繰り返し、古墳

時代の遺物包含層によって覆われていくが、この包含層も海川に向かって緩やかに傾斜している。古墳時代をとおして集落の東端であったことが分かる。その西側に展開する集落は、現在の県道を挟んだ3区の東側まで広がりを確認できる。3区の中ほどに検出された舌状微高地にはビット群が確認でき、その前面には湿地が一定の広がりを見せている。集落の西北側の境である。

一方、集落の南西側への広がりであるが、遺跡南側の京ヶ峰丘陵の先端付近から北西方向へ舌状に伸びる沖積地のわずかな高まりが観察され、この微高地上で古墳時代の玉作集落が確認されていることから、あるいは、一連の集落の可能性も考えられる。地形を見るに、姫川の氾濫原と海川の氾濫原に挟まれた丘陵が南から張り出す北側一帯は最も安定した土地であり、この一帯に展開していた遺跡の北東部分が今回の南押上遺跡と考えられる。

集落の北西側に確認した低湿地は、本遺跡の立地する三角州あるいは自然堤防と海岸砂丘の後背湿地で、しかも、姫川・海川の間を流れる蓮台寺川・城の川の流が、北側の砂丘の影響で滞水した可能性が考えられる。ところで、姫川が河口部に向かって扇状に開く右岸には洪積台地の段丘地形が発達しているとされ、姫川の氾濫は、北陸本線の糸魚川駅付近一帯の低湿地までは及んでいないと考えられている。今回確認した低湿地が、姫川の後背湿地と一連のものであるかは、今後、西側に隣接する姫御前遺跡などの調査結果との比較検討が必要である。

2 歴史的環境

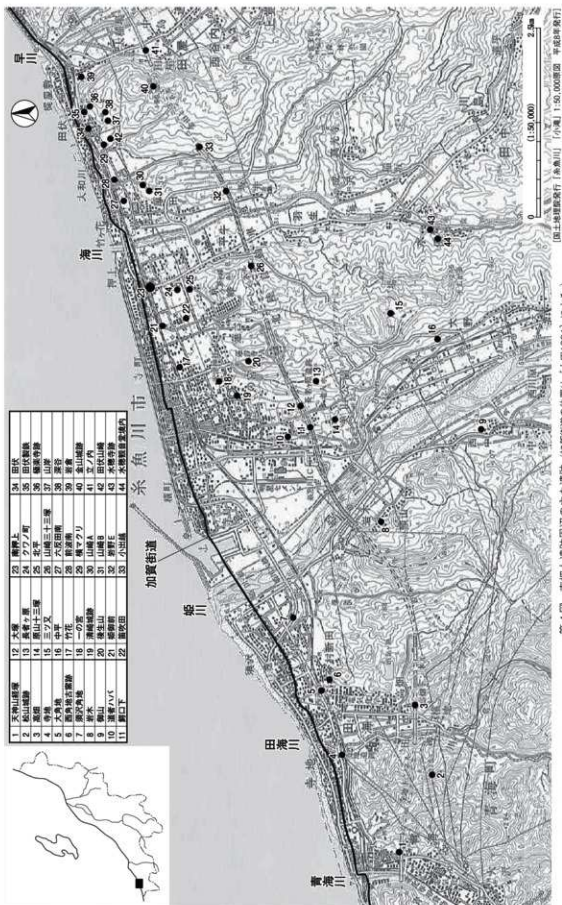
糸魚川市域は、前項で述べたように、丘陵が海岸部まで迫り、急流が直接日本海に注ぐため、河川上流部、中流部、下流部にかけて見られる地形と、海岸部に見られる地形までがすべて揃っているといっても過言ではない。こうした地理的環境から、遺跡の立地も多様である。

これまでの調査によって、段丘と各時代の遺跡の分布との関係について、高位の段丘には縄文・弥生時代、低位の段丘には縄文・弥生・古代、沖積地には古代の各遺跡が主に分布するなど、遺跡の時代が下がるにしたがって高位から低位へとその分布する主体面を移動させていることが指摘されている。このなかで、縄文時代に関しては低地部における遺跡の存在が縄文の海進・海退問題とあいまって今後の課題とされている〔寺崎1988〕。

縄文時代から古墳時代にいたる遺跡では、ヒスイや碧玉を中心とした玉類及びその原石や製作過程にある未成品、あるいは玉の製作道具である砥石など玉作に関する遺物の出土が著しく、この地で産する原石を中心とした玉作が当地方の最も重要な歴史的特徴といえる。ここでは、南押上遺跡に関連する弥生時代から中世の遺跡について概観する。

弥生時代

弥生時代の遺跡として現在まで確認されているのは、大塚遺跡(12)、後生山遺跡(20)、一の宮遺跡(18)、笛吹田遺跡(22)、横マクリ遺跡(29)、田伏山崎遺跡(42)などである。遠賀川系土器が出土した弥生前期末の大塚遺跡、中期の一の宮遺跡を除けば、すべてが弥生時代後期から古墳時代前期にかかる遺跡である。大塚遺跡と後生山遺跡、一の宮遺跡は沖積地を望む段丘上に立地し、ほかはすべて沖積地に立地している。また、これらすべての遺跡で玉作関連資料が確認されている点が特徴的である。大塚遺跡では多量のヒスイ・滑石原石、荒削された素材や玉未成品が出土し、砥石の出土とともに盛んに玉作が行われてい



第4図 南岸上遺跡周辺の主な遺跡(加賀街道の位置は「土田1991」に4.6。)

たことが判明した。特にその製作技術は縄文時代からの伝統を受け継いでいることが指摘された〔寺崎・田中¹⁰1988〕。

田伏山崎遺跡は狭い谷合いに立地する弥生後期から中世に及ぶ複合遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期の土器集中が複数出土している〔佐藤¹¹2009〕。

南押上遺跡でも弥生後期の土器片がわずかに出土し、そのあるものは一定量が集中して出土した。出土状況や土器片の個体観察では、決して流入などではない。海岸に展開する砂丘の背後まで迫る沖積微高地での発見は、姫御前遺跡などとともに弥生時代後期の集落の立地と広がりを考える上で貴重な発見であったといえる。

古墳時代

糸魚川市域における古墳時代の主な遺跡は、笛吹田遺跡(22)、大角地遺跡(5)、三ツ又遺跡(15)、一の宮遺跡(18)、姫御前遺跡(21)、竹花遺跡(17)、六反田南遺跡(27)、横マクリ遺跡(29)、田伏遺跡(34)などである。この内、笛吹田遺跡、姫御前遺跡、六反田南遺跡、横マクリ遺跡は古墳時代前期、大角地遺跡、三ツ又遺跡は古墳時代中期、一の宮遺跡、田伏遺跡は古墳時代後期をそれぞれ中心とする玉作遺跡として特筆される。

糸魚川市域において、「古墳」そのものについては今のところ確認・調査されていない。ただし、周辺の丘陵上には中世の塚とされるマウンド(土盛り)状の遺構(山崎三十三塚(26)〔木島1989〕や長者ヶ原の塚〔安藤1981〕など)が多く存在し、また過去に古墳が存在した可能性を示唆する伝承等も残されている〔青木1976〕ことから、今後古墳時代の墳墓である「古墳」が確認される可能性も想定できる。

笛吹田遺跡は、南押上遺跡の南西約500mの沖積地上に立地する、古墳時代前期～中期の玉作遺跡である。昭和52(1977)年の糸魚川市立東小学校建設に伴う発掘調査では、玉作に関連する工作用特殊ビットのほか、白玉・勾玉・管玉等の成品・未成品類、ヒスイや碧玉・瑪瑙・滑石等の原石類、内磨砥石や平砥石といった工具類が出土している〔安藤・千家¹²1978〕。また、近年の都市計画道路整備に伴う発掘調査では、堅穴住居をはじめ、平地住居と考えられる溝状遺構、木製の釣版や木杵を伴う井戸、それに全国的にも類例の少ない丸山型の琴柱形石製品などが出土している〔山岸2005・2006〕。南押上遺跡に隣接し、また時期的にも重複することから、その関連性が注目される。

姫御前遺跡は、南押上遺跡から西へ600m程の沖積地上に立地する、古墳時代前期の遺跡である。平成18(2006)年に北陸新幹線の建設に伴って発掘調査を行い、滑石製の勾玉や管玉・白玉・算盤玉・平玉・ヒスイの原石・割片類など、玉作関連資料が出土している〔加藤¹³2008〕。また、平成20(2008)年度の調査では平地建物4棟、掘立柱建物2棟とともに、ヒスイや緑色凝灰岩、砥石等の玉作関連資料も出土している〔加藤2009〕。笛吹田遺跡とは一連の遺跡として認識されていた時期もあり〔土田1978〕、南押上遺跡とは地理的にも、時期的にも近い遺跡であることから、笛吹田遺跡同様にその関連性が注目される。

六反田南遺跡は、南押上遺跡から東へ1.2kmほどの海川の対岸に位置し、海川が形成した沖積地に立地する。平成18(2006)年度の発掘調査では、平地住居の周溝の可能性が指摘される幅1.8m前後で円形に巡る溝のほか、土坑やビットなどが検出されている〔春日¹⁴2008〕。また、今回南押上遺跡で検出された平地建物の溝によく似た方形に巡る溝も数基検出されている。さらに、平成19(2007)年度の発掘調査では、古墳時代後期の川跡から須恵器や内面黒色処理された土器群のほか、滑石製の子持勾玉や勾玉・管玉・白玉・紡錘車の成品・未成品類、それに敲石・砥石などの工具類が出土している〔細井・水落¹⁵2008〕。

2010]。また、平成20(2008)年度の発掘調査では、土坑から古墳時代前期の土器群とともに、勾玉が1点出土している〔細井2009〕。

横マクリ遺跡は、糸魚川市街地の広がる海岸平野部の東端付近に位置し、南方の金山から北へ伸びる丘陵の先端付近、緩やかな微高地上に立地する古墳時代前期の遺跡である。遺跡の北東約350mには、古墳時代中期～後期の玉作遺跡として著名な田伏遺跡が存在する。平成18(2006)年度に、国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴って発掘調査を行っている。南押上遺跡で確認した平地建物に類する方形区画溝1基のほか、遺物集中ブロック14か所を検出している。勾玉や管玉の成品・未成品類をはじめ、白玉の未成品、ヒスイや滑石の原石・石核・剥片類、それに筋砥石や内磨砥石・平砥石といった玉作関連資料が多数出土している〔渡邊ほか2008〕。

大角地遺跡は、黒姫山地から広がる舌状台地の先端部に位置する、古墳時代前期～後期にかけての玉作遺跡である。勾玉の製作過程である「オガクチ技法」〔寺村1966〕の標識遺跡としても著名である。都市計画道路建設に伴い、昭和45・48(1970・73)年に発掘調査が行われている。その際、工作用特殊ピットを有する玉作工房跡をはじめ、滑石製玉類の製作関連資料が多数出土している〔寺村・安藤ほか1979〕。また、平成17(2006)年度には北陸新幹線建設に伴う発掘調査を行い、滑石(緑泥石岩)製の白玉製作工程品のほか、緑色凝灰岩製の管玉、緑泥石岩製の勾玉未成品等も出土している〔加藤ほか2006〕。

三ツ又遺跡は、姫川右岸の山間に位置し、丘陵地に立地する。古墳時代中期の堅穴建物3種のほか、土坑などが検出されている。滑石製の白玉や勾玉、管玉、紡錘車、有孔円板の成品・未成品類をはじめ、ヒスイの勾玉未成品・原石・剥片類、緑色凝灰岩の原石や剥片類、それに砥石等が出土している〔木島1988・1989a〕。

一の宮遺跡は、現在の天津神社境内に位置し、南側から伸びる緩やかな舌状台地の先端部付近に立地する。大正8(1919)年に高橋健自氏によって発掘調査がなされている。有孔円板・勾玉・白玉等の祭祀遺物が多数出土しており、共伴した土師器から古墳時代後期の玉作遺跡とされている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。

田伏遺跡は、糸魚川市域の広がる平野部のほぼ東端に位置し、金山から日本海側へ向かって伸びる丘陵の先端、緩やかな微高地上に立地する。昭和45(1970)年に、住宅団地建設に伴う緊急発掘調査が行われている。滑石製の白玉・管玉・勾玉の成品・未成品類をはじめ、子持勾玉や紡錘車、砥石など多数の玉作関連資料が出土している〔関1972〕。また、剣形・勾玉形・有孔円板といった滑石製模造品も大量に出土していることから、玉作に伴う祭祀が行われた可能性が指摘されている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。

古 代

南押上遺跡では、古代の所産と考えられる遺構は確認されていない。ただし、少量ではあるが遺物包含層中から古代の土師器や須臾器の小片、それに柄振などの木製品類が出土していることから、周辺に古代の集落あるいは水田などの生活・生産域が形成されていた可能性を指摘することができる。

糸魚川地区(旧糸魚川市域)では、道者ハバ遺跡(10)、小出越遺跡(33)、立ノ内遺跡(41)、山崎A・B遺跡(30・31)などが調査されている。道者ハバ遺跡では、密集する掘立柱建物や井戸といった遺構とともに、多量の土師器・須臾器、灰軸陶器・緑軸陶器が出土しており、当地方の中心的役割を担った遺跡と推定されている〔糸魚川市史編さん委員会1986〕。小出越遺跡〔鈴木ほか1988〕では8世紀末～9世紀に土師器の生産が行われており、立ノ内遺跡〔高橋1988〕では多数の製塩土器が出土している。また、山崎A・B遺

跡〔木島 2007〕では数百点に及ぶ土師器の一括廃棄土坑が出土しており、注目される。

青海地区（旧青海町域）では、須沢角地遺跡（7）などの集落遺跡のほか、西角地古窯跡（6）などの窯跡の調査も行われている。須沢角地遺跡は、昭和 62（1987）年・平成 17（2005）年に発掘調査が実施されている。郷川の河口近くに位置し、7 世紀末～9 世紀前半の集落であることが明らかにされている〔土田・小池ほか 1988、辻 2006〕。西角地古窯跡は、須沢角地遺跡から西南西へ約 1km の丘陵裾に所在する。窯体の一部や窯壁・焼土とともに、多量の須恵器が出土しており〔寺村・安藤ほか 1979〕、8 世紀末～9 世紀初頭前後の窯跡と考えられている〔春日 1998〕。

中 世

南押上遺跡周辺における中世遺跡の調査事例は決して多いとはいえないが、御山遺跡（9）、中平遺跡（16）、水保観音堂境内遺跡（44）、北平遺跡（25）、クワノ町遺跡（24）、竹花遺跡（17）、山崎 A・B 遺跡（30・31）等が知られている。また、丘陵部には中世後期から近世初期と考えられている原山十三塚（14）や山崎三十三塚（26）が分布する。近年は、北陸新幹線建設に伴う調査事例が増し、山岸遺跡（37）、寺地遺跡（4）、郷御前遺跡（21）など沖積地に多数の遺跡が存在することが明らかになりつつある。なかでも、山岸遺跡は海川と早川との間に広がる丘陵の末端に位置し、13～14 世紀の大型掘立柱建物が発見された。多量の国産陶器と貿易陶磁が出土しており、鎌倉時代における沼川郷の中心的な集落と考えられている〔春日 2008・飯坂 2009〕。山崎 A・B 遺跡は、海川の下流域右岸に形成された河岸段丘の北端に位置している。この遺跡では 13 世紀とされる大小の掘立柱建物が溝の区画内に建ち、中でも桁行 8 間、梁行 4 間の建物は集落の中核の建物と想定されている〔木島 2007〕。遺構の多い割に遺物が少なく、珠洲焼、青磁、白磁などの陶磁器が若干出土しているにすぎないようである。南押上遺跡では、中世の遺構は発見されなかったが、珠洲焼の陶器片や中国龍泉窯系の青磁片などが少量出土している。中でも青磁片は 13 世紀中頃から 14 世紀前半にまでさかのぼる。

遺跡周辺には、経塚や葬地を想定させる京ヶ峰や蓮台寺などの地名が残り、蓮台寺集落にある光照寺一帯の西向きの傾斜地には中世以来の古墓が点在する。また、遺跡の北側を走る旧道の辻には五輪塔などの石塔類の残欠が見られることから、周辺に中世遺跡の存在することが十分に予想される。

第三章 調査の概要

1 調査区とグリッドの設定

本発掘調査対象範囲は、東西約240m・南北約18mと東西に長く、途中、道路や水路によって分断される。そこで、発掘調査対象範囲の東端から市道カマタ道1号線までを1区、市道カマタ道1号線から県道上町屋釜沢・糸魚川線までを2区、県道上町屋釜沢・糸魚川線から本発掘調査の最西端までを3区と、大きく3つの調査区に分けて調査を行った。なお、1区は水路によって東西に分断されることから、東側を1-A区、西側を1-B区に細分している。同様に、2区も水路によって分断されるため、水路の東側を2-A区とし、西側は2本の南北メインセクションベルトによって2-B区・2-C区・2-D区の3つに細分して調査を行った。3区も、調査区のはほぼ中央を流れる水路部分と、その東側の2本をメインセクションベルトとし、東から3-A区・3-B区・3-C区の3つに細分した(図版3～5)。

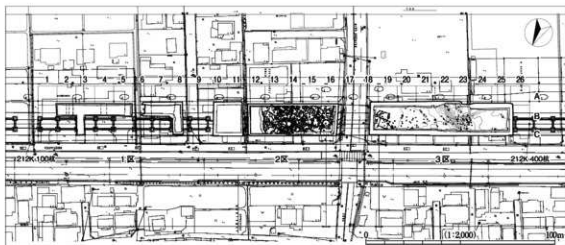
グリッドの主軸は、新幹線法線のセンター杭212K-100杭(日本測地系X=116166.558, Y=-54846.298)と212K-400杭(日本測地系X=116068.332, Y=-55129.761)を結んだラインを主軸とし、杭212K-100を基点とした(第5図)。主軸は真北から70度53分16秒東偏している。

グリッドは大小2種設定した。大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドの呼称は、新幹線法線のセンター杭を東西に結ぶ方向を算用数字1～26の26分割し、それと直交する南北方向をアルファベットA～Cの3分割して、南東隅の交点がその大グリッドの呼称となるように両者を組み合わせて表示している(なお、新幹線法線のセンター杭を結ぶラインは、Cラインに相当する)。小グリッドの番号は、1～25の算用数字で表し、南東隅を1、南西隅を5、北東隅を20、北西隅を25となるようにした。これらを組み合わせて、「16B3」等と表している。

杭名	X (m)	Y (m)
3B	116150.561	-54861.921
5B	116144.012	-54880.819
8B	116134.190	-54909.165
11C	116133.816	-54940.786
14C	116123.993	-54969.132
16C	116117.445	-54988.030
19C	116107.622	-55016.376
22C	116097.800	-55044.723
25C	116087.977	-55073.069

※ 3B・5B・8B杭の座標値は計算値

第1表 主要グリッド杭の座標
(日本測地系)



第5図 調査区・グリッド設定図 (S=1:2,000)

2 基本層序

東西に長い南押上遺跡の基本層序(図版3~5)は、土層の堆積環境の違いにより、各調査区で異なる。ただし、近世後葉~近現代にかけての耕作土が主体のⅠ層、中世~近世前葉に堆積した粗砂主体のⅡ層は、全調査区で共通して認められた。

Ⅰ区は、近世後葉~近現代にかけての耕作土であるⅠ層をⅠa・Ⅰb・Ⅰc層の3層、砂層であるⅡ層をⅡa・Ⅱbの2層、少量ながら古代の土師器片が出土した遺物包含層をⅢ層、地山をⅣ・Ⅳ層に分層した。この内、Ⅲ層については当初「Ⅲ」層として調査を行ったが、2区で見られた古墳時代の包含層である「Ⅲa・Ⅲb」層とは明らかに堆積年代や性格が異なることが判明したため、本書では「」をつけて記述する。なお、Ⅳ・Ⅳ層も同様である。

遺構・遺物が最も集中して出土した2区では、基本層序をⅠ~Ⅷ層に大別し、Ⅲ・Ⅳ層をそれぞれa・bの2層に細分した。Ⅲa層(暗紫灰色~暗灰色粘土)及びⅢb層(暗灰色粘土)が古墳時代前期の遺物包含層、Ⅳa層(明緑灰色粘土)上面が遺構検出面である。以下、青灰色シルトのⅣb層、青灰色粘土層のⅤ層を挟み、炭化物を多く含む厚さ5cm程のⅥ層、緑灰色細砂のⅦ層と続く。なお、2区の中央付近(2C区付近)は、東側や西側に比べてⅢb層がそれほど明瞭ではなく、部分的に確認されない地点もあった。2区は、2C区付近を最高地点として東西に緩やかに傾斜していることから、Ⅲb層は標高の低い方向に向かって厚く堆積したものと想定される。また、炭化物を多く含むⅥ層は、放射性炭素年代測定によれば弥生時代に形成された可能性が高い(第Ⅵ章参照)が、土器などの人工遺物は包含しておらず遺構も全く検出されなかった。

3区は、1・2区では見られなかった有機物腐植土層(ガツボ層)が広がっており、1・2区とは様相が大きく異なる。ガツボ層の東端部分と、建物群の西端部の位置はほぼ一致していることから、集落は西側の低湿地と東側の河川に挟まれた、幅70m程の空間を利用して営まれていたものと理解できる。Ⅰ・Ⅱ層については細部で異なるものの、1・2区とはほぼ同様の在り方を示す。Ⅲa・Ⅲb層は、3区の東端部付近にのみ確認され、西側では確認されなかった。Ⅲ層の消滅と入れ替わるようにして、3区の大部分には前述の有機物腐植土層(ガツボ層)が広く展開する。このガツボ層は、当初「Ⅳ層」と命名して調査を行ったが、その後「ガツボ層」と修正した。なお、ガツボ層は大きくa~cの3層に分層される。ガツボ層以下は、古墳時代の遺物包含層であるⅤ層、その直下のⅥ層、炭化物が多く混じる厚さ4~5cm程のⅦ層、灰色粘質土のⅧ層と続く。3区のⅤ層は古墳時代の遺物包含層であるとともに、古墳時代の生活面でもあるが、2区のⅢa・Ⅲb層とは直接一致しない。これは、土壌の堆積環境の違いによる結果と理解できる。以上から、3区のⅤ層は2区のⅣa層、3区のⅥ層は2区のⅣb層、3区のⅦ層(炭化物を多く含む層)は2区のⅥ層にそれぞれ対応するものといえる。

各層位の特徴は、以下のとおりである。

1区~3区(共通)

Ⅰa層：黒色土(N/2)	旧表土(耕作土)。しまりは弱く、粘性はやや弱い。砂がやや混じる。
Ⅰb層：暗灰黄色土(25Y4/2)	近現代の耕作土。しまりは弱く、粘性は中。
Ⅰc層：灰色砂(5Y4/1)	近世堆積層。しまりはやや弱く、粘性はなし。18世紀~19世紀頃の近世陶磁器類を含む。

Ⅱ a 層：灰オリーブ粗砂 (5Y4/2)	近世堆積層。しまりは中、粘性はやや弱い。17世紀代の近世陶磁器類をわずかに含む。
Ⅱ b 層：灰色粗砂 (N4/1)	中世堆積層。しまりはやや弱く、粘性はやや弱い。珠洲焼片や青磁片が少量出土する。
Ⅱ c 層：黒褐色砂質土 (2.5Y3/2)	中世堆積層。しまりは強く、粘性はやや弱い。3区のみ確認。
1区	
Ⅲ' 層：暗紫灰色粘質土 (5P4/1)	古代の遺物包含層。しまりはやや弱く、粘性は強い。土師器片が少量出土するが、小片で摩滅著しく、詳細な時期の特定には至らない。
Ⅳ' 層：明青灰色粘土 (5BG7/1)	しまりは強く、粘性は強い。遺構は全く検出されていない。
Ⅳ'' 層：緑灰色シルト (10G5/1)	しまりはなし、粘性は弱い。
2区	
Ⅲ a 層：灰色粘質土 (10Y5/1)	古墳時代前期の遺物包含層。しまりはやや弱く、粘性は強い。多量の土器片のほか、玉作関連資料が出土している。
Ⅲ b 層：暗灰色粘土 (N3/)	古墳時代前期の遺物包含層。しまりは中、粘性は中。Ⅲ a 層に比べ、さらに多くの土器片・玉作関連資料が出土している。
Ⅳ a 層：明緑灰色粘土 (10GY7/1)	Ⅳ a 層上面が、古墳時代前期の遺構検出面。しまりは強く、粘性は強い。Ⅳ a 層中にも、古墳時代前期の遺物が含まれている。
Ⅳ b 層：青灰色シルト (5B6/1)	しまりは弱く、粘性はやや弱い。酸化すると、黄褐色に変化する。遺構のラインは、Ⅳ a 層上面に比べてより明瞭に確認できる。Ⅳ b 層中には、古墳時代前期の遺物は含まれていない。
V 層：青灰色粘土 (10BG6/1)	しまりはなし、粘性は強い。2区のみ確認。
Ⅵ 層：暗紫灰色粘土 (5P4/1)	弥生時代の炭化物包含層。しまりはなし、粘性は強い。炭化物を多く含むが、土器などの遺物は包含していない。
Ⅶ 層：緑灰色細砂 (10G5/1)	しまりはなし、粘性はなし。無遺物層。
3区	
ガツボ a 層：黒褐色土 (10YR3/1)	粘性は中、しまりはやや弱い。腐食した植物を多く含んだ黒褐色土がマーブル状にやや多く混じる。
ガツボ b 層：黒色粘質土 (10YR2/1)	粘性は中、しまりはやや弱い。腐食した植物を多量に含む。黒褐色土と褐灰色の粘質土がマーブル状に入り混じる。
ガツボ c 層：オリーブ黒色粘質土 (5Y3/1)	粘性はやや強く、しまりは弱い。腐食した植物・炭化物・炭化微粒子を多く含む。
漸移層：黒褐色粘質土 (10YR3/1)	粘性は中、しまりはやや弱い。腐食した植物は、ガツボ c 層に比べて少ない。直下の V 層の土が、マーブル状にやや多く混じる。
V 層：灰色粘質土 (10Y5/1)	古墳時代前期の遺物包含層及び生活面。2区のⅣ a 層に対応。粘性はやや強く、しまりはやや弱い。土器や玉作関連資料が多数出土。
Ⅵ 層：灰色粘質土 (10Y4/1)	粘性は強く、しまりはやや弱い。2区のⅣ b 層に対応する。
Ⅶ 層：オリーブ黒色粘質土 (10Y3/1)	粘性は強く、しまりは弱い。炭化物多量。2区のⅥ層に対応する。
Ⅷ 層：灰色粘質土 (10Y4/1)	粘性はやや弱く、しまりはやや弱い。無遺物層。

3 調査区の概要

1区は、発掘調査対象範囲の東端から市道カマタ道1号線までの東西約66m、南北約18m(約1,188㎡)である。試掘調査の時点で、1区に相当する位置から遺構は検出されず、遺物も調査区の西側で古代の土師器片が少量出土した程度であった。そのため、本発掘調査では調査区の南側約3分の1(南北約7m)の幅を優先して掘削し、遺構・遺物の出土状態を見てから北側を調査することとなった。その結果、1区では古墳時代はもちろん、古代～中世に至るまでの遺構は一切検出されなかった。遺物も、古代の遺物包含層であるⅢ'層中から土師器の小片が、また中世～近世にかけて堆積したと見られる砂層のⅡa・Ⅱb層中から陶磁器片がそれぞれ少量出土したに過ぎない。唯一、1区の東端から西へ約12m、南端から北へ約3.9mの地点から、杭状の木製品(912・914)が近接し、Ⅳ'層に刺さった状態で出土した。そこで、出土地点付近のみ北側に向けて調査区を拡張し、本来の調査区の北端部まで調査を行った。また、比較的遺構が出土する可能性の高い1区の西端においても、北側に調査区を拡張して調査を行った。しかし、いずれの拡張区においても遺構は一切検出されなかったことから、1区の北側の大部分は調査不要と判断した。

2区は、市道カマタ道1号線から県道上町屋釜沢・糸魚川線までの東西約66m・南北約18m(約1,188㎡)である。試掘調査の時点で、古墳時代の遺物のほかに遺構の存在も確認されていたことから、当初予定した範囲のすべてを掘削・調査している。2区の東端、2A区においては、1区同様に遺構は一切検出されなかった。ところが、水路を挟んだ西側、2B区以西は様相が一変し、多量の遺物・遺構を集中して検出した。今回の調査で遺構・遺物を最も集中して検出したのは、この2B～2D区である。検出した遺物と遺構の様相から、古墳時代前期の玉作集落が形成されていたものと判断できる。2B区付近においては、当時の地面が東側に向かって急角度で落ち込み、そこから東側に河川跡が検出された。この旧河川の西側沿いには、直径15～20cmの小穴が多数検出されており、柵状の施設が存在した可能性も指摘できる。集落の東端は、河川と柵状の施設によって明瞭に区切られていたものと想定される。2A区以東については、この旧河川の氾濫原(広い意味での海川の氾濫原)であったため、遺構が全く検出されなかったものと理解することができる。

3区は、県道上町屋釜沢・糸魚川線から発掘調査対象範囲の西端までの東西約76m・南北約18m(約1,368㎡)である。3区では、2区に近い東側(県道側)で掘立柱建物や土坑などの遺構を検出したが、西側に向かうにしたがって遺構は希薄となり、調査区の西端部付近では遺構は全く検出できなかった。3区の中央付近には、調査区の南側から北側に向かって張り出すような自然地形の高まりが確認された。この自然地形の高まりの東側に沿うようにして、大量の木片及び杭などの木製品類が出土している。木片・木製品類が出土した地点は、南東側から北西側に伸びる低地部となっている。この低地部は、土壌の科学分析の結果、沼沢湿地的な環境であったものと推測された。2区東側の旧河川が集落の東端とすれば、この3区の低地部が集落の西端とすることもできる。なお、この低地部西側の地形の高まりは、古墳の墳丘の一部である可能性も想定されたため、高まりの頂部及び周囲を調査した。しかし、埋葬施設等の痕跡は一切検出されなかった。高まりの斜面部に弥生時代後期の土器が集中して出土していることから、この高まりは古墳時代以前から存在する自然地形と判断した。

第四章 遺 構

1 概 要

今回の調査で検出された主な遺構は、竪穴建物3棟、平地建物10棟、掘立柱建物9棟、土坑44基、溝30条、ピット約450基、木材・杭集中遺構、円礫集中遺構、弥生土器集中遺構、祭祀遺構等である。これらの大部分は、古墳時代前期の玉作集落に関連するものである。

この内、2区で検出された1号竪穴建物(SI01)は、南北約7.8m・東西約7.0mで、新潟県内における古墳時代前期の竪穴建物としては大型の部類に属する。床面のほぼ中央部には、三方を石で囲んだ石囲炉が設置されていた。古墳時代の石囲炉は極めて珍しく、新潟県内初の確認例となる。石囲炉が構築される以前には、古い地床が構築されており、床面の張り替えがなされていることも明らかとなった。また、建物の東壁沿いには、工作用特殊ピットの可能性が指摘される2段掘りの屋内土坑を1基検出した。土坑の内部からは、大型の内磨砥石が1点出土している。このほか、床面直上からは大型の置砥石をはじめ、多数の玉作関連遺物が出土しており、集落内における主要な施設であったものと推測できる。

竪穴建物と並んで注目されるのが、幅・深さ共に30cm前後の、細く浅い溝をもつ平地建物¹⁾である。一部、その全容が明らかでないものも含まれるが、その多くが長辺約5～6m・短辺約4～5mの長方形を呈していたものと想定され、長軸方向を南北にほぼそろえている。構築された時期差も考慮せねばならないが、建物の設置における綿密な計画性がうかがえる。溝で囲まれた内側には、火を焚いた痕跡(灰跡等)は一切認められなかったことから、倉庫等の貯蔵・収納空間であった可能性も否めない。

このほか、主要な建物として複数の掘立柱建物の存在が挙げられる。2区では最低7棟、3区では2棟検出された。ただし、柱穴と考えられるピットは多数存在していることから、さらに多くの掘立柱建物が存在した可能性も指摘できる。多くは梁間1間×桁行2間の梁間1間型で、そのすべてが長軸方向を東西に向けている。平地建物同様、方位を意識した計画性がうかがえる。なお、3区のSB08は、2本の棟持柱のほか、建物の東側に落棟が付設されていたようであり、特筆される。

44基の土坑の内、3基は3区で検出され、残る41基は2区に位置する。この内、近世の性格不明土坑であるSK01を除いた43基は、すべて古墳時代前期の所産である。土坑の中には、SK04やSK07のように連結して一つの溝を形成する可能性があるものや、断続的に建物を囲んで周溝を形成する可能性があるものも存在するが、主となる建物とのセット関係は明らかでない。また、SK33やSK49のように単独で土坑墓状の様相を呈するものや、SK34のように小型の竪穴状を呈するものもあり、多種多様といえる。

集落の東端には旧河川(SD04)が存在し、これに沿った棚状の小穴も検出された。また、集落の西端には木片及び杭類が大量に出土した低地部が存在し、集落の東西境界は明瞭だったものと推測できる。

これらの遺構は整然と配置され、綿密な計画性のもとに集落が形成されたものと推測される。古墳時代前期中葉～後葉における玉作集落を検討する上で、これらの遺構が示す様相は極めて重要といえる。

1) 平地建物については、宮本長二郎氏から平地式の「壁立式」建物である可能性も御教示頂いた。本書では、溝中に壁の芯材である「小舞」の痕跡を明確に確認できなかったことから、「平地」建物として報告するが、SI05やSI07など一部その可能性を残すものも認められる。今後、平地式「壁立式」建物としての可能性も考慮して検討していかなければならない。

2 記述の方法と遺構の分類

A 基本方針

遺構の検出面 遺構が検出された2区・3区においては、土壌の堆積環境の違いにより、標準土層が異なっている。2区における遺構検出面はIVa層であるが、IVa層中にも古墳時代前期の遺物が含まれている点と、遺構のプランがやや不明瞭であるという点で、最終的にはIVb層まで掘り下げて遺構プランの確定を行っている。3区においては、当初V層を遺物包含層、VI層直上を遺構検出面と想定して調査を行ったが、隣接する2区との土層対応関係や、V層中においても直下の遺構に対応すると考えられる遺物の集中が見られたことなどから、最終的に2区の遺構検出面であるIVa層が3区のV層に対応し、より遺構プランが明瞭に検出できる2区IVb層が3区のVI層に対応するものと結論付けた(第III章2及び図版1～3参照)。なお、2区IVa層の上位に堆積するIIIa・IIIb層は、古墳時代の遺物包含層としたが、当然これらの層中から掘り込まれた遺構もあるものと想定される。遺構によってはIIIb層上面でおぼろげながらプランが認識できたため、セクションベルトを設定して、IIIb層中から掘り込まれていることを確認できたものもある(SK05等)。

覆土の表記について 覆土の説明文中のローマ数字による記数法の土層(IIIa・IIIb・IVa・IVb層等)は、基本層序における堆積土層を示している。また、「〇層に起源する土」との表記は、調査を通じて、覆土がいずれの基本層序における堆積土層に由来するかを意識した表現である。「〇層類似土」との表記は、基本層序における堆積土層の複数層の混土割合や炭化物などの含有物の割合によって、上記「〇層に起源する土」とまで明言できないが、それらの含有率が割合的に近似する土層に対する表現である。なお、IVa層上の遺構が、自然堆積によって覆われた場合、IVa・IVb層起源土が堆積し、IIIb層が遺構覆土の最上層に堆積している場合がある。この場合は、窪地堆積の特性であろう。基本土層に比して、炭化物粒子が比較的多く観察できる。

遺構出土の遺物について その数量を記したものは、測量後取り上げることができたもの及び土壌洗浄によって検出したものを含む数値である。遺構掘り上げ中に出土した遺物は、可能な限り測量を行い、出土位置を記録した後に取り上げている。

B 遺構の種類・遺構名

遺構種別は略称を用い、竪穴建物及び平地建物=SB、掘立柱建物=SL、土坑=SK、溝及び旧河川=SD、ピット=Pとした。なお、発掘調査段階で「性格不明遺構」についてはSXの略称を用いたが、本書ではそれらをすべてSK(土坑)と修正判断し、報告している。遺構名はこれらの略称に遺構番号を組み合わせて表現した。なお、遺構番号については、各種別ごとに01番から番号を付している。また、欠番のものが存在するのは、調査中、または整理中に遺構の種別を変更したか、あるいは遺構同士が連結して一つの遺構となった等の理由による。

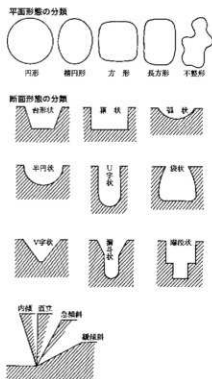
本書では、遺構の種別ごとに説明を行う。遺構の掲載順番については、遺跡の東側から西側の順に記載することを前提としたが、遺構の遺存状態等も考慮して掲載したため、すべてがその限りではない。各説は、基本的に主要な遺構のみにとどめ、示しきれない情報は観察表に提示した。したがって、各説に記載されない遺構及び、遺構の詳細な情報については、別表の《遺構観察表》を参照されたい。

C 遺構の形態及び規模の分類・観察表の記載

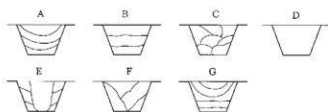
遺構の平面形態及び断面形態の分類は、『和泉A遺跡』で示した分類 [加藤1999] (第6図)に、また遺構の覆土堆積形状については『青田遺跡』で示した分類 [荒川2004] (第7図)によった。ただし、これらの分類に当てはまらないものについては、本文中、あるいは観察表中でその旨を記載している。

遺構の規模による分類については、基本的に直径が50cmを超えるものを土坑、それ以下のものをピットとした。ただし、例外的に柱穴であっても上端部の直径が50cmを超えるものや、土坑であっても直径が50cm未満のものも存在する。これらについては、遺構の断面様相や深度等から、現地で峻別を判断した。

観察表の記載については、これまで刊行された報告書の形式におおむねのっとり、必要項目について記載している。ただし、報告者がさらに必要と判断した項目、及び重要な点などについては、極力掲載することとし、情報の提供に努めた。規模については、遺構プランが確定した段階での平面形の長径・短径の最大・最小値、深度については、遺構プランが確定した段階での上端部から最深部までの値である。したがって、遺構の掘り込み面が遺構プラン確定面よりも上方に位置していた場合、本来の規模・深度はそれよりも大きな値を示す可能性が高い旨を断っておく。調査区の制約等により、全体の形状や規模が明らかでない遺構については、「？」(不明、又は推定の意)、あるいは現存値に「+」(以上の意)を記した。断面形態については、部分によって形状が異なるものも認められるが、全体的な傾向を現地で判断し、その旨を観察表中に記載している。したがって、各遺構の断面図の形状と、観察表の断面形態が合致していない場合も存在する。



第6図 遺構の平面形態と断面形態の分類 [加藤1999]



A レンズ状	後段階がレンズ状に堆積する。
B 水平	後段階が水平に堆積する。
C ブロック状	ブロック状に堆積する。
D 単層	覆土が単一層のもの。
E 柱状	柱状と思われる土層が堆積するもの。
F 斜位	斜めに堆積するもの。
G 水平-レンズ	覆土下位は水平に、上位はレンズ状に堆積するもの。

第7図 遺構埋土の堆積形状の分類 [荒川2004] を一部改変

3 古墳時代の遺構

A 竪穴建物

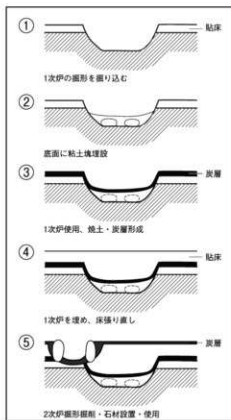
SI01 (図版7・10・11・83・84)

2区北西隅、16B・16C グリッドに位置する。遺構の北側及び西側の一部は調査区外のため、全容は不明である。ただし、調査区の北壁及び西壁の一部に遺構の断面が検出できたことから、SI01は南北約7.8m・東西約7.0mで、南北にやや長い隅九長方形を呈すると想定される。長軸はN-6°-Wで、真北からわずかに北西側を向いている。遺構検出面から床面までは約20cmで、壁の立ち上がりは60°前後である。東壁・南壁沿いには、幅5～10cm・深さ5～8cmの浅い溝が断続的に巡り、壁溝と判断できる。主柱穴は、4か所で検出した。この内、南東側の主柱穴覆土内からは直径が約20cmで、周縁の一部を欠いた扁平な川原石が一点、斜めに傾いた状態で出土している。北西側の主柱穴は、開渠の掘削後に検出したため全容は不明であるが、底面の標高はほかの主柱穴とほぼ同じである。

床面のほぼ中央部には、北側を除く三方を石で囲んだ石囲炉が構築されていた。この石囲炉の調査中、石囲炉とは別の地床炉が1基、石囲炉の構築以前に設置されていたことが判明した。したがって、ここでは最初に構築された地床炉を一次炉、後に構築された石囲炉を二次炉として報告する(図版11)。

一次炉は、建物の床面はほぼ中央部に構築されていた。掘形は、東西50～65cm・南北70～75cm・深さ約15cmの不整形を呈しており、炉の内部底面はよく焼けて焦げ茶色に変色・硬化していた。一次炉内部に石材は残っていないかったが、炉底面の一部に焼土が認められない部分が存在していた。このことから一次炉には当初、部分的に石等が据えられていた可能性も指摘できる。一次炉底面の焼土は北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、また焼土の面が南北に長いことから、焚き口は二次炉(石囲炉)同様に北側であったものと推測できる。一次炉に伴う建物床面の薄い炭層は、炉の掘形を中心に南北約1.7m・東西約2.0mの範囲で認められた。

二次炉に伴う床面の薄い炭層との間には、1～2cmほどの間層(硬く締まったシルト層)が認められ、炉の再構築と共に床土も張り替えられたものと理解できる(第8図)。なお、一次炉を断ち割った際、一次炉底面の焼土の下から白色の粘土塊が2点出土している(図版84)。これは、一次炉を構築する際、炉の掘形の底面に意図的に埋設されたものと判断した。どのような目的でこれらの粘土塊を埋設したかは明らかでないが、いずれの粘土塊も全く焼けていないことから、一次炉の掘形を掘り込み、これらの粘土を設置した後、それを意図的に埋めて炉の底面を構築したものと理解できる。この粘土塊については自然科学分析を行い、生成由来の解明を試みた。その結果、粘土中に含まれる砂は海川の河川作用により堆積した沖積低地の砕屑物に由来し、



第8図 1次炉・2次炉概念図

試料本体は同じく沖積低地の後背湿地の堆積物である可能性が指摘された(第VI章参照)。

二次炉(石囲炉)は、一次炉の掘形を埋め、建物の床面を厚さ2cmほどのシルト質の土で張り替えた後に、床面上方から掘形を掘り込んで構築している。一次炉同様、建物のほぼ中央部に位置するが、一次炉の掘形の範囲からはわずかに東に寄っている。石囲炉の周囲は、南北約1.7m・東西約2.6mの範囲で薄炭の面が広がっており、一部は南西側に向かって細長く突出していた。この炭の突出部については、断面を断ち割って調査したものの、排水路や溝等の遺構は認められなかった。石囲炉の掘形は、直径約38cm・深さ約7.5cmの不整形を呈しており、一次炉の掘形に比べると半分以下の規模である。二次炉掘形の内部縁辺に沿うようにして、川原石が3点据えられていた。石囲炉を構成する石材は、長さ19～30cm・幅10.5～12cm・厚さ4～6cmほどの長楕円形を呈する安山岩である。東側の石材のみ、中央部から折れて北側半分が炉の内側に傾いていた。北側一辺は炉石が据えられていないことと、掘形の上方・建物床面上まで赤く変色していたことから、焚き口は一次炉同様、炉の北側であったものと推測できる。炉石は、掘形内部にそれぞれの掘形を設け、長軸側で立てるようにして設置し、一部は粘土で押さえていたようである。炉の内側底面は被熱により赤く変色し、よく焼けていた。また、炉石本体も被熱の影響により、東側の炉石は割れ、西側の炉石もヒビ割れが生じていた。なお、炉石を外した際、石の掘形底面には炭化物が一面に付着していた。石囲炉内部の覆土は、それぞれ厚さ1cmほどの灰主体の層(1・3層)と炭主体の層(2・4層)が互層を成していた。ある期間、継続して使用されていたものと推測できる。

SI01の東壁沿い中央部には、東西約1.5m・南北約1.4m・深さ約10cmで、均整のとれた方形を呈する掘形(屋内土坑)を検出した(図版10・11)。この掘形中央部には、長径約80cm・短径約68cm・深さ約40cmの2段目の土坑が掘り込まれていた。2段目の土坑内下方には厚さ2～4cmほどで、炭を多く含む層(3・5・11層)と間層のシルト質の土(4・6層)が互層に堆積し、上方には厚さ12cmほどで土器片を含む青灰色土層(2層)、そして1段目の方形の掘形には黄灰色土(1層)が覆っていた。この内、炭を多く含む3層と5層は、西側上方から流入していることが判明した(図版10)。屋内土坑の西側上方には炉が存在していることから、炉の炭化物が流入したものと推測した。これは、この土坑内に覆土が堆積する過程で、引き続き炉が使用されていたことを表している。換言すると、この屋内土坑は堅穴建物廃絶後に埋没したのではなく、建物使用段階で既に埋没(土壌の堆積)が始まっていたことを示している。なお、土坑の最下部付近には、粘土層(12・13層)が認められた。これらの粘土層は、灰糞の可能性も想定されたため、最下層の粘土層(13層)については科学分析を行っている。その結果、重軽鉱物組成の「その他」とされた鉱物の割合が、SK38の粘土や1次炉底面の粘土に比べ最も高いことが判明した(第VII章参照)。「その他」の鉱物の中には、チャートや砂岩、凝灰岩等が含まれている。これらの石材を用いた玉作が行われ、その結果生じた灰糞の可能性を指摘することもできる。

このほか、2段目の土坑の上層(3層上面～2層)からは大型の内磨砥石(586)が1点、また下層(11層)からは長さ5cm・幅2～3cmの小礫が2点、それぞれ出土している。内磨砥石は、炭を多く含む3層の直上から出土していることから、土坑がある程度埋没した段階で土坑内に置かれたものと理解できる。玉の剥片・チップ類の多くは、1～6層を中心に出土している。土器片は、方形掘形上面及びその覆土(1層)中から多く出土したが、2段目の土坑内部では2・5・6・8・11層の各層から小片がわずかに出土した程度である。なお、2段目の土坑底面からは、玉類や土器片等の目立った遺物は一切出土していない。

屋内土坑の1段目から出土した大型の壺(61)の土器片は、SI01の埋没後に掘削されたSK03の覆土中出土の土器片と接合している(図版11)。SK03の掘削時に61の壺の一部が掘り返されたが、それがその

まま SK03 内に廃棄されたものと解釈できる。

以上の様相から、この屋内土坑は玉作に関わる「工作用特殊ピット」の可能性を指摘することができる。土坑は、玉類を研磨した際に生じる砥糞などの堆積により、次第に埋設していったものと推測できる。なお、方形掘形の北東隅付近に認められた白色粘土の堆積については、出土した層位・レベルから、SI01の廃絶・埋没後に掘り込まれたSK03に伴うものと判断している。

SI01の床面は、西側開渠及びセクションの様相から、以下の手順で構築されていることが判明した。

- ① 堅穴建物の中央部及び壁際をやや浅く掘り残すようにして、掘形を掘り込む。
- ② 掘形の窪んだ部分を、平らにして掘削土（4層・IVb層起源の暗灰黄色粘質土）でならす。
- ③ 掘形を掘削土でならした後、最終的に床土（3層・IVb層起源のオリブ黄色シルト）を張って叩き締め、床面を仕上げている。

SI01内における遺物は、覆土中をはじめ、床面直上・貼床内・掘形覆土中からも出土している。特に目立つのが土器小片であるが、床面直上から覆土最上層までまんべんなく出土している。また、玉類の出土も多く、勾玉・管玉・棗玉などの成品・未成品類をはじめ、剥片・チップ類も多数出土した（図版11）。その多くは覆土中からの出土であるが、床面直上からも多くの玉類及び剥片・チップ類が出土した。そのほか、玉類の生産に関わる砥石などの工具類も多く出土している。中でも、建物北東隅付近からは、開渠掘削中ではあるものの大型の置砥石（591）が1点、床面直上に相当する位置から出土している。

なお、SI01と切り合う形で、SK03・36・41・42など複数の土坑が検出されたが、いずれもSI01の廃絶後、堅穴が埋没した後に掘り込まれている。

SI02（図版7・12・85）

2区北壁沿い、15Cグリッドに位置する。遺構の大半は、北側の調査区外に伸びており全容は不明だが、調査区北壁に残された遺構の断面から、東西約6.2m・南北4m以上の隅丸方形を呈するものと想定される。調査区内において検出できたのは、建物の南東隅の一部である。長軸はN-14°-Eで、真北からやや北東側を向いている。主柱穴は、開渠内に存在していたと推測されたため精査を行ったが、検出することはできなかった。壁の立ち上がりは約60°である。壁沿いには、SI01同様に幅約10cm・深さ約10cmの浅い溝が巡っており、壁溝と判断される。建物の南東側南壁沿いからは、ほぼ完形の内磨砥石（614）が1点、床面直上から出土している。また、開渠掘削中ではあるが、建物の南西隅に想定される位置から大型の置砥石（615）が1点出土している。このほか、覆土からは玉類の成品・未成品類も数点出土しており、床面直上からもヒスイ製の勾玉未成品（604・605）が出土している。土器片は主に2層及び3層から出土している。

セクション及び開渠の断面の様相から、SI02は掘形が掘り込まれた後、炭や土器片・シルトブロックなどの混入物を多く含んだ覆土（9層）で一旦平らにならし、その上にシルト質の土（6層）を張って床面としていたことが判明した。この構築法は、隣接するSI01とほぼ同様であり、注目される。

SI03（図版6・12・85）

2区北壁沿い、13Cグリッドに位置する。SI02同様、遺構の大半は調査区外であり、規模など全容は不明である。当初、土坑の一部として調査を行ったが、遺構断面及び平面形態・遺物の出土状態等から、最終的に堅穴建物の一部と判断した。調査区内において検出できたのは、建物の南東隅部である。長軸は、N-20°-Eで、SI02と同様に真北からやや北東側を向いている。調査区内においては、主柱穴は検出していないが、SI01-02同様壁溝が巡っている。本遺構は、掘形を掘り込んだ後に、黄灰色シルト主体の土（12

～15層)で掘形底面をならし、最後に貼床(6・9・11層)で床面を平らに仕上げている。この構築法は、ほかの堅穴建物2棟とも共通している。遺物は、床面直上及び覆土下方(3層)から多数出土しており、大半が土器片である。なお、玉類は緑色凝灰岩A(石材については第V章第2節D3(64頁)参照・以下同じ)製の管玉未成品(616)・蛇紋岩A製の叢玉未成品(617～619)等が出土している。

B 平地建物

SI04 (図版7・13・85・86)

SI04は、15B・15Cグリッドに位置する。東西約4.0m・南北約4.4mの整った長方形を呈する。長軸はほぼ真北を向いている。SK05・06・33等と切り合いを有するが、断面の様相からSK33→SI04→SK06及びSK05の順で構築されたことが判明している。溝は、上幅で30cm前後・深さ8～18cmと狭く浅いもので、断面は半円～台形状を呈する。遺構の切り合い部分を除けば、途切れることなく全周している。溝の覆土は1・2層の2つの層が主体で、生活基盤面であるI a層との土質の違いはわずかなものであった。溝が掘られた後、さほど時間を置かず意図的に埋められた可能性が高い。遺物は主に1層から出土した。甕や器台の脚部といった土器片類に加え、滑石A・滑石B・蛇紋岩A製の勾玉の未成品(620～622)や緑色凝灰岩B製の管玉の未成品(624)、ガラス玉の小片等も出土している。溝で囲まれた内部には、ピットが数基確認されたが、建物に伴うものかどうかは明らかではない。また、灰の痕跡(焼土)も一切認められなかった。なお、最終的に各溝の長軸方向に合わせて溝の内部を断ち割ったが、溝の底面に小舞の小穴列等は認められなかった。

SI05 (図版7・13・86)

SI05は、15Bグリッドに位置する。東西約4.0m・南北約4.8mの長方形を呈し、長軸はSI04同様、ほぼ真北を向いている。SI04に比べ、長辺方向がわずかに長いものの、ほぼ同規模で、長軸の方向もそろっている。溝の南西隅は、SD11が西側に向かって伸びるが、切り合いは明瞭ではなく、SI05の溝と一連のものである可能性が高い。溝は、上幅約20cm、深さ13～29cmで、断面は浅い半円～台形状を呈する。東側の一部、及び北側の大部分が途切れていた。溝の内部(底面)には、P313・378・409等のピットが検出された。これらは長辺(南北)側の溝の隅に近く、それぞれ対称的な部分に位置している。溝の覆土は1・2層の2つの層が主体で、遺物は主に南側及び西側の溝内、1層から出土した。甕や壺等の土器片のほか、滑石A製の勾玉の成品(626)、ヒスイ製の勾玉未成品(627)、緑色凝灰岩B・A製の管玉の未成品(628～630)も出土している。なお、108の甕のみ、溝で囲まれた内側、溝の覆土外から出土している。この溝の内側には、SK09・39、SD45などが存在しているが、溝と一連の施設であるかどうかは不明である。なお、灰の痕跡は一切認められなかった。

SI06 (図版7・14・87)

SI06は、14B・15B・14C・15Cグリッドに位置する。東西3.2m以上・南北約4.9mの長方形を呈し、SI05とはほぼ同規模の建物であったと想定されるが、北西側長辺の溝はSD37及びSK07によって破壊されており、全容は不明である。長軸はN-34°-Eで、SI04・05に比べ東へ大きく傾いている。溝は、上幅約20cm、深さ15～30cmで、断面は半円～浅い台形状を呈する。南西側の溝は、SK12の南側で途切れている。溝の内側には、灰の痕跡は認められなかった。溝の覆土は2層に分けられる。遺物は溝の覆土から小型の甕や器台の脚部等、土器片が複数出土しているが、玉作関連遺物の出土はわずかであった。

SI07 (図版6・14・87)

SI07は、13B・14B・13C・14Cグリッドに位置する。東西約4.8m・南北約6.0mの長方形を呈し、全容が判明している平地建物の中では最も規模が大きい。長軸はN-9°-Eで、真北からわずかに北東側を向いている。溝は、上幅20～50cm、深さ10～40cmで、断面形は半円～台形状を呈する。溝は、SK34・29などに切られるが、当初は途切れることなく全周していたようである。溝に重なる形で、複数のピットが検出された。これらのピットは長辺(南北方向)側の溝で認められるのに対し、短辺(東西方向)側の溝においては認められない。なお、P153・590、SK29南脇のピット、P39北脇のピットは、長辺側の溝においてそれぞれ対称的な部分に位置し、SI05と類似した様相を示すといえる。ただし、これらのピットはSI07の溝よりも新しく掘られたものがあり、一概にSI07に伴うものかどうかは断定できない。溝で囲まれた内部には、SK15等が存在するが、SI07と一連の施設であるかどうかは不明である。また、灰の痕跡等も認められなかった。遺物は、堯や小型丸底埴といった土器片のほか、ヒスイ製の勾玉未成品(632・633)や緑色凝灰岩A製の管玉未成品(634)などが出土している。特に、北側の溝内から多くの遺物が出土している。

SI08 (図版6・16)

SI08は、13B・14Bグリッドに位置する。南側の一辺及び北側に向かって折れる溝の一部しか検出できなかったことから、確実に平地建物を構成する溝であるのか、また平地建物であるとすれば南側の溝が短辺なのか長辺なのか等は明らかではない。ただし、溝の幅や深さ・断面形・覆土の堆積状況等がほかの平地建物と似通っている点、また溝の東西端部が北側に向かってほぼ直角に折れ曲がっている点、さらにSI07の外郭施設としては長軸の方向が異なる点等から平地建物と判断した。

南側の溝を長辺とすると、長軸はN-82°-Eでほぼ東西を向き、ほかの平地建物とは長軸の方向が大きく異なる。長辺は約6.4mで、東側が約1.4m、西側が約20cm北側に向かって折れ曲がっている。溝の幅は20cm前後、深さは10～20cm前後で、断面形は半円～台形状である。溝の覆土からは、少量の土器片が出土しているものの、図示し得たものはなく、玉作関連遺物の出土もわずかであった。北側に溝が確認できない原因の一つに、当初から掘られた溝が浅く、標高の高い山側(南側)のみ相対的に深く掘られて残ったものの、標高の低い海側(北側)は溝が浅く、後に消失してしまった可能性も指摘できる。

SI09 (図版6・15・88)

SI09は、13B・14Bグリッドに位置する。ほかの平地建物とは異なり、独立した3本の溝によって構成されている。西側には溝が存在せず、全体としては途切れた「コ」の字形を呈する。短辺側の溝が西側に向かうにつれてやや間くため、長辺の長さは東側と西側で異なる。各溝の端部を延長してつないだ場合の建物の規模は、東側の長辺約4.3m・西側の長辺約5.0m、南側の短辺約3.4m・北側の短辺約3.6mの四角形を呈し、SI04とほぼ同規模の床面積といえる。長軸はN-10°-Eで、SI07とほぼ同じ方角を向いている。溝の覆土からは、土器の小片が出土しているものの、図示し得たものはない。

SI10 (図版6・15・88)

SI10は、13B・13Cグリッドに位置する。南側の溝、及び東側・西側の溝の一部が検出されたが、北側については溝が検出されていない。SI08同様、南側の溝が短辺・長辺のいずれになるかは不明であるが、西側の溝の方向がSI07の長辺とほぼそろっていることから、当初から意識的・計画的に建物の配置がなされたと推測できる。南北方向を長辺とした場合、長軸はN-79°-Wとなる。北側の溝や西側の溝の北部、及び東側の溝の大部分が検出できなかったのは、もともと溝が掘られていなかったか、あるいはSI08と

同様に、標高の低い東側・北側に掘られた溝が浅く、後に消失してしまったものと推測できる。なお、建物の東側には河川による落ち込みが迫っており、地盤の崩落の影響もあるものと想定される。溝は東西約6.2m、南北が西側で約2.8m・東側で約0.9m、断面形は半円～台形状である。遺物は、溝の覆土から甕や壺・器台といった土器片のほか、滑石B製の勾玉未成品(635)や緑色凝灰岩B製の管玉未成品(636)等も出土している。

SI11 (図版6・16・88)

SI11は、13B・14Bグリッドに位置する。南側の大部分は調査区外のため、全容は不明である。ほかの平地建物とは異なり、溝がやや鋭角に折れ曲がっている。SI12・SD08などと切り合い関係を有し、SI12より新しく、SD08より古く構築されたことが判明している。溝は、上幅20～50cm、深さ5～25cmで、北西隅部のみ幅約80cmと広がっている。断面形は半円～台形状で、覆土は単層1層である。遺物は、甕や壺の土器片類が出土している。

SI12 (図版6・16・88)

SI12は、13B・14Bグリッドに位置する。東西約5.0m、南北3.8m以上と推定されるが、南側の大部分は調査区外のため、全容は不明である。東西方向を短辺、南北方向を長辺とすると、長軸はN-14°-Eとなり、SI02等と長軸をほぼそろえる。西側の溝及び東側の溝は、北側の溝に対してほぼ直角に南側へ伸びている。SI13より新しく、SI11より古く構築されている。調査区内の様相からは、もともと溝は途切れることなくつながっていたものと推定される。幅は30～50cm、深さは5～20cmで、断面形は半円～台形状である。溝で囲まれた内部には、ほかの平地建物同様、埴等は検出されていない。溝の覆土からは、壺等の土器片類が出土しているもの、玉作関連遺物の出土はわずかであった。

SI13 (図版6・15・89)

SI13は、13Bグリッドに位置する。南側の大部分は調査区外のため、全容は不明である。北側と西側の溝の一部が検出されており、2本の溝は北西隅部で切り合い関係を有している。2本の溝の内、どちらが長辺・短辺になるかは不明であるが、SI12の溝と方向をほぼ同じくしており、ほかの平地建物の様相からも、南北方向が長辺になるものと推測される。したがって、長軸はN-40°-Eとなる。北側の溝は調査区内において約3.2m、西側の溝は調査区内で約2.8mを測るが、それぞれ東側・南側調査区外に向かってさらに伸びている。溝の幅は15～40cm、深さは5～15cmで、断面形は半円ないしは台形状を呈する。溝の覆土からは、結合器台等の土器片が出土している。

C 掘立柱建物

SB01 (図版6・17)

SB01は、13Bグリッドに位置する。P625・335・128・130・370で構成されるが、南東隅の柱穴は調査区外に位置するものと想定され、検出できなかった。桁行2間(約5.5m)×梁行1間(約3.9m)の個性構造で、長方形を呈する。梁行・桁行・平面規模が、SB04・05と類似する。推定床面積は約21.5㎡、長軸はN-76°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。SI09やSK32より新しく、P65やP336より古く構築されている。柱穴底面の標高は3.6m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面はU字状、ないしは箱状・弧状で、柱根は全く残存していなかった。図示し得た遺物は、P130の甕の底部(138・139)、P335の壺の口縁部(137)、P128の器台もしくは高杯の脚部片(140)である。

SB02 (図版7・17)

SB02は、14Bグリッドに位置する。P334・180・340・27・160で構成されるが、南東隅の柱穴はSD33と重複し、判然としなかった。桁行2間(約5.8m)×梁行1間(約3.2m)の側柱構造で、長方形を呈する。ほかの掘立柱建物に対し、梁行がやや狭い。推定床面積は約18.6㎡、長軸はN-80°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。想定される南東隅の柱穴を除いては、いずれの柱穴も切り合い関係は認められない。柱穴底面の標高は3.8m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面はU字状ないしは箱状・弧状で、柱根は全く残存していなかった。なお、いずれの柱穴からも、図示し得る遺物は出土していない。

SB03 (図版7・18)

SB03は、13C・14Cグリッドに位置する。P53・26・622・20・102・165で構成される。桁行2間(約5.6m)×梁行1間(約4.4m)の側柱構造で、長方形を呈する。床面積は約24.6㎡、長軸はN-80°-Wの東西棟で、SB02と長軸方向をそろえている。桁行・梁行・平面規模は、SB07とほぼ等しい。柱穴は、SI07・06、SD24・25、P64・162・169などと切り合い関係を有する。SI07・06より古く構築され、ほかの遺構より新しい。なお、隣接するSB02・05とは長軸の方向をそろえるものの、切り合い関係が認められず、新旧関係は不明である。柱穴底面の標高は4.0m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面はU字状ないしは弧状で、柱根は全く残存していなかった。図示し得た遺物は、P20の小型の甕(141・142)及び砥石(638)、P26の薬玉の成品(637)、P165の敲石(639)である。

SB04 (図版6・18)

SB04は、13B・13C・14B・14Cグリッドに位置する。P331・333・611・596・99で構成されるが、北西隅の柱穴は調査区外に存在すると推定され、確認することはできなかった。桁行2間(約5.6m)×梁行1間(約3.7m)の側柱構造で、長方形を呈する。梁行・桁行・平面規模が、SB01・05と類似する。推定床面積は約20.7㎡、長軸はN-84°-Wで、ほかの掘立柱建物同様、東西棟である。SK34・27、SD50・24・14と切り合い関係を有する。いずれの遺構よりも、新しい。柱穴底面の標高は3.7m前後だが、北東隅の柱穴のみ50cm以上深く掘られている。柱穴の断面はU字状ないしは箱状で、柱根は全く残存していなかった。図示し得た遺物は、P99・596の甕の口縁部(143～145)3点である。

SB05 (図版7・19)

SB05は、14B・14C・15B・15Cグリッドに位置する。P13・402・426・624・70・175で構成される。桁行2間(約5.3m～5.5m)×梁行1間(約3.9m)の側柱構造で、長方形を呈する。梁間・桁行・平面規模が、SB01・04と類似する。床面積は約21.0㎡、長軸はN-78°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。SI02・06、SK04・12、P168と切り合い関係を有する。SK12より古く、SI02・06～SD05、SK04、P168より新しい。柱穴底面の標高は3.6m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面はU字状ないしは漏斗状・弧状で、柱根は全く残存していなかった。図示し得た遺物は、P175の甕の底部(146)1点のみである。

SB06 (図版7・19・89)

SB06は、15B・16Bグリッドに位置する。P407・257・250・96・286で構成されるが、南側の柱穴は南西隅を除いて調査区外のため、詳細は不明である。桁行3間(約7.4m)×梁行1間(約4.3m)の側柱構造で、長方形を呈するものと想定される。今回検出された掘立柱建物の中では、唯一、桁行3間となる。推定床面積は約31.8㎡、長軸はN-82°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。SD47とわずかに切り合い関係を有し、SD47より新しく構築されている。柱穴底面の標高は3.4m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面形は漏斗状、ないしはU字状で、掘形及び木柱の痕跡も検出されたが、柱根そのものは全く残存していなかつ

た。図示し得た遺物は、P257の蓋のつまみ(147)、P286の器台の脚部(148)のみである。

SB07 (図版7・20・89)

SB07は、16Bグリッドに位置する。P285・423・408・383・381で構成されるが、南西側の柱穴は調査区外に位置すると想定され、検出できなかった。桁行2間(約6.0m)×梁行1間(約4.2m)の側柱構造で、長方形を呈する。桁行・梁行・平面規模が、SB03とはほぼ等しい。推定床面積は約25.5㎡、長軸はN-90°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。SK33と切り合い関係を有し、SK33より古い。柱穴底面の標高は3.6m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面形はほとんどがU字状である。柱根そのものは腐蝕して全く残存していなかった。なお、いずれの柱穴からも、図示し得る遺物は出土していない。

SB08 (図版8・20・90)

SB08は、18B・19Bグリッドに位置する。P564・563・562・571・483・485・487・492・488・503・565で構成される。桁行2間(約4.2m～4.3m)×梁行2間(約3.4m～3.6m)の側柱構造で、今回確認された掘立柱建物の中では唯一、東西方向に棟持柱を有する。また、桁側の柱穴列東延長方向やや内側に1本ずつ、計2本の柱穴が認められ、さらにその東側に、小規模な柱穴が1基検出された。これらがSB08に伴うとすれば、落棟状の施設である可能性も指摘できる。このような施設は、新潟県内では縄文時代晩期の胎内市青田遺跡などでも検出され〔荒川ほか2004・宮本2004〕、注目される。

床面積は約15㎡(落棟状の施設を含むと約20㎡)、長軸はN-88°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。唯一SK45と切り合い関係を有し、SK45より古い。柱穴底面の標高は3.2m前後で、ほぼ一定している。柱穴の断面形はおおむねU字状もしくは箱状で、落棟状施設を構成する柱穴はV字状もしくは漏斗状である。柱根そのものは全く残存していなかったが、掘形及び、柱根が腐蝕した痕跡と想定される黒色土層が確認されている。図示し得た遺物として、P483から甕の胴部中位～底部(150)と半分欠けた土鍾(151)が、またP563から甕の口縁部(149)がそれぞれ出土している。

SB09 (図版8・21・90)

SB09は、18C・19B・19Cグリッドに位置する。P486・484・482・545・495・559で構成される。桁行2間(約4.7m～5.0m)×梁行1間(約4.0m～4.3m)の側柱構造で、長方形を呈する。梁行の広さはSB03やSB07とはほぼ等しいが、桁行の長さがやや短い。床面積は約20㎡、長軸はN-87°-Wで、東西棟の掘立柱建物である。ほかの遺構とは、全く切り合い関係を有さない。柱穴底面の標高は3.3m前後で、ほぼ一定している。P559からは、柱穴の底から7cmほど浮いた位置に、掌大の扁平な円礫が1点出土している(図版21)。なお、柱根そのものについては全く残存していなかった。また、いずれの柱穴からも、図示し得る遺物は出土していない。

D 土 坑

SK40 (図版6・21)

12・13 Bグリッドに位置する。検出面はIVa層、下位のIVb層上面で平面形態を確定した。P365と重複し、これに切られている。平面形は隅丸方形を呈し、長径185cm、短径139cm、深さ20cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b層に起源する土を主体に、IV a・IV b層に起源するブロック状の土を含む。2層はIV a・IV b層に類似する。覆土からは、少量の土器片(152～154)のほか、蛇紋岩Aのチップ数片が出土した。

SK35 (図版6・21・91)

13C グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は不整形を呈し、長径318cm、短径118cm、深さ5～15cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土はIV a・IV b 層に類似し、単層である。IV a・IV b 層に比してややしまりに欠け、炭化物粒子を少量含む。遺物は多くの土器片(155～158)のほか、ヒスイ製の勾玉未成品(640)や内磨砥石(642)等の玉作関連遺物も出土している。

SK30 (図版6・21)

13B グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。SH2 - SD34と重複し、これを切っている。平面形は楕円形を呈し、長径108cm、短径65cm、深さ30cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b 層の窪地堆積で、炭化物粒子を少量含む。2層はIV a・IV b 層に類似する。IV a・IV b 層に比してややしまりに欠け、炭化物粒子を少量含む。遺物は覆土から土器片が少量出土した。

SK32 (図版6・21)

13B グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は隅丸方形を呈し、長径98cm、短径72cm、深さ20cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土はIII b 層の窪地堆積による単層で、炭化物粒子を少量含む。遺物は覆土から少量の土器片が出土した。

SK25 (図版6・21・91)

13B グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。P588と重複しているが、土坑の覆土掘り上げ後に検出したもので、新旧関係は不明である。平面形は円形を呈し、径は75～60cm、深さ20cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土はIV a・IV b 層類似土の単層で、III b 層に起源するブロック状の土を少量含む。底面からまとまった粘土塊が出土した。土器片類のほか、覆土から赤玉の原石、及び蛇紋岩Aの剥片等が出土している。

SK21 (図版6・21)

13B グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は楕円形を呈し、長径82cm、短径56cm、深さ10cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b 層類似土で炭化物粒子を少量含む。2層はIV a・IV b 層類似土で、III b 層に起源するブロック状の土を少量含む。炭化物粒子を少量含む。遺物は覆土から少量の土器片(159)が出土した。

SK18 (図版6・22)

13B・C グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。P88と重複し、これに切られている。平面形は不整形を呈し、長径140cm、短径75～124cm、深さ22cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は単層で、III b 層類似土である。IV a・IV b 層に起源するブロック状の土を多量に含む。覆土から土器片類(160)のほか、緑色凝灰岩A・Bのチップ類や蛇紋岩Bの石核等が出土している。

SK17 (図版6・23)

13C グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は楕円形を呈し、長径106cm、短径52cm、深さ24cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b 層類似土で、IV a・IV b 層に起源する土を多量に含む。2層はIV b 層類似土で、IV b 層に起源するブロック状の土及び炭化物粒子を少量含む。なお、遺物は土器片類が出土したが、

図化し得なかった。

SK27 (図版6・23)

13C グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。P99と重複し、これを切っている。平面形は楕円形を呈し、長径203cm、短径126cm、深さ16cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土はIV a・IV b 層類似土の単層で、しまりにやや欠け、炭化物粒子を少量含む。覆土から少量の土器片類が出土した。

SK38 (図版6・23・93)

13B グリッドに位置し、南東側の一部が調査区外となっている。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は円形を呈し、径68～85cm、深さ28cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土はIII b 層類似土の単層で、炭化物粒子を多く含む。底部から粘土塊が8個体出土し、そのほとんどは各々接していた。自然科学分析の結果、これらの粘土はほかの粘土同様、後背湿地の堆積物である可能性が指摘された(第VI章参照)。なお、覆土から少量の土器片類が出土した。

SK23 (図版6・21・91)

13B グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は隅丸方形を呈し、長径66cm、短径60cm、深さ25cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土はIII b 層類似土の単層で、しまりにやや欠け、炭化物粒子を少量含む。覆土からヒスイの原石・蛇紋岩 A の石核・緑色凝灰岩 A のチップがそれぞれ1点ずつ出土している。このほか、覆土下層から底面にかけて多量の土器片(161～170)が出土している。

SK34 (図版6・22・92)

13B・C～14B・C グリッドに位置する。検出面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。S107 - SD13・22と重複し、これを切っている。平面形は不整形円形を呈し、長径317cm、短径305cm、深さ40cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は5層に識別できる。1層から3層まではレンズ状に堆積する。1層はIII b 層類似というよりも、そのものであり、III b 層の窪地堆積である。炭化物粒子をやや多く含む。2層はIV a 層類似土で炭化物粒子を少量含む。3層はIII b 層類似土でブロック状のIV層が多量に混入する。4層は地山(IV層)の崩落土で、ブロック状のIII b 層に起源する土を少量含む。5層はブロック状のIII b 層に起源する土を少量含む。炭化物粒子を少量含む。地山崩落土の4層と木の根によると思われる5層を除外して考えれば、1層から3層まではレンズ状に堆積するが、2・3層は自然堆積と思えない。土坑底面に広く堆積する3層の堆積は、III b 層に起源するが、ブロック状のIV層起源土を多量に含む。2層の堆積は、IV a 層に起源する土だが、この堆積段階はIII b 層の一部が既に遺跡を覆っている段階であり、層の厚さからみてもIV層で形成されている土坑壁面の風化堆積土とも思えない。やはり、人為的な埋土であろうか。覆土からは、大量の土器片(171～192)が出土した。また、滑石B製の勾玉成品(643)・未成品(644)、蛇紋岩 A 製の葉玉成品(648)をはじめ、緑色凝灰岩 A・B 製の管玉未成品(645～647)、砥石(649)、ヒスイの原石・石核類、緑色凝灰岩 A～C や蛇紋岩 A の剥片・チップ類等、玉作関連遺物も多量に出土している。

SK26 (図版6・23)

13C グリッドに位置し、調査区北壁に重複する。確認面はIV a 層、下位のIV b 層上面で平面形態を確定した。平面形は楕円形を呈し、長径90cm以上、短径40cm、深さ16cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土はIV b 層類似土の単層で、III b 層に起源する土を少量含む。炭化物粒子を少量含む。遺物は覆土か

らごく少量の土器片 (198) が出土した。

SK28 (図版 6・23)

14B グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SI11 - SD33、P400 と重複し、これらを切っている。平面形は楕円形を呈し、長径 110cm、短径 79cm、深さ 35cm を測る。断面形は半円状を呈する。覆土は 4 層に識別でき、地山 (Ⅳ b 層) 崩落土である 4 層を除き、レンズ状に堆積する。1 層はⅢ b 層類似土でⅣ b 層に起源する土をブロック状に少量含む。2 層はⅣ a 層類似土で炭化物粒子を少量含む。3 層はⅣ a 層類似土で、Ⅲ b 層に起源する土をブロック状に少量含む。炭化物粒子を少量含む。遺物は覆土上層から土器片が多く出土した。なお、玉作関連遺物は蛇紋岩 A の剥片が 1 点のみ出土している。

SK15 (図版 6・23)

14C グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。平面形は円形を呈し、長径 180cm、短径 120cm、深さ 40cm を測る。断面形は半円状を呈する。覆土は 4 層に識別でき、レンズ状に堆積する。1 層はⅢ b 層そのもので、Ⅲ b 層の窪地堆積である。炭化物粒子を少量含む。2 層はⅣ a 層類似土で、炭化物粒子を少量含む、Ⅲ b 層に起源する土をブロック状にやや多く含む。3 層はⅣ a 層類似土で、Ⅳ b 層に起源する土をブロック状にやや多く含む。4 層はⅣ a 層類似土で、Ⅳ b 層に起源する土をブロック状に少量含む。このように、土層観察によれば、2 層以下は人為的な埋め戻しの可能性が高い。覆土からは多くの土器片 (193 - 196) のほか、蛇紋岩 A 製の勾玉未成品 (650) や内磨砥石、緑色凝灰岩 A・B や鉄石英の剥片・チップ等が出土している。

SK16 (図版 6・23)

14B グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。平面形は楕円形を呈し、長径 110cm、短径 65cm、深さ 20cm を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は 2 層に識別でき、レンズ状に堆積する。1 層はⅢ b 層そのもので、Ⅲ b 層の窪地堆積である。炭化物粒子を少量含む。2 層はⅣ a 層類似土でしまりはやや弱く、炭化物粒子を少量含む。遺物は覆土から、ごく少量の土器片 (199) 及び剥片が出土している。

SK20 (図版 6・23)

14B グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SI08 - SD28 と重複しこれを切っている。平面形は楕円形を呈し、長径 75cm、短径 62cm、深さ 48cm を測る。断面形は半円状を呈する。覆土は基本的にⅢ b 層類似土の単層であるが、ブロック状に含まれるⅣ a・Ⅳ b 層の多寡によって 2 層に識別できる。1・2 層とも炭化物粒子を少量含む。覆土からごく少量の土器片のほか、ヒスイ及び緑色凝灰岩 A の剥片、チャートの原石等が数点出土している。

SK29 (図版 6・23)

14C グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SI07 - SD23 と重複している。覆土の差異はわずかであるが、SI07 - SD23 を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、長径 68cm、短径 40cm、深さ 15cm を測る。断面形は弧状を呈する。覆土はⅢ b 層類似土の単層、Ⅳ b 層に起源する土を多量に含む。遺物は覆土からごく少量の土器片が出土したのみである。

SK31 (図版 7・22)

14B グリッドに位置し、南側がわずかに調査区南壁にかかる。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SD48 と重複している。切り合いは確認できず新旧は不明である。一連の遺構の可能

性も否定できないが、ここでは土坑として扱った。平面形は円形を呈し、径95cm、深さ23cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土はSD48と同様でIV a層類似土の単層である。しまりにやや欠け、炭化物粒子を少量含む。覆土から多量の土器片(211・212)のほか、ヒスイや緑色凝灰岩B、蛇紋岩Aの剥片・チップ類が出土している。調査段階での遺物の取り上げは、SD48と一連の遺構と考え、これを含めてSK31としていたため、ドット上げた遺物以外についてはいずれの覆土に属するか明瞭でない。ただし、調査時に撮影した遺物出土状態の写真では、遺物はSK31の平面形に則して集中して出土している。

SK08 (図版7・23)

14Bグリッドに位置する。確認面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。平面形は不整形円形を呈し、長径120cm、短径90cm、深さ26cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b層類似土で、IV b層に起源する土がブロック状に多量に含む。2層はIV a層類似土で、炭化物粒子を少量含む。覆土からは多数の土器片(204～206)のほか、蛇紋岩B・滑石A製の勾玉未成品(652・653)、緑色凝灰岩B製の管玉未成品(654)、蛇紋岩Aの剥片・チップ類等を検出した。

SK10 (図版7・24)

15Bグリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。SK11と重複し、これを切っている。平面形は不整形円形を呈し、長径110cm、短径90cm、深さは最深で12cmを測る。断面形は不整形ながら弧状を呈する。覆土はIV a層類似土の単層で、炭化物粒子を少量含む。覆土から多数の土器片(215・216)のほか、チャートの原石・剥片、緑色凝灰岩B・蛇紋岩Aの剥片・チップ類等が出土した。

SK11 (図版7・24)

15Bグリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。SK10と重複し、これに切られている。平面形は不整形を呈し、長径100cm、短径80cm、深さは最深で18cmを測る。断面形は不整形を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b層類似土で、IV層を起源とする土をブロック状に少量、及び炭化物粒子を少量含む。2層はIV a層起源土で、炭化物粒子を少量含む。覆土から多数の土器片(217・218)のほか、ヒスイの原石が1点出土している。

SK12 (図版7・22・92)

14B・C～15B・Cグリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。SB05 - P402と重複し、これを切っている。平面形は不整形円形を呈し、長径185cm、短径95cm、深さ29cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は4層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIV a層類似土で、IV a層を起源とする土をブロック状に少量、及び炭化物粒子を多量に含む。2層はIV a層類似土で、やはりIV層に起源する土をブロック状に少量含む。炭化物粒子は、1層に比して少ないが多く含む。3層はIII a層に起源する土で、粗砂を多く含む。炭化物粒子を多量に含む。4層はIV a層類似土で、炭化物粒子を少量含む。3層を中心として、復元率の高い土器の大片(226～241)がまとまって出土した。また、覆土からは蛇紋岩A製の勾玉未成品(656)、ヒスイ・緑色凝灰岩A・蛇紋岩A・鉄石英・チャート・滑石A等の剥片・チップ類が出土している。

SK07 (図版7・24・97)

14Cグリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。P345、SD37と重複し、P345を切っている。SI06 - SD05との切り合い関係は確認できなかった。堆積土層の観察からSD37と一連の遺構の可能性が高いが、平面形態から、ここでは土坑として扱った。平面形は長楕円形を

呈し、長径は南西側がSD37に連結するため195cm以上、短径は93cmで、この幅を維持しつつ自然にSD37に移行している。深さ34cmを測る。断面形は底面中央部がやや不整形を示すもの全体として弧状を呈する。覆土は3層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はⅢb層類似土で、Ⅲb層に起源する土をブロック状に少量含む。2層はⅢb層類似土で、上層に比して黒味を帯びた色調を呈する。SD37の覆土との分離ができなかった層である。3層はⅢb層類似土で、炭化物粒子を少量含む。遺物は底面及び覆土から少量の土器片(213・214)及び玉作関連遺物が出土している。なお、遺物取り上げに関して調査段階では、覆土をSD37と区別していない。SK07として取り上げた遺物には、緑色凝灰岩A製の管玉未成品(651)がある。

SK48 (図版7・24)

15Cグリッドに位置する。検出面はⅣa層、下位のⅣb層上面で平面形態を確定した。SI02と重複し、これに大きく切られている。平面形は不整形を呈し、残存している部分で長径216cm以上、短径70cm以上、深さ30cmを測る。断面形は不整形ながら弧状を呈する。SI02南北メインベルトの東側断面で落ち込みを確認していたが、当初、SI02の壁の立ち上がりと考えSI02の覆土として掘り上げてしまったため、SK48の覆土としての土層注記がない。記憶では、SI02の覆土と近似し、Ⅳ層類似土で、色調はⅣ層に比べやや暗く、下層に炭化物粒子が多く見られた。遺物は底面及び覆土から少量の土器片(219・220)が出土している。

SK04 (図版7・24・93)

15Cグリッドに位置する。検出面はⅣa層、下位のⅣb層上面で平面形態を確定した。SB05 - P426、P324、SD37と重複している。P324を切っており、P426に切られている。SD37との切り合い関係は確認できなかった。SD37と一連の遺構の可能性もあるが、ここでは土坑として扱った。平面形は楕円形を呈し、長径は南西側がSD37に連結するため240cm以上、短径は125～130cmで、この幅を維持しつつ自然にSD37に移行している。断面形は弧状を呈する。覆土は7層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はⅢb層類似土で、炭化物粒子を少量含む。2層はⅢb層類似土で、炭化物粒子を少量含む。3・4・5層の主体はⅢb層に起源する土で、西側からの炭の流れ込みとして包括できる層である。特に5層は炭化物が面的に堆積する。6層はⅢb層類似土で、炭化物粒子が半ば混ざり、上層に比して黒味を帯びた色調を呈する。SD37の覆土と分離できなかった層である。ちなみに、SD37で連結するSK07の2層に比定される層である。7層はⅣb層を起源とする土で、Ⅳb層に比してややしまりに欠ける。覆土から大量の土器片(246～255)のほか、ヒスイ製の勾玉未成品(658)、蛇紋岩A製の勾玉未成品(659・660)、緑色凝灰岩A製の管玉の破片(661)及び緑色凝灰岩B製の管玉未成品、蛇紋岩A製の薬玉未成品(662)、各種石材の原石・剥片・チップ類等、多くの玉作関連遺物が出土している。

SK09 (図版7・24)

15Bグリッドに位置する。検出面はⅣa層、下位のⅣb層上面で平面形態を確定した。SK39と重複し、これを切っている。平面形は円形を呈し、長径155cm、短径130cm、深さ38cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土は2層に識別できる。1層はⅣa層類似土で、SI05 - SD07の覆土と近似している。Ⅳa層に比べ、しまりに欠け、わずかに黒色味を帯びた色調を呈する。2層はⅣb層類似土で、炭化物粒子をほとんど含まない。覆土からは、多数の土器片(221～225)のほか、ヒスイ製の勾玉未成品(664)、蛇紋岩A・滑石B製の勾玉未成品(663)、緑色凝灰岩A・B製の管玉未成品、蛇紋岩A製の薬玉未成品(665)、各種原石・剥片・チップ類等、多くの玉作関連遺物が出土している。

SK39 (図版7・24)

15B グリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。SK09と重複し、これに切られている。平面形は円形を呈し、長径77cm、短径66cm、深さ18cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土は5層に識別でき、レンズ状に堆積する。全層ともIV a・IV b層類似土である。しまり、粘性、色調の明暗、炭化物粒子の含有量などの差異で分類できる。特に5層は炭化物を多量に含み、黒色味を呈する炭層である。遺物は土器片のほか、剥片等少量の玉作関連遺物が出土した。

SK05 (図版7・25・93)

15B グリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。III b層中から掘り込まれている。SI04 - SD03と重複し、これを切っている。平面形は不整形を呈し、長径164cm、短径106cm、深さ42cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は6層に識別でき、レンズ状に堆積する。1～3層まではIII b層類似土で炭化物粒子を少量含み、3層はその割合がやや多い。4・6層はIV b層類似土で、土質は互いに近似している。5層は炭化物層である。覆土から緑色凝灰岩A製の管玉未成品(666)、蛇紋岩A・滑石B製の甗玉未成品(667・668)、それに各種原石・剥片・チップ類が出土した。中でも、蛇紋岩Aの出土数が多い点に注目される。土器は3層を中心に多数出土(256～262)したが、6層にはほとんど含まれていない。

SK33 (図版7・26・94)

15・16B グリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。SK06・37、SI04 - SD03、SD06と重複し、SK06、SI04 - SD03に切れ、SK37、SD06を切っている。平面形は長楕円形を呈し、長径261cm、短径97～115cm、深さ30cmを測る。断面形は南北で弧状を呈するが、東西は台形状を呈する。覆土は7層に識別できる。1～3層はIII b層類似土で、黒味を帯び炭化物粒子を少量含む。4層以下の覆土は大きく2種に分類でき、上層の4層はIV a層類似土である。下層の7層はIV b層類似土で、あたかも粘土を敷き詰めたような堆積状況である。4層と7層の南側層境いには部分的には炭化物層である5層が挟在する。5層は土器を多量に含み、炭化物を少量含む。土坑南壁際の7層上面には径30cm以上の川原石を含む礫がまとまって出土している。覆土からは多量の土器片(263～280)とともに、多数の玉作関連遺物が出土している。蛇紋岩A・滑石A製の勾玉未成品のほか、緑色凝灰岩A製の管玉未成品(670)、蛇紋岩A製の甗玉未成品(671)、滑石B製の白玉(672)、内磨砥石(673)や敲石(674)等が出土している。原石・石核・剥片・チップ類では、ヒスイ(669)及び蛇紋岩Aの出土量が目立つ。

SK06 (図版7・25・93)

15B グリッドに位置する。検出面はIV a層、下位のIV b層上面で平面形態を確定した。III b層中から掘り込まれている。SI04 - SD03、SK33と重複し、これを切っている。平面形は長楕円形を呈し、長径130cm、短径91cm、深さ23cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は6層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIII b層類似土で、炭化物を少量含む。2層以下5層まではIV a層類似土である。この内、2層と4層は炭化物粒子を多量に含み、黒味を帯びた色調を呈する。3層はIV b層を起源とする土をブロック状に少量含み、炭化物粒子は少ない。5層はIV b層を起源とするブロック状の土との混土層で、炭化物粒子を多く含む。6層はIV b層類似土で、しまりに欠け、IV a層を起源とする土をブロック状に少量含む。炭化物粒子は少ない。覆土からは多数の土器(242～245)のほか、滑石A製の勾玉未成品(675)、ヒスイ製(677)及び滑石A製(676)の勾玉未成品、緑色凝灰岩C製(679)及び黒色頁岩製(678)の管玉未成品、蛇紋岩A製の甗玉の未成品(680)、石錘(681)等が出土している。剥片・チップ類では、蛇紋岩Aの出

土数が突出している。

SK37 (図版7・25・94)

16B グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SK33と重複し、これに切られている。平面形は長楕円形を呈し、長径157cm、短径88cm、深さ47cmを測る。断面形は台形状を呈する。覆土は4層に識別でき、レンズ状に堆積する。1～3層はⅢ b 層類似土である。1・2層は炭化物粒子を少量含む、3層はこれを多量に含む。4層はⅣ a・Ⅳ b 層を起源とする土である。炭化物粒子を少量含む。覆土からは、緑色凝灰岩 A・B 製の管玉未成品や砥石 (682)、ヒスイや蛇紋岩のチップ類等が出土している。土器片は3層を中心に、多数出土 (281～288) している。

SK03 (図版7・27・95)

15・16C グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SI01と重複し、これを切っている。平面形は不整形を呈し、長径265cm、短径180～194cm、深さ25～28cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は5層に識別でき、レンズ状に堆積する。1・2層はⅢ b 層を起源とする土で、4・5層はⅣ a・Ⅳ b 層類似土である。4層は部分的に見られる。覆土中からは、大量の土器片 (332～334) のほか、ヒスイ製の勾玉未成品 (684)、蛇紋岩 B 製の勾玉未成品 (683)、緑色凝灰岩 B・A 製の管玉未成品 (685・686)、蛇紋岩 A 製の甗玉未成品 (688・689)、大型の置砥石 (691) や内磨砥石 (690) 等、多数の玉作関連遺物が出土している。なお、剥片・チップ類では蛇紋岩 A・鉄石英の出土量が目立つ。

SK02 (図版7・25・94)

16B グリッドに位置する。Ⅳ a 層上で検出し、平面形態を確定した。SK49と重複し、これに切られている。平面形は不整形を呈し、長径290cm、短径196cm、深さ29cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は4層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はⅢ b 層を起源とする土である。2層はⅣ b 層類似土である。3層はⅢ b 層類似土で、炭化物粒子を含み黒味を帯びた色調を呈する。4層はⅢ b 層類似土で、炭化物粒子を多量に含む黒味を帯びた色調を呈する。覆土からは土器片 (289～297) のほか、緑色凝灰岩 B 製の管玉未成品 (692)、内磨砥石 (693)、蛇紋岩 A 製の勾玉未成品、各種剥片・チップ類が出土している。

SK19 (図版7・26・94)

16B グリッドに位置し、調査区西壁の一部にかかっている。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。平面形は円形を呈し、長径は西壁まで120cm、短径110cm、深さ26cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は3層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はⅢ b 層を起源とする土で、炭化物粒子を少量含む。2層はⅢ b 層類似土で、Ⅳ a・Ⅳ b 層を起源とする土をブロック状に多く含む。3層はⅣ b 層類似土で、炭化物粒子をほとんど含まない。遺物は、覆土から多くの土器片 (298～302) のほか、蛇紋岩 B 製の勾玉未成品 (694)、滑石 A 製の勾玉未成品、蛇紋岩 A 製の甗玉未成品、砥石 (695)、ヒスイや緑色凝灰岩 A・蛇紋岩 A のチップ等が出土している。中でも、蛇紋岩 A のチップの出土量が際立っている。

SK49 (図版7・26・95)

16B グリッドに位置する。検出面はⅣ a 層、下位のⅣ b 層上面で平面形態を確定した。SK02・14、SD17と重複し、SK02を切り、SK14に切られている。SD17との重複は、セクションで見ると、SD17を切っている。ただし、SK49とSK04・07の長軸方向の断面形状には若干の相違があるとはいえ、SK49とSD17の重複する平面形態はSK04・07がSD37と重複している平面形態と酷似している。この平面形態の酷似を前提に考えると、調査段階では切り合いを観察したものの、SD17の覆土が10cm弱と薄く、

幅広の溝の端部に見られる土坑状の落ち込みとして、SD17と一連の遺構という可能性も残しておきたい。平面形は長楕円形を呈し、長径は西側がSD17に連結するため276cm、短径は128～140cmで、この幅を維持しつつ自然にSD17に移行する。断面形は台形状を呈する。覆土は1層と4層がIVa層類似土で、2・3・5・6層がIVb層類似土である。2層は炭化物粒子を多く含む。覆土からは、ヒスイ製勾玉未成品、滑石A製勾玉未成品(696)、蛇紋岩A製の薬玉未成品(697・698)、ガラス玉(699)、内磨砥石(700)、そのほかの原石・剥片・チップ類を検出した。なお、チップ類ではヒスイのほか、蛇紋岩Aの出土が目立つ。土器は、遺構の底面及び覆土中から多量に出土(307～321)している。

SK14 (図版7・26)

16Bグリッドに位置する。確認面はIVa層、下位のIVb層上面で平面形態を確定した。SK49、SD17と重複し、これらを切っている。平面形は不整形形を呈し、長径90cm、短径60cm、深さ26cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIIIb層に起源する土で、炭化物粒子を多く含む。2層はIVb層類似土で、炭化物粒子を少量含む。覆土中からは、土器片のほか、滑石製白玉1点が出土している。

SK36 (図版7・27・95)

16Bグリッドに位置する。検出面はIVa層、下位のIVb層上面で平面形態を確定した。SK42、SI01と重複し、これらを切っている。平面形は不整形だが底面の平面形は隅丸長方形を呈する。長径208cm、短径110～140cm、深さ53～56cmを測る。断面形は台形状を呈する。覆土は6層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はIIIb層を起源とする土で、炭化物粒子を少量含む。2層はIIIb層類似土で、炭化物粒子を多量に含み、黒色味を帯びた色調を呈する。3層はIVb層類似土でIVb層を起源とする土をブロック状に多く含み、炭化物粒子を少量含む。4層はIIIb層類似土で炭化物(幅2～3cm、長さ10～15cm)を多量に含み、黒色味を帯びた色調を呈する。5層はIVb層類似土で、炭化物粒子を少量含む。6層はIVb層を起源とする土で、炭化物粒子をほとんど含まない。覆土からは多数の土器(322～331)のほか、蛇紋岩A製の勾玉未成品、緑色凝灰岩A製の管玉未成品(701)、内磨砥石(703～705)、砥石(706)、凹石(707)、石核・剥片・チップ類が出土している。

SK42 (図版7・27)

16Bグリッドに位置する。SI01の貼床面上で検出した。SK36と重複し、SK36に切られている。平面形は不整形形を呈し、長径221cm、短径103cm、深さ26cmを測る。断面形は半円状を呈する。覆土は4層に識別でき、レンズ状に堆積する。1・2・4層は炭化物粒子を含み、やや黒色味を帯びた色調を呈する。特に1・2層は径2～3cm大の炭化物を多く含む。当初、SI01に伴う土坑と判断した。しかし、最終的に住居と土坑の絡む土層のセクション写真を検討した結果、土坑直上の住居址覆土がやや黒色味を帯びていることが判明した。調査段階では住居に伴う土坑と判断していたが、整理段階では住居址覆土中から掘り込まれている可能性も高い。覆土からは、土器片(305・306)のほか、玉類のチップ数点が出土した。

SK41 (図版7・27)

16Cグリッドに位置する。SI01の貼床面上で検出した。平面形は円形を呈し、径66cm、深さ31cmを測る。断面形は壁面にやや歪みがあるが台形状を呈する。覆土は3層に識別でき、レンズ状に堆積する。いずれもIVa層を起源とする土で、炭化物粒子を少量含む。SI01との関係については、当初、SI01に伴う土坑と判断したが、SK42と同様の理由によって、住居址に伴う土坑であるか否かは留保せざるを得ない。覆土からは、少量の土器片のほか、ヒスイや滑石の剥片・チップ類が出土した。

SK45 (図版8・28・95・96)

19B グリッドに位置する。検出面は3区V層(2区Ⅳa層対応)、下位の3区Ⅵ層(2区Ⅳb層対応)上面で平面形態を確定した。SB08 - P571と重複し、これを切っている。平面形は長楕円形を呈し、長径190cm、短径88cm、深さ24cmを測る。断面形は台形状を呈する。

覆土は3層に識別でき、レンズ状に堆積する。1層はⅢb類似土で、炭化物粒子を多量に含む。2層は1層によく似るが、混入物が少ない。3層はV層(2区Ⅳa層)類似土で、炭化物粒子をほとんど含まない。覆土からは多くの土器片(355~361)のほか、滑石B製の薬玉未成品、蛇紋岩Aの石核、蛇紋岩Aやヒスイ等の剥片・チップ類が出土した。

SK46 (図版8・28・96)

19C グリッドに位置する。検出面は3区V層(2区Ⅳa層対応)、下位の3区Ⅵ層(2区Ⅳb層対応)上面で平面形態を確定した。P628と重複している。土坑を半截したセクションの観察によれば、SK46がP628を切っている。平面形は不整形を呈し、長径126cm、短径90~106cm、深さ30cmを測る。断面形は弧状を呈する。覆土は2層に識別でき、レンズ状に堆積する。1・2層ともV層(2区Ⅳa層)類似土で、1層は炭化物粒子を多く含む、2層は少量含む。覆土からは少量の土器片(362)のほか、蛇紋岩A製薬玉未成品(708)、ヒスイ等の剥片・チップ類が出土した。

SK47 (図版8・28・96)

19B・C グリッドに位置する。3区V層(2区Ⅳa層対応)、下位の3区Ⅵ層(2区Ⅳb層対応)上面で平面形態を確定した。平面形はやや不整形ながら長楕円形を呈する。長径105cm、短径61cm、深さ40cmを測る。断面形は台形状を呈する。覆土は5層に識別でき、レンズ状に堆積する。全層ともV層(2区Ⅳa層)類似土である。1層は青灰色のシルトが入り混じり、炭化物粒子を多く含む。2・3・4層は炭化物粒子を多く含む、この含有量の多寡による黒色味を帯びた色調の差異によって識別できる。覆土から土器片(363・364)のほか、ヒスイや蛇紋岩Aの剥片・チップ類が出土した。

E 溝

SD14 (図版6・28・96)

13C・14C グリッドに位置する。SI07(SD13)とSB04、SK34と重複し、これらに切られている。北西側から南東へ伸びた後、南西方向へほぼ直角に屈曲する。規模は長さ6.7m、幅1.0m、深さ20~35cmで、断面形は弧状を呈す。深さの割に、幅の広いタイプの溝である。覆土は弱粘土質シルトを主体に4層に分層できる。最下層の4層には砂質シルトが堆積する。出土遺物は大量の土器片(365~379)のほか、砥石、各種剥片・チップ類などの玉作関連遺物が出土した。

SD24・50 (図版6・28)

14C グリッドに位置する。SI06とSB03、SD25と重複する。SD25を切り、SI06、SB03に切られる。当初、1本の溝と想定して調査を進めたが、セクション等の検討から、最終的には2本の溝が重なっているものと判断した。SD24は南北に向かって伸び、南端部は西側へほぼ直角に折れる。SD50はSD24と重複しており、全体の規模等は不明である。SD24の規模は長さ5.12m、幅0.8~1.0m、深さ15~40cm、断面形は半円状を呈す。覆土はⅣb層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は土師器(380)のほか、緑色凝灰岩B製の角柱状管玉未成品(709)、緑色凝灰岩A・Bや蛇紋岩Aの剥片・チップ類、瑪瑙の原石などが出土した。SD30と一連の遺構の可能性がある。

SD25 (図版6・29)

14B・14Cグリッドに位置する。SK01、SD24、SB03と重複している。切り合い関係から、これらの中では最も古い遺構である。東西方向から南北方向へ屈曲する。規模は長さ5.65m、幅0.15～0.4m、深さ10～30cm、断面形は半円状を呈す。覆土はIVb層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は少量の土師器及び緑色凝灰岩Bの剥片が出土している。

SD46 (図版7・29)

15Bグリッドに位置する。IVb層上面で検出した。当初は重複するSD44の一部と考えたが、調査区南壁にかかる土層の観察により、SD44より古い遺構であると判断した。遺構の西端部が南側へ屈曲し、南端部は調査区外に伸びている。規模は長さ3.85m、幅0.7～0.95m、深さ10cm、断面形は弧状を呈す。覆土はIIIb層に類似する弱粘土質シルトの単層である。遺物は土師器が少量出土している。

SD48 (図版7・29)

14Bグリッドに位置する。SD46と同じく、遺構の南側が調査区外に伸びるため、全容は不明である。SK31と重複し、これに切られるが、一連の遺構の可能性もある。東西に伸びる遺構の東端部が、南側へ屈曲する。規模は長さ1.9m以上、幅0.52～1.0m、深さ16cm、断面形は弧状を呈す。覆土はIVa層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は少量の土師器と蛇紋岩の剥片が出土している。

SD44 (図版7・29)

15Bグリッドに位置する。調査区外に伸びるため、全容は明確ではない。SD46と重複し、これを切っている。南北に伸び、15B1・2付近で西側へ屈曲する。規模は長さ3.8m、幅0.5～1.25m、深さ5～15cm、断面形は弧状を呈す。覆土はIIIb層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は土師器のほか、緑色凝灰岩Aのチップが出土している。

SD31 (図版6・29)

14Cグリッドに位置する。遺構は北西方向の調査区外に伸びるため、全容は不明である。規模は長さ1.85m、幅0.5m、深さ10～40cm、断面形は弧状を呈す。覆土はIIIb・IVb層に類似した弱粘土質シルトを主体として3層に分層できる。1層には粘性がやや強い黒色土が堆積し、多くの土師器片が出土しているが、図化には至らなかった。

SD32 (図版6・29)

14Cグリッドに位置する。SD31と重複し、切られている。SD31と同じく、北西方向の調査区外に伸びる溝である。調査区内での規模は長さ1.5m、幅1.8m、深さ10～30cmを測る。断面形は弧状を呈し、覆土はIIIb層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は少量の土師器(382～385)のほか、緑色凝灰岩A・Bや蛇紋岩A、滑石A・Bの剥片・チップ類等が出土している。

SD30 (図版6・29・97)

14Cグリッドに位置する。SD40と重複し、これに切られている。遺構は北西方向の調査区外に伸びるため全容は明確ではないが、平面形及び規模からSD24、もしくは50と一連の遺構の可能性がある。調査区内での規模は長さ2.6m、幅1.15m、深さ20～35cmを測る。断面形は弧状を呈し、覆土はIIIb層に類似した弱粘土質シルトからなる単層である。遺物は多くの土師器片(381)のほか、蛇紋岩A製の勾玉未成品、緑色凝灰岩A・B製の管玉未成品(710～712)、各種剥片・チップ類が出土している。

SD47 (図版7・29)

15Bグリッドに位置する。調査中は1基の土坑と1条の溝(SD47)と想定して調査を進めたが、遺構の

土層断面及び平面形などから、最終的に1条の溝であると判断した。遺構の南西端でSB06と重複し、これに切られる。総じて南北方向に伸び、規模は長さ4.7m、幅0.8～1.05m、深さ15～24cm、断面形は弧状を呈す。覆土は上層から下層まで弱粘土質シルトが堆積し、しまり・粘性・混入物などから、4層に分層した。3層の灰色の弱粘土質シルトからは土師器片(386～391)や礫が、また4層の灰色粘土質シルトからは大型の緑色凝灰岩B製角柱状管玉未成品(715)が出土した。このほか、透明度の高い石英製の勾玉未成品(713)、緑色凝灰岩B製の管玉未成品(714)、内磨砥石(716)、それにヒスイをはじめとする各種剥片・チップ類が出土している。

SD37 (図版7・30・97)

15Cグリッドに位置する。調査中はSK04・07とSD37はそれぞれ独立した遺構であるという想定のもとに調査を進めたが、連結して一連の溝になる可能性も指摘できる。北東方向から南西方向へ伸び、南側で北西方向に屈曲する。規模は長さ9.1m、幅0.5～1.0m、深さ10～40cm、断面形は弧状を呈す。覆土は粘土質シルトがレンズ状に堆積し、3層に分層できる。上層から下層まで多量の土師器片(392～396)を含み、1層からは土師器の小型高杯(395)がほぼ完形で出土した。そのほか、蛇紋岩A製の管玉未成品、緑色凝灰岩A製の管玉未成品(717・718)、蛇紋岩A製の薬玉未成品(719)、砥石(720)など玉作関係の遺物も複数出土している。

SD12 (図版7・29)

15Bグリッドに位置する。SI06と重複し、これを切っている。西側で北東方向へ屈曲する。規模は長さ3.4m、幅0.2～0.68m、深さ15cm、断面形は弧状を呈す。覆土は弱粘土質シルトの単層である。遺物は覆土上層から土師器片がまとめて出土したが、腐化には至らなかった。

SD38 (図版7・30)

14Cグリッドに位置する。長軸方位はN-16°-E、規模は長さ1.5m、幅0.25～0.3m、深さ5～10cm、断面形は半円状を呈す。覆土はIVb層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は土師器片のほか、緑色凝灰岩Bのチップが出土した。

SD17 (図版7・29)

16Bグリッドに位置する。遺構は西側の調査区外に伸びるため、全容は明らかではない。調査段階では、SK49と重複し、これに切られていると判断したが、平面形態等からSK49と一連の遺構の可能性も指摘できる。規模は1.05m、幅1.1m、深さ9cm、断面形は皿状を呈す。覆土はIVa層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は少量の土師器(398・399)のほか、ヒスイや緑色凝灰岩B、蛇紋岩Aの剥片・チップ類も出土している。

SD08 (図版6・30・97)

14Bグリッド中央に位置する。SI11と重複し、これを切っている。南東から北西方向にほぼ一直線に伸びる。規模は長さ5.25m、幅0.2～0.63m、深さ10～20cm、断面形は半円状を呈す。覆土はレンズ状に2層に分かれて堆積する。1・2層とも粘性の強い粘土質シルトが堆積する。遺物は1層の最上位から蛇紋岩A製の勾玉未成品(721)が出土しているほか、土師器も少量出土している。

SD27 (図版6・30)

13Bグリッドに位置する。主軸方位はN-55°-E、規模は長さ2.25m、幅0.2～0.55m、深さ5～15cm、断面形は弧状を呈す。覆土はIVb層に類似した弱粘土質シルトの単層である。遺物は少量の土師器片(400)のほか、直径20cm未満の礫が数点まとめて覆土の最上位から出土した。

SD10 (図版7・30)

14B グリッドに位置する。南西から北東方向に伸び、規模は長さ1.9m、幅0.24～0.35m、深さ10～15cm、断面形は半円状を呈す。覆土は粘性がやや強い粘土質シルトの単層である。遺物は少量の土師器片のほか、蛇紋岩 A のチップが数点出土している。

SD06 (図版7・30)

16B グリッドに位置する。SK33と重複し、これに切られている。規模は長さ2.1m、幅0.4～0.69m、深さ25～29cm、断面形は台形状を呈す。覆土はⅢ b 層に類似した黒灰色粘質土が3層にわたってレンズ状に堆積している。遺物は1～3層まで各層に土師器片が含まれている(402～404)ほか、2層からは蛇紋岩 A 製の薬玉未成品(722)も出土した。また、ヒスイをはじめとする各種剥片・チップ類が複数出土している。

F 旧河川 (SD04)・小ピット列 (図版6・31・32・97・98)

2-B 区では東側は基本層序のⅢ b 層が厚く堆積していた。このため遺構検出面であるⅣ a・b 層が傾斜しつつ下がっていくのではと予想し、トレンチを東西方向に三か所設定し、掘り下げたところ、西側で検出した生活面(遺構検出面)は約45°の角度をもって急激に落ち込んでいくことが確認できた。

この落ち込み際の標高は4mの等高線に沿っている。落ち込み際には、小ピットが集中して検出されている。規則性は定かではないが、おおよそ2列で構成されているようである。打ち込み式である可能性は否定できないが、各小ピットは掘形をもっている。欄と言いつけるかは疑問であるが、何らかの境界を意識した施設があったものと思われ、単なる杭列ではない。南側のピットがやや少ないのは、斜面部の崩落が著しく、多くは消滅してしまったためである。

古墳時代の包含層であるⅢ b 層が緩やかに下方に傾斜することが確認できたため、調査区の東側に拡張区を設け、東側の土層堆積の把握に努めた。

1～13層までは、Ⅲ b 層の上層の堆積であり、土層の各説明については、土層注記を参照されたい。

次に、Ⅲ b 層以下の落ち込み本体部分の堆積状況について述べる(なお、シルトでも粘性の高いものは粘質土とした)。

北壁・中央・南壁セクションのそれぞれで検出された a～p の土層は、地山の崩落土と解釈できる。これは、河川の働き等によって、西側(集落側)の地山は浸食の影響を受けていたものと見られる。

14層以下28層までは基本的にシルト層の堆積の間に、時折、粘質土が堆積する。シルト層は、含まれる炭化物粒子の多寡、つまり粘性の強弱、色調の差異によって分層できる。シルト層と粘質土の堆積は、26層はシルト層であるが、砂質に富む。北壁セクションには見られない。現在と違い遺跡東側を流れる海川は網目状の流路となって氾濫原を蛇行しつつ、三角洲を形成していたであろうが、この地点まで、砂を運ぶ程度の氾濫があったことを示している。28層は南壁と中央壁で厚く、北壁ではやや薄い。シルト層(青灰色の粘質土のブロックが少量混入)で、シルトと粘質土の薄い堆積の互層(ラミナ状)を呈している。海川の氾濫に伴う堆積であるが、こうした堆積状況は一般的には本流からはかなり離れた段階での堆積である。28層は北壁では薄いのが、その下部に互層堆積を示さない厚いシルト層が堆積している。

最下層は10～30cm前後の砂層である。30～32層で一括したが、北壁セクションの32層を覆う30層は細砂と粘質土が交互に堆積する。南壁セクションでは北壁の30層に比定される層は見られなかった。

最下層の礫層を覆う30～32層は、砂層である(北壁セクションの32層は粗い砂層、南壁セクションの32層

は細砂層、中央セクションの30・32層は細砂層、中央セクションの31層は粘質土だが細砂がブロック状に混ざる。このように砂層であっても粒径や混入土の違いによって変化に富むのは、流水による堆積の特徴である。

33層は礫層（玉砂利）で、落ち込みの最下底部を構成する。東西3～4m幅の砂利層が南北方向に帯状に延びていた。この砂利層上から古墳時代前期中葉の土師器の器台が出土している。

この砂利層のさらに下層については、重機によって掘削し、無遺物層であることを確認している。この礫層下を重機で掘削したところ、人頭大から一抱えもある円礫層が厚く堆積していた。流路の本流クラスが流れ、この急流が遠ざかるにつれて、玉砂利層が形成され、さらに流路が遠のく状況下で細砂層が堆積したものである。

なお、旧河川（SD04）では、西側（集落側）から遺物の多くが集中して出土した。土器片のほか、大量の玉作関連遺物が出土している。最下部の礫層直上から、上層のⅢb層に至るまで、1m以上の高低差をもって出土している。最下部の遺物は古墳時代前期中葉、最上部は前期後葉の様相を呈しており、集落内で出土した遺物の年代観とはほぼ一致している。河川の埋没の過程とともに、集落側から当時遺物が廃棄されていたものと理解できる。

G 円礫集中遺構（図版37・101）

3区の舌状の高まり東側斜面から多数の石が出土しており、特に22Bグリッドに集中している。石は斜面の裾から落ち込みに向かって広がり、木材に混じって散らばるように分布している。その範囲は後述の木材集中遺構とはほぼ重なるが、高まり中腹の木材が見られない地点からも出土している。大半は河原石のような自然礫であるが、石器や玉作資料も若干混じっている。石器には貝殻状剥片・砥石等が、玉作関係の遺物にはヒスイ・滑石等の原石及び石核・筋砥石などが見られる。円礫は分布が偏っていることと、高まり中腹のような場所から固まって出土したことから、水流などにより自然に運ばれてきたというよりは、人為的に持ち込まれた可能性が高い。なお、玉の原石や未成品・筋砥石等も出土しているが、その場で玉の製作が行われたような状況は見られなかった。これらの石は不要となったものを廃棄ないしは放置したものと思われる。また、22B2グリッドでは本章第4節Cで述べるように、杭が4本埋め込まれた周囲から土器片や砥石に混じって礫が出土しており、それらを用いた何らかの行為・作業が行われた可能性もある。

4 そのほかの時代の遺構

A 弥生土器集中遺構（図版38・101）

3区23C1～3-6～8グリッド付近では、多数の木材と共に、弥生土器の破片が集中して出土している。これらが出土したのは自然地形の高まり北側斜面部下方、標高3.6～3.8m付近で、VI～VII層（2区IVb～VI層相当）から出土している。VII層（2区VI層相当）は自然化学分析の結果、弥生時代に形成された炭化物包含層であることが判明している（第VI章参照）。これらの土器は、壺（450・451）、高杯（453）等で、いずれも弥生時代後期の法仏式に比定される。建物などは検出されていないことから、自然地形の高まりの斜面部に意図的に置かれたものと推測できる。自然地形の高まり沿いで、何らかの祭祀行為が行われた可能性も想定できる。

B 木材・杭集中遺構 (図版33・34・35・36・99・100)

3区中央付近には南から北に向かって張り出す舌状の高まりが見られ、その東側は南東から北西の方向に落ち込んでいる。高まりの東側の裾から落ち込みにかけての部分と、3区東側に存在するSB08・09の西側の19C5・10、20B16・21、20C1グリッドから木材が集中して出土している。

高まり東側の落ち込み付近では、V層(2区IVa層相当)とVI層(2区IVb層相当)の間に両者が入り混じったVI層が見られ、V層の上にはガツボの漸移層及びガツボ層が厚く堆積する。VI層の堆積状況からは、VI層の堆積後に土壌が攪乱される状況にあったことが、またガツボの堆積状況からはV層の堆積後、長期にわたり水はけの悪い状態であったことが推定できる。木材はIV～VI層中に分布し、特にV層中から多く出土している。平面的には低くなっている部分に帯状に分布し、所々にまとまって出土している。

掘立柱建物の西側では、VI層が見られず、ガツボ層の形成も顕著ではない。木材はガツボ層及びV層中から出土しており、平面的には3.8mの等高線のラインに沿うように分布している。

両地点から出土した木材の中には柄板・曲物の底板等少数の成品が含まれるが、大半は板状・棒状に加工されたもの及び自然木である。これらの木材の多くは地形の低くなっているところに雑然と散らばり、廃棄されたか、あるいは水流により流れ着いたかのような状況を呈するが、大型の木材の中には、等高線のラインに沿うように南北あるいは南東～北西の方位を取るものもある。木道などの遺構を構成する部材であった可能性もあるが、直線的に並ぶような状況は見られず、それに伴う杭なども確認できなかった。

木材集中遺構の木材の中には、縦や斜めに、地面に刺さった状態で検出されたものも多く見られた。これらすべてが人為的に埋め込まれたものとは断定できないが、何らかの施設の一部を構成するもの、あるいは祭祀等の行為に使用されたものである可能性を考慮し、そのほかの木材と区別して杭として扱った。ただし、杭とそれ以外の木材を区別する明確な基準は無く、主観的な判断である。杭にはさまざまな法量・形状のものがあり、いくつかのタイプに分類することが可能である(第V章第3節B2)。

杭は掘立柱建物西側から1点(杭74)出土した以外は、すべて舌状の高まりの東側の裾から落ち込みにかけて分布する。分布には偏りが見られ、22B18・19・23・24グリッド、22C3・4・9グリッド、22B25、22C5・10及び23C1・6・7グリッドに集中している。杭はIV(ガツボ層)～VII層(2区VI層相当)中で検出されており、時期差が存在する可能性があるが、上部が腐食等により損傷しているものもあり、層毎に区分することは困難である。

22B18グリッドから出土した杭44(903)・76(904)及び22C1グリッドから出土した杭53-1(901)・53-2(902)の4本は、群を抜いて大型であり、柱根といってもよい規模である。4本の杭は長方形の配列を取り、短軸で向かい合う2本の杭はやや内傾して建てられている。杭44と杭76は各芯々で約65cm、杭53-1と53-2は同じく約75cmの距離で並び、杭44と杭53-2は各芯々で約5m、杭76と杭53-1は同じく約4.95mの距離で向かい合っている。杭53-1・53-2・44は上端がVI層で検出されたが、上部が腐食している。杭76も上部が腐食しており、上端がVII層中に存在するが、杭の腐食痕と見られる土層はVI層で検出されている。これらの杭は、下端を尖らせるように加工が施されており、腐食の状況から上部は地上に露出していたものと推定される。これらの杭は何らかの施設の一部と思われるが、隣り合う2本の間の距離が短く、周囲に同様の杭及び適当なピットが見られないことから、建物の一部とは考えにくい。地形の窪んだ部分と直交するように存在すること、短軸方向に並ぶ2本の杭が内傾して建てられていることから、用途として木橋か浅橋の橋脚のようなものが想定される。4本の杭のみで上部構造を支えられるかどうかという点

に疑問が残るが、現時点ではほかの用途に思い至らない。

22C3・4・9グリッドの杭は標高3.5mのコンタの外側に弧を描くように並んでおり、意図的に埋め込まれたように見えるが、形状がまちまちで、2点間の距離も約15cmから80cmと一定ではない。

22B2グリッドからは杭70～73の4本が出土した。4本の杭の規模・形状は一定では無く、どのような用途に用いられたものかは明らかでないが、この地点からは、後述するように土器片や礫等がまともて出土していることから、特別な場所であった可能性がある。

杭の大半は明確な配列をなさず、規模もおおむね小型であることから、柵・矢板等の施設の一部というよりは、祭祀に用いられた可能性が高いと思われる。

なお、木材・杭集中遺構から出土した木製品・杭類の一部については、放射性炭素年代測定を行っている。その結果、弥生時代後期～古代にかけての様々な年代が得られた(第VI章参照)。杭はどの層位・段階で打ち込まれたかの断定が困難な点と、古墳時代以前・以降の所産である可能性が高いものも含まれることから、ここでは「そのほかの時代の遺構」として報告したが、古墳時代の所産となる木材・木製品・杭類も多く含まれるであろう。

C 祭祀遺構 (図版3・100)

1区及び3区からは、前述の「B 木材・杭集中遺構」でも触れたとおり、先端を尖らせた板状もしくは棒状の祭祀具と推定される杭(杭状木製品)が複数出土している。ここでは、これらの祭祀具状の木製品が複数まともて出土する地点を「祭祀遺構」として報告する。

1区3Bグリッドでは、板状の木製品と杭が1点ずつ近接して出土した。この内、板状の木製品(912)はⅣa'～Ⅳa''層中にかけて、上方を西側に傾けた状態で刺さっていた。また、杭(914)は、同じくⅣa'～Ⅳa''層中にかけてほぼ垂直に刺さった状態で出土している。風化の様相は明瞭でなく、それぞれがどの層位上面から地面に刺されたかは断定できないが、Ⅲ層に含まれる土器の小片が古代以降の所産である可能性が高いことから、これらは古代以降に倉串状の祭祀具として使用されたものと推測できる。

3区では、自然地形の高まりの東～北側、22B・22C・23Cグリッドの標高3.5～3.7m付近から、先端を尖らせた板状の杭(梶谷木簡状杭)が数点まともて出土している。多くはV層(2区Ⅳa層相当)もしくはⅥ層(2区Ⅳb層相当)の堆積過程において地面に刺されたものと推定されるが、共存遺物が少なく、年代を特定するのは困難であった。そこで、杭40(908)について年代測定を行ったところ、5世紀前半～6世紀前半の年代が得られた(第VI章参照)。杭39(910)・杭40(908)・杭86(911)や杭49・杭50・杭51は近接して出土しており、形状もよく似ることから、一連性が高いものと推測できる。これらの周囲からは、沼沢湿地において堆積したと想定される多数の木材が出土している。水辺の祭祀等に用いられた可能性も指摘できよう。

このほか、22B2グリッドからは杭70(921)・71(915)・72(917)・73の4本が近接して出土している(図版100)。その付近からは、弥生時代後期の器台(484)や内磨砥石(864)、それに礫等がまともて出土している。これらが同時期の所産であるかは判然としませんが、何らかの祭祀行為に用いられた可能性も指摘できる。また、先に述べたように23C1～3・6～8グリッド付近では、弥生時代後期の土器が複数、意図的に置かれたように出土している。これらの様相から、3区の舌状に伸びる高まりの東側～北側では、弥生時代後期以降、長期にわたって何らかの目的で祭祀行為が行われてきた可能性を指摘することができよう。

D 自然地形の高まりとピット群 (図版2・5・9)

3区中央付近では、自然地形の高まりが南側から北側に向けて舌状に張り出している。調査区内では南東～北西にかけて約17m、南西～北東にかけては約16m張り出しており、方台状を呈している。低地部との比高は東側で約1.2m、北側で約1.3m、西側で約0.8mである。古墳時代前期の集落に近接するため、埋没した古墳の墳丘の可能性も想定して調査を進めたが、①頂部平坦面には小ピットが2基確認されたのみで、埋葬施設等の痕跡は一切確認されなかった。②高まりを開渠によって数か所断ち割ったが、地山の標準堆積が確認され、人為的な盛り土や地山削り出しの様相は一切認められなかった。③高まりの斜面部から古墳時代以前の弥生土器が意図的に置かれたような状態で出土している。などの理由により、この高まりは弥生時代以前から存在した自然地形であると判断した。

この高まりには、斜面部を中心に幾つかの小ピット群が認められた。中でも、22B3・4・9グリッド付近、23B12・16・17・21・22グリッド付近、23B19・20・24・25グリッド付近に分布が偏る傾向が認められる。その多くは、直径20cm前後、深さ30cm前後で、小規模なものがほとんどである。これらの配列に規則性は認められないが、高まり上面の平坦面ではなく、斜面部に設けられている点に注目できる。規模や立地から、2区東端で見られた杭列と同様のものであるか、あるいは斜面部を上り下りする際の手摺り状の施設が設けられていた等の可能性を想定することができる。

第V章 遺 物

1 概 要

南押上遺跡から出土した遺物は、土器、石器・石製品、木製品、金属製品、銭貨類で、コンテナ315箱（箱サイズ54×34×10cm）分であった。出土した遺物の大半は、古墳時代前期の土師器及び玉作関連遺物で、遺構の密度が最も高い2区を中心に大量に出土した。ほかに少量の弥生土器、古墳時代中～後期の土器・石製品、古代～中世の土器・陶磁器類、近世の陶磁器類等が出土している。また、3区の低地部及びガツボ層からは、所属時期が不明確ではあるものの、大量の木片とともに多数の杭類や木器・木製品類が出土している。古代以降の遺物は大部分が包含層中からの出土で、遺構に伴うものはごく少量であった。

主体となる古墳時代前期の遺物のうち、最も多く出土したのは土器（土師器）である。土器は小片が多く、復元率はそれほど高いとはいえないが、包含層だけではなく遺構内からも多量に出土している（第9図、第2表）。玉類は、勾玉、管玉、璽玉の各成品・未成品類が計400点近く出土したほか、多数の原石・剥片・チップ類も出土した。また、少量ながらガラス玉や、白玉の成品・未成品、石製模造品なども出土している。

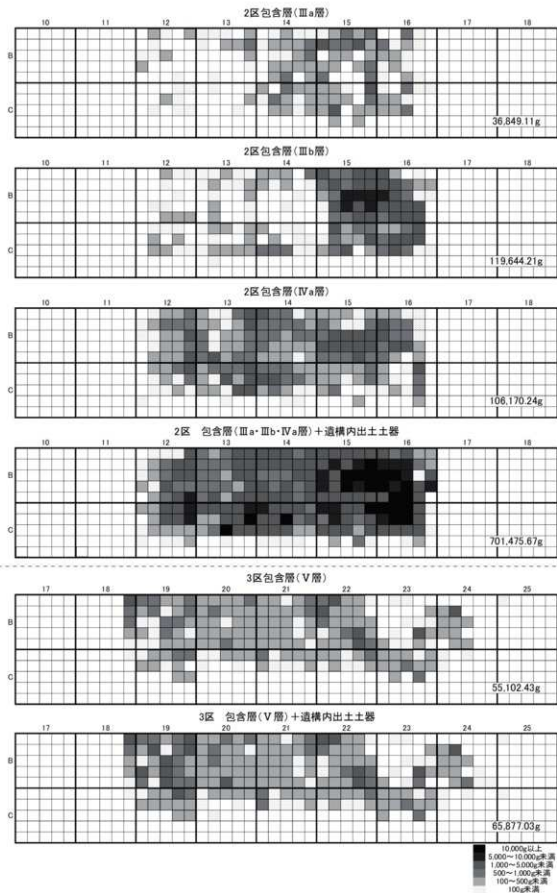
玉類の石材は、糸魚川を代表するヒスイをはじめ、緑色凝灰岩、鉄石英、メノウ、チャート、蛇紋岩、滑石、それに透明度の高い石英などもあり、種類に富んでいる。また、玉の生産を示す筋砥石や内磨砥石、敲石、台石、軽石製研磨具といった工具類も多数出土している。

弥生時代の遺物は、弥生時代後期に比定される法仏式の土器が主体であり、その多くは3区から出土している。中でも、3区中央の自然地形の高まり斜面部からは、複数の弥生土器が集中して出土している。また、唯一2区で出土した鉄石英製の管玉未成品（781）は細形で、同時期の所産の可能性もある。

古墳時代中期～後期の遺物は、少量の土師器及び須恵器片が出土している。弥生土器と同様、そのほとんどは3区から出土しており、自然地形の高まりに沿った低地部付近で比較的多く出土している。また、その低地部付近からは剣形の石製模造品も出土している。これらの遺物は、当初からここに置かれた（廃棄された）可能性もあるが、調査区内で同時期の遺構がほとんど検出されなかったことから、3区低地部における沼沢湿地等の水の作用によって、上流域などから漂着した可能性も指摘できる。

古代の所産と判断される遺物は、その量が極めて少ないものの、2区及び3区から数点出土している。底部糸切り底の土師器のほか、壺や横瓶の須恵器片等が出土した。また、3区のガツボ層からは、古代の所産と判断される柄振等の木製品も複数出土している。調査区内で古代の遺構は全くといってよいほど検出されなかったが、これらの遺物の出土から判断して、周辺に水田等の生産域や集落等の生活域が存在した可能性は高い。

中世の遺物は、1～3区のほぼ全域、II層（砂層）から珠洲焼や青磁片等が少量出土している。珠洲焼は鉢鉢の破片が多く、ほかに壺や壺の破片が少量出土した。青磁片は13世紀中頃から14世紀前半、中国龍泉窰系のものが認められる。また、中世末～近世初頭にかけて生産された唐津焼や、越中瀬戸焼の破片も一定量出土している。さらに、中国の北宋銭も数点出土した。中世の遺構も全く検出されていないが、3区のII層からイネ属の植物珪酸体が多く検出された（第VI章参照）ことから、当時、周辺地域一帯は水田が広がる生産域であったものと推測できる。



第9図 包含層出土土器分布図(重量)

2 古墳時代の遺物

A 古墳時代前期の土器

1) 分類

まず、大きく甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台といった器種別に分類した後、個々の形態差や部位の特徴等によって細分した。その際、大別分類をアルファベットの大文字 (A・B・C…) で、細別分類は算用数字 (1・2・3…) で表した。なお、分類にあたっては、「シンボジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」〔滝沢 2005c〕などを参考にした。

壺 南押上遺跡から出土した土器の内、最も多く出土した器種である。大きく A～F の 6 類に分類した。

A 類 有段・受口状を呈し、口縁部が無文のもの。出土数は少ない。

B 類 いわゆる付加状口縁のもの。上下またはそのどちらかに拡張する。

C 類 いわゆる「く」字状、あるいは「コ」字状口縁を呈するもの。3 類に細分した。

1 類 口縁内外を強くナデ調整した結果、つまみ上げられたような端部形態をなすもの。

2 類 口縁端部が面取りされたもの。

3 類 口縁端部が面取りされず、丸く収まるもの (面取りが明瞭でないものも含む)。

D 類 近江系長浜甕、もしくはそれに類するもの。口縁部は直線的に外方に伸び、内外面にハケ目と指頭圧痕が残る。口縁部上端は凹凸が著しく、端部上面に平坦面を有することもある。

E 類 近江系受口状甕、もしくはそれに類するもの。出土数は少ない。

F 類 東海系 S 字状口縁台付甕、もしくはそれに類するもの。出土数は少ない。

甕 甕に次いで多く出土した器種である。大きく A～H の 8 類に分類した。

A 類 二重に外反する二重口縁甕。畿内系で、その影響を受けたと見られるものも含む。

1 類 内面の段部が明瞭なもの。

2 類 内面の段部が不明瞭なもの。

B 類 比較的長い口縁部を有する直口甕、もしくはそれに類するもの。

C 類 大型で、外反して立ち上がる広口甕。口縁部の長短で細分した。

1 類 口縁部が比較的短いもの。

2 類 口縁部が比較的長いもの。

D 類 短頸直口甕。

E 類 細口有段で、口縁部下段が短いもの。

F 類 東海系二重口縁甕、もしくはその影響を受けたと見られるもの。

G 類 畿内系小型甕、もしくはその影響を受けたと見られるもの。丸底のものが多いが、平底を呈するものも少量認められる。2 種に細分した。

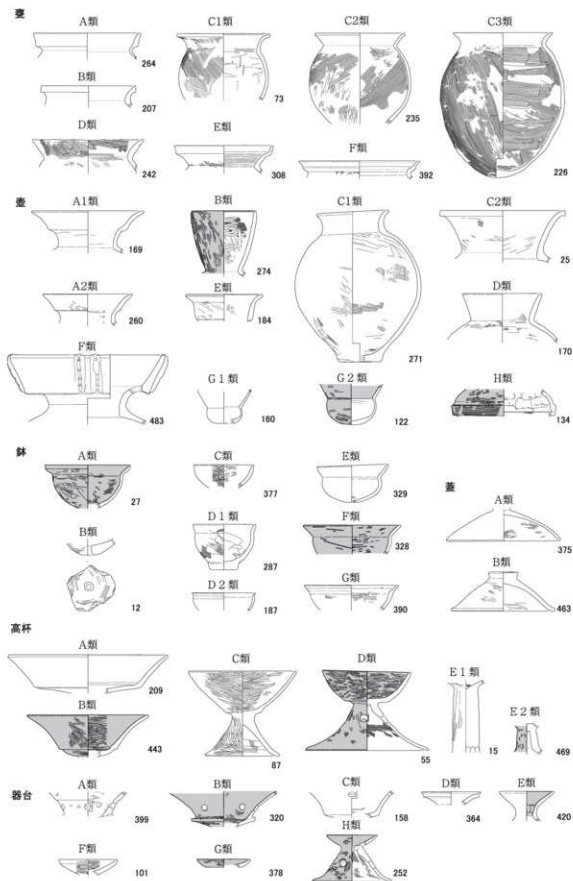
1 類 口径に比して器高が高いもの。

2 類 口径に比して器高が低いもの。

H 類 胴部に突帯を有するもの。口縁部等の形状は不明である。出土数は少ない。

鉢 出土数はそれほど多くないが、定量認められる。大きく A～G の 7 類に分類した。

A 類 有段口縁鉢。



第10図 古墳時代前期の土器分類図 (S=1:6)

B類 底部有孔鉢。全体の形態が判明したものはない。なお、11のように、底部に孔を有さないものも認められる。

C類 碗形の鉢。

D類 小型で短頸のもの。精製のものが多い。身の深浅で細分した。

1類 口径に比して身が深いもの。

2類 口径に比して身が浅いもの。

E類 比較的浅い丸底の胴部と、内湾して立ち上がる口縁部とからなるもの。

F類 比較的浅い丸底の胴部と、外反もしくは直線的に外方へ伸びる口縁部とからなるもの。

G類 畿内系の小型鉄兜鉢、もしくはその影響を受けたと見られるもの。

蓋 出土数は少ないが、遺構に伴うものも認められる。2類に分類した。

A類 体部が笠形に湾曲するもの。

B類 体部がハの字に開くもの。

高杯 遺構内からの出土数はそれほど多くない。大きくA～Eの5類に分類した。

A類 口縁部が有段で、外反、もしくは外傾して端部に至るもの。

B類 杯部が有段鉢形のもの。

C類 東海系大型高杯。口縁部が内湾・もしくは内湾気味に立ち上がる。杯部外面下方に稜線を有することが多い。

D類 東海系小型高杯。有稜内湾の杯部を有する。

E類 畿内系屈折脚高杯。脚部の長短により細分した。なお、脚部には中空のものと中実のものがあり、後者の出土も目立つ。

1類 長脚のもの。

2類 短脚のもの。

器台 遺構内からの出土数が比較的多く、高杯を上回る。受部底面の孔の有無で、高杯と区別した(受部底面に孔の無い器台は、今回出土していない)。大きくA～Hの8類に分類した。

A類 いわゆる装飾器台、又はその類似土器。口縁部の透かし穴上方に段を有し、受部に突帯状の鐙部が巡る。全体の形状が明らかなものがないため、鐙部や透かし穴の形状等から判断して、可能性が高いものをここに含めた。

B類 いわゆる鐙付結合器台。新潟県内に多く認められる〔滝沢2005a〕。受部が突出して鐙状を呈し、口縁部・脚部ともに無段。A類同様、全体の形状が明らかなものがないことから、鐙部や透かし穴の形状等から判断して、可能性が高いものをここに含めた。

C類 大きく外反する口縁部に透かし穴が施され、「ハ」の字に開く脚部が付くと想定されるもの。B類と似るが、鐙部が付かない。出土数は少ない。

D類 上端が短く外反する受部の器台。出土数は少ない。

E類 受部が直線的に開いて立ち上がり、受部が深い小型器台。出土数は少ない。

F類 受部が直線的に外へ開き、上端でわずかにつまみ上げられた小型器台。外面に緩やかな稜線を有する。

G類 受部が有段のもの。出土数は少ない。

H類 受部が内湾して立ち上がる小型器台。最も多く出土した。厚手のものと、薄手のものがある。

2) 各 説

SI01 (図版39～41・104・105-1～68)

覆土最上～上層(1～22) 甕・壺・鉢・高杯・器台が出土している。小片が多く、完形で出土したものはない。特に目立つのが、屈折脚の高杯E類(15～19)である。長脚のE1類(15・16)と、短脚のE2類(17～19)の両者が認められる。長脚の2点と短脚の19はいずれも中実である。12の底部有孔鉢は、底部片の周囲が意図的に打ち欠かれており、紡錘車等の用途で二次的に利用された可能性も指摘できる。11の鉢は、底部有孔鉢とはほぼ同一のつくりであるが、底部は穿孔されていない。13の壺は、小型丸底埴の流れをくむものである。なお、窪地堆積により一部包含層(Ⅲb層)の遺物が混入している可能性も指摘しておく。

覆土中位(23～31) 甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台が出土している。小片が多い。覆土の中位付近から出土しているため、上層・下層のいずれかに帰属する可能性もあるが、総じて古相を呈するものが多い。27は鉢A類で、深身を呈する。30は、裝飾器台、もしくは結合器台の罎部である。罎の残存部上面3方向に、ケガキ痕状の傷が認められる。元来、欠損部も含めて十字方向に施されていたものと見られ、透かし穴を施す際の日印等にしたものと推測できる。

覆土下層～床面直上(32～60) 甕・壺・鉢・蓋・高杯・器台が出土している。甕は、口縁端部が面取りされるものと、丸く収まるものの両者がある。甕の底部はいずれも小さな平底を呈し、丸底のものは認められない。54は、小型丸底埴の前段階的様相を呈する。55は高杯D類で、脚部が「ハ」の字に大きく開く。59は裝飾器台、もしくは結合器台と見られるが、罎部の幅がほかに比べて広く、罎端部が上下に突出する点で古相を呈する。60も同器種の罎部であるが、59に比べて罎の幅は狭く、上下に突出しない。受部との接合部には、円形の窪みが多く認められる。接着効果を高めるものと理解できる。

屋内土坑(61～65) 甕・壺・高杯が出土している。61は、口縁部が外反しながら大きく伸びる大型の甕である。屋内土坑の1段目(上段)から口縁部を含む大型の破片が出土しているが、SK03の覆土からも同一個体の破片が出土し、接合している(図版11)。62は甕D類で、口縁部端部上面に面を有する。64は壺B類で、屋内土坑の2段目土坑内覆土中位付近から出土した。65は小型高杯D類の杯部である。

貼床内～掘形覆土(66～68) 壺・鉢・器台がある。小片が多く、図化できたのはわずかである。68は器台H類で、比較的厚手である。

SI02 (図版41・105-69～72)

甕・鉢・ミニチュア土器が出土している。SI02からは図化可能な土器の出土が少なく、図化した遺物も小片が多い。70は甕A類で、形骸化した有段口縁を呈する。72は器台のミニチュアで、脚部には小さな透かし穴が施されている。

SI03 (図版41・42・106-73～101)

覆土最上～上層(73～88) 甕・壺・鉢・高杯・器台が出土している。SI03は土器片が密集して出土し、遺存状態も比較的良好なものが多い。甕は、口縁端部が面取りされるものと、丸く収まるものの両者が存在する。甕の底部は実底状、あるいは丸底のものが多い。78は甕F類だが、口縁端部の屈曲は形骸化している。85は壺B類で、内外面ともに赤彩される。86は鉢F類で、口縁部が外方に向かって大きく伸びる大型の鉢である。東日本で多く見られる。87は高杯C類で、口縁端部～脚端部まで復元できた。杯部はやや深手で下方に段部を有する。内外面のヘラミガキも丁寧に施されるが、脚部に透かし穴は認められない。

覆土下層～床面直上(89～101) 甕・壺・器台が出土している。完形に復元されたものはないが、甕の出土数が多い。甕の口縁部形態からは、やや古相を呈するものと新相を呈するもの両方が認められる。89は、口縁部と肩部の境界付近が窪む。93は口縁端部が面取りされ、幾分上下に突出する点で、やや古相を呈する。96は、外反しながら「く」の字に折れ曲がり、端部は先細りして丸く収まる。やや新相を呈する。92は小型の甕で、胎土に粗い小礫を多く含む。98の甕の底部は、小さな平底を有する。99は甕または壺の底部で、接地面付近が外方に突出する。101は器台F類である。内外面ともに、丁寧なヘラミガキが施される。

S104 (図版43・106 - 102 - 107)

甕・鉢・高杯・器台が出土している。いずれも小片で、溝の中から出土している。105は高杯A類で、古相を呈する。106の器台は脚上部の穿孔部分が長く、107の器台はやや太身になる。

S105 (図版43・106 - 108 - 114)

甕・壺・器台もしくは高杯の脚部が出土している。108は溝で囲まれた内側、地山直上からまともに出ており、それ以外は溝の中からの出土である。108は口縁端部の断面が三角形を呈し、上下に突出する。110は壺もしくは甕で、口縁部が外方に向かって大きく伸びた後、端部がわずかにつまみ上げられる。外面の段部は、剥落している可能性もある。113の壺は、口縁部内面の段部がそれほど明瞭ではないが、立ち上がりの角度は比較的急傾斜となる。

S106 (図版43・107 - 115 - 118)

甕・器台が出土している。115は小型の甕C3類で、底部は器高のわりにやや広い平底を有する。116の底部は、小さな平底である。117の器台は脚部に変則的な4方向の透かし穴が施される。118の器台は、脚上部の穿孔部分が長い。

S107 (図版43・107 - 119 - 124)

甕・壺・器台が出土している。小片が多いが、122は口縁端部を除いてほぼ復元できた。甕は、いずれも「く」の字に折れ曲がる単純口縁で、丸く収まるか、緩やかな面取りが施される。122は壺G類で、口徑に比して器高が低い。外面及び口縁部内面が赤彩される。123は、口縁端部外面に櫛歯状工具による刺突が列点状に巡るが、器種が定かではない。器台、もしくは近江系の甕の系譜を引くものか。

S110 (図版44・107 - 125 - 127)

甕・鉢・器台が出土している。いずれも小片である。127の器台は脚部に三方の透かし穴が施され、穴の位置が上面視で二等辺三角形を呈する。このような器台は、同じ糸魚川市内の横マクリ遺跡で多く出土し、報告されている [渡邊 2008]。

S111 (図版44・107 - 128 - 132)

甕・壺・鉢が出土している。128の甕は、口縁部の内外面に明瞭なハケメが残り、外面では一部羽状に施されている。130は壺A1類である。口縁部が外方に向かって大きく開き、口縁部内面に段部を有する。132は、口縁部が外方に向かって大きく伸びた後、口縁端部内面が沈線状に窪む。鉢に分類したが、大型の壺の可能性もある。

S112 (図版44・107 - 133 - 135)

壺・器台が出土している。134は壺H類である。胴部の突帯上には5～6条の擬凹線が巡っており、突帯の上下端部には刻みが施される。135は器台H類である。口縁部は総じて内湾しながら立ち上がるが、端部がわずかに屈曲する。

S113 (図版44・107 - 136)

図化できたのは、136の装飾器台、もしくは結合器台の胴部小破片1点のみである。

SB01 (図版44・107 - 137 - 140)

甕・壺・高杯もしくは器台の脚部が出土している。甕の底部は、2点が同じ柱穴(P130)から出土しており、いずれも小さな平底を呈する。

SB03 (図版44・107 - 141・142)

甕が出土している。141は小型の甕C3類で、体部は球胴状、底部は丸底を呈する。142も小型の甕で、口径が胴部最大径を凌ぐ。

SB04 (図版44・107 - 143 - 145)

図化できたのは、甕の口縁部3点である。いずれも口縁部は強く外反し、端部は丸く収まる。

SB05 (図版44・107 - 146)

甕の底部1点を図化した。146は丸底を呈す。

SB06 (図版44・107 - 147・148)

蓋・器台が出土している。蓋(147)はつまみ部のみ出土である。器台(148)は、脚上部の穿孔が長い。透かし穴は2か所のみ確認できた。

SB08 (図版44・107 - 149・150)

甕が出土している。149は、甕の口縁部の小片である。端部に緩やかな面取りが施される。150は、甕の体部下半～底部である。柱穴(P483)内出土だが、遺存状態は良好であった。底部は大きな平底を呈する。P483からは管状土錘(151)1点も出土している。

SK40 (図版45・107 - 152 - 154)

甕・壺・器台が出土している。いずれも小片である。153は壺E類で、内面の段部は明瞭である。

SK35 (図版45・107 - 155 - 158)

甕・器台が出土している。155は甕C1類で、口縁部断面が「コ」の字状を呈する。157は甕の底部で、小さな平底である。158は器台C類である。受部の透かし穴は1か所のみ確認できる。

SK21 (図版45・107 - 159)

壺が出土している。159は壺H類で、胴部破片のみ出土である。外面は赤彩されるが、突帯部に擬凹線や刻み等は認められない。

SK18 (図版45・107 - 160)

壺が出土している。160は壺G1類である。口縁部から体部上半にかけて、器厚は特に薄い。口縁部は欠損するものの、口径に比して器高が高いグループに分類できる。

SK23 (図版45・108 - 161 - 170)

甕・壺が出土している。特に甕が多く、比較的大型の破片がまとまって出土した。甕の口縁部には、端部が面取りされるものと丸く収まるものの両者がある。169は壺A1類である。内面には段部が残るが、稜線は明瞭でない。170は壺D類である。短い口縁部が外方に向かって一直線に伸びる。

SK34 (図版46・108 - 171 - 192)

土器片が多数出土した遺構であるが、復元・図化に耐え得る遺物は少なく、小片が多い。甕・壺・鉢(片口も含む)・高杯・器台が出土している。甕は、面取りされるものや端部がつまみ上げられるもの、丸く収まるものがある。174は器種が定かでないが、壺あるいはS字状口縁部付甕が形骸化したものの可能性

もある。178の甕底部は、周囲から粘土が工具によって押し下げられて輪郭状を呈し、中央が丸く窪む。壺は、大型のものと小型のものがある。182は壺A1類で、1段目がやや長めに直立して上方へ伸びた後、2段目が外方に短く外反する。内外面の段部は明瞭である。183は壺A1類で、外面の段部には刻みが施される。古相を示すが、混入品の可能性がある。184は壺E類で、口縁部下段が短くなるものと想定される。185は壺G2類の小片で、新相を呈する。187は鉢D2類である。小片だが、薄手で精緻なつくりである。190は高杯C類である。内外面は赤彩される。杯部は口径の割に浅く、大きく外方に開くことから、新相を呈するものと判断できる。189は片口鉢の片口部である。191・192は器台の脚部である。192は脚部上端の径が太く、長方形配置の4個の透かし穴が残存し、古相を呈する。

SK15 (図版46・108 - 193 - 196)

壺・壺・器台が出土している。193は口縁部が段を有し、口縁端部が外方に大きく伸びる。S字状口縁台付壺の影響を受けているものと見られ、ここでは壺F類に分類した。195は壺H類である。胴部破片のみの出土である。胴部突帯上には5本の擬凹線が施されるが、SI12の134のように突帯の上下に刻みは施されず、赤彩もされていない。196は器台の脚部で、湾曲しながら大きく外方に開き、3方向に透かし穴が施される。

SK38 (図版46・108 - 197)

甕の底部1点を図化している。197は小さな平底を有する。

SK26 (図版46・108 - 198)

図化できたのは、甕の口縁部1点のみである。198はやや厚手で、外方に大きく開き、端部は丸く収まる。

SK16 (図版46・108 - 199)

壺の口縁部小片1点のみ図化できた。199は壺A1類で、口縁部内面の段部が明瞭である。

SK28 (図版47・108 - 200 - 203)

壺・壺・高杯もしくは鉢が出土している。201は壺の胴部中位～底部で、底部は平底である。203は高杯、もしくは鉢である。口縁部の下方に、わずかに傾斜変換する稜線が認められる。

SK08 (図版47・109 - 204 - 206)

壺・鉢・器台が出土している。いずれも小片である。204は、口縁部が外反し、内外面が赤彩される。205は大型の鉢に復元できる。206は器台H類で、やや厚手を呈する。

SK27 (図版47・109 - 207 - 210)

壺・壺・高杯が出土している。207は壺B類で、口縁端部が上下に突出する。208は壺A1類で、口縁部の立ち上がりが急角度を呈し、口縁部内面の段部も明瞭である。209は高杯A類である。大型の杯部で、段部の上方が大きく外方に伸びる。210は、器台もしくは壺の口縁部、あるいは脚端部片である。端部には明瞭な面取りが施される。これらは今回調査された遺構出土の土器群の中でも、古相を呈している。

SK31 (図版47・109 - 211・212)

壺・壺が出土している。211は壺C3類である。212は壺B類で、口縁部が内湾しながら上方に伸びる。

SK07 (図版47・109 - 213・214)

壺(鉢?)・壺が出土している。213は、台が付く甕もしくは鉢と見られる。器壁は厚手で、内面はヘラミガキが施されているようである。214は、壺の底部である。底部外面には、笹の葉状の葉脈痕が認められる。中央部に太い葉脈が1本走り、その両側に細い葉脈が何本も平行に走っている。その内側には、さらに細い葉脈も認められる(図版109)。いわゆる「底部平行葉脈圧痕」の土器[相田2009]と見られる。

SK10 (図版 47・109 - 215・216)

甕・壺が出土している。215 は甕の底部で、大きな平底を呈す。216 は壺の底部である。

SK11 (図版 47・109 - 217・218)

甕が出土している。いずれも口縁部片で、217 は端部がわずかに沈線状に窪む。

SK48 (図版 47・109 - 219・220)

甕が出土している。219 は小型の甕で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。220 は肩部が大きく外方に張り出す。

SK09 (図版 47・109 - 221 - 225)

甕・鉢・器台が出土している。223 は甕もしくは鉢で、口縁部が有段状を呈するが、段部が浅く形骸化している。224 は鉢Cの口縁部である。口縁部は丸く内湾し、内外面は赤彩される。225 は器台A類である。残存部の様相から、透かし穴は三角形に復元でき、上下が交互に入れ替わって配置されていたものと判断できる。

SK12 (図版 48・49・109・110 - 226 - 241)

甕・壺・鉢・高杯が出土した。今回の調査で、最も土器の遺存状態が良好であり、かつまとまって出土した遺構である。226 は甕C3類で、完形に復元できた。内外面にはハケメが明瞭に施される。体部はやや長胴傾向にあり、底部は完全な丸底を呈する。230 は甕C2類で、口縁端部には内傾する面を有する。体部は砲弾状で、下半が細く収束し、底部はほぼ丸底状の小さな平底を呈する。外面はおおむねハケ調整であるが、肩部付近及び内面にはヘラケズリが施されている。227 は甕C3類で、体部は球胴状を呈する。内外面はハケ調整、口縁端部は細くなって丸く収束する。底部を欠損するが、丸底を呈するものと推測できる。231 は甕C2類で、口縁端部には明瞭な面取りが施される。面取り部には凸線状のラインが1～2本巡っている。調整は外面がハケメのちヘラケズリ、内面にはヘラナデが施される。228 は甕C2類である。口縁端部は面取りされるが、沈線状のライン等は認められない。内外面はハケメが施される。232 は甕C3類で、口縁部は直立気味に上方に伸びた後、わずかに外反する。外面調整は不明瞭だが、内面にはヘラナデが施される。229 は甕C3類で、口縁部は「く」の字に強く屈曲し、外反しながら端部は細くなって収束する。233 は甕C3類である。口縁部は大きく外反し、端部はやや下方に湾曲して垂れ下がる。外面はヘラナデ状のハケメ、内面にはヨコハケが施される。234 は小型の甕C1類である。口縁端部は上方につまみ上げられ、浅い受口状を呈する。胴部外面はハケメ、内面はヘラナデが施される。235 は甕C2類である。口縁部は直線的に外方に伸び、端部は面取りされる。体部は球胴状で、内外面にはハケメが施される。なお、ハケメの方向は右上がりであり、ほかの大部分の甕と傾斜が逆になっており、注目される。236 は甕C2類である。外面はヘラナデに近いハケメ、内面は明瞭なハケメが施される。237 は大型の壺C1類である。口縁部は単口縁で直立気味に上方へ伸び、上方でわずかに外反したのち端部がつまみ上げられ、面を有する。外面はヘラミガキ、内面には細かいハケメが施される。底部は平底である。238・239 は壺B類である。238 は外面及び口縁部内面が赤彩される。いずれも口縁部は内湾気味に上方へ立ち上がるが、238の方がやや外方へ開いている。240 は鉢である。外面は赤彩される。口縁部のやや下方にはわずかな段差(傾斜変換)が認められ、口縁部に段を有する鉢が形骸化したものと判断できる。241 は高杯の脚部である。外面は赤彩される。脚部の上方は中実状だが、下方は外方に大きく開く。以上、甕の口縁部形態にはバリエーションがあるものの、226の甕のプロポジションや238・239の壺、240の鉢の様相などから判断して、これらの土器群はほかの遺構出土土器群に比べて新相を呈している。

SK06 (図版 49・111 - 242 - 245)

甕・鉢が出土している。242 は甕 D 類である。243 は小型の甕 C2 類で、口縁部は面取りされる。244 は鉢 F 類である。口縁部と体部の境界線は明瞭である。245 は大型の鉢 C 類である。底部は平底で、あたかも壺の下半部分であるかの様相を呈するが、口縁部は丁寧に仕上げられている。内外面ともにハケメが施される。

SK04 (図版 50・111 - 246 - 255)

甕・鉢・高杯・器台が出土している。中でも、器台の出土が目立つ。246 は甕 C3 類で、外面は全体的にヘラケズリが施される。底部は丸底である。248 は鉢 D2 類である。薄手で、焼成も堅緻である。249 の底部と同一個体である可能性が高い。250 は高杯の脚部である。透かし穴はすべて遺存し、3方に穿たれていた。252 は器台 H 類である。受部の器壁は薄く、脚部の透かし穴は3方である。253 も器台 H 類で、252 の器台と隣接して出土した。外面及び受部内面は赤彩されるが、受部は浅く、器高もそれほど高くない。遺存状態が悪く、取り上げ時と取り上げ後の洗浄中に脚部上半が融解してしまい、透かし穴の数が不明であるが、出土状態の写真を見る限りでは、直径 5mm 程の透かし穴が2か所確認できる。254 の器台は、252・253 に比べて器壁が厚く、受部も深身でしっかりしたつくりである。透かし穴は3個確認できるが、残存位置が変則的であり、4方なら台形状を呈するが、あるいはそれ以上の透かし穴が穿たれていた可能性も指摘できる。255 は小片だが、近接する2個の透かし穴が確認でき、長方形配置の4方透かしであったものと推測可能である。

SK05 (図版 50・111 - 256 - 262)

甕・壺・鉢・器台が出土している。256 は甕 C3 類で、底部を欠損するものの、残存率は比較的高い。口縁端部は丸く取まると共に、胴部全体がやや長胴的で、比較的新相を呈する。257 も甕 C3 類である。残存率は256程高くないが、口縁部から胴部下方まで接合・復元できた。256・257ともに底部を欠損するが、丸底、あるいは尖底状を呈するものと推測される。258 は小型の甕である。口縁部は内外面にわずかに段部を有する。259 の甕の底部は尖底状である。260 は壺 A2 類で、内面の段部は形骸化し不明瞭である。261 は鉢で、内湾する口縁部の先端が外方に屈曲し、上部がほぼ平坦となる。262 は器台の脚部で、透かし穴が3方に穿たれている。いずれの土器も、古墳時代前期としては新相を示している。

SK33 (図版 51・112 - 263 - 280)

甕・壺・鉢・高杯・器台が出土している。263 は甕 C3 類だが、口縁部は直立気味に上方に伸び、上端がわずかに外傾する。端部は幅の広い緩やかな面を有するが、後縁は不明瞭である。267 は甕 C1 類である。端部がつまみ上げられ、面取り部分が沈線状に窪む。264 は甕 A 類だが、小片で、ほかの土器の様相から見て混入品と判断される。269 は甕の底部で、尖底気味の丸底を呈する。270 は器種が定かでないが、大型の甕、もしくは広口の壺と推測される。口縁部外面にはわずかに段部を有するが、内面はほぼ一直線に斜め上方へ伸びる。部分的に、ヘラミガキも施されている。271 は壺 C1 類である。口縁部から底部まで接合し、復元できた。口縁部は単口縁だが外反して立ち上がり、底部は平底である。272 は壺 D 類である。口縁端部は上方につまみ上げられ、緩やかな受口状を呈する。外面は赤彩される。275 は鉢 B 類である。底部の孔は、焼成前に内外面から開けられている。274 は壺 B 類である。口縁部は外面が赤彩され、内湾気味に長く上方に伸びる。276 は高杯 D 類である。口縁部内外面の下方に明瞭な傾斜変換の後縁が確認できる。278 は器台 F 類である。279・280 は器台の脚部で、透かし穴がいずれも2個残存していた。279 は3方透かし、280 は長方形配置の4方透かしであったものと推測できる。

SK37 (図版52・112 - 281 - 288)

甕・壺・鉢・器台が出土している。281は甕D類で、口縁部から底部付近まで接合・復元できた。口縁部は直線的に外方へ伸びた後、端部付近で粗雑に折り返されるとともに、上端には平坦面が形成されている。282・283は甕C3類である。口縁部が単純な「く」の字に折れ曲がる。屈折の度合いや肩の張り具合等から判断して、やや新相に位置付けられる。287は鉢D1類である。口縁部から底部まで接合し、復元することができた。底部は平底で、外面にはハケメ・ヘラナデ、内面にはヘラナデが施される。

SK02 (図版52・112 - 289 - 297)

甕・壺・高杯・器台が出土している。289・290・291の甕は、いずれも「く」の字に折れ曲がる甕C3類である。292は壺で、頸部に突帯状の隆帯が巡る。弥生土器の混入かもしれない。293・294は高杯の脚部である。293は特に小型で、器壁も薄いことから、ミニチュアの可能性もある。296は器台の脚部で、透かし穴が3個確認できる。元々は長方形配置であったものと推測できる。

SK19 (図版52・112 - 298 - 302)

甕・壺が出土している。298は甕C3類である。甕の底部は、平底(301)、小さな平底(299)、尖底気味の丸底(300)の3種が出土した。302は壺の底部である。平底で、外面は赤彩される。

SK14 (図版52・113 - 303・304)

甕が出土している。303は甕C3類で、体部が丸味を帯び、口縁部が大きく外反する。口縁部外面下方には、わずかに突帯状の隆起が認められる。304は平底の甕底部である。

SK42 (図版52・113 - 305・306)

壺が出土している。305は壺A2類である。306は壺の底部で、底面に植物の圧痕が認められる。

SK49 (図版53・113 - 307 - 321)

甕・壺・鉢・壺・高杯・器台が出土している。307は甕C1類で、口縁端部が上方につまみ上げられている。308は甕E類である。深い受口状の口縁部が特徴的であるが、口縁部外面には施文は認められない。ただし、口縁部内面の頸部に明瞭なヨコハケが施されており、意図的なものが感じられる。311は甕の底部で、小さな平底である。312は壺B類で、丁寧なヨコヘラミガキが施される。頸部は太く、丸みを持って上方に立ち上がる。313は壺E類で、口縁部外面に段部を有するが、内面には認められない。315は鉢A類である。口縁部には段部を有し、外面及び口縁部内面は赤彩される。316は蓋のつまみ部である。外面は赤彩される。317は高杯C類である。口縁部下方の段部は明瞭である。319は高杯B類である。杯部には沈線状の段部が認められる。脚部は縦に長く、透かし穴は長方形配置の4方透かしである。320は器台B類である。受部には円形の透かし穴が3か所確認でき、その配置から本来は6方向であったものと推測される。321は器台の脚部である。320と同一個体の可能性もある。脚部の透かし穴は、319と同様長方形配置の4方透かしで、脚部も長く、319とよく似たつくりである。SK49出土の土器は、遺構出土土器群の中で相対的に古相を示している。

SK36 (図版53・113 - 322 - 331)

甕・壺・鉢・壺・高杯・器台が出土している。322・323は甕C1類で、面取り部分が沈線状にわずかに窪む。325は口縁端部上面に平坦面を有する。326は甕で、口縁部が外反しながら大きく外方へ伸びる。327は壺の口縁部である。外面に緩やかな段部を有する。329は鉢E類である。底部を欠くが、完形に復元できた。328は鉢F類である。内外面が赤彩される。331は器台脚部で、透かし穴が2か所確認できる。

SK03 (図版 54・113・114 - 332 - 354)

甕・壺・鉢・蓋・器台が出土している。332は甕C3類である。胴部上半と下半は直接接合しないが、内外面の調整の様相からみて同一個体と判断し、復元した。底部は小さな平底である。334も甕C3類である。底部付近を欠くが、口縁部から胴部下半まで接合・復元できた。333は、胎土や胴部破片の様相から、同一個体と判断して復元・図化した。335の甕は口縁部が外反しながら上方に大きく伸びる。337は甕C1類で、端部がつまみ上げられる。343は甕D類である。口縁部外面には指頭圧痕が認められる。甕の底部には、345のように小さな平底を呈するもののほか、346のように大きな平底で下端がつぶれたように外方へ張り出すものも見られる。348は壺の口縁部である。口縁部下方には突帯状の隆起が巡っており、山陰系の直口壺と見られる。352は深手で脚が付く鉢と見られ、やや古相を呈するが、小片のため混入品の可能性も指摘できる。353の器台は変則的な4方透かしが施されている。

SK45 (図版 55・114 - 355 - 361)

甕・壺が出土している。355は甕C1類で、口縁端部は緩やかに面取りが施される。肩が張らず、胴部の最大径はほぼ中位に位置するようである。357は甕C3類で、口縁端部はわずかに下方へ垂下して丸く収まる。355同様、肩が張らずナデ肩である。358の口縁端部も、357のように下方へわずかに垂下した後、丸く収まる。359は口縁部に段を有する甕もしくは壺であるが、小片で、系譜もはっきりしない。

SK46 (図版 55・114 - 362)

図化できたのは壺1点のみである。362は壺A1類で、口縁端部は明瞭な面取りが施される。また、口縁部内面には製作者のものと思われる指もしくは布の接触痕が認められる。

SK47 (図版 55・114 - 363・364)

甕・器台が出土している。363は甕C2類で、体部は球胴状を呈する。364は器台D類である。焼成は良好で堅緻な、精製土器である。

SD14 (図版 55・114 - 365 - 379)

甕・壺・鉢・蓋・器台が出土している。365は甕A類で、端部には面取りが施される。366は甕C1類で、面取りも明瞭に施され、端部がつまみ上げられる。367は甕C2類で、端部はわずかに下方へ垂下する。369～371は甕の底部で、いずれも小さな平底を呈する。中でも、369は底部周縁の粘土が押し下げられて輪郭状を呈し、中央部分が窪む。373の壺は口縁端部が折り返されて、突帯状に巡る。375は蓋A類である。つまみ部を欠くが、蓋の中では比較的残存率が高い。376は鉢、もしくは甕の口縁部である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部が内側に肥厚する。布留系の小型甕の可能性も指摘できる。378は器台G類である。口縁部が有段のものは出土数が少ない。379は器台の脚部である。残存部に透かし穴は3か所確認できるが、当初は変則的な配置で4方あるいは3方の透かし穴が施されていたものと見られる。

SD24 (図版 56・115 - 380)

図化できたのは、甕1点のみである。380は甕C3類だが、小片である。

SD30 (図版 56・115 - 381)

壺もしくは甕の口縁部片1点のみ図化した。381の内面には、わずかにハケメが確認できる。

SD32 (図版 56・115 - 382 - 385)

甕・壺が出土している。382は甕C2類で、口縁部は直立気味に上方へ伸びた後、上端付近で外方へ開く。385は壺の底部で、外面は赤彩され、丸底を呈する。

SD47 (図版56・115 - 386 - 391)

甕・鉢・鉢・高杯が出土している。386・387はいずれも甕C2類だが、386は大型、387は小型の甕である。388は壺B類で、口縁部は細くなって収束する。390は鉢G類である。口縁部に段を有する。

SD37 (図版56・115 - 392 - 396)

甕・高杯が出土している。392は甕F類で、口縁部部の屈曲が外方へ大きく拡張する。393は甕C1類で、口縁部部はわずかにつまみ上げられる。395は高杯D類で、口縁部から脚部部まで復元できた。脚部部は大きく外方へ開き、脚部部は上方へ反り上がる。396は高杯E類で、柱状部外面上方には粗いヨコヘラミガキが施されている。

SD11 (図版56・115 - 397)

甕口縁部小片が出土している。397は甕C1類で、口縁部部がわずかにつまみ上げられる。

SD17 (図版56・115 - 398 - 399)

甕もしくは壺の底部、及び器台が出土している。399は器台A類で、透かし穴の上方には段部を有する。透かし穴は円形で3か所残存するが、当初は6方向に穿孔されていたようである。

SD27 (図版56・115 - 400)

甕もしくは鉢の口縁部小片が出土している。400の口縁部には段を有する。

SD08 (図版56・115 - 401)

壺が出土している。401は小型の壺の体部で、外面は底部まで赤彩されている。

SD06 (図版56・115 - 402 - 404)

甕が出土している。402は甕C3類だが、口縁部の下方にはわずかに段部が意識されているようである。403・404は甕C1類で、明瞭な面取りとともに、端部がわずかにつまみ上げられる。

SD04 (図版57・115 - 405 - 422)

覆土最上〜上層(405 - 415) 甕・壺・高杯・器台が出土している。405は甕C3類で、肩が張らずに胴部が長く下方へ伸びるようである。406は甕の底部で、丸底を呈す。408は壺D類で、口縁部は直線的に外方へ伸びる。413は器台B類と見られるが、鈿部も端部が細く収束し、形骸化が著しい。

川底付近(416 - 422) 甕・壺・器台が出土している。416は甕C2類で、2A区西壁の調査中に出土した。口縁部部は緩やかではあるが面取りされ、底部も大きな平底である。417は甕の底部で、小さな平底を呈す。底部周縁の粘土は押し下げられて輪郭状を呈し、中央部分が窪む。418は壺A1類で、内外面ともに赤彩される。420は器台E類で、受部が深くラッパ状に外方へ広がる。内面に赤彩の痕跡が認められる。421は器台H類だが、厚手でしっかりしたつくりである。422は器台の脚部であるが、脚が長く、焼成も堅緻でヘラミガキも丁寧に施される。透かし穴は長方形配置の4方透かしである。総じて、最上〜上層付近の土器に比べ古相を呈している。

P329 (図版57・115 - 423 - 427)

甕・鉢もしくは壺が出土している。423は口縁部部がわずかにつまみ上げられるが、明瞭な面取りは施されない。425は、口縁部部が丸く折り返されて、外方に肥厚する。426は甕の底部で、小さな平底を呈し、内面にはおこげ状の炭化物が付着している。427は鉢もしくは壺に分類される。口縁部には段を有し、外面及び口縁部内面は赤彩される。

P06 (図版57・115 - 428 - 429)

器台が出土している。428は器台の脚部で、裾部を欠損する。透かし穴は長方形配置の4方透かしで、

2 古墳時代の遺物

比較的丁寧なつくりである。429も器台の脚部と見られ、長方形配置の透かし穴が施される。

P594 (図版58・116-430-432)

甕が出土している。いずれもC3類だが、430と431は肩が張らず、432は口縁部の屈曲が強い。

P299 (図版58・115-433-434)

甕が出土している。433は甕D類で、口縁部上端には平坦面を有する。434は甕の底部で、丸底に近い。

P104 (図版58・115-435-436)

甕・ミニチュア土器が出土している。435は甕で、面取りが不明瞭であるためC3類に分類した。436はミニチュア土器である。口縁端部をわずかに欠損するが、ほぼ定形である。底部は比較的大きな平底で、平面形は楕円形状である。

その他のピット (図版58・116-437-439・441-449)

P58の437は甕C3類で、口縁部は外反し、端部が丸く収まる。P57の438は甕B類で、口縁端部が付加状を呈する。P379の439は甕C1類である。P75の441は壺A2類である。口縁部外面には段部が存在するが、内面には認められない。口縁部の下段は直立～やや内傾気味である。P512の442は壺の底部で、輪台状を呈する。胎土には石英のほか、海綿骨針も多く含む。P403の443は高杯B類で、内外面が赤彩される。丁寧なつくりで、口縁部下方の段部稜線も明瞭である。〔滝沢2005c〕6～7期の所産と判断できる。P380の444は器台の脚部である。脚が長く、外面は赤彩される。長方形配置の透かし穴が施される。

SI (竪穴建物)

遺構名	重量 (g)
SI01	111825.1
SI02	3877.8
SI03	21642.6
合計	137345.5

SI (平地建物)

遺構名	重量 (g)
SI04	3575.4
SI05	737.5
SI06	2623.3
SI07	9609.2
SI08	72.5
SI09	180.1
SI10	1585.9
SI11	1685.3
SI12	1857
SI13	1072.4
合計	18998.6

SD (竪立柱建物)

遺構名	重量 (g)
SD01	727.9
SD02	370.0
SD03	886.0
SD04	108.5
SD05	167.8
SD06	672.8
SD07	325.7
SD08	28.0
SD09	0
合計	3286.7

SK (土坑)

遺構名	重量 (g)
SK01	182.48
SK02	4803.6
SK03	17554.1
SK04	7928.25
SK05	7880.4
SK06	3589.5
SK07	627.8
SK08	1887.8
SK09	4488.9
SK10	2135.2
SK11	1101.5
SK12	6800.2
SK14	125.8
SK15	198.1
SK16	139.0
SK17	877.9
SK18	1066.8
SK19	2603.5
SK20	52.5
SK21	151.9
SK23	3366.2
SK24	3.9
SK25	773.8
SK26	82.2
SK27	284.1
SK28	1161.1
SK29	22.2
SK30	386.7
SK31	1848.2
SK32	623.1
SK33	21667.9
SK34	17279.6
SK35	1911.4
SK36	13888.7

SK37	6345.3
SK38	755.7
SK39	1433.3
SK40	483.7
SK41	206.3
SK42	1486.6
SK45	2791.0
SK46	475.8
SK47	928.7
SK48	417.0
SK49	19803.9
合計	164329.63

P (ピット)

遺構名	重量 (g)
全ピット	20643.2
合計	20643.2

SD (溝)

遺構名	重量 (g)
SD02	16.2
SD04	28576.5
SD06	2757.7
SD07	7196.4
SD08	296.3
SD10	154.5
SD11	832.4
SD14	11428.5
SD16	3.3
SD17	861.5
SD24	1514.5
SD25	90.2
SD26	29.6
SD27	211.5
SD30	1721.1
SD32	1153.1
SD36	117.8
SD37	6313.3
SD38	20.0
SD39	22.2
SD40	23.1
SD41	46.8
SD44	1293.6
SD47	3767.9
SD48	25.0
合計	70664.0

第2表 遺構出土土器集計一覧表

2区包含層 (図版59・60・116・117 - 454 ~ 476)

454は甕C1類であるが、面取り部分の幅がやや広く、受口に近い。455は甕C1類である。456は、胴部上半と下半が直接接合しないものの、同一個体と判断して図化した。口縁端部はやや垂下して丸く収まり、底部付近は幾分下方に伸びて平底、あるいは台部が付くものと想定される。457は甕の底部で、丸底を呈する。458は甕A1類である。大型の甕で、器壁も厚く、口縁部内外面の段部も明瞭である。459は大型の甕で、口縁部から底部まで復元できた。口縁部は外面に段を有するものの、内面には段が無く、広口で口縁端部には明瞭な面取りが施される。底部は大きな平底で、土器製作時に付着したと見られる粘土片や砂粒が認められる。461は甕A2類で、口縁端部は面取りされるものの、ゆがみが生じ、全体的にややいびつである。463は蓋B類で、つまみ部から口縁部まで復元できた。つまみの径は口径に比して大きい。464は高杯B類である。口径も小さく、同タイプの高杯の中では新相を呈する。465は高杯C類である。口縁部下方の段部及び稜線は明瞭である。471は高杯E2類である。柱状部の上半のみ中空で、下半は中空である。外面にはヨコヘラミガキが施される。469は高杯E2類で、柱状部は中空であるが器壁は厚く、また極めて短脚である。473はミニチュア土器である。甕、もしくは甕を模したものであろう。474は器台である。透かし穴は互い違いの三角形を呈するものと想定され、器台A類と判断した。

3区包含層 (図版60・61・117 - 480・482・483・486 ~ 494)

483は大型の甕F類の口縁部である。2個1対の棒状浮文が3か所残存するが、当初は十字方向の4か所に施されていたものと想定される。浮文の上には、刻みが施されている。486・487は高杯E1類である。486は完全に中空、487は中空だが器壁が厚く、中空部分は狭い。488・489は高杯E2類で、488は中空、489は中空である。492・493は高杯の脚上部で、透かし穴がすべて遺存しており、いずれも3方透かしである。穴の配置はそれぞれ二等辺三角形を呈する。494は器台の脚部上半で、3方向に透かし穴が施される。外面及び受部底面には赤彩の痕跡が認められる。

B 古墳時代中・後期の土器 (図版61・118 - 485・496・497・499)

古墳時代中・後期に属する土器は、出土数が極めて少なく、遺構に伴うものはほとんど認められない。また、大部分は3区低地部付近からの出土であり、周辺からの流入品も存在すると推測できる。

485は屈折脚の高杯である。3区自然地形の高まり西側付近から出土した。杯部と脚柱状部下半が出土している。両者は直接接合しないものの、胎土の様相や出土位置等から判断して、同一個体として図化した。脚柱状部は直線的に伸び、脚根部は上方にやや反り上がっている。古墳時代中期中葉の所産であろう。496は長胴甕である。3区低地部付近から出土している。外面はタテハケ、内面は明瞭なヨコハケが施される。497は内面黒色処理の杯である。口縁部は外反し、端部は丸く収まる。口縁部と体部との境界には緩やかながら稜線が巡る。古墳時代後期の所産と判断できる。499は須恵器の杯身である。体部の深さに比して口縁部の返りは短く、内傾の度合いも強い。ロクロの回転方向は左で、底部は静止ヘラ切りである。古墳時代の須恵器杯身では新相の特徴を有し、TK209段階(古墳時代後期後葉)頃に位置付けられる。

C 土製品 (図版44・61・107・117 - 151・495)

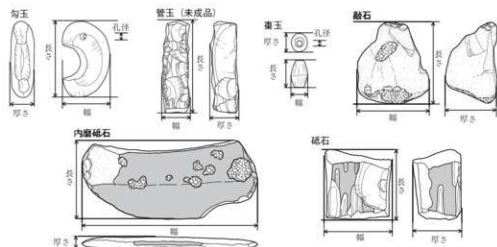
古墳時代の所産である土製品は、わずかに管状土鉢が数点出土したにすぎない。SB08(P483)の151は、管状の土鉢が縦半分に割れた状態で出土している。穴の内面には痕跡が認められる。495は、3区の低地部付近から出土している。管状で、全体の約3分の2程度が遺存している。

D 石器・石製品 (図版 63～76・119～126・128)

古墳時代前期に相当する遺構や土器に伴って、石器・石製品が7,283点出土した。その多くが玉作に関わる製作工程品や工具である。出土した玉作資料から、勾玉・管玉・霰玉の三種類の玉が製作されていたことを想定できる。竅穴建物などの遺構を中心に玉作が行われたと考えられる。成品の出土は非常に少なく、生産遺跡特有の様相が認められる。石材では、ヒスイなどの在地石材のほか、緑色凝灰岩などの遠隔地石材が用いられる。また、出土例が希少な霰玉の製作資料が多数出土し、製作工程が迫る点で貴重である。西頸城地域では当該期の玉作遺跡の発見はまだまだ少なく、北陸地方における古墳時代前期の玉作を考える上で、貴重な調査事例である。ここでは、個々の遺構や包含層から出土した石器・石製品の出土状況や、個別の記載を行う。なお各遺物の個別記載がないものについては、観察表を参照されたい。

1) 記述の方法

石器の計測方法・計測部位、部位名称については以下の通りである(第11図)。観察表の作成・各分析についても同様の測定方法をとった。なお、玉の破損資料に表現した穿孔内部の回転痕は、鉄錐と石錐を区別する目的〔庄田2006〕のものではなく、穿孔作業の方向性を示したものである。



第11図 石器・石製品の計測位置

2) 石器・石製品の分類

出土した石器・石製品は7,283点であり、内訳は第3表のとおりである。ここでは、分類・細分類を行った基準を示す。本遺跡は、発掘調査の初期段階から玉作遺跡との認識が強く、ほとんどの包含層や遺構覆土の土壌洗浄を実施することができた。通常の掘削方法に比べて、玉作資料を回収できた割合は高いといえる。現に玉作資料の7割以上は、土壌水洗で得られたものである。なお、土壌水洗で得られたもの多くは1cm角未満の剥片・チップで、本報告ではそれらをすべてチップとして取り扱った。

区分	玉作資料		工具などの石器		全体	
	個数	[g]	個数	[g]	個数	[g]
遺 積	5706	8356.7	111	48431.1	5817	56987.8
包含層等	1374	13061.6	92	47844.6	1466	60906.2
総計	7080	21618.3	203	96275.7	7283	117894.0

第3表 出土石器・石製品総点数

① 勾玉

勾玉はC字状を呈し、穿孔されたものである。ここでは製作工程時の粗い研磨痕を除去し、入念に研磨されたものを成品、それ以外を未成品とした。大きさは長幅分布により三分でき、これを分類基準とした(第12図)。なお、グラフ作成にあたっては未成品の5~7類の数値を合わせて反映させた。

厚さは、長さに対して大体3:1から4:1の間にまとまっており、扁平なものが目立つ(第13図)。4:1から5:1のような比較的薄手のものもあるが、おおむね目的とする大きさに対応した厚さの傾向がうかがえる。

A類 長さ1.8cm未満、幅1.5cm未満

B類 長さ1.8cm以上2.5cm未満、幅1.2cm以上2.0cm未満

C類 長さ2.5cm以上、幅2.0cm以上

② 勾玉未成品

勾玉の形を呈するもので、研磨や剥離作業の途上のもの。剥離の施される部位や研磨・穿孔の有無により、製作の工程が追えることから、作業進度による細分類を行う(第14図)。

1類 原石(原石・石核段階)

2類 表皮と主要剥離面のみを持つもの(荒削段階)

3類 大きな剥離により勾玉の外形を呈するもの(形削段階)

4類 小さな剥離により勾玉素材全体が滑らかなもの(微調整剥離段階)

5類 研磨により半月状に仕上げられたもの(研磨段階)

6類 a類 研磨により腹部形成のみがなされたもの(内磨段階)

b類 研磨による腹部形成以前に、穿孔のみがなされたもの(穿孔段階)

7類 a類 研磨による腹部形成後に、穿孔されたもの(穿孔段階)

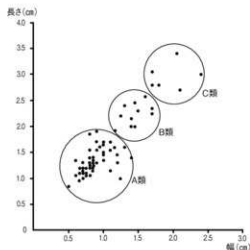
b類 穿孔後に、研磨によって腹部が形成されたもの(内磨段階)

(8類) 荒い研磨痕を入念に磨き上げ仕上げたもの(仕上げ段階)

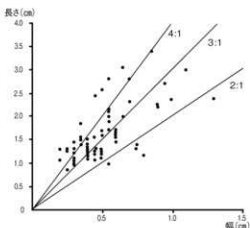
7a類は腹部が形成された後、穿孔途中で破損したもの、7b類は穿孔されているが腹部の形成が不十分なもの、あるいは腹部形成時に破損したものを含めた。なお、7a類と7b類の分類が困難なものについては、「7類」と表記した。



第14図 勾玉未成品の作業進度による分類



第12図 勾玉の長幅分布による分類



第13図 勾玉の長厚分布図

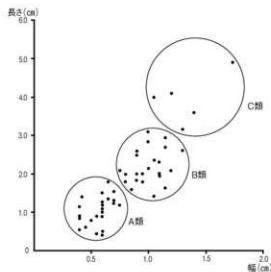
③管玉

細い管状を呈し、穿孔されたもの。入念な研磨により、微細な研磨痕をすべて除去したものを成品とし、それ以外を未成品とした。大きさは長幅分布により三分でき、これを分類基準とした(第15図)。なお、グラフ作成にあたっては未成品の5~7類の数値を合わせて反映させた。

A類 長さ20cm未満、幅0.8cm未満

B類 長さ2.0cm以上3.2cm未満、幅0.8cm以上1.3cm未満

C類 長さ3.2cm以上、幅1.3cm以上



第15図 管玉の長幅分布による分類

④管玉未成品

緑色凝灰岩を用いて、管状を呈するもので研磨や剥離作業の途上のもの。剥離の大小や研磨・穿孔の有無により、製作の工程が追えることから、作業進度による細分類を行う(第16図)。また、緑色凝灰岩の剥片で、製作時発生した薄手の剥片や微細なものは、「剥片・チップ」とした。

1類 大きな剥片のもの(原石・石核段階)

2類 大きな柱状ないし亜角状のもの(荒削段階)

3類 いわゆる四角柱状のもの(形削段階)

4類 大きな剥離を加えて管玉の大枠を呈するもの(側面剥離段階1)

5類 細かい剥離を加えて形が整うもの(側面剥離段階2)

6類 研磨により多角柱状を呈する(研磨段階)

7類 穿孔されたもの(穿孔段階)

(8類)素材全体を入念に研磨し、滑らかにしたもの(仕上げ段階)



第16図 管玉未成品の作業進度による分類

⑤薬玉

やや寸厨で身の中心にかけて太くなる形状を呈し、穿孔されたもの。ほかの玉同様、入念に研磨されたものを成品、それ以外を未成品とした。身の長さは、すべて約1cmを前後するため、寸法による作り分けは行われていないと想定できる。形態は幅狭と、幅広の二つに分類した。

A類 幅狭(長幅比1:0.7未満)のもの



第17図 薬玉の形態分類

B類 幅広(長幅比1:0.7以上)のもの

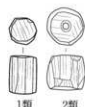
⑥ 薬玉未成品

薬玉の形状を呈するもので、研磨が進行していないものはすべてここに含めた。研磨段階以前の資料は、小型の剥片を用いたと推測される。しかし、該当する資料が多様で判然としないことから、明らかに薬玉と直結する、研磨段階から薬玉未成品とした(第18図)。

1類 研磨により多角柱状を呈するもの(研磨段階)

2類 穿孔されたもの(穿孔段階)

(3類) 素材全体を入念に研磨し、器体の中腹に緩やかな稜を作り出し、滑らかにしたもの(仕上げ段階)



第18図 薬玉未成品の作業速度による分類

⑦ 砥石

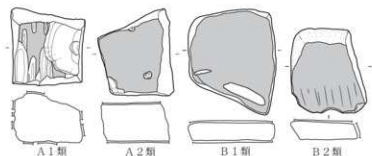
断面形が四角状の砥面を持つもの。大型と薄型、筋状砥面の有無で四分した(第19図)。いずれも研磨具であることに違いないが、作業や目的に応じた砥石の使い分けが行われていると考えられる。

A類 大型砥石

B類 薄型砥石

1類 筋状擦痕のあるもの

2類 筋状擦痕のないもの



第19図 砥石の形態分類

⑧ 内磨砥石

砂岩製の横長剥片ないし貝殻状剥片〔小池義1986〕を素材とし、素材縁部に砥面を形成したものの。横マクリ遺跡の報告書〔桑原2008〕で詳細に検討され、分類されている。基本的にはそれに準じた分類を行う(第20図)。ただし横マクリ遺跡の「I類」(内磨砥石となり得るもので、ほぼ無加工のもの。砂岩製の貝殻状剥片)は、本遺跡において横刃形石器〔加藤2008〕との関係も考慮せねばならず、分類から除いた。

A類 素材に砥面が観察できるもの。砥面と二次加工面を共伴するものもすべて含む。さらに砥面の形成部位によって細分類を行う。

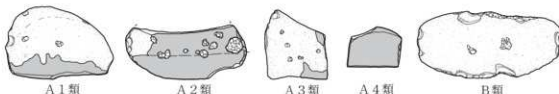
1類 素材縁部とその付近に砥面が形成されるもの

2類 素材の表裏面と縁部に砥面が形成されるもの

3類 素材表裏面のいずれかの面に砥面が形成されるもの

4類 素材のほぼ全面に砥面を持つもの

B類 素材に二次加工のみが施されており、砥面を形成しないもの。縁部や素材の打点部付近に多く見られる。打点部除去や、平坦面の形成を目的としたものと考えられる。



第20図 内磨砥石の形態分類

3) 石材の分類

岩石名の同定は、糸魚川市フォッサマグナムミュージアム竹之内 耕剛参事の御教示をもとに、肉眼及びルーペによる観察で行った。

緑色凝灰岩：緑色凝灰岩は、糸魚川市域では良質なものを認めることができず、遠隔地から搬入していると考えられる。大まかに三種類に分けることができる。濃緑色あるいは緑色で光沢のあるものを緑色凝灰岩 A、淡緑色でシルト質が強く風化が著しいものを緑色凝灰岩 B とした。また、淡緑色～黄緑色で粒子が粗く、組織が脆いものを緑色凝灰岩 C とした。緑色凝灰岩 A に対して緑色凝灰岩 B・C は比較的軟質な傾向にある。

蛇紋岩：蛇紋岩は姫川などに多く見られる石材であり、本遺跡からでも、採集に行くのは容易である。蛇紋岩の内、やや軟質で透緑閃石を含むものを蛇紋岩 A、磨製石斧に用いられる緻密で光沢のあるものを蛇紋岩 B とした。蛇紋岩 B は比較的硬質で、海岸に漂石として落ちているが、蛇紋岩 A は軟質素材のため川を下ることができない。したがって、蛇紋岩 A は露頭やその近隣まで採集に赴く必要がある。

滑石：滑石は蛇紋岩地帯に併在するため、糸魚川市域での採集が可能である。茶褐色で軟質なものを滑石 A、黒褐色で滑石 A に比べやや硬質なものを滑石 B、乳白色でシルト質が強く軟質なものを滑石 C とした。

砂岩：第 II 章 1 にて述べたように、糸魚川周辺の地質は姫川を挟んだ東西で大きく異なる。砂岩も同様であり、大きく二種類に分けられる。緻密で、黒色から白色までさまざまな色調を呈するものを砂岩 A、風化の度合いが強く、黄褐色で粗粒の砂や小粒の鉱物をまばらに含むものを砂岩 B とした。砂岩 A は新生層中の砂岩であり姫川以東から、砂岩 B は古生層中の砂岩であり姫川以西から、それぞれ産出する。

4) 石器・石製品各説

a 主要遺構出土の石器・石製品

ここでは、石器・石製品が特に多く出土した主要な遺構について詳述したい。そのほかの遺構については、次項で記述を行う。

① SIO1 (図版 63～65・119・120～527～600)

石器・石製品は 1,543 点、遺跡全体の 20% が出土した。遺構の層位は覆土最上・上・中・下層、床面直上、貼床、掘形覆土に分層できる。土器の年代観が層位によって異なることから、石器・石製品も覆土最上層～中層・覆土下層～床面直上・掘形覆土の大きく三つに分け、組成表を示した (第 4 表)。層位ごとの組成に大きな違いは認められないが、床面直上に砥石が多く見られることや、薬玉の関連資料が覆土上層に多く見られるなど、幾つの特徴が認められる。なお、個別の記載は器種ごとに行い、層位によるまともまりなどの特徴がある場合は記載中に示した。そのほかの詳細は観察表を参照されたい。

勾玉 (527) 床面直上から出土した一点のみで、蛇紋岩 B を使用している。研磨作業は完了しており、形態は端正に仕上げられている。上下端はまるく収束せず、先端を尖り気味に仕上げている。

勾玉未成品 (528～557) 石材は、ヒスイ 27 点 (45%)、滑石 A 8 点 (13%)、滑石 B 4 点 (7%)、蛇紋岩 A 18 点 (30%)、蛇紋岩 B 2 点 (3%)、緑色石英岩 1 点 (2%) である。工程別では、7 類が 5 点 (8%)、6a 類が 8 点 (13%)、6b 類が 1 点 (2%)、5 類が 22 点 (37%)、4 類が 6 点 (10%)、3 類が 8 点 (13%)、2 類が 3 点 (5%)、1 類が 7 点 (12%) である。掘形覆土～覆土最上層まで定量出土している。この中で、特にヒスイは 1～6 類までがまとまっている。1 類の原石には、557 のような母大のものが多く見られる。こ

S101 (覆土層上層～中層)

品名	調査		ナンプ		形状	写す本数	写す本数	鑑定	鑑定本数	鑑定	内装鑑定	鑑定	内装鑑定	形状	内装形状	形状	内装形状	全体		
	数	割合	数	割合															数	割合
ヒスイ	21	52%	36	83%	7	13%	12	67%										66	12%	
緑色凝灰岩A	7	14%	46	43%				0	19%									36	12%	
緑色凝灰岩B	12	29%	27	26%					7	4%								46	20%	
緑色凝灰岩C										1								1	1%	
滑石A	3	12%	6	13%			3	14%										9	25%	
滑石B	2	4%	2	6%														4	10%	
蛇紋岩A	30	22%	107	80%			8	30%		11	6%	12	32%					152	28%	
蛇紋岩B	2	14%	1	6%	1	14%	1	9%										5	10%	
蛇紋岩C	3	11%	12	7%	3	22%												17	10%	
チャート	2	24%	26	12%	20	70%												48	18%	
珪藻	1	3%	6	6%	2	14%												9	3%	
緑泥石片							1	3%										1	1%	
砂岩A											2	9%	3	6%	1	2%	1	3%	7	2%
砂岩B											9	27%	3	9%				12	5%	
灰の片																		0	0%	
凝灰岩																		0	0%	
石灰石																		0	0%	
粘土																		0	0%	
砂石																		0	0%	
ガラス																		0	0%	
合計	52	100%	143	100%	50	100%	27	100%	17	100%	1	100%	6	100%	4	100%	4	100%	127	100%

S101 (覆土下層～下層部上)

品名	調査		ナンプ		形状	写す本数	写す本数	鑑定	鑑定本数	鑑定	内装鑑定	鑑定	内装鑑定	形状	内装形状	形状	内装形状	全体		
	数	割合	数	割合															数	割合
ヒスイ	16	46%	25	32%	1	25%												41	12%	
緑色凝灰岩A	6	20%	27	43%					1	6%								34	21%	
緑色凝灰岩B	2	6%	27	43%														29	18%	
緑色凝灰岩C																		0	0%	
滑石A	4	11%	16	24%					1	3%								21	7%	
滑石B	2	12%	2	6%														4	1%	
蛇紋岩A	48	81%	160	21%			1	3%	8	6%								217	17%	
蛇紋岩B	4	10%	3	6%	1	24%			1	6%								10	8%	
蛇紋岩C																		0	0%	
チャート			11	17%	6	64%												17	6%	
珪藻			6	6%	7	9%												13	10%	
緑泥石																		0	0%	
砂岩A														1	24%	1	24%	2	4%	
砂岩B														1	24%	1	24%	2	4%	
灰の片																		0	0%	
凝灰岩																		0	0%	
石灰質																		0	0%	
粘土																		0	0%	
砂石																		0	0%	
合計	34	72%	101	31%	11	65%	1	100%	19	95%	1	100%	6	100%	2	100%	2	100%	127	100%

S101 (覆土層下)

品名	調査		ナンプ		形状	写す本数	写す本数	鑑定	鑑定本数	鑑定	内装鑑定	鑑定	内装鑑定	形状	内装形状	形状	内装形状	全体	
	数	割合	数	割合															数
ヒスイ	2	28%	29	36%	2	13%												33	11%
緑色凝灰岩A	2	13%	1	6%			1	14%										4	1%
緑色凝灰岩B			3	6%			2	6%										5	2%
緑色凝灰岩C							1	26%										1	0%
滑石A	1	6%	3	13%	2	31%												6	2%
滑石B	1	22%																1	3%
蛇紋岩A	14	33%	33	89%	1	22%												48	14%
蛇紋岩B	1	13%	1	6%														2	1%
蛇紋岩C																		0	0%
チャート			2	6%														2	6%
砂岩A																		0	0%
砂岩B																		0	0%
合計	21	77%	60	15%	7	16%	4	26%	21	100%	1	100%	1	100%	1	100%	24	100%	

S101 (覆土下)

品名	調査		ナンプ		形状	写す本数	写す本数	鑑定	鑑定本数	鑑定	内装鑑定	鑑定	内装鑑定	形状	内装形状	形状	内装形状	全体	
	数	割合	数	割合															数
ヒスイ	1	15%	26	67%														27	13%
緑色凝灰岩A			1	6%														1	0%
緑色凝灰岩B			2	6%														2	1%
緑色凝灰岩C																		0	0%
滑石A																		0	0%
滑石B																		0	0%
蛇紋岩A	32	44%	13	42%														45	21%
蛇紋岩B	3	17%																3	1%
蛇紋岩C																		0	0%
チャート																		0	0%
珪藻																		0	0%
砂岩A																		0	0%
砂岩B																		0	0%
合計	36	14%	122	4%	1	14%	1	100%	21	100%	1	100%	1	100%	1	100%	24	100%	

第4表 S101石器・石製品出土量

れらは4～7類の資料とおおむね同様の寸法を呈している。滑石や蛇紋岩は5～7類のものが主体である。形態別ではA類が12点(80%)、B類が3点(20%)である。ただし、調整段階資料の中には546などC類に類似するものもある。

管玉未成品(558～570) 石材は、緑色凝灰岩Aが6点(35%)、緑色凝灰岩Bが9点(53%)、緑色凝灰岩Cが2点(12%)である。工程別では、7類が8点(47%)、6類が1点(6%)、5類が4点(23%)、4類が2点(12%)、3類が1点(6%)、2類が1点(6%)である。勾玉と同様に研磨段階前後ものが比較的多く見られる。形態別ではA類が5点(45%)、B類が6点(55%)で、C類は見られない。覆土の上層に多く認められるが、掘形覆土からもわずかに出土している。

薬玉(571・572) 571がA類で蛇紋岩A、572がB類で滑石Bである。寸法や石材はS101内出土の薬玉未成品と対応する。

薬玉未成品(573～584) 1類が7点、2類が9点出土した。いずれも製作中に破損している。覆土の上層～下層に認められるが、特に上層に多く見られる。石材は蛇紋岩Aと滑石Bに限られる。

ガラス玉(585) 透明がかった青色のガラスを用い、整形は丁寧に行われている。内在する気泡が球状状であることから、いわゆる「引き伸ばし法」ではなく、鋳型で作られたものと考えられる。

石核 蛇紋岩Aが2点、蛇紋岩Bが1点出土した。

剥片・チップ 剥片が278点と、1cm未満のチップが1,090点出土した。平面的にも、また立面的にもSIO1のいたるところから出土している。石材ごとのまとまりはなく、大きさも多様である。蛇紋岩Aの剥片は、上層に比較的多く見られる。これは葉玉未成品にも見られたことで、蛇紋岩Aの剥片と葉玉未成品の密接な関係がうかがえる。剥片の大きさは1cm正方形から握大で、この中から葉玉素材を選択すると考えられる。チャートや鉄石英の剥片・チップは、比較的上層に多く認められるが、成品・未成品と直結したものは出土していない。

内磨砥石 (586～590) 砂岩Aが7点、砂岩Bが3点である。SIO1を中心に出土している。掘形覆土～最上層まで出土しているが、特に上層で多く認められる。586は屋内土坑から出土したもので、大型のA2類である。砥面の縁辺部は比較的厚手で、勾玉腹部の整形のみを目的としたかは疑問である。590は砂岩Bを用いたB類である。本遺跡で内磨砥石の石材は砂岩Aが多く、薄型砥石の可能性も考えられる。しかし、調整が内磨砥石製作時に見られる急角度なものであることから、内磨砥石の未成品と考えた。

砥石 (591～595) 砂岩Aが3点、砂岩Bが11点、安山岩が1点、流紋岩が1点である。内磨砥石と同様に掘形覆土～最上層まで出土している。591は建物北東隅から出土した大型のA1類である。表裏面に砥面を持ち、筋状砥面はおおよそU字状を呈している。筋の幅は、1cm前後で管玉や勾玉背部の幅とおおむね一致する。592はB1類であるが、591と同じ幅の筋状砥面を持つ。砥石は、建物の中でも北半からの出土が多い。

敲石 (596～598) 596は大型の敲石で、強い敲打作業により、大きな剝離面が生じている。597は砂岩Aを用いた敲石で、敲打により下端部分がつぶれている。敲打痕付近には摩面も認められることから、随時、磨る動きもしていたと想定される。

台石 (599) 建物の南壁付近から出土した。砂岩Aの大きな亜角礫を素材とする。中央部に敲打面と砥面を持つ。削作業と砥作業を随時繰り返していた可能性が考えられる。

軽石製研磨具 覆土上層から出土した1点のみである。砥面に筋状擦痕を有する。

珪化木 (600) 珪化木を用いた製品は見られず、利用目的は明確でない。年輪に沿って薄くスレート状に剥がれる点では、ほぼ無調整で鋭利な先端を効率的に獲得できる。したがって、石針の素材としても考えられるが、今回出土資料では言及することができない。周辺遺跡の笛吹田遺跡出土品は素材端部を使用し、内磨砥石に類似した形態を呈している¹⁾。

② SIO2 (図版66・120・121～601～615)

勾玉・勾玉未成品 (601～605) 601は蛇紋岩Bの勾玉である。腹部付近の仕上げが丁寧なため、成品とした。表裏面が平坦で平行なため、半月状の未成品から磨き上げられたことが明らかである。未成品は605を除いて5～7類である。605は、ヒスイ製の勾玉未成品4類である。剥片を小剝離で、勾玉状に成形している。

管玉未成品 (606～609) 5・6類が出土した。大きさはA類が目立つ。

葉玉未成品 (610～612) 610が滑石B、611・612は蛇紋岩Aを用いる。いずれも穿孔中に破損している。葉玉の石材が蛇紋岩Aと滑石Bに限られることは、SIO1でも認められた。

剥片・チップ 鉄石英・チャートが少ないことを除いて、各石材の割合はSIO1に近似している。

内磨砥石 (614) 砂岩Aを用いたA3類である。器体厚は薄く、先端部の砥面幅はA類の勾玉腹部幅

1) 長者ヶ原考古館で資料を実見した。

	剥片		チップ		玉石核		礫石		勾玉		勾玉未成品		管玉未成品		藁玉未成品		砥石		内磨砥石		石核		全体			
	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)			
ヒスイ	10	13									2	8.3											12	9.8		
緑色凝灰岩 A			11	1.0									3	8.6										14	9.9	
緑色凝灰岩 B	1	1.0	10	1.1									1	0.7										12	2.9	
滑石 A	1	1.2	7	0.7						1	0.7													9	3.4	
滑石 B	1	1.2	1	0.3							1	0.3			1	0.4								4	2.2	
蛇紋岩 A	10	10.9	133	44.0	1	07.4																		172	133.4	
蛇紋岩 B	2	19.5							1	0.7														3	20.2	
鉄石英	1	0.4	19	2.0																				20	2.4	
チャート			7	1.0																				7	1.0	
珪藻							2	1.9																2	1.9	
砂岩 A																									11	3.5
砂岩 B																									1	0.4
総計	26	44.1	217	51.9	1	07.4	2	1.9	1	0.7	6	10.3	4	9.3	7	2.1		286219	2	166.0	1	184.2		58974.1		
																			286219	2	166.0	1	184.2		269161.7	

第5表 SI02石器・石製品出土量

に近似している。表裏面中央部には稜を形成しており、内磨作業と背部研磨が並行したことを示す。

礫石 (615) 砂岩 A の大型の扁平礫を使用した A2 類である。砥面は平坦で、ほぼ全面をまんべんなく使用している。筋状擦痕が認められないことと、断面形が凹状にならないことから、SI01 の 591 とは違う用途が示唆される。砂岩の粒子が比較的細粒なことから、玉表面の仕上げとも考えられる。

遺構の全貌が明らかでないために判然とはしないが、SI01 と石器組成が近似することから、SI01 と同様の玉製作がなされていた可能性を指摘することができる。

③ SK34 (図版 67・121 - 643 - 649)

	剥片		チップ		玉石核		礫石		勾玉		勾玉未成品		管玉未成品		藁玉未成品		砥石		内磨砥石		石核		全体				
	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)	個 (g)				
ヒスイ	4	10.4	4	1.1	1	14.3	1	0.6																12	35.4		
緑色凝灰岩 A	12	27.1	37	6.6								2	8.2												31	116.0	
緑色凝灰岩 B	13	40.9	34	10.4	1	17.0						4	7.4												78	146.1	
緑色凝灰岩 C	1	2.2	3	0.4								1	1.3												5	3.9	
滑石 A	6	1.0																							6	1.0	
滑石 B									1	1.2	1	4.7													3	5.9	
蛇紋岩 A	18	34.2	33	7.0							1	0.3		1	0.4	2	0.8								35	42.8	
蛇紋岩 B							1	07.6																	1	067.6	
鉄石英			5	0.3																					5	0.3	
チャート			1	0.1			9	48.2																	10	48.3	
緑色石英岩	2	2.8																							2	2.8	
砂岩 A																										3	447.7
砂岩 B																				1	31.0				1	31.0	
流紋岩																					1	34.0			1	34.0	
総計	36	131.6	143	26.5	2	31.5	11	736.4	1	1.2	2	5.2	7	155.0	1	0.4	2	0.8	3	127.7	2	43.9	2	1196.1	234	3003.1	

第6表 SK34石器・石製品出土量

勾玉・勾玉未成品 (643・644) 643 は滑石 B を用いた A 類の勾玉である。全体が丹念に研磨されている。644 は滑石 B を用いた、勾玉未成品 B5 類である。ほかの未成品と比較して、素材が厚い。527 のような身の厚い形態になることが考えられる。

管玉未成品 (645 - 647) 646 や 647 のような 2 - 4 類が目立つ。ほかの遺構と比べて 5 - 7 類が見られない。

藁玉 (648) 腹部が張り出し、幅広の B 類である。

剥片・チップ ほかの遺構と大きく異なり、緑色凝灰岩の剥片・チップが多い。そのほかの石材は出土量が少ない。

礫石 (649) 表面のみ使用している。わずかだが破断面の稜上にも砥面が形成されている。断面は比較的扁平であり、擦痕も一定方向である。これは金属器を対象とした砥石の砥面に類似する。

b その他の遺構出土の石器・石製品

① 竪穴建物 (図版66・121 - 616 ~ 619)

SI03 (616 ~ 619) 槩玉未成品が3点出土した。いずれも蛇紋岩 A を使用しており、1・2類である。槩玉未成品は、寸法も石材も SI01 出土のものに近似している。616 は 4 類の管玉未成品である。

② 平地建物 (図版66・67・121 - 620 ~ 636)

SI04 (620 ~ 625) 勾玉未成品 A5 類が1点、勾玉未成品 B5 類が1点、A7 類が1点出土した。624 は小型の管玉未成品 7 類であり、穿孔時のいわゆる「当たり」痕を有する。625 は凹石である。凹部は摩滅しており、磨り潰すような動きをしていたと考えられる。砥面や敲打痕も認められることから、複合的に使用されたと想定できる。

SI05 (626 ~ 631) 勾玉と勾玉未成品 5 類がそれぞれ 1 点、管玉未成品 4 類が3点出土した。631 は砂岩 A の棒状礫を素材とした砥石である。表面下部にわずかな砥面を持つが、擦痕は認められない。630 は管玉未成品 4 類で縦長剥片を素材とする。横長剥片を剥離した石核を打面転移し、縦長剥片を剥離している。この行為が作業面の調整かは判然としないが、得られた剥片で管玉製作を行っている。

SI07 (632 ~ 634) 632 はヒスイ製の勾玉未成品 A5 類である。633 は勾玉未成品 3 類で、両極加撃で得られたヒスイ剥片を用いる。634 は緑色凝灰岩 A の剥片で、二次加工のされていないものである。調整剥離を継続すると、A 類の管玉になると想定できる。

SI10 (635 ~ 636) 635 は滑石 B を用いた勾玉未成品 A5 類である。本遺跡の 5 類資料と比較して細形であり、一連のものか断定できないが、製作の在り方と石材の傾向から勾玉未成品と位置付けた。636 は管玉未成品 A7 類である。本遺跡では希少な片面穿孔の資料である。

③ 掘立柱建物 (図版67・121 - 637 ~ 639)

SB03 (637 ~ 639) 637 は槩玉 B 類である。639 は敲石である。SI01 から出土した 596 と類似した形態であり、反復した敲打作業により大きな剥離面を形成する。638 は凝灰質流紋岩の楕円礫を用いた砥石である。側縁の稜を砥作業に使用しており、平坦な断面を呈する。これは 586 のような大型の内磨砥石 A1 類に見られる断面と類似している。

④ 土坑 (図版67・69・121 - 123 - 640 ~ 642, 650 ~ 708)

SK35 (640 ~ 642) 640 は穿孔痕が見られないため、内磨の段階で破損したと考えられる。641 は管玉未成品 C4 類である。節理により得られた剥片を大きな剥離により成形する。642 は内磨砥石 A1 類である。砥面形成時の剥離痕が目立つ。

SK15 (650) 650 は勾玉未成品 A6a 類である。内磨作業時に破損している。

SK07 (651) 651 は A5 類の管玉未成品である。横長に剥離された素材剥片を、表面と右面の両面剥離し、断面正方形に仕上げている。

SK08 (652 ~ 654) 勾玉未成品はいずれも A6a 類である。654 は管玉未成品 3 類である。比較的薄いことから、剥離や研磨が加えられると細い形態になると想定される。

SK31 (655) 655 は管玉未成品 C7 類である。わずかに穿孔した状態で作業を停止している。

SK12 (656 ~ 657) 656 は勾玉未成品 A5 類である。勾玉としては、やや縦長の形態になると想定できる。657 は管玉未成品 4 類である。小型の縦長剥片を素材とし、右側縁を急斜度に調整する。下面は単磨の剥離で成形していることから、小型だが目的とする寸法だと考えられる。

SK04 (658～662) 660は蛇紋岩Aを用いた、厚手の勾玉未成品B5類である。調整段階の剥離痕が明瞭に観察でき、単一方向からの急斜度調整と器体修正の交互調整が確認できる。661は本遺跡で唯一の成品段階の管玉である。直径からA類の管玉であったと推定できる。折損後に折損面を研磨し、小玉状に再加工している。

SK09 (663～665) 663は滑石B類を用いた勾玉未成品A6a類である。ほかの勾玉に比べて、薄手である。664はヒスイ製の勾玉未成品C5類である。半月状を呈しており、SI01で出土した勾玉未成品と同一の手法で形態を仕上げている。

SK05 (666～668) 666は管玉未成品3類である。節理面を活かして得られた大型の剥片を素材としている。主要剥離面には未発達のパルプと、対向する位置に弱いパルプがみられることから、両極剥離が行われていたことが考えられる。

SK33 (669～674) 669はヒスイを用いた石核である。円盤状に剥離した大きな剥片を、半割したものである。半割された石核の短軸方向に断ち割るように剥片を得たものと推定される。得られた剥片の大きさは664程度であり、勾玉の製作に直結する可能性が考えられる。670は管玉未成品A7類である。寸法から薬玉未成品とも考えられるが、薬玉の成品として緑色凝灰岩Bを用いたものが存在しないことと、管玉未成品の中に小型のものも目立つことから、これを管玉製作の工程品と位置付けた。

SK06 (675～681) 677はヒスイを用いた勾玉未成品3類である。素材表面に敲打痕をもつが、主要剥離面に切られている。これは敲石の機能を終えたヒスイを、転用したものと考えられる。679は管玉未成品2類である。大きく打割された剥片に、調整剥離を加えて形態を平坦に仕上げている。この調整は、細打割への円滑な移行を目的としたと考えられる。680は比較的大きな薬玉未成品1類である。剥離面を残らせていることから、作業の前段階が推定できる。微細な調整は行わず、剥離面を直接磨き出している。軟質素材は、剥離の制限が困難であることから、研磨の多用によってリスクの少ない製作を行う様相がうかがえる。681は石錘である。安山岩の円礫を素材として、敲打で器体中央に凹部を外周させる。

SK37 (682) A2類の砥石である。

SK03 (683～691) 683は蛇紋岩Bの勾玉未成品7類である。内磨作業で節理により剥落したと考えられる。684はヒスイを用いた勾玉未成品3類である。正方形に得られた剥片に、調整剥離を加えて素材全体を滑らかにしている。685は緑色凝灰岩Bの管玉未成品3類である。石核の上下から調整剥離し、作業面を平坦にした後、断面長方形の横長剥片を剥離している。686は管玉未成品3類で、縦長剥片を素材とする。作業面にも縦長の剥離面が確認できることから、縦長剥片を連続的に剥離していたと考えられる。本遺跡の縦長剥片素材は、打面や作業面の調整などで得られたものが多く、連続的に剥離された縦長剥片素材はこの一点のみである。687は鉄石英の石核である。大きく形成された剥離面を打面として、小型の剥片を剥離している。また左側面は、両極剥離で平坦に剥離している。本遺跡で鉄石英を使用した成品・未成品は、781の一点のみにしか見られず、鉄石英製品の製作が恒常的に行われたとは考えにくい。690は砂岩Aを用いた内磨砥石A4類である。全面を研磨しており断面は長方形を呈する。左右の側面は折損している。691はA2類の砥石である。砥面は擦痕と同時に光沢を帯びていることから、平坦な面で研磨作業が反復して行われたと考えられる。

SK02 (692・693) 692は管玉未成品4類である。比較的小型だが、670のような形態に仕上げられると想定される。693は内磨砥石A2類である。内磨部は細身である。表面には筋状砥面があり、勾玉の背部や頭部などの研磨作業が、随時並行して行われたと想定される。

SK19 (694・695) 695はA1類の砥石である。複数の筋状砥面を持ち、幅広、幅状の大きさが確認できる。勾玉背部の形成段階で、縦方向の研磨と横方向の研磨が行われていたことを示す。

SK49 (696～700) 699は、半透明の青色を呈する端置なガラス玉である。ほかのガラス玉に比べて孔径が大きい。半分に欠損している。700は内磨砥石A2類である。表面に2条の筋状砥面を持ち、前述の693に見られたような背部研磨に用いられたと考えられる。内磨の砥面は摩滅が激しく、既存の筋状砥面を壊している。上方の筋状砥面は新規に形成されたものと考えられる。

SK36 (701～707) 701は管玉未成品A7類である。穿孔段階で剥落したと想定される。702は鉄石英の石核である。節理により得た平坦面を打面として、剥片剥離を行う。同一の方法は、ヒスイの剥片剥離にも認められる。703はA1類、704はA3類、705はA2類の内磨砥石である。704は端部に調整剥離を持つことから、ここに内磨の砥面が形成されると考えられる。703・705は薄手の内磨砥石である。706はA1類の砥石である。筋状砥面は比較的大きく、勾玉の背部を横方向に研磨したと考えられる。707は砂岩Aの楕円礫を素材とした凹石である。礫全体が敲打されている。凹部は摩滅している。

SK46 (708) 素玉未成品1類である。

⑤溝 (図版70・123～709～722)

SD24 (709) 709はC5類の管玉未成品である。

SD30 (710～712) 711は管玉未成品3類であり、剥片剥離段階の調整剥片を素材とする。上下から石核調整を加え、山なりに成形した石核から剥取される。断面は台形状を呈する。

SD47 (713～716) 713は石英岩製の勾玉未成品4類である。不純物を含まず、透明度の高いものであり、水晶として扱われる可能性もある。しかし、本来、断面が六角柱状を呈する水晶に比べると、ややいびつな形状であるように感じられる¹⁾。硬質で半透明の石材を利用する点では、メノウと共通するといえる。715は管玉未成品C6類で、断面は五角形を呈する。716は、A1類の内磨砥石である。砥面を断ち切るように大きな剥離を加えているが、刃部再生の意図があると考えられる。

SD37 (717～720) 717は管玉未成品B7類である。素材全体を研磨し、両面穿孔しているが、製作時の擦痕や稜線を残していることから未成品とした。

SD08 (721) 721は蛇紋岩A製の勾玉未成品A7類である。

SD06 (722) 722は蛇紋岩A製の素玉未成品2類である。

⑥ビット (図版70・123～723～732)

P06 (723) 723はメノウ製の勾玉未成品3類である。両極加撃で得られた剥片を素材としている。外形はすでに勾玉の形状を呈している。本遺跡においてメノウを用いた勾玉未成品は、研磨されたものや成品が存在していないため、工程の復元が困難である。

P174 (729) 729は管玉未成品3類である。大型の剥片から角柱状の剥片を得る。最終剥離の剥片は剥離時に半割したことで、放棄されたと考えられる。

P329 (731) 731は閃緑岩製の楕円礫を用いた砥石である。表表面にわずかな擦痕を持つ。側縁にも研磨痕が形成されている。いずれの研磨痕も平滑である。金属の研磨を目的としていたと考えられる。

P368(732) 円磨した凹部と敲打痕・砥痕を複合的にもつ。SI04で出土した625と同様の形態である。

P424 (724) 勾玉未成品4類である。やや大ぶりだが剥離により勾玉の形状を作り出している。

1) 竹之内 耕氏から御教示をいただいた。

⑦旧河川 (図版71・123 - 733 - 763)

S004 (733 ~ 763) 736 は蛇紋岩 A の勾玉未成品 A5 類である。この未成品は平面形が半月状でなく、長方形を呈する。これは軟質素材である蛇紋岩 A 特有のものといえる。剥離による成形が困難なため、この段階を経て、半月状に改めて仕上げる工程が想定できる。738・739 はヒスイの石核である。大ぶりなヒスイの剥片を素材とする。剥離面の稜上には敲打痕があり、稜をつぶす意図が想定される。740 ~ 744 は管玉未成品 7 類である。いずれも両面穿孔されている。741 は角玉状に仕上げられている。6 類の段階で 715 や 745 のように研磨で四角柱状に仕上げる例もある。その状況から 6・7 類の形状は、常に四角柱状あるいは多角柱状のいずれか一方に限定されていたのではなく、前段階の形状で流動的に選択していると考えられる。746 は両極剥離で連続的に剥離されたものである。748 は管玉未成品 4 類のやや太めの形態であるが、この形状から剥離により成形していくと考えられる。752 ~ 754 は薬玉未成品 2 類である。いずれも穿孔中に破損しており、破損面には両面穿孔が認められる。751 は形状が成品に近似することから、最終研磨の際に破損したことが考えられる。755 は薬玉未成品 1 類である。751 や 752 とほぼ同じ大きさである。756 ~ 759 は滑石製の白玉である。器体中央に稜を形成するような研磨が施され、断面は六角形を呈することから、比較的古い段階の白玉と位置付けることができる。760 は製作中の剥離面が除去されていない、白玉の未成品である。761 は埋木を用いた薬玉未成品 2 類である。本遺跡出土の薬玉と比較して胴長の形態を呈し、一連の製作工程のものかは疑問である。出土位置が河川上であることから、後世に自然的要因で流入した可能性が考えられる。埋木製のものは、六反田南遺跡で古墳時代後期の石製品に伴って一点出土している [水落 2010]。763 は横刃状石器である。下端部に鈍角な調整を施す。部分的に両面になるが基本的には片面調整である。磨減などの使用痕は見られない。

c 包含層出土の石器・石製品

Ⅲa・Ⅲb・Ⅳa 層と層位を三層に分けることができる。いずれの層においても石器組成に大きな違いはない。個別記載は器種ごとに行い、層位のまとまりなどの特徴がある場合は記載中に示した。そのほかの詳細は観察表を参照されたい。なお、出土位置の分布が遺構とほぼ重なることから、ある程度遺構との関連性を想定できる。また、未調査部分である県道下の状況が明らかでなく、堆積の連続性などが判然としないため、2 区と 3 区は分けて記述する。ただし、3 区の一部 (18 ~ 19 グリッド) ではⅢ b 層に相当する層位が確認されており、この範囲内で出土したものについては、2 区のⅢ b 層に含めて記載を行った。

① 2 区 (図版 71 ~ 75・124 ~ 126 - 764 ~ 840)

勾玉・勾玉未成品 (764 ~ 779) 勾玉や勾玉未成品は S101 付近に多く見られる。出土層位ではⅣa 層に比べて、Ⅲ b 層に多く見られる。

管玉未成品 (780 ~ 816) 管玉や管玉未成品は S101 から見て東側に多く分布する。出土層位ではⅢ b 層に比べて、Ⅳa 層に多く見られる。素材となる剥片は横長のものが多い。縦長剥片は 806 や 808、811 のような剥片剥離時の調整剥片が多く認められる。781 は鉄石英製の管玉未成品 7 類である。穿孔時の当たりをつけた段階で作業を停止している。直径は 4mm 程で、細形の管玉に相当する。鉄石英は原石・石核が多く出土しているもの、成品や未成品はこれ以外に見られず、本遺跡で製作されたものとは考えにくい。鉄石英製の細形管玉は、弥生時代中期を中心に多く見られることから、本例も弥生時代の所産である可能性を指摘することができる。

2 古墳時代の遺物

SI00

	調片		ナップ		原石		写本床品		写本床品		砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
ヒスイ		11	22											
母貝類(古)	7	0.7	7	22.7	1	1.10								15.74
母貝類(古)	3	1.4	25	3.9										28.43
滑石	1	8.2												8.2
軟状石 A	20	42.4	30	5.4			4	2.2						67.50
軟状石 B				1.03										1.03
砥石 英				2.02										2.02
チャート	1	0.4	2	0.2										2.06
砂石 A									1	30				11,300
総計	32	53.1	88	34.2	1	1.10	4	2.2		1	30			126,133

SI01

	調片		ナップ		原石		写本床品		写本床品		砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
ヒスイ	1	2.4	8	1.4	2	4.32								11.76
母貝類(古)			4	0.5										4.05
母貝類(古)			3	0.3					1	0.3				4.06
滑石 A			2	0.6					1	0.5				3.11
滑石 B			1	0.8					1	3.8				2.34
軟状石 A	6	17.8	30	6.5										49.25
軟状石 B									1	1.8				1.18
砥石 英			2	0.2										2.02
チャート						1	6.8							1.66
馬廐			2	0.7										2.07
砂石 A														14458
砂石 B														14455
総計	7	19.2	35	16.6	3	20.1	4	6.2	1	0.3				14452

SI05

	調片		ナップ		原石		写本床品		写本床品		砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
ヒスイ			2	0.5										6.15
母貝類(古)			9	1.2							2	8.1		11.98
母貝類(古)			2	1.2										2.14
滑石 A			1	0.2					1	0.5				2.07
滑石 B											1	3.0		2.30
軟状石 A	1	18.0	18	2.3										19.203
軟状石 B			2	0.2										2.02
チャート						1	10.2							1.02
馬廐			1	0.1										1.01
砂石 A														12128
砂石 B														12128
総計	1	18.0	38	5.2	1	10.2	1	0.5	2	1.7	2	8.1		22,842

SI07

	調片		ナップ		原石		写本床品		写本床品		砥石		内磨砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
ヒスイ			3	0.4												7.85
母貝類(古)			2	0.3					2	0.9						4.35
母貝類(古)			2	0.9	14	1.9										17.47
母貝類(古)			9	4.8	11	1.5										20.03
軟状石 A																1.24
チャート						1	12.4									2.963
砂石 A																11.05
砂石 B																21.265
砥石																11.05
総計	14	66.3	38	4.7	1	12.4	2	0.9	2	7.1	2	8.1				52,157

SI03

	調片		ナップ		原石		写本床品		写本床品		砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
母貝類(古)			1	0.1										0.1
軟状石 A														1.03
馬廐						1	0.3							1.03
砂石 A														1,000
砂石 B														1,864
総計			1	0.1		1	0.3							1,864
														1,864

SI02

	調片		ナップ		写本床品		写本床品		内磨砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
ヒスイ			3	0.3								31.03
母貝類(古)			1	0.1								1.01
母貝類(古)											1	0.8
母貝類(古)												1.01
滑石 B	2	1.0										2.14
軟状石 A	2	10.1	28	2.5	1	0.8						31.42
チャート			1	0.8	1	0.1						2.09
馬廐												2.02
砂石 A			1	3.8	2	0.2						2.02
砂石 B												1.670
砂石 C												1.670
総計	7	28.7	37	4.4	1	0.8	1	0.1				1.670

SI03

	調片		ナップ		原石		写本床品		写本床品		写本床品		砥石		内磨砥石		全体	
	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)	個	量 (g)
ヒスイ			1	0.5														10.51
母貝類(古)			3	1.1	18	2.1												2.16
母貝類(古)			5	6.2	2	0.2												8.34
母貝類(古)																		1.01
滑石 A			1	0.4	3	0.9												4.18
滑石 B																		1.11
軟状石 A	20	31.2	36	7.8														17.57
軟状石 B																		9.19
砥石 英			19	5.3	30	1.8	2	8.4										91.983
チャート			1	0.7	4	0.9												8.201
馬廐																		1.33
砂石 A																		2,170
砂石 B																		2,432
総計	61	133.1	101	27.8	4	6.1	3	17.1	2	4.1	2							1,840
																		1,840

第7表 各遺構石器・石製品出土量 (1)

内磨砥石 (829～833) 層位ごとには、ほぼ同量出土している。829はA1類である。本遺跡の内磨砥石は、砂岩Aを主に用いるが、これは安山岩製である。砥面は狭小であり、擦切具に類似する。ただし、ヒスイ剥片や管玉未成品に擦切りを用いた痕跡はなく、これが擦切具であるとは断定できない。ここでは内磨砥石のバリエーションとして考えたい。833は打点を除去する剥離調整や、砥面形成の敲打痕をもつことから、内磨砥石の製作段階と考えられる。

砥石 (834～837) 出土層位では比較的Va層に多く見られる。834はA2類である。剥離面が目立ち、新規に砥面を形成していると考えられる。835はB2類である。表裏面に砥面をもち、表面下方には筋状砥面をわずかに持つ。筋状砥面は半弧状を呈し、幅広であるため、勾玉背部などを横位に研磨したと想定できる。836はB2類である。剥片の打点部付近を剥離により除去し、周縁を剥離調整で整形する。表面と右側面に砥面を形成する。

敲石 (838) ヒスイ製のものは本遺跡では一点のみの出土である。上下端に敲打痕をもつ。

加工痕のある剥片 (839) 珪質頁岩を用いる。これと同一の母岩は本遺跡では認められない。左側縁は両面加工で浅角度の剥離を加え、縁辺を鋭利に仕上げている。平面形は三角形を呈する。

② 3区 (図版75・76・126～841～876)

ここでは3区のV層(2区のVa層に対応する)から出土した遺物を記載する。

勾玉・勾玉未成品 (841～846) 846は蛇紋岩Bの勾玉未成品である。剥離成形の後、やや胴回りか膨らむように研磨されている。

管玉未成品 (847～852) 横長剥片を素材とする。852は管玉未成品1類の資料である。小さな剥片を無調整で獲得しているが、管玉製作に有効な剥片を得られていない。素材は比較的平坦な板状であり、打削する過程に移行すると考えられる。

藁玉・藁玉未成品 (853～861) 3区では、まばらに出土する。いずれも2区から出土するものに特徴が類似する。

滑石製品 (862～863) 862は白玉の未成品である。周縁は折取により成形され、両面穿孔を施す。SD04から出土したものと形態が類似している。863は板状に仕上げた滑石の下方を、先端にかけて尖頭状に研磨する。いわゆる剣形に類似した形態であるが、穿孔されていないことと、研磨が十分でないことから未成品と考えられる。

剥片・チップ 2区に比べて、いずれの資料も少ない。特に緑色凝灰岩はほとんど見られない。

内磨砥石 (864～865) 864はA4類、865はA2類でいずれも小型の内磨砥石である。864は表裏面に礫面を持つことから、小型扁平礫素材と考えられる。

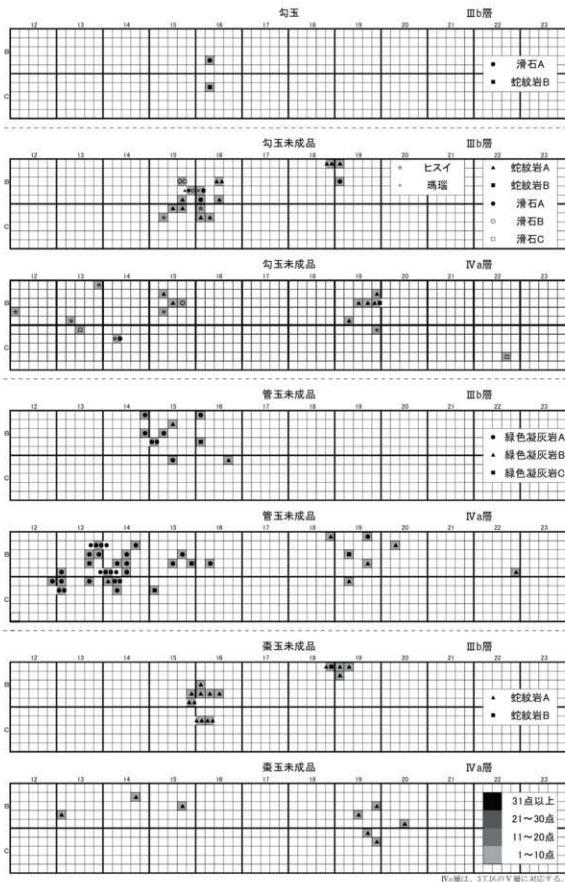
砥石 (866～869) 867は内磨砥石2類、特に586のような大型なものに近似するが、厚手の礫素材であることを加味すると、638のような形態の大型化したものと考えられる。

軽石製研磨具 (870～871) いずれも、面的な使用痕が認められる。

磨石類 (872) 楕円扁平な安山岩礫を素材として、表裏面に磨痕と凹痕をもつ。また上端には敲打痕をもつことから、複合的に使用された磨石と考えられる。本遺跡出土のものでは唯一の磨石である。

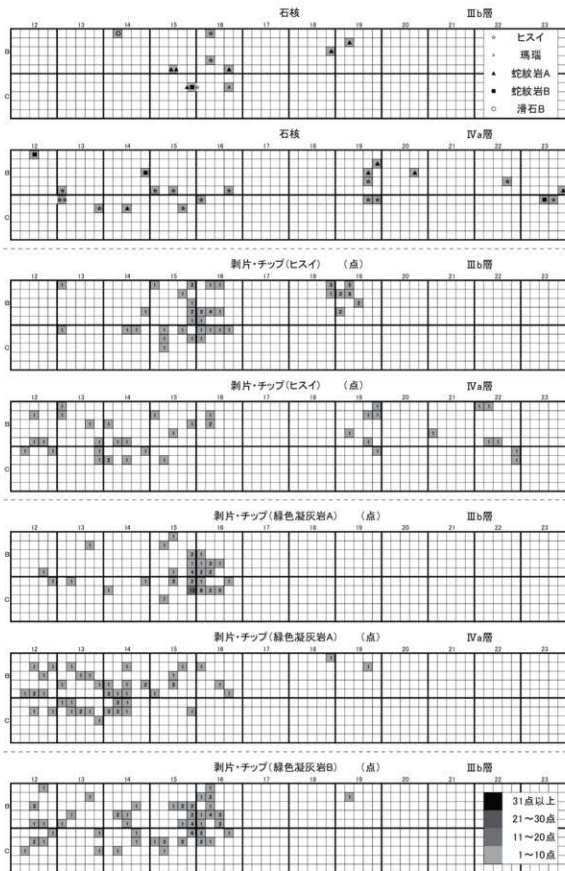
横刃形石器 (873～874) 874は黒色で緻密な砂岩Aの貝殻状剥片を素材として、下端部に連続した鋭角な剥離痕をもつものである。873は茶褐色でやや緻密な砂岩Aの貝殻状剥片を素材とする。

石錘 (875～876) 875は流紋岩の扁平礫を素材とし、両側縁とも両面調整により袂部を作り出す。876は砂岩Aの楕円礫を素材として、敲打により凹状の袂部を作り出す。

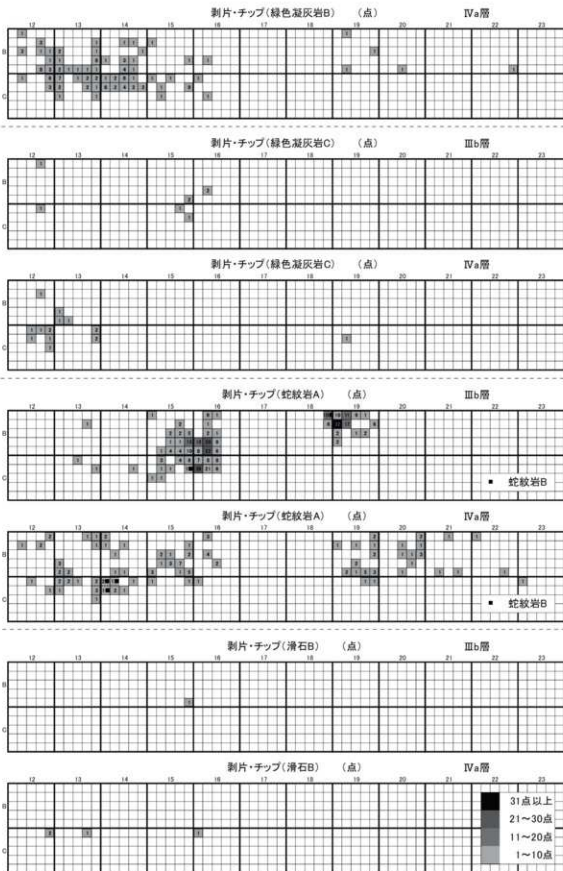


第21図 包含層出土石器・石製品分布図(1)

2 古墳時代の遺物

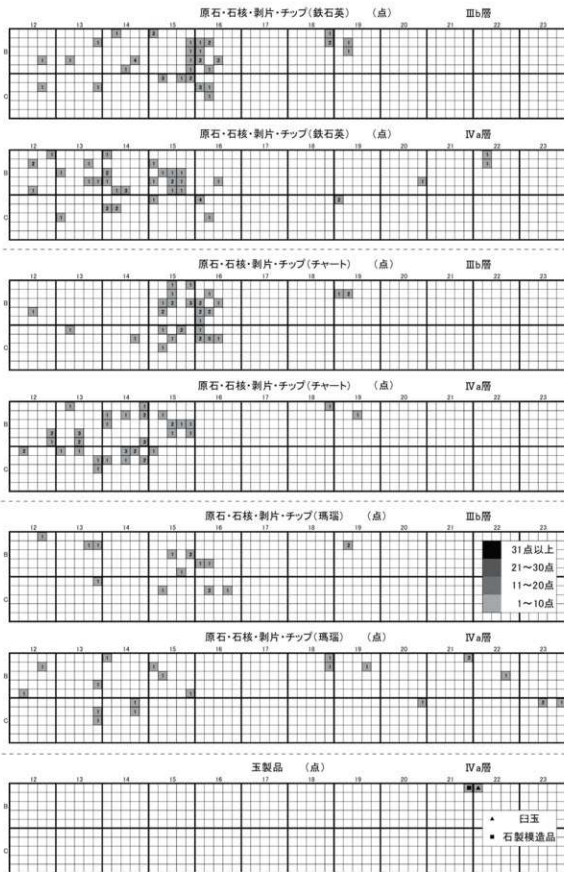


第22図 包含層出土石器・石製品分布図(2)



第23図 包含層出土石器・石製品分布図(3)

2 古墳時代の遺物



第24図 包含層出土石器・石製品分布図(4)

E 木器・木製品 (図版 77・127 - 877・880・882・883・891)

木器・木製品は3区を中心に多数出土しているが、古墳時代の所産と断定できるものは少ない。

891はSI01の覆土最上層から出土している。用途は不明だが、小口的一方が斜めの面を有しており、この部分を用いて作業を行う道具の一種と見られる。手に持って作業を行うには程良い大きさであり、木砥等の用途で玉作に用いたか、あるいは土器製作時のハケメの原体としての機能等が推測できる。877は柱材等の建築部材と見られる。一方の端部にはほかの部材との接合痕と見られる窪みが2か所で認められる。樹種は針葉樹のスギで、年代測定の結果では3世紀前半～4世紀前半の年代が得られている(第Ⅵ章参照)。ただし、外表皮は残っておらず、伐採年や実際に使用された年代はこれより後になることから、注意が必要である。880は柱根の残骸である。P431の底面から出土した。今回の調査で、唯一腐蝕し切らずに残存していた柱根の一部である。残存部の先端は鋭く尖っているが、腐蝕の結果と見られる。882は田下駄である。3区のV層下方から出土している。一部が欠損しているものの、大型で2か所の穿孔部が認められる。883も、同じく3区のV層から出土した、板状の木製品である。882に比べると一回り小振り、穿孔等は認められないが、先端が「ハ」の字に整えられている。

3 そのほかの時代の遺物

A 土 器

1) 弥生時代の土器

弥生土器集中遺構 (図版 58・116 - 450 - 453)

450は壺である。口縁部から底部まで復元できた。口縁部には5本の擬凹線が施され、頸部には対になる2か所に穿孔が認められる。外面及び口縁部内面は赤彩される。451は壺の口縁部である。外反しながら大きく上方へ伸び、端部は緩やかな面を有する。452は、器種がはっきりとしないが高杯の脚部、あるいは壺の肩部の可能性を指摘できる。内面の調整は粗く、高杯の杯部にはならないものと判断した。全体的に内湾しており、中位には断面台形状の突帯が一周している。453は高杯の杯部である。上段は外方に向かって大きく伸びる。これらはいずれも弥生時代後期、法仏式の土器と判断できる。

P435 (図版 58・116 - 440)

壺が出土している。440の口縁端部は付加状を呈する。頸が細く、弥生時代後期の所産と判断した。

3区包含層 (図版 60・61・117 - 477 - 479・481・484)

477は有段口縁を呈する甕である。口縁部と胴部下半で直接接合しないが、胎土の様相及び出土位置から同一個体と判断した。口縁部には凹線が施され、底部は大きな平底を呈する。479は受口状の甕である。肩部には連続する櫛溝の刺突文が施される。481は壺である。口縁部は受口状を呈する。底部は大きな平底で、輪台技法により中央部が窪む。484は器台の脚柱状部である。中空の円筒状で、ほぼ一直線に立ち上がる。これらの土器は、いずれも弥生時代後期、法仏式～月影式の範疇に取まると判断できる。

2) 古代以降の土器 (図版 61・62・118 - 498・500 - 514)

498は、器種が定かではないが土師器の底部である。回転系切り痕が明瞭である。500は須恵器の輪と見られる。口縁部は内湾して立ち上がる。498・500は奈良・平安時代の所産であろう。501は珠洲焼の甕

口縁部である。502～505は、珠洒焼の片口鉢である。502・504は口縁部内面上端に櫛目波状文が施される。502の卸し目は11目、505は8目で一つの単位を形成する。505の底部には静止切り痕が認められる。503は片口部である。これらは、吉岡編年のV期〔吉岡1994〕におおむね位置付けられよう。506～508は、青磁である。506は碗の小片で、稿進弁文が施される。507も碗だが、外面に文様は認められない。青磁片については、13世紀中頃～14世紀前半にかけての中国龍泉窯系と判断できる。509は、かわらけの底部である。回転切り痕が認められる。510・511は越中瀬戸焼である。510は丸碗で、内面には漆状の物質が付着している。511は皿の底部で、高台は削り出されている。512～514は、唐津焼の皿である。いずれも見込みに胎土目が数か所確認できる。513と514は法量もほぼ等しく、セット関係を有していた可能性もある。これらはいずれも16世紀末～17世紀初頭、あるいは前葉頃の所産と判断できる。

B 木器・木製品 (図版77・78・127・128 - 878・879・881・884～890・892～927)

木器・木製品は、3区の低地部を中心に多数出土した。最も多く出土したのは先端を加工した杭類で、次いで農具類や用途不明の木製品も多数出土している。木器・木製品類の一部は年代測定を行っているが、外表皮に近い部材を使用したものは限られており、伐採年或使用年代が明らかなものは少ない。ただし、ここでは出土層位等も参考にして、およその製作・使用年代を推定し、記述する。また、杭類についてはどの時代・層位から打ち込まれたかが明確でないことから、ここで一括して記載するが、古墳時代のものが含まれる可能性もあることを断っておく。

1) 農具ほか (878・879・881・884～890・892～900)

881は柄振である。上端と歯の一部分を欠く。樹種はスギで、木取は椴目である。年代測定の結果、9世紀後半～10世紀後半頃の年代が得られた(第VI章参照)。出土層位は3区のガツボ層で、ガツボ形成年代の日安となる。885は農具の柄と見られる。両端を欠損しているため本来の長さは明らかでないが、断面は円形に整えられている。3区V層の下方から出土している。884は下駄である。小型で、子供用と見られる。一方の歯の部分に剥落している。3区IIb層から出土しており、中世の所産と見られる。886は、櫛状の不明木製品である。3区のガツボ上層から出土している。樹種はスギで、板目材である。柄と見られる部分には、端部に数か所、付け根に1か所、それぞれ小さな穴が開けられている。878・879・887・889・890は、いずれも3区のV層中から出土した、用途不明の木製品である。878は杭状の木製品である。本体には長方形の穴が開けられていたと見られるが、一辺の側面が剥落している。一方の先端は削り出しによって鋭利に突っており、もう一方の端部には敲打痕が認められる。879は、片側側面のみ凸凹に加工されているが、その間隔や幅に規則性は認められない。887は、取っ手状の木製品である。中央に長方形の大きな穴が開けられている。889は、両小口付近にそれぞれ半円形の窪みが認められるが、当初円形に開けられた穴が後に破損・剥落したものと見られる。一方の窪みには、何かを巻き付けていたような痕跡が認められる。890は、中央付近に方形の抉りが施されるが、当初は四角形の穴であった可能性も指摘できる。888は、3区のVI層から出土している。中央部分に小さな四角形の穴が開けられており、表裏面・側面の角付近はそれぞれ緩やかな窪みを有する。892～895は、いわゆる箸状木製品である。断面は台形～長方形を呈し、長さはおおむね15～20cm前後である。いずれもガツボ層中から出土しており、古代以降の所産と見られる。896は先端が炭化しており、付け木と判断される。ガツボ層からの出土である。897は、曲物の底板である。樹種はスギで、木取は椴目である。3区のV層下方から出土した。半分以上



















が欠損している。側面及び表面に、数個の木釘穴が認められる。898は蓋板とみられる板の一部である。中央付近に凹形の穴が削り抜かれており、一部は炭化している。穴の部分に栓をしていたものと見られるが、あるいはこの板自体が蓋に取り付けられて取手の役割を果たしていたのかもしれない。899-900は、いずれも3区のⅡb層中から出土した。899は一見すると刀子状の木製品であるが、刃に相当する部分に貫通・非貫通の穴がそれぞれ1か所ずつ穿たれており、用途は不明である。900は栓である。ほぼ完形で、断面は凹形に仕上げられている。

2) 杭・杭状木製品 (901～927)

3区の低地部を中心に、多数の杭・杭状木製品が出土した。これらの木製品類は、その規模や形状から幾つかのタイプに分類することができる(第26図)。ここでは、その内の主要なものを図化・報告する。

杭・杭状木製品の内、912と914は1区のⅢ～Ⅳ層中から近接して出土した。912は板状の杭状木製品Ⅰ-B2類で、先端部分の側面が削られて尖る。914は棒状の杭Ⅰ-A2類で、やはり先端が削られて細く収束している。いずれも用途は明らかではないが、1区のⅢ層は古代の土師器小片を包含していることから、古代以降の所産と判断できる。齋申としての用途も想定可能である。

そのほかの杭状木製品は、すべて3区内から出土している。この内、905を除いたすべてが自然地形の高まり沿いの、低地部周辺から出土している。901～904は、第Ⅳ章4Bでも述べたように木橋、あるいは栈橋の橋脚の可能性のある杭Ⅰ-C2類である。樹種はいずれもスギで、ミカン割等の分割がなされている。先端は大きく削られ、鋭く尖る。年代測定の結果、901は2世紀前半～3世紀中頃の年代が得られている(第Ⅵ章参照)。901は外表皮付近まで遺存していることから、伐採年代や使用年代もそれほど遠くないものと想定できる。自然地形の高まりからは、弥生土器も集中して出土していることから、弥生時代には既に周辺の土地利用がなされていたものと理解できる。906は大型の杭Ⅰ-A3類である。下端は明瞭な加工痕というよりも、木目に沿った剥離によって尖っている。907は角柱状の杭Ⅱ-A2類で、折れて細くなった先端が地面に突き刺さった状態で出土した。908～911は、呪符木筒状の杭Ⅰ-B2類である。先端は丁寧に加工され、鋭く尖っている。908と910は近接して出土しており、作りもよく似ることから、同時期の所産と判断できる。908は年代測定の結果、5世紀前半～6世紀前半の年代が得られたが(第Ⅵ章参照)、その形状等から判断して、実際に使用されたのは古代以降と推測される。913は909や908等とよく似るが、一回り小型で薄く、荷札木筒状を呈する。918はさらに小型の杭Ⅰ-B3類で、実際の杭

	先端が加工されるもの(Ⅰ類)				先端が加工されないもの(Ⅱ類)			
棒状 (A類)	 (断面円～楕円形)	 (断面方形)	 (断面長方形)	 (断面三角形)	 (断面円～楕円形)	 (断面方形)	 (断面長方形)	 (断面三角形)
板状 (B類)	 (幅広)	 (細長)	 (小型)		 (幅広)	 (細長)	 (小型)	
柱状 (C類)	 (断面円形)	 (分類)			 (断面円形)	 (分類)		

※「柱状」は、幅10cm以上、厚さ5cm以上のものを指す。

第26図 杭の形態分類

としての役割は想定しづらい。915は、断面が長方形を呈する杭Ⅰ-A3類である。先端は刃物で加工されており、尖っている。916は断面が円形を呈する杭Ⅰ-A1類である。両端が折れており、折れて尖った部分が地面に突き刺さっていた。当初は農具の柄として用いられたものかもしれない。917は、断面が三角形の杭Ⅰ-A4類である。端部は加工され、鋭く尖る。920は、幅が広く薄い板状の杭Ⅰ-B1類である。端部側面が大きく削り取られ、先端に向かって収束する。矢板状の用途も推測できる。921は、板状だがやや厚手の杭Ⅰ-B1類である。断面は台形状で、端部は加工されて尖っている。922は杭Ⅰ-A2類である。断面はいびつな四角形で、先端はやはり加工されて尖る。923は、杭Ⅰ-A3類である。端部は片方の側面のみが弧を描くように削ぎ落とされ、先端でヘラ状に収束する。924は、断面は四角形だが先端部は両側面から削り落されて尖る。925は、一方の先端が斜めにカッティ

ングされている。919は板状の杭Ⅱ-B1類である。やや幅の広い板状を呈し、厚みもほぼ一定であるが、片方の端部が折れており、本来の長さ等は明らかでない。926は杭Ⅱ-B2類である。平面形が細長い長方形で、先端部は尖らず、厚さも均一である。927は、断面が隅丸長方形で、両端が尖らない杭Ⅱ-A3類である。農具の柄としてはやや太いことから、建築部材であった可能性も指摘できる。

C 金属製品・銭貨 (図版62・118 - 515 - 526)

本遺跡では金属製品の出土が極めて少なく、古墳時代の所産と断定できるものは出土していない。出土した金属器は近世以降のものが多く、ここでは煙管を2点図化したに留まる。525は煙管の雁首である。裝飾等は認められない。526は、煙管の吸口で、線刻による裝飾が施されている。銭貨は、いずれも包含層中からの出土である。大半は近世の寛永通寶であるが、中国の北宋銭も数点認められる。515は「聖宋元寶」で、1101年初鑄の北宋銭である。516は、「寶」以外の読解が困難である。517は真書体の「泉宋通寶」である。初鑄年は1039年である。518は行書体の「元豊通寶」である。1区にて、近世の寛永通寶2枚とともに出土した。519～524は「寛永通寶」である。この内、519・522・523はいわゆる「背文銭」である。1～3区の近世堆積砂層(Ⅰc～Ⅱa層)から出土している。

取の上昇No.	報告No.	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	取の上昇No.	報告No.	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
杭 8		Ⅰ A3	45.7	4.3	2.6	杭 48	Ⅰ A4	10.5	2.4	0.9	
杭 9		Ⅱ A2	42.6	2.0	1.9	杭 49	Ⅰ B2	13.4	2.3	0.6	
杭 10		Ⅱ A1	7.0	2.4	1.5	杭 50	Ⅰ B2	19.8	2.1	0.6	
杭 11		Ⅱ B2	56.8	6.2	1.7	杭 51	Ⅰ B2	25.6	3.3	0.7	
杭 12		Ⅱ A1	11.5	2.8	1.2	杭 52	Ⅱ A2	27.2	1.9	1.6	
杭 13		Ⅰ B2	14.2	2.1	1.1	杭 53-1	901 Ⅰ C2	72.0	15.2	9.5	
杭 14		Ⅰ B2	14.7	3.2	1.0	杭 53-2	902 Ⅰ C2	73.9	14.0	9.9	
杭 15	922	Ⅰ A2	23.9	2.9	2.7	杭 54	Ⅰ B2	10.7	4.1	0.9	
杭 16		Ⅰ B2	16.6	4.0	0.4	杭 55	Ⅱ B1	10.4	7.2	0.7	
杭 17		Ⅱ B2	13.2	2.8	1.0	杭 56	Ⅰ B2	6.9	1.3	0.35	
杭 18		Ⅱ B2	20.5	5.7	0.9	杭 57	920 Ⅰ B1	31.75	11.6	1.6	
杭 19		Ⅱ B1	25.1	5.6	1.7	杭 58	Ⅱ B2	12.7	1.6	0.6	
杭 20		Ⅱ B2	17.8	3.5	0.5	杭 59	Ⅱ B2	9.7	3.2	0.3	
杭 21	919	Ⅱ B1	14.0	6.6	1.1	杭 60	Ⅱ B3	8.5	2.6	0.4	
杭 22	907	Ⅱ A2	52.8	2.35	2.2	杭 61	Ⅱ B2	6.2	2.9	0.4	
杭 23		Ⅱ B2	15.6	4.5	0.7	杭 62	909 Ⅰ B2	22.9	4.85	1.15	
杭 24		Ⅱ B3	9.0	1.8	0.7	杭 63	921 Ⅰ A3	25.3	2.9	2.1	
杭 25		Ⅱ A3	21.9	3.0	1.4	杭 64	926 Ⅱ B2	30.06	3.9	1.1	
杭 26		Ⅰ A3	11.1	1.8	0.9	杭 65	906 Ⅰ A3	68.2	7.4	4.7	
杭 27		Ⅰ B2	14.5	1.6	0.9	杭 66	Ⅱ A4	42.5	6.7	6.4	
杭 28		Ⅱ B3	9.5	3.0	0.6	杭 67	Ⅱ B3	7.9	2.5	0.6	
杭 29		Ⅱ B2	10.3	2.5	0.8	杭 68	916 Ⅰ A1	39.2	3.2	3.1	
杭 30		Ⅱ A1	12.0	3.2	1.9	杭 69	Ⅱ B1	24.4	6.6	1.3	
杭 31		Ⅱ A1	12.4	2.6	1.75	杭 70	921 Ⅱ B1	26.0	7.6	2.85	
杭 32		Ⅰ B2	25.9	2.7	0.95	杭 71	915 Ⅰ A3	35.2	5.8	3.45	
杭 33		Ⅱ B2	30.8	9.3	2.3	杭 72	917 Ⅰ A4	49.0	6.1	3.1	
杭 34		Ⅰ A1	42.1	4.0	3.2	杭 73	Ⅱ A3	20.6	4.3	1.9	
杭 35		Ⅱ B2	25.5	3.5	1.1	杭 74	905 Ⅰ C1	13.7	10.3	9.2	
杭 36	925	Ⅰ A2	29.4	2.35	1.9	杭 75	Ⅱ A4	25.7	3.5	1.8	
杭 37	918	Ⅰ B3	8.4	1.7	0.95	杭 76	904 Ⅰ C2	20.5	11.9	7.8	
杭 38		Ⅰ A2	20.9	1.8	1.7	杭 77	Ⅰ B1	11.0	5.1	0.4	
杭 39	910	Ⅰ B2	22.3	5.2	1.6	杭 79	923 Ⅰ A3	18.15	1.95	1.6	
杭 40	908	Ⅰ B2	32.9	4.9	2.0	杭 80	Ⅱ B2	11.6	3.0	1.0	
杭 41		Ⅱ B3	9.0	1.5	0.4	杭 81	Ⅱ B2	13.1	3.2	0.6	
杭 42		Ⅱ B2	14.2	2.1	0.4	杭 82	Ⅱ A2	25.7	3.2	1.7	
杭 43		Ⅰ B2	11.4	2.2	0.9	杭 83	Ⅰ A4	21.4	5.5	2.6	
杭 44	903	Ⅰ C2	52.3	15.9	9.8	杭 84	Ⅱ A3	18.2	3.5	2.3	
杭 45		Ⅱ B3	6.8	3.2	0.7	杭 85	927 Ⅱ B3	20.9	4.1	3.2	
杭 46		Ⅱ B2	21.9	5.0	0.8	杭 86	911 Ⅰ C2	15.9	4.2	2.3	
杭 47		Ⅰ A3	21.7	1.7	1.1						

第11表 3区出土杭の分類・法量一覧

※杭1～7・78は欠番

第Ⅵ章 自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

新潟県糸魚川市南押上に所在する南押上遺跡は、海川河口域の左岸に位置する。本遺跡周辺は、[鈴木1983]によれば、海川低地に分類されており、海川河口域には三角州が発達し、海岸沿いには砂丘の形成が認められる。本遺跡の発掘調査では、古墳時代前期の竪穴建物や平地建物、土坑等が検出されており、出土遺物等から当該期の玉作に関連する集落であることが推定されている。

本報告では、南押上遺跡から検出された遺構・遺物及び堆積層の年代、古環境（古植生、堆積環境）の変遷及び植物利用、茅床の構築材等に利用された粘土の由来の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

2 遺構・遺物及び堆積層の年代観

A 試料

1) 遺構・遺物

試料は、竪穴建物や土坑から採取された土壌及び炭化物4点（SI01-1次炉底面炭（No.27）、SI01-2次炉底面炭（No.28）、SI01-2次炉最上層炭（No.29）、SK36下層炭化物（No.30））と、3区から出土した木製品4点（杭（橋脚状）（901）（No.33 3B区 22C1 VI層 No.53-I（左側））、梶竹木簡状杭（908）（No.36 3C区 22B24 VI層 No.40）、柱材？（877）（No.38 3C区 22C5-22B25 V上層 No.1）、柄振（881）（No.39 3区 19C 北側開渠上 ガツボ層））である。

SI01-1・2次炉試料（No.27～29）は、いずれも黒色泥質土からなり、肉眼観察では大型の炭化材・炭化物は認められなかった。そのため、SI01-1次炉底面炭（No.27）の土壌200cc、2次炉の底面炭（No.28）の土壌100cc、同最上層炭（No.29）の土壌40ccを対象に水洗選別を行い、炭化物等の回収を行っている。SK36下層炭化物（No.30）は、土壌ごと取り上げられた炭化物NaI（長さ約11cm、幅約3cm）の年輪外側部分から試料を採取している。なお、分析対象とした炭化物のうち、水洗選別で2～3mm角以上の炭化物が複数回収されたSI01-2次炉の底面炭（No.28）と、同一試料から炭化物の分割が可能であったSK36下層炭化物（No.30）については、試料の由来に関わる情報を得るため樹種（炭化物）同定を行う。

一方、木製品4点は、後述する樹種同定の結果、すべて針葉樹のスギに同定されている（第20表）。分析試料は、木製品の木取観察時に確認された最も外側の年輪2～3年分を対象とし、それぞれ採取している。

2) 堆積層

試料は、3区低地炭層（Ⅷ層）（No.20）として採取された土壌（暗灰色粘土）中に観察された厚さ0.5mm程度の板状を呈する炭化物である。

B 分析方法

試料に土壌や根等の目的物と異なるものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等で物

理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による有機酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl でアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差（One Sigma: 68%）に相当する年代である。放射性炭素年代は、 $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いて同位体効果の補正を行った値（補正值）と、補正前の値を併記する。

補正年代を用いて、暦年較正を行う。暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。その際、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正結果は、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表示する。また、測定誤差 σ 、 2σ （ σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲）の値を示す。表中の相対比（確率分布）とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

C 結果及び考察

炭化物及び木製品等の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、SI01-1 次炉底面炭（No.27）が $1,820 \pm 30\text{yrBP}$ 、SI01-2 次炉底面炭（No.28）が $1,680 \pm 40\text{yrBP}$ 、SI01-2 次炉最上層炭（No.29）が $1,710 \pm 30\text{yrBP}$ 、SK36-下層炭化物（No.30）が $1,710 \pm 30\text{yrBP}$ 、杭（橋脚状）(901)（No.33 3B 区 22C1 VI 層 No.53-I（左側））が $1,810 \pm 30\text{yrBP}$ 、呪符木筒状杭（908）（No.36 3C 区 22B24 VI 層 No.40）が $1,580 \pm 30\text{yrBP}$ 、柱材？（877）（No.38 3C 区 22C5・22B25 V 上層 No.1）が $1,770 \pm 30\text{yrBP}$ 、柄振（881）（No.39 3 区 19C 北側開渠上 ガツギ層）が $1,140 \pm 30\text{yrBP}$ 、3 区 低地炭層（III 層）（No.20）が $1,960 \pm 30\text{yrBP}$ を示す（第 12 表）。

これらの補正年代に基づく暦年較正結果（ σ ）は、SI01-1 次炉底面炭（No.27）が calAD138-calAD234、SI01-2 次炉底面炭（No.28）が calAD336-calAD414、SI01-2 次炉最上層炭（No.29）が calAD259-calAD385、SK36-下層炭化物（No.30）が calAD259-calAD385、杭（橋脚状）(901)（No.33）が calAD138-calAD240、呪符木筒状杭（908）（No.36）が calAD431-calAD534、柱材？（877）（No.38）が calAD229-calAD331、柄振（881）（No.39）が calAD874-calAD971、3 区 低地炭層（III 層）（No.20）が calAD4-calAD72 である（第 13 表）。

3 古環境及びイネ属の消長

試料 No.	地区(地点)名/遺構名	種類/器種	性状	細種	補正年代 (yrBP)	$\pm 1\text{}\sigma$ (%)	測定年代 (yrBP)	測定機関 Code
27	S101-1 次が成面炭	黒色泥質土(炭化物混じり)	炭化材	広葉樹	1,820 \pm 30	-25.68 \pm 0.73	1,830 \pm 30	IAAA-82572
28	S101-2 次が成面炭	黒色泥質土(炭化物混じり)	炭化材	-	1,680 \pm 40	-32.91 \pm 0.85	1,810 \pm 30	IAAA-82573
29	S101-2 次が成面炭	黒色泥質土(炭化物混じり)	炭化材	-	1,710 \pm 30	-24.26 \pm 0.69	1,700 \pm 30	IAAA-82574
30	SK36-下層炭化物(No.1)	炭化材	炭化材	スギ	1,710 \pm 30	-28.13 \pm 0.76	1,760 \pm 30	IAAA-82575
33	3-B区 Z2C1 V層 No.53-1 (左側)	杭(橋脚状) (901)	生材	スギ	1,810 \pm 30	-24.30 \pm 0.55	1,800 \pm 30	IAAA-90182
36	3-C区 Z2B24 V層 No.40	呪符木筒状杭 (908)	生材	スギ	1,580 \pm 30	-22.18 \pm 0.62	1,540 \pm 30	IAAA-90183
38	3-C区 Z2C-5 Z2E25 V上層 No.1	柱材? (877)	生材	スギ	1,770 \pm 30	-22.75 \pm 0.58	1,730 \pm 30	IAAA-90184
39	3区 10C 北側階上ガツボ層	柄杓(881)	生材	スギ	1,140 \pm 30	-24.83 \pm 0.60	1,140 \pm 30	IAAA-90185
30	3区低地炭層(埋層)	順色粘土(炭化物混じり)	炭化物	-	1,960 \pm 30	-9.25 \pm 0.73	1,710 \pm 30	IAAA-82576

第12表 放射性炭素年代測定結果

試料名	補正年代 (暦年較正期) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	測定機関 Code
		σ	cal AD	cal AD	cal BP		
No.27 S1011 次が成面炭	1820 \pm 32	σ	cal AD 138	cal AD 160	cal BP 1,812	1,790	0.262
			cal AD 160	cal AD 197	cal BP 1,785	1,753	0.390
		2 σ	cal AD 207	cal AD 254	cal BP 1,743	1,716	0.318
			cal AD 88	cal AD 103	cal BP 1,862	1,847	0.018
No.28 S1012 次が成面炭	1678 \pm 34	σ	cal AD 122	cal AD 257	cal BP 1,838	1,693	0.949
			cal AD 298	cal AD 319	cal BP 1,632	1,631	0.033
		2 σ	cal AD 330	cal AD 414	cal BP 1,611	1,536	1.067
			cal AD 256	cal AD 304	cal BP 1,694	1,646	0.167
No.29 S1012 次が成面炭	1712 \pm 32	σ	cal AD 313	cal AD 429	cal BP 1,637	1,521	0.833
			cal AD 259	cal AD 285	cal BP 1,691	1,665	0.277
		2 σ	cal AD 287	cal AD 293	cal BP 1,663	1,657	0.045
			cal AD 320	cal AD 385	cal BP 1,628	1,565	0.678
No.30 SK36 下層炭化物No.1	1712 \pm 33	σ	cal AD 251	cal AD 465	cal BP 1,699	1,545	1.000
			cal AD 259	cal AD 285	cal BP 1,691	1,665	0.274
		2 σ	cal AD 287	cal AD 293	cal BP 1,663	1,657	0.045
			cal AD 322	cal AD 385	cal BP 1,628	1,565	0.681
No.33 杭(橋脚状) (901)	1812 \pm 32	σ	cal AD 249	cal AD 406	cal BP 1,701	1,544	1.000
			cal AD 138	cal AD 197	cal BP 1,812	1,753	0.618
		2 σ	cal AD 207	cal AD 240	cal BP 1,743	1,719	0.382
			cal AD 126	cal AD 259	cal BP 1,834	1,691	0.926
No.36 呪符木筒状杭 (908)	1581 \pm 33	σ	cal AD 284	cal AD 323	cal BP 1,696	1,627	0.074
			cal AD 431	cal AD 466	cal BP 1,519	1,484	0.385
		2 σ	cal AD 482	cal AD 534	cal BP 1,468	1,416	0.615
			cal AD 412	cal AD 352	cal BP 1,538	1,298	1.000
No.38 柱材? (877)	1768 \pm 31	σ	cal AD 229	cal AD 263	cal BP 1,721	1,687	0.407
			cal AD 277	cal AD 331	cal BP 1,673	1,619	0.593
		2 σ	cal AD 138	cal AD 199	cal BP 1,812	1,751	1.107
			cal AD 207	cal AD 348	cal BP 1,743	1,602	0.881
No.39 柄杓 (881)	1142 \pm 32	σ	cal AD 379	cal AD 377	cal BP 1,580	1,573	0.011
			cal AD 874	cal AD 907	cal BP 1,076	1,043	0.326
		2 σ	cal AD 911	cal AD 971	cal BP 1,039	979	0.674
			cal AD 781	cal AD 790	cal BP 1,169	1,160	0.029
No.20 3区低地炭層(埋層)	1961 \pm 32	σ	cal AD 807	cal AD 981	cal BP 1,143	969	0.971
			cal AD 41	cal AD 72	cal BP 1,946	1,878	1.000
		2 σ	cal BC 40	cal AD 87	cal BP 1,990	1,863	0.657
			cal AD 104	cal AD 121	cal BP 1,846	1,829	0.043

第13表 暦年較正結果

以上の結果を参考とすると、S101-1 次は2世紀中頃～3世紀中頃、S101-2 次は4世紀中頃～5世紀前半及び3世紀中頃～4世紀後半、SK36は3世紀中頃～4世紀後半頃に相当する暦年代が推定され、S101の1・2次についてはおおむね新旧関係がうかがわれる。また、3区 低地の埋層は、今回の分析結果から1世紀頃の暦年代が推定される。一方、木製品では、杭(橋脚状) (901) (No.33) は2世紀前半～3世紀中頃、呪符木筒状杭 (908) (No.36) は5世紀前半～6世紀前半、柱材? (877) (No.38) は3世紀前半～4世紀前半、柄杓 (881) (No.39) は9世紀後半～10世紀後半頃の暦年代を示した。これらの木製品のうち、辺材に近いと思われる部位を分析対象とできた試料は杭(橋脚状) (901) (No.33) のみであることから、得られた暦年代については慎重な評価が望まれる。

3 古環境及びイネ属の消長

A 試料

試料は、古墳時代の居住域が確認された2区(2-D区)(以下、2区)と、いわゆるガツボ層が堆積する

低地と相対的に高所となる箇所（以下、高地）が確認された3区の基本土層から採取された土壌である。発掘調査時に認められた堆積層は、基本土層Ⅶ～Ⅰ層に区分されている。試料の観察によれば、Ⅶ層は青灰色極細粒砂、Ⅵ層は暗褐色粘土、Ⅴ層は暗灰色粘土、Ⅳb・a層は暗灰色シルト泥じり粘土、Ⅲb・a層は暗灰色シルト質粘土、Ⅱ層は暗灰色シルト質極細粒～細粒砂、Ⅰ層は暗褐色砂質シルトからなる。このうち、Ⅵ層は弥生時代の遺物包含層、Ⅳa層上面が古墳時代の遺構検出面、Ⅲa・b層は古墳時代の遺物包含層、Ⅱ層は中～近世の堆積物、Ⅰc層は近世後半の堆積物、Ⅰa・b層は近現代の旧耕作土とされている。

3区は、2区と堆積物の累重が異なり、Ⅱ層下位にガツボ層の堆積が認められている。そのため、ガツボ層から下位の堆積物については、発掘調査所見から2区のⅣa層はⅤ層、Ⅳb層はⅥ層、Ⅵ層はⅦ層にそれぞれ対比されている（第27図）。

土壌試料は、2区の基本土層Ⅰc、Ⅱ、Ⅲa・b、Ⅳa・b、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層から採取された土壌9点（No.1～9）、3区低地の基本土層Ⅰc、Ⅱa・b・c、ガツボa・b・c、漸移層、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層から採取された土壌11点（No.10～20）、3区高地の基本土層Ⅱa・b・c、ガツボ、Ⅴ、Ⅵ層から採取された土壌6点（No.21～26）の計26点である。

これらの試料のうち、2区基本土層のⅢa、Ⅲb層（No.3・4）と、3区低地基本土層のⅠc層を除く各層（No.11～20）の14点を対象に珪藻分析、2区の基本土層試料（No.1～9）を対象に花粉分析、2区と3区低地・高地の基本土層試料のうちⅠc層（No.1・10）を除く24点を対象に植物珪酸体分析を行う。



第27図 2・3区土層対応模式図

B 分析方法

1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、[原口ほか1998]、[Krammer1992]、[Krammer & Lange-Bertalot1986・1988・1991a・1991b]、[渡辺ほか2005]、[小林ほか2006]などを参照し、分類基準は、[Round et al.1990]に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、[柳沢2000]に従う。

同定結果は、中心類 (Centric diatoms: 広義のコアマケイソウ綱 Coscinodiscophyceae) と羽状類 (Pennate diatoms) に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類 (Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae) と有縦溝羽状珪藻類 (Raphid pennate diatoms: 広義のタサケイソウ綱 Bacillariophyceae) に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、[Vos & de Wolf 1993] を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は [Lowe 1974] に従い、真塩性種 (海水生種)、中塩性種 (汽水生種)、貧塩性種 (淡水生種) に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成し、淡水生種の生態性についても 100 個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種 (貧塩性種) については [安藤 1990]、陸生珪藻については [伊藤・堀内 1991]、汚濁耐性については [渡辺ほか 2005] の環境指標種を参考とする。

2) 花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、濾別、重液 (臭化亜鉛, 比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9, 濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料ではこの限りではない)。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は 20 μ m 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物 1cc 当たりに含まれる個数を、花粉分析結果と合わせて一覧表・図に示す。この際、有効数字を考慮し、100 単位として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体) 及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体) を、[近藤 2004] の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g 当たりの植物珪酸体含量 (同定した数を堆積物 1g 当たりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示し、100 個/g 未満は「<100」で表示する。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に 100 単位として表示する。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化を図示する。

praerupta var. *bidenis* 等がある。産出種の多くは、保存状態が悪かったことから種の同定に至らなかったが、*Cymbella* spp. が多産するほか、*Pinnularia* spp.、*Stauroneis* spp. を伴う。ガツボa層 (No.14) は、ガツボc・b層 (No.16・15) と同様水生珪藻が全体の約85%と優占する。主要種は、流水不定性で付着性の *Cymbella cuspidata* が約25%産出し、流水不定性で付着性の *Ulnaria ulna* 等を伴う。また、保存状態が悪く種の同定が不能であった *Cymbella* spp.、*Pinnularia* spp.、*Stauroneis* spp. 等も産出する。

IIa層 (No.11) は、水生珪藻が約60%、淡水～汽水生種が約40%産出する。淡水性種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)の特徴は、貧塩不定性種と貧塩好塩性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真止水性種が優占あるいは多産する。主要種は、淡水～汽水生種で付着性種の *Anomooneis sphaerophora* が約35%産出し、好止水性種で偶来性浮遊性種(普段は、水生植物などに付着して生育しているが、波等の物理的な影響を受けて基物から剥離した後は浮遊生活を営む種)の *Staurisira construens*、*Staurisira venter*、流水不定性で付着性の *Amphora copulata*、好汚濁性種の *Craticula cuspidata* 等を伴う。このほかのIIb・c層、漸移層、V～VII層 (No.12・13・17～20) は、海水生種の破片や前述した分類群が少量産出する程度である。

2) 花粉分析

結果を第16表、第29図に示す。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示する。

2区Ⅷ・V・IVa層 (No.9・7・5) は、花粉化石の産出状況が悪く、解析に耐え得る個体数は検出されない。わずかに検出される花粉化石は、木本花粉ではツガ属やマツ属、スギ属、ブナ属等が、草本花粉ではイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属が1～7個体認められるのみである。いずれの花粉化石も保存状態は不良である。

2区Ⅵ層 (No.8) は、ろうろじて解析に有効な個体数が検出される。ただし、いずれの花粉化石も保存状態は悪く、ほとんどの花粉外膜が破損・溶解している。花粉群集は、シダ類胞子が優占し、木本花粉の割合が高い。木本花粉では、ツガ属やマツ属、ブナ属が多産し、トウヒ属、スギ属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。草本花粉は少なく、イネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属、キタネ科が認められる。

2区IVb、IIIb-a、II層 (No.6・4～2) は、花粉化石の産出状況は良好であり、保存状態も比較的良好である。木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、次いでブナ属が多く、このほかにツガ属やマツ属、サワグルミ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。層位的な変化を見ると、上位に向かってスギ属が減少し、マツ属やブナ属、コナラ属が増加する。草本花粉群集は、上位に向かって割合が増加し、イネ科の増加が顕著である。このほかに、カヤツリグサ科やヨモギ属等を伴い、水湿地生植物であるガマ属やサジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、ミズオオバコ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属等も認められる。

2区Ic層 (No.1) は、木本花粉ではマツ属が優占し、このほかにツガ属やスギ属、カバノキ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科やミズアオイ属、キカシグサ属、ヨモギ属等が認められる。

微粒炭量は、Ⅷ層 (No.9) が約2,700個/cc、Ⅵ層 (No.8) が約16,100個/cc、V層 (No.7) が約13,600個/cc、IVb層 (No.6) が約6,100個/cc、Ⅵa層 (No.5) が約3,800個/cc、IIIb層 (No.4) が約58,200個/cc、IIIa層 (No.3) が約44,200個/cc、II層 (No.2) が約36,800個/cc、Ic層 (No.1) が約8,300個/ccである。

3 古環境及びイネ属の消長

分類群	試料名		2区 (2.D区)								
	Ic層 1	II層 2	IIIa層 3	IIIb層 4	IVa層 5	IVb層 6	V層 7	VI層 8	VII層 9		
木本花粉											
モミ属	1	3	1	3	1	-	-	-	-		
ツグ属	3	9	8	2	2	9	4	31	-		
トウヒ属	-	1	1	2	1	3	-	5	-		
マツ属早熟葉束帯属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
マツ属晩熟葉束帯属	110	11	1	2	-	8	1	-	-		
マツ属 (不明)	47	20	16	2	5	7	5	24	-		
コウヤマキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
スズナキ	11	65	138	191	7	142	4	11	2		
イネイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	1	6	4	-	7	-	2	-		
ヤナギ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-		
ヤマモモ属	-	2	1	1	-	-	-	-	-		
サワグルミ属	-	5	12	5	-	5	-	2	-		
クルミ属	-	2	1	2	-	2	-	-	-		
クマシラ属-アサダ属	2	-	2	6	-	2	1	-	-		
カバノキ属	4	12	6	4	-	3	-	-	-		
ハシノキ属	3	14	11	8	-	2	1	1	-		
ブナ属	18	53	54	31	2	34	7	37	2		
コナラ属コナラ亜属	12	17	16	5	-	6	-	-	-		
コナラ属アカシヤ属	2	1	6	2	-	4	-	-	-		
クリ属	1	1	-	-	-	-	-	-	-		
ニレ属-ケヤキ属	3	10	7	8	1	10	-	3	-		
エノキ属-ムクノキ属	1	1	1	-	-	-	-	-	-		
トナリ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
ブドウ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
ウコギ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-		
イボタノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
タニウツギ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-		
草本花粉											
ガンマ属	-	2	-	2	-	1	-	-	-		
オジノモミヤコ属	-	2	-	1	-	-	-	-	-		
オモダマ属	-	1	2	2	-	1	-	-	-		
スズナキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ミスオオバコ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
イネ科	360	542	434	203	5	111	2	22	-		
カヤツリグサ科	11	21	39	7	2	32	2	1	1		
ホシソク草属	-	1	-	-	-	1	-	-	-		
ミスオオバコ属	4	4	2	5	-	2	-	-	-		
ササニクサ属-ワナギツカミ属	-	4	1	1	-	3	-	-	-		
タヌキ	1	-	1	-	-	-	-	-	-		
ソバ属	3	2	-	-	-	-	-	-	-		
アカザ科	2	-	1	1	-	1	-	-	-		
ナゲシ科	-	1	1	1	-	-	-	-	-		
アザラシ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
ハナダ科	1	-	1	-	-	-	-	-	-		
キキリダマ属	5	1	1	-	-	-	-	-	-		
アリノトウグサ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
セリ科	-	1	1	1	-	1	-	-	-		
ナス科	-	1	1	-	-	-	-	-	-		
オオバコ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ゴキウ草属	-	1	-	-	-	-	-	-	-		
ヨモギ属	6	21	13	7	1	4	-	7	-		
オホモミ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
キタマコ科	1	1	-	1	-	1	-	2	-		
タンポポ草科	1	1	2	-	-	-	-	-	-		
不明花粉	11	10	7	5	-	6	1	5	4		
シダ類孢子											
オンショウモ	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
他のシダ類孢子	50	88	80	55	19	72	78	371	11		
合 計											
木本花粉	219	230	290	282	19	245	23	116	4		
草本花粉	395	609	503	233	8	158	4	32	1		
不明花粉	11	10	7	5	0	6	1	5	4		
シダ類孢子	51	88	80	55	19	72	78	371	11		
総計 (不明を除く)	665	927	873	570	46	475	105	519	16		
Iccあたりの推定数量 [個]	8300	36800	44200	58200	3800	6100	13600	16100	2700		

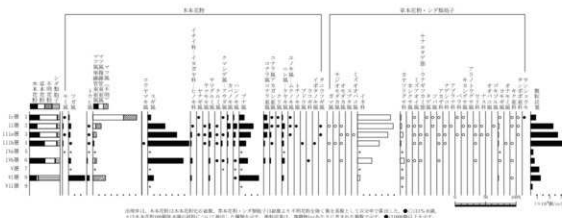
第16表 花粉分析結果

3) 植物珪酸体分析

結果を第17～19表、第30図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各地点の産状を記す。

2区

2区試料の植物珪酸体含量は約11,000～200個/gである。層位の変化をみると、概してIIIb～II層(No.4



第29図 2区(2-D区)における花粉化石群集の層位分布

～2)で高くなる傾向にあり、これらの試料では約11,000～4,900個/gである。一方、Ⅷ～Ⅳa層(No.9～5)は約1,500～200個/gである。

検出される分類群は、Ⅷ～Ⅳa層(No.9～5)では、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、さらにⅣa層(No.5)でイチゴツナギ亜科が検出されるのみである。上位のⅢb～Ⅱ層(No.4～2)では、下位試料に比べ検出される分類群が増加し、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、コブナクサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。概してヨシ属の含量が高い。

また、栽培植物のイネ属も検出される。上記したⅧ～Ⅳa層(No.9～5)では、Ⅵ層(No.8)とⅣb層(No.6)でイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出され、その含量は短細胞珪酸体は100個/g未満、機動細胞珪酸体は約100～100/g未満である。一方、Ⅲb～Ⅱ層(No.4～2)では、各層からイネ属が検出され、Ⅱ層(No.2)では糊殻に形成される顆粒珪酸体も検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約2,400～100個/g、機動細胞珪酸体は約1,400～300個/g、顆粒珪酸体は約400個/gと、いずれもⅡ層(No.2)で含量が高い。

3区低地

3区低地試料の植物珪酸体含量は約22,000～1,500個/gである。層位的な変化をみると、Ⅷ～ガツボb層(No.20～15)では約6,500～1,500個/gであるのに対し、ガツボa～Ⅱb層(No.14～12)では約22,000～11,000個/gと含量が高くなり、上位のⅡa層(No.11)では約8,800個/gと低くなる。

検出される分類群は、Ⅷ～漸移層(No.20～17)とガツボc・b層(No.16・15)、ガツボa層～Ⅱa層(No.14～11)で異なる特徴を示す。Ⅷ～漸移層(No.20～17)では、いずれも約1000個/g未満と低いが、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属等が各層で検出され、このほかにコブナクサ属を含むウシクサ族やイチゴツナギ亜科等も認められる。ガツボc・b層(No.16・15)は、下位試料に比べ分類群が少ないことを特徴とし、概してヨシ属の含量が高い。このほかに、コブナクサ属やイチゴツナギ亜科が認められる。ガツボa～Ⅱa層(No.14～11)では、分類群が増加し、含量もやや高い傾向を示す。クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、コブナクサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が認められ、概してヨシ属の含量が高い。Ⅱa層(No.11)では、ヨシ属の植物珪酸体含量が低くなり、タケ亜科と同程度となる。

本地点においても栽培植物のイネ属が検出される。その含量の変化は、イネ属を除く分類群と同様にⅧ～漸移層(No.20～17)とガツボc・b層(No.16・15)、ガツボa～Ⅱa層(No.14～11)で異なる特徴を示す。

3 古環境及びイネ属の消長

試料名	Ⅱ区 (2-D区)								
	Ⅱ期 2	Ⅲa期 3	Ⅲb期 4	Ⅲc期 5	Ⅲd期 6	V期 7	Ⅷ期 8	Ⅸ期 9	
イネ科葉部短細胞組織体									
イネ族イネ属	2,400	300	100	-	-	-	<100	-	
タケ亜科タマザサ属	600	<100	100	100	<100	<100	100	<100	
タケ亜科	300	400	100	100	<100	100	100	-	
ヨシ属	900	800	1,200	<100	-	-	<100	-	
ウシクサ族コブナグサ属	200	200	<100	-	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	180	<100	200	-	-	-	-	-	
イネゴツナギ亜科	400	300	<100	<100	-	-	-	-	
不明キビ型	1,700	800	700	-	<100	<100	200	-	
不明ヒシノハ型	100	100	<100	-	-	-	<100	-	
不明ダンクナ型	400	200	400	<100	<100	<100	-	<100	
イネ科葉身細胞組織体									
イネ族イネ属	1,400	300	300	-	<100	-	100	-	
タケ亜科タマザサ属	200	<100	<100	<100	<100	100	100	<100	
タケ亜科	200	-	<100	<100	<100	<100	<100	-	
ヨシ属	300	200	300	<100	100	<100	<100	-	
ウシクサ族	200	<100	100	-	-	-	-	-	
不明	1,100	1,000	1,100	300	400	200	700	100	
珪化組織片									
イネ属短細胞体	400	-	-	-	-	-	-	-	
合 計									
イネ科葉部短細胞組織体	7,200	3,200	3,200	300	200	400	500	100	
イネ科葉身細胞組織体	3,200	1,700	2,000	500	700	500	1,100	100	
珪化組織片	400	0	0	0	0	0	0	0	
総 計	11,100	4,900	5,100	800	1,100	800	1,500	200	

第17表 植物珪酸体含量 (1)

試料名	Ⅲ区 低地									
	Ⅱa期 11	Ⅱb期 12	Ⅱc期 13	ガツガツ a期 14	ガツガツ b期 15	ガツガツ c期 16	廣穂期 17	V期 18	Ⅷ期 19	Ⅸ期 20
イネ科葉部短細胞組織体										
イネ族イネ属	1,400	2,900	1,400	900	-	-	200	100	<100	<100
タケ亜科タマザサ属	600	700	200	<100	-	-	300	<100	100	<100
タケ亜科	200	1,100	500	200	-	-	700	200	<100	<100
ヨシ属	600	2,700	2,000	2,900	2,200	2,400	800	300	700	200
ウシクサ族コブナグサ属	100	500	300	400	300	-	<100	<100	-	-
ウシクサ族ススキ属	200	800	300	200	200	-	-	-	-	-
イネゴツナギ亜科	100	800	300	500	200	-	100	-	-	-
不明キビ型	1,600	2,300	1,600	2,000	100	<100	800	200	-	<100
不明ヒシノハ型	<100	200	200	200	200	-	200	-	<100	-
不明ダンクナ型	200	200	500	400	100	200	200	-	<100	<100
イネ科葉身細胞組織体										
イネ族イネ属	1,200	3,400	1,200	500	-	100	600	300	<100	400
タケ亜科タマザサ属	<100	300	100	<100	-	-	500	200	100	-
タケ亜科	200	500	100	<100	-	-	200	100	-	200
ヨシ属	100	800	700	400	200	700	200	<100	200	100
ウシクサ族	<100	500	<100	200	-	-	<100	-	-	100
不明	1,200	2,800	1,600	1,200	200	400	1,600	900	200	1,000
珪化組織片										
イネ属短細胞体	700	1,400	500	<100	-	-	-	-	-	-
合 計										
イネ科葉部短細胞組織体	5,200	12,200	7,200	8,700	3,200	2,700	3,500	1,900	1,000	600
イネ科葉身細胞組織体	3,000	8,400	3,800	2,400	400	1,200	3,100	1,600	300	1,900
珪化組織片	700	1,400	500	100	0	0	0	0	0	0
総 計	8,800	22,000	11,500	11,100	3,700	3,900	6,500	2,600	1,500	2,500

第18表 植物珪酸体含量 (2)

試料名	Ⅲ区 高地					
	Ⅱa期 21	Ⅱb期 22	Ⅱc期 23	ガツガツ 24	V期 25	Ⅷ期 26
イネ科葉部短細胞組織体						
イネ族イネ属	2,600	700	1,100	1,200	-	-
タケ亜科タマザサ属	<100	100	100	<100	100	<100
タケ亜科	<100	<100	200	500	200	100
ヨシ属	300	400	1,800	1,000	200	-
ウシクサ族コブナグサ属	<100	<100	100	200	-	-
ウシクサ族ススキ属	<100	<100	400	-	-	-
イネゴツナギ亜科	<100	100	100	200	-	-
不明キビ型	1,000	700	1,200	800	100	<100
不明ヒシノハ型	<100	<100	<100	<100	<100	-
不明ダンクナ型	400	200	600	200	-	-
イネ科葉身細胞組織体						
イネ族イネ属	4,000	1,000	900	1,100	<100	-
タケ亜科タマザサ属	-	100	<100	-	<100	<100
タケ亜科	100	<100	<100	200	200	300
ヨシ属	<100	<100	400	200	100	-
ウシクサ族	<100	<100	200	200	-	-
不明	1,000	700	1,500	1,300	900	300
珪化組織片						
イネ属短細胞体	3,800	600	400	400	-	-
合 計						
イネ科葉部短細胞組織体	4,700	2,500	5,600	6,200	800	200
イネ科葉身細胞組織体	5,300	2,000	3,200	2,900	1,400	500
珪化組織片	3,800	600	400	400	0	0
総 計	13,800	5,100	9,200	9,500	2,200	700

第19表 植物珪酸体含量 (3)

タケ亜科やヨシ属、コブナクサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出され、概してヨシ属の含量が高い。ただし、ヨシ属の短細胞珪酸体は、上位に向かって含量が低くなる傾向を示す。II a層 (No.21) は、下位のII b層 (No.22) と同様の分類群が認められ、含量も同程度である。

栽培植物では、2区、3区低地と同様にイネ属が検出される。VI・V層 (No.26・25) では、V層 (No.25) で機動細胞珪酸体が100個/g未満と極めて低い含量を示したほかは検出されない。ガツボ層～II b層 (No.24～22) では、イネ属の葉部や初殻に形成される植物珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約1200～700個/g、機動細胞珪酸体は約1.100～900個/g、顆粒酸体は約600～400個/gと層位(試料)間で大きな変化は認められない。II a層 (No.21) では、短細胞珪酸体は約2,600個/g、機動細胞珪酸体は約4,000個/g、顆粒酸体は約3,800個/gと、いずれも下位試料に比べ高い値を示す。

D 考 察

1) 堆 積 環 境

2区及び3区低地試料の多くは、珪藻化石の産出が少なく、保存状態も溶解や破損などが認められるなど不良であった。また、検出された珪藻化石は、被殻の丈夫な分類群に限られる傾向にあることから、被殻の薄い繊細な種類は消失している可能性が高く、確認された化石も選択的に残存したものと考えられる。

有意な数量の化石が産出した試料のうち、3区低地 ガツボb・c層では、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や、さらに水深の浅い湿地で優勢な出現が見られる沼沢湿地付着生種群を多く含む、湿地や沼沢地などに生育する分類群を含む *Cymbella* spp., *Pinnularia* spp. も多産した。したがって、ガツボc層とガツボb層は沼沢湿地的な環境が推定される。また、ガツボa層では、湖沼や河川の砂泥上に多く見られる *Cymbella cuspidata* が多産したが、このほかに多産する種類が同様であったことからガツボb・c層と比較して大きな変化がなかったと推定され、流水の影響が少ない低湿な環境であったと考えられる。

中～近世の堆積物である3区II a層は、電解質物質の豊富な電気伝導度の高い水域に生育する *Anomooneis sphaerophora* が多産した。また、ある程度富栄養化した止水域に生育する偶来性浮遊生種の *Staurisira venter* が多産し、好汚濁性種も産出した。このことから、同堆積層では塩分や塩類の豊富な富栄養池沼～沼沢地等の止水域という環境が推定される。後述するように、植物珪酸体分析結果では、II層で栽培植物であるイネ属の植物珪酸体含量の増加が確認され、稲作の可能性が示唆されていることから、今回の分析結果から推定される環境は、生産域の水域環境を示している可能性もある。

3区低地のVII～V層、漸移層、IIc, b層は、珪藻化石の産出状況及び保存状態が悪かったことから堆積環境の検討は困難であった。なお、これらの試料から検出された海水生種は、海の影響や後背山地に分布する中新世以降の厚い海成層(難波山層など)などに由来する二次堆積が推定されるが、今回の産状から判断することは困難である。また、微高地に相当する2区のIII a・b層から珪藻化石がほとんど産出しなかった要因としては、これらの堆積層が遺物包含層とされていることを考慮すると、経年変化の影響や乾燥化などにより珪藻が生育し難い環境であったことが想定される。

2) 古 植 生

ここでは、2区における花粉分析結果及び2・3区の植物珪酸体分析結果から、本遺跡における古植生変遷を検討する。

2区Ⅷ層は、花粉、植物珪酸体ともに産出状況は不良であった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされる。また、花粉の中では落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている [中村 1967、徳永・山内 1971、三宅・中越 1998 など]。おそらく、経年変化で取り込まれた花粉の多くが分解・消失していることが推定される。

Ⅷ層では、針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のブナ属、草本類のカヤツリグサ科の花粉がわずかに検出されたことから、これらが周囲に生育していたと推定される。また、植物珪酸体分析でわずかに検出されたクマザサ属は、周辺の落葉広葉樹林の林床等に生育していた可能性がある。

弥生時代の遺物包含層とされる2区Ⅵ層及び3区Ⅷ層は、3区低地Ⅷ層中で検出された炭化物の放射性炭素年代測定結果から1世紀頃の暦年代が得られた。当該土層も花粉化石が検出されたが保存状態が悪く、シダ類胞子が多産した。したがって、2区Ⅷ層と同様に花粉の多くは分解・消失していると考えられる。花粉群集を見ると、ツガ属やトウヒ属、マツ属、スギ属等の針葉樹に由来する花粉が多く、このほかに、落葉広葉樹のブナ属、草本類のイネ科等が認められた。植物珪酸体は、クマザサ属やタケ亜科、ヨシ属等が検出された。これらの結果から、後背の山地・丘陵にはブナ属を主体とする落葉樹林が見られ、その林床にはクマザサ属が生育していたことが推定される。また、扇状地上や山地等にはツガ属、マツ属等の針葉樹、水湿地にはヨシ属が生育していたことが推定される。

古墳時代の遺構検出面の低位層に相当する2区Ⅳb層は、花粉群集を見ると、木本類で針葉樹のスギ属が多産し、針葉樹のツガ属やトウヒ属、マツ属、落葉広葉樹のブナ属やニレ属-ケヤキ属、コナラ亜属、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属-アサダ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属等を伴い、草本類では、イネ科が多く、カヤツリグサ科、サナエタ節-ウナギツカミ節、ミズアオイ属、ヨモギ属等を伴うという特徴が認められた。また、2区Ⅳb層と3区Ⅵ層の植物珪酸体分析では、クマザサ属やタケ亜科、ヨシ属が検出された。

スギは、水分の多い土地に生育することから、周囲の低地や山地・丘陵地の谷沿い等に生育していた可能性がある。後背の山地等にはブナ属やコナラ亜属が落葉広葉樹林を形成し、その林床にクマザサ属が生育していたことが推定される。また、ニレ属-ケヤキ属やサワグルミ属、クルミ属、ハンノキ属等は河野林を形成し、水湿地にはヨシ属が生育していたことが推定される。花粉分析でわずかに認められたガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属等の水生植物も周囲の水湿地に生育していたと考えられる。

古墳時代の遺構検出面に相当する2区Ⅳa層は、Ⅷ層と同様に花粉化石の産出状況は悪い。わずかに検出された分類群はⅣb層と共通する種類が多い。また、2区Ⅳa層とそれに対比される3区Ⅴ層の植物珪酸体分析結果においても、クマザサ属やタケ亜科、ヨシ属が検出されており、層位的に変化は認められない。これらのことから、Ⅳb層(3区Ⅵ層)と同様の植生であった可能性がある。

古墳時代の遺物包含層とされるⅢb・a層及び上位の中～近世の堆積物とされるⅡ層は、花粉群集はほぼ同様の組成を示したが、その量比において層位的な変化が認められた。木本類では、Ⅲb層で極めて高率で検出されたスギ属は、上位に向かって減少する一方、複雑管束亜属を含むマツ属やブナ属、コナラ亜属等が増加する。草本類では、Ⅳb層以降でイネ科が増加する傾向にあり、Ⅲa層以降で花粉群集における草本花粉の割合が木本花粉を上回るという特徴を示した。植物珪酸体分析では、2区Ⅲb層、3区Ⅴ層(上部)から分類群が増加するとともに、含量が高くなるという特徴を示し、概してヨシ属の含量が高い。珪酸群集の産状から低湿な環境が推定されていることから、潤湿な環境で生育するヨシ属が増加し

た可能性がある。

Ⅲ～Ⅱ層では、スギの減少に対し、イネ科及び草本花粉の割合が増加することから、沖積地においてスギを含む河畔林等の減少や草地の拡大が推定される。ブナ属やコナラ亜属の増加は、スギ属の減少による相対的な変化と考えられる。なお、上記したコナラ亜属には二次林構成種も含まれることから、周囲にはコナラ亜属等の二次林が見られた可能性もある。

また、遺跡周辺の明るく開けた場所には、ススキ属等を含むイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属等の人里植物が生育したと考えられる。発掘調査所見等から3区低地等を含む周囲には水湿地等も分布し、ヨシ属等を含むイネ科やカヤツリグサ科、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、スプタ属、ミズオオバコ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、ゴキツル属の水生植物が生育したと考えられる。

近世後半の堆積物とされるIc層では、Ⅲ～Ⅱ層で減少が認められたスギはさらに低率となり、マツ属が急増する。下位試料における花粉群集の変化や後述する栽培植物のイネ属の増加等を考慮すると、スギ等を含む河畔林の伐採や生産域の拡大等の可能性がある。また、マツ属は極端な陽樹であり、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類である。マツ属の急増は、周辺地域におけるマツ属の二次林の増加を反映している可能性がある。

本遺跡の西側の姫御前遺跡では、縄文時代晩期以降の基本土層を対象とした花粉分析が実施されている。調査結果によれば、縄文時代晩期頃はスギ林が分布する森林状態だったとし、弥生～古墳時代はカヤツリグサ科やハンノキ属の生育する沼沢湿地が拡大し、上位の古墳時代～近世では時代が下るに連れて水田の拡大とスギ林の減少が推定されている〔株式会社古環境研究所 2008〕。本遺跡における分析結果においても、古墳時代以降にスギ属の減少や草本花粉の増加、後述するようにイネ属の含量が高くなる傾向が認められており、姫御前遺跡における古植生変遷と調和する結果と言える。

3) 植物資源利用

2区、3区(低地・高地)の基本土層を対象とした植物珪酸体分析の結果、各地点で栽培植物のイネ属が検出された。

各地点のイネ属の検出状況や層位の変化をみると、集落域に相当する2区では、VI層及びⅢb層～Ⅱ層からイネ属が検出され、VI層では短細胞珪酸体は約100個/g未満、機動細胞珪酸体は約100個/g、Ⅲb～Ⅱ層では短細胞珪酸体は約2,400～100個/g、機動細胞珪酸体は約1,400～300個/gであった。3区低地では、その含量からガツボ層を境として層位の変化が認められ、Ⅳ～漸移層では短細胞珪酸体は約200～100個/g未満、機動細胞珪酸体は約600～100個/g未満、ガツボa～Ⅱa層は短細胞珪酸体は約2,900～900個/g、機動細胞珪酸体は約3,400～500個/gであった。3区高地も、3区低地と同様にVI・V層と、ガツボ～Ⅱa層との間で変化が認められ、VI・V層では短細胞珪酸体は認められず、機動細胞珪酸体は約100個/g未満、ガツボ～Ⅱa層では短細胞珪酸体は約2,600～700個/g、機動細胞珪酸体は約4,000～900個/gであった。

これらの状況を見ると、2区ではIV層以降、3区ではガツボ層から下位試料では、いずれもイネ属の含量は低い。Ⅳa層は古墳時代の遺構検出面とされていることから、古墳時代以前のⅣ～Ⅳ層(3区Ⅳ～Ⅳ層)段階では稲作等の可能性は低いと見られる。ただし、イネ属が検出されていることから、イネの利用や集水域における稲作の可能性もある。

一方、2区のⅢb～Ⅱ層、3区低地のガツボa～Ⅱa層、3区高地のガツボ～Ⅱa層では、地点間・層位

間で多寡があるものの、連続してイネ属が検出された。また、各地点のⅡ層試料で、イネ属の含量が高くなることや、珪酸体が検出されるという特徴も指摘される。Ⅱ層試料のイネ属の含量を見ると、2区Ⅱ層では、短細胞珪酸体は約2,400個/g、機動細胞珪酸体は約1,400個/g、3区低地Ⅱc～Ⅱa層では短細胞珪酸体は約2,900～1,400個/g、機動細胞珪酸体は約3,400～1,200個/g、3区高地Ⅱc～Ⅱa層では短細胞珪酸体は約2,600～700個/g、機動細胞珪酸体は約4,000～900個/gであった。

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている[杉山2000]。この点を考慮すると、2区Ⅱ層は、含量が低く稲作の可能性を支持することはできないが、3区Ⅱ層試料ではこれに近い含量を示しており、水田等として利用されていた可能性がある。また、イネ属の類に由来する組織片も比較的多く確認されていることから、水田利用の可能性が示唆される。

前述した姫御前遺跡における植物珪酸体分析結果では、古墳時代前期とされるⅣ層以降で水田稲作が開始され、中世～近世に相当するⅡb～Ⅱa層で集約的な水田稲作が行われた[株式会社古環境研究所2008]としている。このことから、本遺跡では、とくに3区の産状からⅡ層段階において集約的な稲作が行われていた可能性がある。また、花粉群集で認められたヨシ属等を含むイネ科やこのほかの水生植物等は、水田雑草等として生育したのも含まれる可能性がある。

なお、イネ属以外の栽培種では、2区Ⅱ・Ⅰc層から栽培種のソバ属花粉が検出された。このことから、中世以降におけるソバの栽培・利用が推定される。

4 木材利用

A 試料

試料は、杭、呪符木筒状杭、柱材?、柄振、不明木製品等計12点(No.31～40・44・45)と、放射性炭素年代測定試料として水洗選別で抽出した炭化物3点である。各試料の詳細は、結果とともに第20表に示す。

B 分析方法

木製品の木取りを観察した後、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を木製品の表面から直接採取する。切片をガム・クロラル(指水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入してプレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

材組織の名称や特徴については、[島地・伊東1982]や[Richter et al. 2006]を、日本産木材の組織配列については、[林1991]を参考にする。

C 結果

結果を第20表に示す。分析対象とした木製品12点は、すべて針葉樹のスギに同定された。また、SI01 I次炉底面炭(No.27)の炭化物は種類不明の広葉樹、SK26下層炭化物(No.30)は針葉樹のスギに同定された。なお、No.27の水洗選別時に検出された炭化種実(破片:1点)は、イネの胚乳に似るが破損が著しく、種類の同定には至らなかった。以下に、木製品で同定された分類群の解剖学的特徴等を記す。

4 木 材 利 用

試料 No.	取上 No. (報告 No.)	遺構名 / 地区名	Gr	層位	試料名 / 器種	木取	樹種
27		S01-1 次中		底面	炭化物		広葉樹 *
27		S01-1 次中		底面	炭化棒束?		不明
30		SK36		下層	炭化物 (No.1)		スギ *
31	44 (903)	3区 (3-C区)	22I18	Ⅵ層	杭	分割材	スギ
32	76 (904)	3区 (3-C区)	22I18	Ⅵ層	杭	分割材	スギ
33	53-1 (左側) (901)	3区 (3-B区)	22C1	Ⅵ層	杭	ミカン割	スギ *
34	53-2 (右側) (902)	3区 (3-B区)	22C1	Ⅵ層	杭	ミカン割	スギ
35	39 (910)	3区 (3-C区)	22I24	Ⅵ層	呪符本筋状杭	榎目	スギ
36	40 (908)	3区 (3-C区)	22I24	Ⅵ層	呪符本筋状杭	榎目	スギ *
37	62 (909)	3区 (3-C区)	22I17	Ⅵ層	呪符本筋状杭	榎目	スギ
38	1 (877)	3区 (3-C区)	22C5	V層上層	柱材?	分割角材	スギ *
39	(881)	3区 (3-A区)	19C	ガツボ層	柄振	榎目	スギ *
40	(886)	3区 (3-B区)	21B	ガツボ層上面	不明木製品	榎目	スギ
44	(897)	3区 (3-C区)	23C27	V層下層	曲物底板	榎目	スギ
45	(898)	3区 (3-B区)	23I8	V層上面	半円板 (蓋板?)	榎目	スギ

*放射性炭素年代測定試料

第20表 樹種及び炭化物同定結果

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. L.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

D 考 察

木製品は、杭、呪符木筒状杭、柱材?、柄振、不明木製品等多様であったが、すべて針葉樹のスギに同定された。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。糸魚川市域では、海川右岸に位置する前波南遺跡から出土した古墳~奈良時代を主体とする木製品60点の分析調査では、杭や部材、曲物、柱?、大足?等57点がスギであることが確認されている〔バリノ・サーヴェイ株式会社2008〕。スギ以外では、櫛にイヌノキ、部材にトネリコ属、用途不明品にヒノキ科が各1点確認されている程度である。様々な木製品にスギが利用される傾向は、今回の分析結果と調和する。

Ⅵ層から出土した杭4点(No.31~34)は、いずれも分割材であり、No.33・34はミカン割状を呈する。特にNo.33・34は分割方法が同じであり、肉眼で観察した範囲での年輪の様子も類似することから、本来は同一個体由来する可能性がある。同じくⅥ層の呪符木筒状杭(No.35~37)は、いずれも榎目板状を呈し、一方の端部は先端加工が施されている。形状から割裂性が高く、板状加工が容易なスギを利用したと推定される。

V層上層から出土した柱材?(No.38)は、分割角材であるが、断面は隅丸長方形を呈し、やや広い面が榎目となる木取りであった。スギは強度的にも柱材に利用可能であり、加工性等も含めて利用された可能性がある。V層下層の曲物底板(No.44)とV層上面の半円形板(No.45)は共に榎目板が利用されており、割裂性の高い材質を利用したことが推定される。このうち、半円形板は、中央部に円形の穴が空けられており、容器類の蓋の一部である可能性がある。

ガツボ層の柄振(No.39)は、榎目板状で、下面に鋸歯状の加工が認められる。板状を呈することから、割裂性等の加工性を考慮した木材選択と考えられる。ガツボ層上面の不明木製品(No.40)は、形状は櫛等に似ており、全体として榎目板状を呈し、片方に削出丸木状の柄と思われる棒状の部分が作られる。年輪がほぼ直線状で平行に入る様子から、比較的径の大きなスギ材を利用したことが推定される。

5 粘土の由来

A 試料

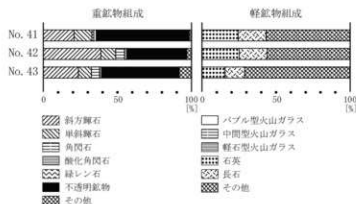
試料は、SK38 から採取された粘土 (27kg) (No.41)、SI01 1次如底面を構築する粘土 (1.0kg) (No.42)、SI01 の屋内土坑粘土 (13層) (0.7kg) (No.43) の3点である。これらの試料の観察では、No.41 は青灰色を呈するシルト質粘土、No.42 は灰白色を呈するシルト質粘土の薄層を挟む灰色のシルト質粘土、No.43 は暗青灰色を呈する粘土混じりの極細砂質シルトである。

B 分析方法

No.41・42 は 60g、No.43 は 160g を採取し、水を加え超音波洗浄装置で分散した後、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム (比重約 2.96) により重液分離、重鉱物と軽鉱物をそれぞれ 250 粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とした。「その他」は軽鉱物中においても同様である。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態からバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡を持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状及び繊維束状のものとする。

C 結果

結果を第21表、第31図に示す。重鉱物組成では、3試料ともに斜方輝石と不透明鉱物を主体とし、少量または微量の単斜輝石と角閃石を伴う。これらの重鉱物結晶は、いずれも本来の結晶の形をきれいに示すものはほとんどなく、結晶表面もキズや汚れが多い。各鉱物の量比は3試料間で異なっている。No.41 は、不透明鉱物が60%程を占め、斜方輝石は20%程度、単斜輝石は約10%であり、ほかに微量の角閃石、酸化角閃石及び緑廉石が含まれる。不透明鉱物は、落射光下の観察から、暗灰褐色の粒がブドウ状に集まった塊状を呈するものが多く認められた。これらは、磁鉄鉱等の鉄鉱物粒が酸化変質した粒子であると考えられる。No.42 は、斜方輝石と不透明鉱物がともに約40%を占め、単斜輝石は10%、角閃石は6%であり、ほかに微量の酸化角閃石と緑廉石が含まれる。No.42の不透明鉱物は、落射光下で黒色金属光沢を呈するものが多く、また結晶の形が認識できた粒子も認められたことから、多くは磁鉄鉱などの鉄鉱物であると考えられる。No.43 は、No.41 とほぼ同様の組成であるが、No.41 に比べて角閃石の量比がやや多い。また、不透明鉱物の状況は、No.42 とほぼ同



第31図 重軽鉱物組成

No.	試料名	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	變化角閃石	緑閃石	不透明鉱物	その他	合計	パブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
41	SK38 粘土	52	30	3	2	4	157	2	250	1	0	1	61	47	140	250
42	SI01 1次が底面粘土	97	25	15	4	2	101	6	250	1	0	1	63	47	138	250
43	SI01 屋内土塊粘土 (13層)	39	22	14	0	3	131	21	250	1	0	0	39	33	177	250

第21表 重軽鉱物分析結果

様である。軽鉱物組成では、No.41・42がほぼ同様の組成を示す。すなわち「その他」とした砕屑物が非常に多く、約55%を占め、次いで石英が約25%、長石が20%弱という組成である。また、いずれの試料にも極めて微量のパブル型火山ガラスと中間型火山ガラスが認められた。No.43は、上記2試料に比べて、「その他」が多く、約70%を占め、石英は15%程度、長石は10%強、さらに極めて微量のパブル型火山ガラスも含まれる。

なお、3試料において「その他」とした砕屑物は、いずれも、灰黒色、暗灰色～灰色及び黄褐色など様々な色調の岩石片である。また、各試料の篩別された中粒砂以上の砂を実体顕微鏡により観察したところ、暗灰色～灰色を呈するチャートや泥岩及び砂岩などの堆積岩類や、凝灰岩及び暗灰色～灰黒色を呈する火山岩（おそらく安山岩）等の岩石片を認めることができた。

D 考察

南押上遺跡の立地する沖積低地は、海川の河川作用によって形成されたものであり、それを構成する砕屑物は、ほとんどが海川流域の山地及び丘陵から供給されたものである。[新潟県商工労働部工業振興課1989]によれば、海川の中流～上流域の丘陵は、新第三紀鮮新世の堆積岩からなる名立層で構成されており、最上流域の山地は、同じ鮮新世に形成された海川火山岩類が広く分布する。名立層は主に凝灰質の泥岩と砂質泥岩からなり、砂岩泥岩互層や凝灰岩層等が挟まれている。海川火山岩類は、主に両輝石安山岩と両輝石角閃石安山岩から構成されている [鈴木^{ほか}1984]。

今回の粘土試料から検出された重鉱物は、その組成が海川火山岩類の岩質と整合しており、かつ結晶があまり新鮮ではないことから、海川火山岩類に由来し、表層の風化した砕屑物が海川で運ばれて沖積低地に堆積したと考えられる。また、供伴する岩石片の種類構成は、上述した名立層や海川火山岩類の岩質と同様である。これらのことから、粘土試料3点に含まれる砂のほとんどは、海川の河川作用で堆積した沖積低地の砕屑物に由来すると考えて良い。試料自体は、シルト質粘土または極細砂質シルトであることから、沖積低地の中でも後背湿地の堆積物であると考えられる。

なお、No.42に認められた灰白色部分は、特に火山ガラスが多く含まれることはなく、新鮮な重鉱物結晶も認められなかった。このことから、テフラに由来する堆積物ではないと判断される。色調の違いについては、少なくとも砂分の重軽鉱物組成以外の要因によると考えられるが、現時点では不明である。また、火山ガラスは、No.41・43にも極微量含まれていたが、いずれの試料のものも比較的新鮮であることとパブル型を呈することから、第四紀更新世に周辺に降下堆積した広域テフラに由来すると考えられる。ただし、火山ガラスが極微量であったことから、テフラを特定するには至らない。

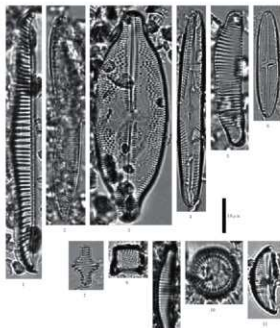
第VI章引用・参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 527-600.
- 伊藤良夫・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 23-45.
- 株式会社古環境研究所 2008 「自然科学分析」『総御前遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 46-60.
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 1-20.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 「小林弘珪藻図鑑」第1巻(株)内田老鶴園 531p.
- 近藤謙三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48 46-64.
- Krammer, K. 1992. *PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.* J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K.&Lange-Bertalot, H. 1986, *Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae.In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.* Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K.&Lange-Bertalot, H.1988,*Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer, K.&Lange-Bertalot, H. 1991a, *Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Enoitiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K.&Lange-Bertalot, H. 1991b, *Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. L. 1974. *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.* 334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop. U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6 (1) 15-30.
- 中村 純 1967 「花粉分析」古今書院 232p.
- 新潟県商工労働部工業振興課 1989 「新潟県地質図(20万分の1)及び説明書」新潟県.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2008 「自然科学分析」『六反田南遺跡・前波南遺跡 一般国道8号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ 新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 53-56.
- Richter H.G.Grosser D.Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006 「針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修) 海青社 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G 1990 *The diatoms. Biology & morphology of the genera.* 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」地球社 176p.
- 鈴木郁夫 1983 「I 地形分類図」『新潟上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部農村総合整備課 9-22
- 鈴木雅彦・周藤賢治・茅原一也 1984 「糸魚川市南部の海川火山岩類」『日本地質学会第91年学術大会講演要旨』日本地質学会 358.
- 徳永重元・山内輝子 1971 「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73.
- Vos, P.C. & H. de Wolf.1993.Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands;

methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270, 285-296.

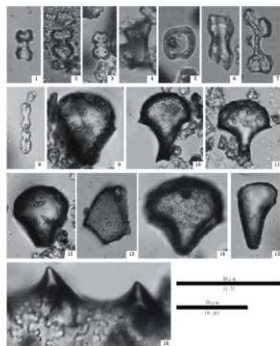
渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆品子 2005 「淡水珪藻生態図鑑」 内田老鶴圃 666p.

柳沢幸夫 2000 「II-1-3-2- (5) 計数・同定」『化石の研究法-採集から最新の解析法まで-』 化石研究会
共立出版株式会社 49-50.



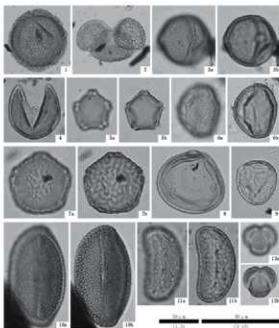
1. *Phaeothalpus gibbus* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 110μm (1)
2. *Phaeothalpus amphioxys* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 オフオウ藻 (1)
3. *Ammoniastrum amphioxys* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 110μm (1)
4. *Parasirastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) オフオウ藻 (1)
5. *Ammoniastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 オフオウ藻 (1)
6. *Ammoniastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 オフオウ藻 (1)
7. *Ammoniastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 オフオウ藻 (1)
8. *Ammoniastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 オフオウ藻 (1)
9. *Ammoniastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 オフオウ藻 (1)
10. *Parasirastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 110μm (1)
11. *Ammoniastrum amplexicaule* (Hsu) Matsuoka (2003) 珪藻 110μm (1)

第32回 珪藻化石



1. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 葉体 50μm (1)
2. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 オフオウ藻 50μm (1)
3. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 オフオウ藻 50μm (1)
4. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
5. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
6. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
7. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
8. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
9. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
10. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
11. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
12. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
13. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
14. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)
15. オフオウ藻類珪藻体 (2003) 珪藻 110μm (1)

第34回 植物珪藻体



1. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
2. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
3. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
4. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
5. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
6. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
7. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
8. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
9. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
10. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
11. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
12. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
13. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
14. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)
15. オフオウ藻類 珪藻 110μm (1)

第33回 花粉化石



第35回 木材



第36回 重鉱質物

第Ⅶ章 ま と め

1 南押上遺跡出土土器の編年的位置付けとその特徴

南押上遺跡では、2区を中心に数多くの遺構と、それに伴う大量の土器が出土した。これらの土器の多くは、古墳時代前期中葉～後葉にかけての所産と見られる。古墳時代でも前期中葉～後葉という限られた期間の中で、この地に玉作集落が形成され、玉の生産が行われていたことになる。

ここでは、今回の調査で大量に出土した古墳時代前期の土器群について、より具体的な編年的位置付けを行うとともに、土器に見られる特徴の一端についても考えてみたい。

A 土器群の編年的位置付け

南押上遺跡では、包含層も含めた全出土土器類の重量が760kgを超える。その内、遺構から出土した土器は約450kgである。今回出土した土器の多くは、発見時、既に小片となっていたものが多い。しかし、SK12のように残存率の高い土器が一括で出土したものもあり、また小片で出土しても、接合作業の結果、復元率が高い土器も多数存在することが明らかとなった。

ここでは、それらの残存率及び一括性の高い遺構出土土器群について概観し、編年的な位置付けを試みる¹⁾。なお、編年軸については、[滝沢 2005c]、[川村 2000]を基軸としたが、越後における古墳時代前期の土器編年には、[田嶋 1986・1988]が大きな影響を与えていることはいうまでもない。

検討の対象とする土器群出土の遺構は、SI01、SI04・05・07、SK23・34・27・12・04・05・33・37・49・36・03、SD14、SD04(旧河川)である。

SI01 SI01からは、全遺構中で最も大量の土器が出土している。今回、「覆土最上～上層」「覆土中位」「覆土下層～床面直上」「屋内土坑」「貼床内～掘形覆土」の5つに分けて報告を行ったが、ここでは「覆土下層～床面直上」と「覆土最上～上層」の土器群に着目したい。

「覆土下層～床面直上」の土器群の内、59の器台は銜部の幅がほかの同器種に比べて広く、銜端部は上下に突出する。古墳時代の装飾器台、あるいは結合器台の中でも古相を呈しており、滝沢編年の7期に位置付けられる。55は、いわゆる東海系の小型高杯で、外面及び杯部内面は赤彩される。杯部の深さや脚部の広がり等から判断して、7～8期初頭頃に比定される。54の鉢は、小型九底壇の前段階的な形状を呈しており、7期にあって違和感がない。甕類は、口縁端部が面取りされるものが多く、つまみ上げられるものもある。甕の底部はいずれも小さな平底である。このほか、壺や蓋、高杯もしくは器台の脚部の様相等からみて、SI01の覆土下層～床面直上の土器群はおおむね7期の所産と判断できる。

一方、「覆土最上～上層」の土器群は、「覆土下層～床面直上」に比べて明らかに新相を呈するものが含まれる。中でも、15～19の高杯は屈折脚で、9～10期に新潟県内で多く見られる中実のものも認められる。

1) 各遺構出土の土器群については、田嶋明人・橋本博文・笹澤正史の各氏に土器を実見していただき、御教示をいただいた。

13は小型丸底壇の流れを汲むもので、10期頃の所産と見られる。これらの様相から、「覆土最上～上層」の土器群はおおむね9～10期に位置付けられよう。ただし、覆土最上層の土器群の中には、包含層である「Ⅲb層」の土器が含まれる可能性もあることから、注意せねばならない。

SI04・05・07 平地建物としたもので、いずれも長軸をほぼ南北にそろえる。個々の遺構における土器の出土量が少ないため、平地建物を代表する3棟の特徴を見ることにする。

SI04の105は、いわゆる「中山南タイプ」の高杯で、7期以前の所産である。SI05の甕108は、口縁部が付加状を呈し古相（5～6期）を呈する。ただし、108はほかの土器とは異なり、溝で囲まれた内側の地山直上から出土している点で、注意を要する。古相を呈する土器が見られる一方、SI07の122（小型丸底壇）のように、8期の特徴を示すものも出土している。小片が多いため、断定的なことは言い難いが、これらはおおむね7～8期頃の所産と見られ、堅穴建物のSI01と併存した時期があるものと推測できる。

SK23 土坑内から土器が複数まとまって出土している。甕の口縁部は多くがいわゆる「コ」の字状に近く、端部も面取りやつつまみ上げるものが多い。169の二重口縁の壺は、口縁部内面に比較的明瞭な段部を有する。総じて、8期に位置付けられる。

SK34 SI07を切って掘られた大型の土坑である。190は東海系の大型高杯で、口縁部は外方に浅く大きく開き、脚部の付け根も広く新相を呈する。9期に位置付けられる。185は小型丸底壇だが、幅広く段部の屈曲も甘く、新相を呈する。183の段部に刻みを有する壺の口縁部や、192の器台はやや古相を呈するが、混入の可能性もある。混入品も含まれるが、SK34出土の土器群は9期の特徴を示しており、SI07との切り合いによる新旧関係にも矛盾をきたしていない。

SK27 207は付加状の甕の口縁部である。208は二重口縁の壺だが、口縁部の立ち上がりは急角度で外方には大きく広がらず、内面の段部も比較的明瞭である。209は「中山南タイプ」の高杯で、段部上方が長く外方へ伸びる。これらは本道跡における古墳時代前期の土器の中では最古相を呈しており、6期に位置付けることができる。

SK12 今回の調査で発掘された遺構の内、最も遺存状態が良い土器群が出土している。甕が主体で、ほかに壺・鉢・高杯がある。甕の多くは、口縁端部が丸く収束するとともに、口縁部の外傾・外反の度合いも強い。226の甕は、側面観で長楕円形のプローションを呈し、底部は完全な丸底である。ほかの甕も、最大径は胴部の中位にあるものが多く、それほど肩が張らない。底部が残存しているものは少ないが、本来は多くが丸底を呈するものと推測される。内外面の調整にはハケメとともに、ヘラケズリが施されるものも見られる。このほか、238・239の直口壺や、口縁部の段差が形骸化した240の鉢等からも、比較的新しい要素が見てとれる。SK12は、古墳時代前期では新相の、10期に位置付けられる。

SK04 SD37やSK07と連結して一つの溝になる可能性もあるが、SK04とした範囲内から特に土器がまとまって出土している。246の甕は、口縁端部が丸く収束するとともに、外面はヘラケズリが施される。252・253の器台も、受部が浅くて器厚も薄く、華奢である。252の透かし穴は3方向である。これらの様相から、SK04の土器群は9期に位置付けられる。

SK05 SI04（SD03）を切って掘られている。256の甕は最大径が胴部中位に位置し、口縁端部も丸く収束する。257の甕も口縁部が強く屈曲し、端部はやはり丸く収まる。いずれも底部は残存していなかったが、259の甕底部を見る限りでは、平底ではなく尖底状である。260の壺は二重口縁が形骸化し、口縁部内面の段部は不明瞭である。これらの様相から、SK05は古墳時代前期でも新相の10期に位置付けることができる。SI04出土の土器群と比べても明らかに新相を呈しており、矛盾をきたしていない。

SK33 比較的、大型の土器片が多数出土した遺構の一つである。甕は口縁端部が面取り、つまみ上げされるものと、丸く収まるものの両者がある。264の甕は有段口縁で古相を呈するが、小片であり、ほかの土器との年代観も一致しないことから、混入品と推測できる。274の壺の口縁部は、SK49の312に比べて頸部がわずかに狭く、やや新相を呈する。278の器台は、受部に稜線を有する。これらの土器の様相から、SK33出土の土器群は8期に位置付けることができる。

SK37 遺構の切り合いから、SK33より古くに構築されていたことが判明している(図版94)。281はいわゆる長浜甕で、比較的大型である。282・283の甕は新相を呈するが、いずれも小片で、後世の混入品と考えられる。287の鉢は、底部が平底で丁寧な作りである。これらの土器や遺構の切り合い関係から判断すると、SK37はSK33の一段階前、7期の所産と判断できる。

SK49 比較的遺存状態の良い土器片が多く出土した遺構の一つである。308は、近江系受口甕の流れを引くものと見られ、受部が長く上方へ伸びる。ただし、外面に刺突等は見られない。309は口縁部が外反して丸く収まり、やや新相を呈するが、上層の出土のため混入品の可能性もある。319はいわゆる「御経塚ツカダ」タイプの高杯である。脚部が長く、透かし穴も長方形配置の4方透かしである。320の器台は、器壁が薄くてシャープである。321の器台脚部も、319の脚部と良く似ており、透かし穴は長方形配置の4方透かしである。312の壺は頸部が太く、古相を呈する。SK49の土器群は遺跡内でも古相に位置付けられ、7期に比定することができる。

SK36 SI01の埋没後、SI01の覆土を切る形で掘り込まれている。326の甕は、口縁部が長く大きく外反して伸びる。328や329の鉢は8期以降に認められるもので、329は9期の所産と見られる。SI01との切り合い関係や、土器の様相から判断して、SK36出土の土器群は9期に位置付けることができる。

SK03 SI01と切り合い関係を有し、SI01の埋没後に掘削されている。332の甕は口縁部が大きく外反し、端部は丸く収束する。335の甕も、口縁部が大きく外反しながら伸びる。そのほかの甕は、単純に「く」の字に外反して端部が丸く収まるものが多い。348は山陰系の直口壺と見られ、やや古相を呈するが小破片である。352も同様に古相を呈するが、小破片である。古相の様相を呈する土器片も散見されるが、総じてSK03の土器群は9期の所産と判断することができる。SI01との新旧関係も、矛盾をきたさない。

SD14 SI07(SD13)と切り合い関係を有し、SI07よりも古く構築されている。甕の口縁部は365のように有段口縁が形骸化したものや、端部が明瞭に面取りやつまみ上げされたものが多く、総じて古相を呈する。甕の底部はいずれも小さな平底である。段部が明瞭な二重口縁の壺(372)や、端部が折り返されて突帯状に巡る壺(373)、蓋(375)や有段の器台(378)など、古相を呈するものが多い。6～7期頃に位置付けられ、SI07出土の土器との年代観や切り合い関係とも、矛盾をきたさない。

SD04(田河川) SD04は、集落の東端部の境界でもある。大きく「川底付近」と「覆土最上～上層」の2群に分けた。「川底付近」では、比較的焼成が良好で堅緻な土器が出土している。416の甕は2-A区出土である。口縁端部は面取りが施され、底部は大きな平底である。421の器台は器壁が厚く、しっかりとした作りである。420の器台は受部が深い。422の器台脚部は、脚が長く外面のヘラミガキも丁寧で、焼成も良好である。

一方、「覆土最上～上層」出土の土器群は、405のように丸く収まる単純口縁の甕や、406のように丸底を呈する甕、414のように小さく形骸化した3方透かしと見られる透かし穴を有する器台など、新相を呈するものが多い。なお、413は脚部が薄く形骸化した器台であるが、摩滅が著しく、上流域からの流入品である可能性も指摘できる。

「川底付近」と「覆土最上～上層」の土器群の間には、明らかに時期差が見てとれる。「川底付近」は7期前後、覆土最上～上層は9～10期頃と見られ、集落内における遺構の年代観の幅と大差ないことが分かる。

以上、遺構出土の主要な土器群の編年観を表すと第22表のとおりとなる。

南押上遺跡の古墳時代前期における遺構出土土器群は、最も古いもので6期、新しいもので10期の年代観を与えることができる。大型の竪穴建物S101は7期に比定されるが、床が貼り替えられていることを勘案すると、それ以前に構築された可能性も指摘できる。それとはほぼ同時期の7～8期には、S104・05等の平地建物が存在した。切り合い関係で8期のSK33より古く、S105と壁面方向をそ

編年 [確定2005]	主要土器群出土遺構
6期	SK27・SD14
7期	S101(覆土下層～床面直上)・S104・S105 SK37・SK49・SD04(川底付近)
8期	S107・SK23・SK33
9期	SK03・SK04・SK34・SK36 SD04(覆土最上～上層) S101(覆土最上～上層)
10期	SK05・SK12

第22表 遺構出土主要土器群の編年観

える掘立柱建物SB07もまた、ほぼ同時期の所産であろう。ただし、同じ掘立柱建物のSB04は、9期のSK34より切り合い関係で新しく、出土した土器の様相からも9期以降の所産と判断できる。また、平地建物の中にも、切り合い関係を有するものや、長軸方向を造るものも認められる。このように、掘立柱建物や平地建物については、すべてが同時期の所産ではなく、時期差を認めることができる。そのほかの竪穴建物の内、S102については出土した土器やヒスイ製勾玉未成品の様相等から、S101とはほぼ同時期の年代が与えられる。また、S103についてもS101覆土下層出土の土器(58)がS103覆土最上層出土の土器と遺構間接合していることから、S101と同時期か、それより古い年代が与えられる可能性がある。土坑内出土の土器群では、6期のSK27、7期のSK49のように古相を呈するものがある一方、9期のSK34・04・36・03、10期のSK12・05など新相を呈するものも多い。7期のSK49は長軸方向をS101の南壁にほぼ揃えており、有機的な関連性もうかがえる。溝については、SD14が6～7期と古相を呈し、旧河川(SD04)の川底付近出土土器群もまた7期の所産と判断できる。

以上の様相から、南押上遺跡では遅くとも7期の段階までには、河川に沿ったこの地に竪穴建物や平地建物・掘立柱建物が構築され、集落が形成されたものと見られる。その後、時期が下るにつれて掘立柱建物等の建て替えが進み、新相の土器群が廃棄される土坑もまた数多く掘削されたものと見られる。

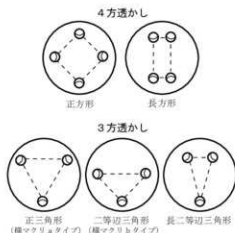
なお、玉作関連遺物は6期の段階では不明な点も多いが、7～10期にはいずれの遺構からも出土していることから、集落が形成されてから廃絶するまでの間、ほぼ連続とこの地で玉類の生産が行われ続けてきた様相をうかがうことができる。

B 器台・高杯脚部の透かし穴の変遷

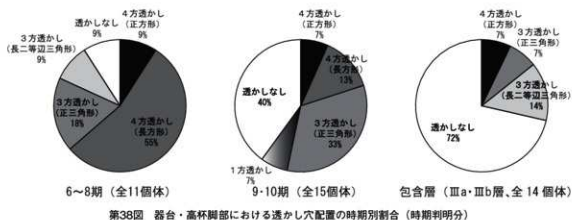
南押上遺跡では、遺構内外から多くの器台や高杯が出土している。これらの器台や高杯の脚部には、円形の透かし穴が施されるものが多い。同じ糸魚川市内の横マクリ遺跡では、高杯や器台の脚部に3方向の透かし穴が施されたものが多く出土している。これらは、上面から見て3等分されるものと二等辺三角形を呈するものの2種があり(第37図)、特に後者については正面性が強く意識されている可能性が指摘されている[渡邊2008]。

南押上遺跡においては、横マクリ遺跡と同じ古墳時代前期の土器が主体であるが、3方透かしのもの

けではなく、4方透かしのもも多く出土している。また、同じ4方透かしでも整った正方形に配置されるものよりも、長方形に配置されたものが目立つ。これら長方形配置の透かし穴は、8期以前の土器群に多く認められ、9期以降の土器群では3方以下の透かしが主流になるようである（第38図）。換言すると、南押上遺跡では長方形配置の4方透かしが相対的に古相を示し、時期が下り、新相を呈するにつれて3方以下の透かしへと変化するようである。横マクリ遺跡出土の土器群は8・9期に比定されており〔渡邊 2008〕、透かし穴の数の上では南押上遺跡の9期以降の様相に近い。ただし、周辺の笛吹田遺跡¹⁾〔山岸 2005・2006〕や六反田南遺跡〔春日ほか 2008〕で7期以前の土器群が出土しているものの、必ずしも長方形配置の透かし穴が施されるわけではないようである。これらの違いは、時間的な差によるものなのか、あるいは土器を作成・使用する集団の差（地域性）によるものなのか、周辺地域の様相も含めて今後さらに検討が必要である。



第37図 器台・高杯脚部の透かし穴配置



C 底部に平行葉脈圧痕を有する土器について（図版 47・109 - 214）

南押上遺跡では、底部外面に笹の葉状の葉脈痕が認められる土器（214）が1点、SK07から出土した。器種は、内面の黒斑の様相から小型の壺と見られる。このような笹の葉状の葉脈痕は、いわゆる「平行葉脈圧痕」と呼ばれるものである。〔相田 2009〕によると、古墳時代～古代における同種の土器は、本州では分布が日本海側に偏る傾向にあり、おおむね弥彦・角田山麓周辺を南限域として阿賀野川流域及び阿賀野川以北に広がる状況が見てとれるという。新潟県内における古墳時代前期の遺構出土例としては、新潟市の角田山麓に位置する南赤坂遺跡で4個体確認されており〔相田 2002〕、新潟シンボ編年の8～10期に収まる資料とされている〔相田 2009〕。南押上遺跡出土の214は、SK07が9期のSK04とSD37を介して一連の遺構である可能性も考慮すると、南赤坂例とほぼ同時期の所産と見られる。南押上遺跡の玉作集落に住む人々が、幅広い地域との交流を有していたことを示す一つの証拠ともいえ、注目される。

1) 糸魚川市長者ヶ原考古館にて資料を実現させていただいた。

2 南押上遺跡における古墳時代前期の玉作について

糸魚川市域ではヒスイや滑石、蛇紋岩などを産出することから、古来から玉作が盛んに行われてきた。その初源は、現時点において縄文時代前期の大角地遺跡にさかのぼることができる。その後、長者ヶ原遺跡（縄文時代中期）・寺地遺跡（縄文時代中・晩期）・細池遺跡（縄文時代晩期）など多くの遺跡で玉の製作が行われてきた。弥生時代になると、大塚遺跡（弥生時代前期）・後生山遺跡（弥生時代後期）に認められるのみで遺跡数は極端に減少する。しかし、古墳時代になり再び玉の製作は活性化し、横マクリ遺跡（古墳時代前期）・笛吹田遺跡（古墳時代前～中期）・姫御前遺跡（古墳時代前～中期）・六反田南遺跡（古墳時代前～後期）など、多くの遺跡で玉作が行われるようになる。南押上遺跡もその内の一つである。南押上遺跡では主に勾玉・管玉・環玉を製作していることが、出土した成品・未成品から明らかになっている。

本項では、それらの成品・未成品を通して、南押上遺跡における古墳時代前期の玉作工程の復元を行う。

A 勾玉の製作

新潟県内で古墳時代における勾玉の製作遺跡は、類例がそれほど多くない。周辺地域で主要なものとしては、糸魚川市の大角地遺跡（古墳時代前期～後期）や笛吹田遺跡（古墳時代前～中期）、富山県朝日町の浜山遺跡（古墳時代中～後期）が挙げられる。そのほかは小規模な生産が見られるのみである。

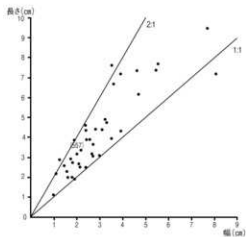
勾玉の成品・未成品は、各遺構内のほか、Ⅲb・Ⅳa層からも出土し、231点を数える（第23表）。平面分布的には広い範囲で出土するが、特にS101周辺にまとまって見られる。

勾玉の製作工程は大角地遺跡のいわゆる「オガクチ技法」があげられるが〔寺村1966〕、その工程と比較しながら次のように整理したい。また各説にて分類した1～8類は、そのまま第1～8工程として位置付け、それぞれを対応させて考えたい（第40図）。

第1工程 原石の採集・素材の獲得段階（大角地遺跡の採石段階） 遺跡内にはヒスイの原石がまばらに出土しているが、これらがすべて勾玉の製作工程に直結するかは判然としない。しかし、本遺跡におけるヒスイの使用は、勾玉の製作と一部の敲石にしか認められない。したがってヒスイの大部分は勾玉製作を目的としたものと判断できる。素材際には557のような2～5cm四方、長幅比1:1～2:1のものが目立つ（第39図）。このこと




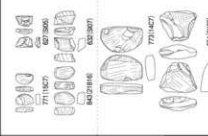









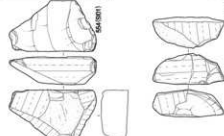

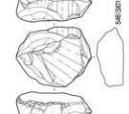










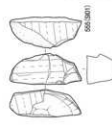
	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	成品	合計
S801	7	3	8	6	22	9	5	1	61
S802				1	1	3	1	1	7
S804	2				3		1		6
S805					2			1	3
S807			1	1					2
S10				1					1
SK02					1				1
SK03			1	3		1			5
SK04				2	2				4
SK05				1	1				2
SK06	2		1	1				1	5
SK08						2			2
SK09	1				2	1			4
SK11	1								1
SK12				1					1
SK15						1			1
SK19					2	1			3
SK23	1								1
SK33					3				3
SK34	1				2		1		4
SK35						1			1
SK36					1	1			2
SK49						1	2		3
SD04	4		1	1	7	1	2		16
SD14			1						1
SD30				1					1
SD37						1			1
SD47				1					1
P		6	2						8
延合棟	36		2	4	26	7	3	2	80
合計	61	3	17	13	84	33	13	7	231

第23表 勾玉・未成品出土数



第39図 ヒスイ原石の長幅分布

2 南押上遺跡における古墳時代前期の玉作について

第1工程 (原石)	第2工程(2類) (荒割)	第3工程(3類) (形削)	第4工程(4類) (微調整削磨)	第5工程(5類) (研磨)	第6工程(6類) (内磨)	第7工程 (穿孔)	成品						
ヒスイ製分玉A類(小割)													
ヒスイ製分玉B・C類(中割〜大割)													
滑石製分玉													

から小型礫を素材とし、荒削工程を省いて直接研磨を開始する勾玉の製作工程も想定できる。一方、蛇紋岩や滑石は、遺跡内に原石を見ることができず、それぞれ獲得手段の違いが考えられる。

第2工程 荒削段階（大角地遺跡の荒削段階） 原石から、勾玉に手頃な大きさの剥片を得る。ヒスイではこの際、火入れなどの痕跡は認められない。縦長・横長の意識はそれほど見られず、節理にしたがった剥離がうかがえる。また633・669に見られるように両極加撃も行われており、素材剥片の獲得は礫の特徴に合わせて流動的に行われたと考えられる。この段階の資料は、破損していない限り次段階へと進行するため、出土量は少ない。ヒスイ以外の軟質石材では、資料数が少なく検討が困難であるが、ヒスイと同様の手法をとっていたと推定される。遺跡内に見られる比較的大きな剥片はこの工程で生じたものと考えられる。

第3工程 形削段階（大角地遺跡の形削段階） 第2工程で得られた剥片に大きな剥離を施す。平面形が三角形を呈するものが多い。552のように、勾玉の腹部側になる面は平坦に剥離される。

第4工程 微調整剥離段階（大角地遺跡の微調整剥離段階） 形削によって成形された剥片に微細な剥離を施し、勾玉の形状により近付ける工程である。特に平面側（表裏面）の剥離を入念に行い、研磨作業を円滑化する。滑石や蛇紋岩Aのような軟質素材では、剥離を制御することが困難であり、省略されることが想定される。

第5工程 研磨段階（大角地遺跡の研磨第1～3工程段階） 素材全体を研磨し、平面形を半月状に仕上げ上げる。この段階の資料が最も多く、ブランクとして保持された可能性が示唆される。ヒスイ以外の石材では、この段階の資料から急激に増加する。これは、この段階に至るまでの勾玉未成品の実態が不明瞭であるためである。おそらくヒスイと同一の工程を踏むと推定されるが、軟質素材の特徴を活かし、研磨作業に重きを置いている可能性が高い。この後の工程の未成品石材の比率から、本遺跡における勾玉製作はヒスイより軟質素材のものが大局を占めていたと考えられる。

第6工程 内磨段階（大角地遺跡の研磨第4工程段階） 半月状に仕上げられた未成品の腹部に挟りを作り出す段階である。勾玉未成品と内磨砥石の平面的な分布が共通し、両者には密接な関係が認められることから、従来考えられているとおり内磨砥石を用いた形成過程が想定される〔寺村1969〕。なお、この段階に先行して穿孔されるもの（531・768等）も数点認められる。これは、穿孔が勾玉のおおまかな形状が形成された時点で流動的に行われていた〔加藤2008〕ことを示すものである。ただし、特定の大きさや石材などに起因するものではないようであり、その実態は判然としない。

第7工程 穿孔段階（大角地遺跡の穿孔段階） 勾玉の形状を形成したものに穿孔する工程である。穿孔は薄いものを除き、両面穿孔される。なお、穿孔に使用された工具が出土していないため明確ではないが、いずれの孔径も比較的細く鋭利で、画一的なことから鉄針が用いられたと推測できる。

第8工程 仕上げ段階（大角地遺跡の仕上げ段階） 製作工程により生じた微細な研磨痕などをすべて除去する工程で、ここに至って成品となる。穿孔を施した段階で製作のリスクはほとんどなくなり、成品になる可能性が非常に高い。よって遺跡外に搬出される可能性が最も高いといえる。微細な研磨痕は、遺跡内に残存している砂岩製の砥石では除去することがほぼ不可能であり、この工程では従来言われるような木紙や革などの有機質の仕上げ紙が使用されたと考えられる〔藤田1983〕。

本遺跡における勾玉の製作工程は、成品・未成品の大小、石材を問わず同一の工程をたどることができる。なお、弥生時代中期～古墳時代前期のヒスイ製勾玉の製作については素材剥片獲得（本遺跡第3～4工程に相当）の際に、擦切りを用いる例が多いとされる〔高橋2005b〕。周辺遺跡の大角地遺跡、笛吹田遺跡、

横マクリ遺跡において、擦切りを用いて獲得したヒスイ剥片が出土している。しかし、本遺跡では擦切りを用いることなく、節理を利用してヒスイ剥片を剥取している。本遺跡のような剥離方法は浜山遺跡（古墳時代中～後期）などのヒスイ剥片に見ることができ、この点についてはヒスイ以外の石材も含めて浜山遺跡や三ツ又遺跡（古墳時代中期）、田伏遺跡（古墳時代中～後期）などの後出的な勾玉未成品と比較検討を要すると考えられる。

また、勾玉腹部の作出の際、「中島技法」〔寺村 1966〕では半月状に仕上げられた未成品に剥離調整を加えた後、研磨を行うのに対し、本遺跡のものは剥離を与えずに一挙に研磨を実施している。このことから、いわゆる「オガクチ技法」と共通した様相が見られる。勾玉製作一連の流れを比較しても、本遺跡の製作方法はまさにオガクチ技法の典型的な製作パターンとして見ることができよう¹⁾。

B 管玉の製作

新潟県内における、古墳時代前期の管玉製作遺跡はそれほど多くはない。その中で糸魚川市苗吹田遺跡、柏崎市行塚遺跡、長岡市五千石遺跡〔加藤ほか 2009〕、新潟市（旧巻町）越玉遺跡〔寺村 1986・若月 1994〕、南赤坂遺跡〔前山・相田 2002〕、胎内市天野遺跡〔水澤 2009〕などが知られる。特に行塚遺跡では、石核～成品に至る一連の管玉製作資料が出土したことから、柏崎市下谷地遺跡〔斎藤 1979〕出土の弥生時代中期の管玉製作資料との比較を行い、古墳時代前期における管玉製作工程の復元が行われている〔伊藤 1985〕。

本遺跡から出土する管玉の成品・未成品は、いずれも緑色凝灰岩 A・B・C が用いられている。また、この石材は、ほかの石器・石製品には全く使用されていないことも明らかである。したがって、本遺跡で出土した剥片・チップを含む緑色凝灰岩のすべてを、管玉の製作に関連した遺物としてとらえることができる。管玉の未成品は、各遺構内のほか、Ⅲb・Ⅳa 層からも出土し、140 点を数える（第 24 表）。平面分布的には広い範囲で出土するが、特に SI01、SD04、SK34 周辺でまとまって見られる。

管玉の製作工程は、行塚遺跡の工程と比較しながら次のように整理した。また各説にて分類した 1～8 類は、そのまま第 1～8 工程として位置付け、それぞれを対応させて考える（第 41 図）。

第 1 工程 原石・石核獲得段階（行塚遺跡の第 1 段階 A 類石核） 本遺跡では緑色凝灰岩の原石を認めることができず、この段階の復元は困難である。852 は比較的加工されていない石核状態である。820～822 の接合資料は接合の結果、大型剥片に戻り、852 とほぼ同一の大きさの石核になる。遺跡内には礫面をもつ緑色凝灰岩の剥片が少ない。このことから、この段階では緑色凝灰岩が準大の石核状態として遺跡内に搬入されたことが示唆される。

	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	成品	合計
SI01		1	1	2	4	1	8		17
SI02						2			4
SI03				1					1
SI04							1		1
SI05				4					4
SI07			1		1				2
SI10							1		1
SK02				1					1
SK03				3					3
SK04				1				1	2
SK05				1					1
SK06		1			1				2
SK07					1				1
SK08			1						1
SK09			2						2
SK12				1					1
SK21							1		1
SK23							1		1
SK24		2	1	4	1				8
SK26							1		1
SK27							2		2
SD04		1	1	3	3	2	4		14
SI24					1				1
SI30			2	1					3
SI37					1		2		3
SD47						1	1		2
P		1	1	1	1	1			5
泓合類	1	7	9	12	14	5	7		56
合計	1	13	24	32	28	12	29	1	140

第24表 管玉・未成品出土数

1) ヒスイ製勾玉の製作工程復元においては、寺村光晴氏に資料を実現していただき、御教示をいただいた。

第2工程 荒削段階（行塚遺跡の第1段階B類石核） 遺跡内に持ち込まれた石核を打撃により分割する工程である。この際、剥取された剥片の幅が、次工程の最大長になることから、目的とする管玉の大きさをすでに意識した剥離が行われていたと想定される。そのため剥離調整により幅を制限したのが見られる。また主要剥離面には複数のバルブが発達するものと、ほとんど確認できないものの二者がある。前者は両極加撃がなされていることから、台石と敲石を用いた反復加撃による打割と考えられる。後者は比較的軟質なハンマーを用いた可能性を指摘できる。また、前者が大型・中型、後者が小型の製作工程品にそれぞれ多く見られることから、目的物の特徴に応じた剥離作業を行っていたと想定される。

第3工程 形削段階（行塚遺跡の第2段階） この段階では、横断面がどれだけ方形に近づけられるかを意識して剥離を行う。つまり、主要剥離面と作業面をどれだけ平行にできるか、打角を直角に近づけるかを主眼としている。わずかに作業面の調整が行われていることが観察できる。これは素材を方形に保つためである。主要剥離面の形状は、凹凸が少なく比較的平坦であり、バルブも不明瞭である。この特徴は「盤状工具」などの金属器を用いた際の剥離面に近似する〔馬場 2000〕。

第4工程 側面剥離段階1（行塚遺跡の第3段階） 形削により得られた剥片に対して、大きな剥離調整で四角柱状に仕上げる。横断面は方形～台形を呈する。また上下端は複数回の剥離で成形され、ほぼ平行になる。この段階で最大長がおおむね確定される。

第5工程 側面剥離段階2（行塚遺跡の第3段階） 第4工程でおおむね仕上げられたものに、微細な剥離調整を施し、整形する。この段階で横断面は長方形ないし正方形を呈する。

第6工程 研磨段階（行塚遺跡の第4・5段階） 研磨が進行し、横断面が円形に近い多角柱状に形成されたもの。同時に上下端部も平坦に研磨される。ただし、741のように正方形の角柱状に仕上げられたものに穿孔された例もあり、この段階で必ずしも多角柱状に仕上げられたのではないと考えられる。研磨は長軸に平行するものや、直交するもの、器体に対して斜めに施されるものがあるが、長軸に平行したものが最も多い。

第7工程 穿孔段階（行塚遺跡の第6段階） 第6工程の多角柱状のものに穿孔を施す。636を除いてすべて両面穿孔である。いずれの穿孔段階資料も同等の孔径であり、同一形状の工具を用いたと考えられる。

第8工程 仕上げ段階（行塚遺跡の第7段階） 穿孔された未成品を完全に磨く作業である。この段階は本遺跡における成品が661の一点のみで判然としない。しかし、他遺跡の事例を見ると、成品には必ず最終研磨が行われていることから、最終工程として仕上げ研磨が存在することは明確である。勾玉同様の作業工程中に生じた微細な研磨痕はすべて除去される。

管玉製作の一連の流れは、柏崎市行塚遺跡で検討されているものとおおむね共通している。しかし、荒削～形削に至る段階の資料において、行塚遺跡では一様に横長剥片であるのに対し、本遺跡では作業面に打面転移が認められる剥片や縦長剥片などの、調整剥片を用いたものが見られる。ここに本遺跡と行塚遺跡の相違点を認めることができる。また、行塚遺跡では石核段階のものに礫面を伴うものが多いことから、原礫を搬入している状況がうかがえる。この様相が、荒削～形削工程に若干の相違をもたらしていると考えられる。ただし、側面剥離から後の工程、そして目的物の形態差などを勘案すると、おおむね同一の技法上に位置付けられる。また近隣の姫御前遺跡で出土している緑色凝灰岩においても「直方体の石核から寸詰まりな素材剥片を得る過程は、柏崎市行塚遺跡出土例に共通する」〔加藤 2008〕とあるように、同一の剥離方法として考えられている。このことから、これらの遺跡で見られる製作方法は新潟県域にて一般的に行われた製作技法として位置付けられよう。

C 藁玉の製作

藁玉を製作している遺跡は、現時点では南押上遺跡を除き、新潟県内では認めることができず、全国的に見ても希少である。ただし、糸魚川市横マクリ遺跡（古墳時代前期）にて小型の管玉未成品として報告されているもの〔桑原 2008〕が、本遺跡の藁玉未成品の形態に類似しており、藁玉の製作工程品である可能性を指摘することができる。

本遺跡出土の藁玉未成品の特徴として、寸胴な形状を呈し、管玉未成品とは明らかに形態が違うこと、石材が蛇紋岩 A や滑石 B の軟質素材に特化していることがあげられる。このため管玉と藁玉は分けて考えることができる。

藁玉の未成品はほかの玉と同様に、各遺構内のほか、Ⅲb・Ⅳa 層からも出土し、99 点を数える（第 25 表）。特に、Ⅲb 層や SI01 の上層に多く認められる。平面分布的には広い範囲で出土するが、とりわけ SI01 周辺にまとまって見られる。

ここでは、横マクリ遺跡の「管玉」製作工程〔桑原 2008〕と比較しながら、次のように整理を行う。また各説にて分類した 1～3 類はそのまま第 4～6 工程として位置付け、それぞれを対応させて考える（第 42 図）。

第 1 工程 原石の採集・素材の獲得段階

藁玉の素材を持ち込む段階である。藁玉には石材として蛇紋岩 A、滑石 B が用いられている。これは、軟質素材を用いた勾玉の石材と共通する。本遺跡からこれらの原石は出土していないが、拳程度の大型の剥片が見られる。このことから、緑色凝灰岩と同様に大型の剥片状態で搬入された可能性が高いと考えられる。

	1類	2類	成品	合計
SI01	7	9	2	18
SI02	3	4		7
SI03	2	2		4
SI03			1	1
SK03	2	2		4
SK04	1			1
SK05	1	1		2
SK06	1			1
SK09		1		1
SK19		1		1
SK33		3		3
SK34	1	1	1	3
SK36		2		2
SK45	1			1
SK46	1			1
SK49	3	2		5
SD04	6	8	1	15
SD06		1		1
SD37	1	1		2
P	1			1
包含層	15	9	1	25
合計	66	47	6	99

第 25 表 藁玉・未成品出土数

	第 1 工程 (原石・石核)	第 2 工程 (荒削)	第 3 工程 (形削・剥離)	第 4 工程 (1 類) (研 磨)	第 5 工程 (2 類) (穿 孔)	成 品
南押上遺跡	<大型剥片>	<剥 片>	<調整剥離のある剥片>			
滑石製藁玉	<大型剥片>	<剥 片>	<調整剥離のある剥片>			
横マクリ遺跡	<原石打割 ⇒ 素材剥片選択>					

※ 横マクリ遺跡の器種名・報告No. は原典表記に準ずる

第 42 図 藁玉の製作工程 (S = 1 : 3)

第2工程 荒割段階(横マクリ遺跡の原石打割段階) 大型の剥片から小型の剥片を剥取る段階である。その際、目的とする剥片を意図して剥離するのではなく、荒割した手ごころな剥片を選択して製作に利用していると考えられる。そのため、玉製作に用いられなかった剥片が遺跡内に多く分布している。薬玉製作には比較的小型の剥片を利用すると想定され、この段階で勾玉の素材と分別されることになる。

第3工程 調整剥離段階(横マクリ遺跡の素材剥片選択～研磨段階) 手頃な大きさの剥片に剥離を加えて、寸胴な形に成形する段階である。ただし、剥離の制限が困難な軟質石材を利用しているため、この段階に重要性があったかは判然としない。横マクリ遺跡では、「剥離による細部調整が困難と推定され(中略)、この工程は存在しなかった」と考えられている。本遺跡では、次工程の研磨塗上資料に二次的な剥離痕が度々見られることから、その存在は認められる。しかし、管玉の側面調整のような微細剥離を行っていた可能性は低いと考えられる。

第4工程 研磨段階(横マクリ遺跡の研磨段階) 寸胴に成形された剥片に研磨を施し、薬玉の大まかな形を作り出す。この段階の資料は、成品の形状を踏まえて器体中間部分がやや膨張する「樽」のような形態を呈する。なお、管玉は研磨痕が単一方向に平行するが、薬玉は複数方向の研磨痕をもつ特徴がある。これは、形態を樽状に仕上げることに起因するものである。また、上下端部は平行に仕上げられる。

第5工程 穿孔段階(横マクリ遺跡の穿孔段階) 研磨された素材を穿孔する段階である。穿孔途中で破損した資料が多く、ほかの玉同様にリスクを伴う作業と考えられる。穿孔は、小型品だがすべて両面穿孔で、ほかの玉と共通する。破断面の観察により、おおよそ中間部まで穿孔した後、反転させて対面から再び穿孔を行う。孔径の多くはほかの玉とほぼ同様の大きさであるが、まれに大小の差も認められる。

第6工程 仕上げ段階(横マクリ遺跡の仕上げ段階) 穿孔された資料に研磨をかけて、身の中心が幅広となるように、また場合によっては体部中央に緩やかな横位の稜を持つように仕上げられる。微細な研磨痕は除去される。いずれの資料においても、穿孔された段階のものより細身な形態になる。これは管玉の最終工程にも見られることであるが、長軸方向の稜線を完全に消すと共に、穿孔部分が器体の中心となるよう入念な研磨を行うためである。

薬玉の製作は以上のように整理される。

D 小 結

ここで、各工程の概略と今後の展望をまとめる。勾玉の製作技法は撞切りを伴わない点で、周辺遺跡の大角地遺跡や笛吹田遺跡とは異なり、後出の古墳時代前期末～中期の資料との比較が必要である。管玉は行塚遺跡と同様の製作技法である。在地的な技法としてとらえられるか、新潟県内出土の資料と比較・検討が必要である。薬玉は横マクリ遺跡の事例と類似しており、石材も郷川流域に産することを鑑みると糸魚川市域で追加発見の可能性は十分にある。なお、ここでは詳しく言及できなかったが、薬玉の成品・未成品の多くは古墳時代前期でも新相を呈する土器を伴う遺構や包含層中から出土していることから、わずかに後出的である可能性もある。ほかの玉も含めて時期の検討は十分にしていかなければならない。

また、予察ではあるが、鉄石英やチャートは台石と大型敲石を用いて、研磨剤に加工されていたことが想定できる。本遺跡でも、これらの微細粒や砂粒が多数出土している。平田遺跡〔坂上ほか2000〕や下馬場遺跡〔尾崎2005〕では玉製作と直結しないメノウや玉髄が出土しており、台石や敲石によって研磨剤を獲得したと想定されている。今後さらなる詳細な分析が必要となるだろう。

3 総 括

南押上遺跡では、古墳時代前期中葉～後葉を中心とする玉作集落の存在が明らかとなり、近隣の笛吹田遺跡や横マクリ遺跡などととも、周辺地域一帯が古墳時代前期における玉の主要な生産地であったことが裏付けられた。とりわけ、この時期のヒスイに関する玉作遺跡は、北陸地域はもちろん、東日本全域においても調査例がそれほど多くなく、貴重な事例といえる。

集落内で生産された玉には、勾玉、管玉、それに薬玉がある。勾玉は、糸魚川を代表するヒスイをはじめ、蛇紋岩・滑石等を用いた生産が行われていた。中でもヒスイの勾玉は、S101を中心に一連の製作工程資料が出土し、注目される。勾玉の製作技法は、寺村光晴氏により提唱された「オガクチ技法」〔寺村1966〕そのものであり、周辺地域における勾玉生産技術の伝播や生産者集団の分布を知る上でも重要な資料といえる。また、本遺跡から出土したヒスイの勾玉未成品には、いわゆる「擦切り溝」が伴わないことから、技術的にやや新相を呈する可能性を指摘することもできる。ヒスイ勾玉製作技術の転換期、過渡期に相当する可能性もあり、遺構の時期とも関連して興味深い事実といえる。

管玉は、法量の点から小型（A類）・中型（B類）・大型（C類）の3種に分類できた。石材は、硬質・軟質の緑色凝灰岩が用いられており、軟質の緑色凝灰岩にはシルト質が強く風化が著しいもの（流紋岩系）と、粒子が粗く組織が脆いもの（安山岩系）の2種が認められた。いずれも、糸魚川周辺地域では原産地が確認されておらず、石材そのものは他地域からの搬入品と見られる。製作技法の点では、周辺地域における同時期の管玉製作技法と細部ではやや異なるもの、おおむね共通していることも明らかとなった。

薬玉は、生産遺跡が全国的にも少なく、今回の調査で出土した多数の製作工程品は極めて重要な出土例といえる。蛇紋岩製のものや滑石製のものがあり、ほとんどが長さ1cm未満・幅7mm前後の小型のものである。形態的には細身のものや、やや太身のもの2種がある。ヒスイ製のものや、矢羽根状の文様等は認められない。近隣の横マクリ遺跡でも同様の未成品が出土しており、今後周辺地域における類例は増加するものと見られる。出土層位から、古墳時代前期後葉を中心に薬玉の製作が行われた可能性が高い。薬玉生産遺跡としては、全国的に見ても古段階に位置付けられる可能性があり、注目される。

このほか、チャートや鉄石英・石英・メノウといった様々な石材も数多く出土しており、各石材の原産地との交流も活発であったものと見られる。また、玉類の生産を裏付ける砥石や工具類も多数出土していることから、玉類の生産が盛んになされていた様相がうかがえる。

出土した遺物の内もう一点、注目されるのは大量の土器類である。遺構内からも多数出土しており、遺構や遺跡の時期を知る上で大きな役割を果たすものとなった。わずかではあるが、弥生土器集中遺構等から法仏式の土器が出土しており、弥生時代後期段階から人々の生活の痕跡が認められる。そして、古墳時代前期中葉から後葉にかけて爆発的に土器の出土量が増大する。出土した土器の様相から、玉作集落は古墳時代前期中葉から後葉まで100年近くの間存続していたものと推測される。その後、古墳時代中期段階に至ると該期の土器は激減し、遺構もほぼ皆無となる。古墳時代前期末葉段階で、何らかの理由で集落の移転、あるいは廃絶等の大きな動きがあったものと推測できる。なお、3区では少量であるが古墳時代後期以降の遺物も出土していることから、周辺地域では引き続き人々の生活が営まれていたのであろう。

古墳時代前期の土器においては、畿内色の強いもののほかに、在地色の強い土器が多く見られる点が特徴される。また、東海系の土器や近江系の土器、それに北日本に多く見られるとされる底部平行葉脈瓦葺

の土器なども出土しており、日本海や陸路を通して幅広い地域との交流があったものと推測できる。

このほか、2区を中心に多数の遺構が密集して検出された点も注目できる。遺構には、堅穴建物のほか、平地建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピットなどが検出された。

この内、SI01は南北約7.8m×東西約7.0mの大型の堅穴建物で、新潟県内における古墳時代前期の堅穴建物としては村上市下新保高田遺跡のSI327(8.86m×8.68m)〔青木¹⁴2010〕に次ぐ規模である。銅鐵が出土した佐渡市の浜田遺跡第1号住居址(約7.2×約7.4m)〔本間・関・本間1975〕ともほぼ同規模であり、越後では大型の部類に属する。建物床面のほぼ中央には、全国的にも極めて珍しい古墳時代前期の石囲炉が設置されていた。古墳時代の石囲炉は、新潟県内では初の確認例となる。石囲炉内部の炭化物の年代測定の結果、4世紀代を中心とする暦年代が推定され、土器の年代観ともおおむね一致した点で重要である。また、建物の東壁沿いには工作用特殊ピットの可能性がある屋内土坑を検出した。古墳時代前期の玉作遺跡として著名な石川原山津遺跡〔大場¹⁵1963〕の第三・四・六号住居址で確認された「工作用二重孔」と、ほぼ同規模・同形状のものである。近年では、同じ新潟県内の玉作遺跡である長岡市五千石遺跡〔加藤¹⁶2009〕でも、同様の屋内土坑が検出されている。大型の建物という点と、石囲炉等の特殊な施設が設けられていることから、集落の中核的な建物であったものと見られる。玉作関連資料も多数出土していることから、集落内の有力者の住まいか、あるいは共同作業場的な機能が想起される。

今回は詳しく触れなかったが、複数の平地建物にも注目される。その多くが一辺5～6mの長方形を呈しており、長軸がほぼ真北を向いている。堅穴建物との切り合いは認められず、出土した土器からは堅穴建物と併存する時期にも機能していたようである。古墳時代前期段階におけるこのような遺構の類例は、近隣の横マクリ遺跡〔渡邊¹⁷2008〕や六反田南遺跡〔春日¹⁸2008〕でも確認されている。また、佐渡市壺場遺跡〔鹿取・佐治2007〕や帆柱川遺跡〔鹿取・本間2004〕でも同様の遺構が多数確認されている。これらのすべてが南押上遺跡と同様の平地建物であったかは断定できないが、地理的・時間的にも近い遺跡であり、当時周辺地域における代表的な建築様式の一つであった可能性も指摘できよう。

掘立柱建物は、いずれも長軸方向をほぼ東西方向にそろえており、その配置には計画性がうかがえる。また、SB08は落棟(下屋)状の施設が付随していたものと見られ、その系譜等も注目される。

堅穴建物和平地建物、それに掘立柱建物は一部で切り合い関係が認められることから、すべてが同時に併存していたわけではない。しかし、いずれも方角を意識して整然と配置されていることから、玉作集落は有力者の指導のもと、計画的に設置されたものと推測することができる。

今回の調査で、遺跡の東西方向における範囲をほぼ確定することができた。東端部は地面が急傾斜に落ち込んでおり、そこには旧河川が存在していた。その河川は、そのまま東方を流れる海川の氾濫原へと続いている。旧河川沿いには小ピットが多数認められ、転落防止、あるいは防御用の柵状の施設が存在したものと推測できる。一方、集落の西端は緩やかに傾斜して下った後、自然地形の高まりに沿って低地部が存在していた。この低地部からは、多数の自然木及び木製品・杭類が出土している。これらの木材の出土状態や土壌の自然科学分析の結果から、低地部は沼沢湿地的な環境であったものと推測された。本遺跡の玉作集団は、河川や沼等を集落の境界として意識・利用していた可能性が示唆される。

南押上遺跡は、東側を流れる海川の河口にも近く、現在の日本海までも約400mと至近距離にある。舟や船を用いて、石材や石製品、様々な物資を搬入・搬出するには好条件であったと推測できる。本遺跡は古墳時代前期中葉から後葉にかけて、周辺地域においても拠点的な玉作集落の一つであり、玉の主要な生産・出荷基地の役割を果たしていた可能性を提示することができよう。

要 約

- 1 南押上遺跡は、新潟県糸魚川市大字南押上2丁目ほかに所在する。糸魚川市街地が広がる沖積地に位置し、東方を流れる海川が形成した自然堤防上に立地する。遺跡の北方約400mには日本海が広がり、南方約500mには京ヶ峰から北へ伸びる丘陵が迫っている。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成20年度に実施した。調査面積は4,000㎡である。
- 3 遺跡は現地地表下約1.6mに存在し、遺構検出面の標高は4m前後である。
- 4 調査によって、弥生時代後期、古墳時代前期中葉～後葉、古墳時代中期及び後期、古代、中世、近世の遺物が出土した。主体を占めるのは古墳時代前期中葉～後葉の玉作関連遺物である。
- 5 出土した遺構は、堅穴建物3棟、平地建物10棟、掘立柱建物9棟、土坑44基、溝30条、ピット約450基である。これらのほとんどが古墳時代前期中葉～後葉にかけての所産と見られ、同時期に玉作集落が形成されていたことが判明した。
- 6 出土した遺物は、古墳時代前期中葉～後葉の土器及び玉の成品・未成品類、それに玉作の工具類が主体を占める。浅箱で約300箱分出土した。土器は小片が多いものの、遺構内からも多量に出土している。玉類は、400点近くの勾玉や管玉・粟玉の成品・未成品類をはじめ、多数の剥片・チップ類、それに少量ではあるがガラス玉や白玉なども出土している。石材には、地元糸魚川産のヒスイをはじめ、緑色凝灰岩、蛇紋岩、滑石、チャート、瑪瑙、石英等があり、種類に富む。また、玉の生産を示す筋砥石や内磨砥石、置砥石や軽石製研磨具、敲石や台石といった工具類も多数出土している。
- 7 古墳時代前期後葉の所産と見られる粟玉の成品・未成品が多数出土しており、その製作工程も判明した。粟玉の生産遺跡としては全国的にも類例が少なく、貴重な事例であるといえる。
- 8 玉作関連遺物のほかには、3区低地部を中心に大量の木片及び木製品、杭等が出土している。所属時期がはっきりとしないものが多いが、弥生時代後期～古代・中世にかけて幅広い時代・時期のものが含まれていると見られる。また、中世～近世にかけての陶磁器類や古銭・煙管等も、少数ではあるが包含層中から出土している。
- 9 S101(1号堅穴建物)は、南北約7.8m・東西約7.0mで、新潟県内における古墳時代前期の堅穴建物としては、大型の部類に属する。床面のほぼ中央部には、三方を石で囲んだ石囲が設置されていた。古墳時代の石囲は全国的にも極めて珍しく、新潟県内では初の確認例となる。また、建物の東壁沿いには、玉作に伴う工作用特殊ピットの可能性が指摘される屋内土坑も1基検出している。
- 10 大型の堅穴建物と並んで注目されるのは、複数の平地建物と掘立柱建物である。平地建物は、短辺が4～5m、長辺が5～6mで幅・深さともに30～50cm前後の浅い溝で囲まれた長方形を呈し、長軸をほぼ南北に向けている。掘立柱建物も、すべてが長軸方向を東西に向けている。これは、有力者の指導のもと、玉作集落を計画的に設置した可能性を示唆している。
- 11 多種多様な石材を用いた玉作が行われていることや、河川や海に近いという遺跡の立地からも、遠隔地との交流も活発であったものと推測される。本遺跡及びその周辺地域が、古墳時代前期中葉～後葉にかけての玉類の主要な生産・出荷基地の役割を果たしていた可能性を指摘することができる。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2002 「古墳時代Ⅱ-1 土師器」『南赤坂遺跡—縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査—』巻町教育委員会
- 相田泰臣 2009 「古墳時代の角田山麓と阿賀北における土器の様相—新潟市南赤坂遺跡を中心に—」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 青木重孝監修 1976 『糸魚川市史』Ⅰ 糸魚川市役所
- 青木 学^{はら} 2010 「下新保高田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第218集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青山博樹 1997 「東北部における古墳編年と土器編年の対応についての予察」『福島考古』38 福島県考古学会
- 赤澤徳明 2007 「北陸—これまでの研究と今後の展望—」『月刊考古学ジャーナル』2 No.554 ニューサイエンス社
- 赤塚次郎 1990 「V 考察 Ⅰ 廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 浅野良治 2008 「弥生時代後期から古墳時代における管玉生産の様相」『第6回日本玉文化研究会石川大会 北陸における弥生・古墳時代玉作の変革 発表要旨集』日本玉文化研究会
- 阿部朝衛 1989 「新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期」『北陸考古学』第2号 北越考古学研究会
- 荒川隆史 2004 「第Ⅳ章 遺構」『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史^{はら} 2004 「青田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一・千家和比古^{あは} 1978 『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 安藤文一 1981 「塚」『長者ヶ原遺跡範囲確認調査概要（第4次・第5次）』糸魚川市教育委員会
- 飯坂盛泰 2009 「山岸遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 糸魚川市史編さん委員会 1986 『糸魚川市史 資料集1 考古編』糸魚川市役所
- 伊藤恒彦 1985 「行塚遺跡出土の玉造り関連遺物について」『吉井遺跡群』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4 柏崎市教育委員会
- 伊藤雅文 2008a 「初期倭王権と玉」『王権と武器と信仰』同成社
- 伊藤雅文 2008b 「古墳時代の王権と地域社会』学生社
- 大賀克彦 2008 「総論 玉生産研究の現状と課題」『月刊考古学ジャーナル』1 No.567 ニューサイエンス社
- 大場啓雄編 1963 『加賀片山津玉造遺跡の研究』加賀市教育委員会
- 岡本淳一郎 2003 「『周溝をもつ建物』の基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集 辰気楼—秋山逸午先生古希記念—』同書刊行会
- 尾崎高宏 2005 「下馬場遺跡・榎田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1994 「第Ⅳ章 4. (3) 遺物各説」『一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅳ 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1998 「新潟城地域における古代の土器様相」『研究紀要』2 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実^{はら} 2008 「六反田南遺跡・前波南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 春日真実 2008 「山岸遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成19年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団』
- 加藤 学 1999 「第V章 遺構」『和泉人遺跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団』
- 加藤 学ほか 2006 「大角地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団』
- 加藤 学ほか 2008 「姫御前遺跡Ⅰ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団』
- 加藤 学 2009 「姫御前遺跡Ⅱ」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団』
- 加藤由美子ほか 2009 「五千石遺跡 一3区発掘調査概報一」長岡市教育委員会・株式会社 大石組
- 鹿取 渉・本間裕亨 2004 「浄文堂橋遺跡・源田川遺跡・帆柱川遺跡・市場遺跡」金井町文化財調査報告 第12集 金井町教育委員会
- 鹿取 渉・佐治栄次 2007 「妻場遺跡」佐渡市教育委員会
- 川村浩司 1993a 「古墳出現前後における北陸北東部の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1993b 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『日本考古学協会 1993年度新潟大会 シンポジウム2 東日本における古墳出現課程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸下流域を中心に—」『上越市史研究』5 上越市史専門委員会
- 河村好光 2005 「倭国の展開と玉つくり集団」『玉文化』第3号 日本玉文化研究会
- 河村好光 2006 「倭国成立期における北陸西部の玉生産」『石川考古学研究会々誌』第49号 石川考古学研究会
- 河村好光 2010 「倭の玉器—玉つくりと倭国の時代」青木書店
- 木島 勉 1988 「三ツ又遺跡 遺跡範囲確認調査報告書」糸魚川市埋蔵文化財報告書第15号 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 1989a 「糸魚川市三ツ又の古墳時代の集落」『新潟県考古学会第1回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 木島 勉 1989b 「立ノ内遺跡・山崎三十三塚」糸魚川市埋蔵文化財調査報告書第16号 糸魚川市教育委員会
- 木島 勉 2005 「後生山遺跡」「笛吹田遺跡」『新潟県における高地性集落の解体和古墳の出現』第2分冊 同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 木島 勉 2006 「翡翠勾玉の生産」『季刊考古学』第94号 雄山閣
- 木島 勉 2007 「山崎A・B遺跡—台地に営まれた平安・鎌倉時代の集落—」『第14回 遺跡発掘調査報告会』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 桑原 健 2008 「第Ⅷ章 4 玉作関連資料と内磨砥石」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 横マクリ遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池勝典 2007 「第二章 第三節 古墳時代の周溝墓と土器について」『聖籠町史 資料編一 原始・古代・中世編』聖籠町
- 小池義人 1986 「中原遺跡・岩野遺跡A・岩野遺跡E」新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小池義人・加藤 学 2000 「灰山遺跡」新潟県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄 1991 「中島廻り遺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 小島幸雄・笹澤正史 1999 「津倉田遺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 斎藤基生 1979 「下谷地遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「越後における古墳出現前後の土器様相」『磐城地方における古墳形成過程の研究』研究者グループ

- 坂上有紀・高橋 保・田海義正 2000 「第IV章 遺跡」『平田遺跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笹澤正史 2003 「古代一時代概説」『上越市史』資料編2 考古 上越市
- 笹澤正史 2005 「頸城地域における弥生時代から古墳時代前期の集落動態」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 佐藤友子^{ほか} 2009 「田伏山崎遺跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第205集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1989 「越後における古墳時代土器の変遷 柏崎平野の中期～後期を中心に」『柏崎市立博物館館報』4 柏崎市立博物館
- 品田高志 1991 「越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ」『柏崎市立博物館館報』6 柏崎市立博物館
- 鳥根県立古代出雲歴史博物館編 2009 「輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り」鳥根県立古代出雲歴史博物館
- 上越市史編さん委員会 2003 「上越市史」資料編2 考古 上越市
- 庄田慎矢 2006 「菅玉の製作と規格に関する小考」『湖西考古学』14
- 鈴木郁夫 1982 「I 地形分類Ⅰ 地形概説」『新潟県上越地域土地分類基本調査 糸魚川』新潟県農地部総合整備課
- 鈴木郁夫 2000 「I 概説 1 地形概説」『新潟県地質図説明書(2000年度版)』新潟県商工労働部商工振興課
- 鈴木俊成・春日貞実 1994 「一之口遺跡東地区 新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 関 雅之 1972 「田伏玉作遺跡」糸魚川市教育委員会
- 関 雅之 1984 「Ⅲ 第1・2次発掘調査の概要 2 遺構 第2号住居址」『長峰遺跡Ⅱ』吉川町教育委員会
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』XXⅡ 庄内式土器研究会
- 高橋浩二 2005a 「富山県における高地性集落の解体と古墳の出現」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 高橋浩二 2005b 「北陸のヒスイ玉生産」『ヒスイ文化フォーラム2005 神秘的勾玉-弥生・古墳時代の翡翠文化-』ヒスイ文化フォーラム委員会
- 高橋浩二 2008 「弥生時代における翡翠勾玉の製作技術と生産の様相」『第6回日本玉文化研究会石川大会 北陸における弥生・古墳時代玉作の変革 発表要旨集』日本玉文化研究会
- 高橋 保 1988 「立ノ内遺跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第49集 新潟県教育委員会
- 滝沢規朗 2005a 「新潟県における古墳時代前後に盛行する装飾器台・結合器台について」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字鏝について」『三面河流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2005c 「土器の分類と変遷-いわゆる北陸系を中心に-」『シンポジウム新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器の編年軸設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 2006 「『漆町編年』と前方後円墳集成編年」『北陸の古墳編年の再検討』富山大学人文学部考古学研究室
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 辻 範朗 2006 「須沢角地遺跡」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成16年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土田孝雄 1978 「第2章 調査の経過 1 発掘調査に至るまで」『笛吹田遺跡』糸魚川市教育委員会
- 土田孝雄・小池義人^{ほか} 1988 「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」青海町教育委員会
- 土田孝雄 1991 「加賀街道 第Ⅱ章1・2」『加賀街道・松本街道 新潟県歴史の道調査報告書 第1集 新潟県教育委員会

- 寺崎裕助 1988 「第1章 遺跡の立地と周辺の遺跡 1.位置と地形」『原山遺跡・大塚遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺崎裕助・田中 靖¹⁾ 1988 「原山遺跡・大塚遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 新潟県教育委員会
- 寺村光晴 1966 「古代玉作の研究」吉川弘文館
- 寺村光晴¹⁾ 1969 「勾玉の故郷 はまやま」富山県教育委員会・朝日村教育委員会
- 寺村光晴・安藤文一¹⁾ 1979 「大角地遺跡-飾玉とヒスイの工房址-」青海町教育委員会
- 寺村光晴 1986 「第4章 古墳時代の社会と文化 第4節 玉作と祭祀」『新潟県史 通史編1』新潟県
- 寺村光晴・青木重孝・岡 雅之 1987 「史跡 寺地遺跡」新潟県西頸城郡青海町教育委員会
- 寺村光晴編 2004 『日本玉作大観』吉川弘文館
- 寺村光晴・松本岩雄 2006 「弥生・古墳時代玉文化研究の現状と課題」『季刊考古学』第94号 藤山園
- 野田意文・野水晃子 2005 「阿賀北地域の様相」『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体和古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 野水晃子¹⁾ 2005 「西川内北遺跡・西川内南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 馬場伸一郎 2006 「第VI章 第1節 吹上遺跡の玉作について」『吹上遺跡-主要地方道上越新井縦関係発掘調査報告書1-』上越市教育委員会
- 浜崎悟司 1993 「3 加賀の集落構造の推移」『日本考古学協会 1993年度新潟大会 シンポジウム2 東日本における古墳出現課程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 浜崎悟司¹⁾ 1998 「八幡遺跡1」社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 近藤義郎編 山川出版社
- 福田 聖 2009 「関東における「周溝」の研究をめぐって」『古代』第122号 早稲田大学考古学会
- 藤田亮策・清水潤三 1964 「長者ヶ原」新潟県糸魚川市教育委員会
- 藤田富士夫 1983 「瓊状耳飾」『縄文文化の研究』7 藤山園
- 細井佳浩・松井 智 2008 「六反田南遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成19年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細井佳浩 2009 「六反田南遺跡Ⅱ・Ⅲ」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成20年度』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細井佳浩・水落雅明¹⁾ 2010 「六反田南遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 本間嘉晴・岡 雅之・本間信昭 1975 「浜田遺跡-新潟県佐波郡真野町浜田遺跡発掘調査報告書-」真野町教育委員会
- 前山精明・相田泰臣 2002 「南赤坂遺跡」巻町教育委員会
- 水落雅明 2010 「第V章 2-C 石器・石製品」『六反田南遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第211集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2009 「天野遺跡第3次・第4次調査 限宮園場整備事業に伴う発掘調査報告書」胎内市教育委員会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸」『越中瀬戸の変遷と分布』『中世の北陸』桂書房
- 宮本長二郎 2004 「1 青田遺跡の住居と集落」『青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山岸洋一 1989 「後山遺跡」『平成9年度遺跡発掘調査概報』糸魚川市埋蔵文化財調査報告書33 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2001 「糸魚川市遺跡地図(糸魚川市内詳細分布調査報告書)」糸魚川市埋蔵文化財調査報告書39 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2005 「平成16年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書」糸魚川市埋蔵文化財調査報告書49 糸魚川市教育委員会
- 山岸洋一 2006 「平成17年度笛吹田遺跡発掘調査概要報告書」糸魚川市埋蔵文化財調査報告書53 糸魚川市教育

委員会

- 山岸洋一 2007 「笛吹田遺跡－玉類・石製品の大规模な製品工房」『第14回 遺跡発掘調査報告会』新潟県教育委員会・糸魚川市教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良ほか 2004 「下河遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第134集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 米田克彦 2005 「出雲における古墳時代玉生産の展開と独自性」『玉文化』第2号 日本玉文化研究会
- 米田克彦 2006 「古墳時代管玉の生産と流通」『季刊考古学』第94号 雄山閣
- 米田克彦 2008 「古墳時代玉生産の変革と終焉」『月刊考古学ジャーナル』1 No.567 ニューサイエンス社
- 若月正光 1994 「越王遺跡」『卷町史』資料編1 考古 卷町
- 波邊裕之ほか 2008 「横マクリ遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第188集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

遺構観察表 (竪穴建物)

遺構 No.	屋内遺構	位置	平面形	断面形	方位	長軸 (m)	短軸 (m)	溝幅 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	切り合い	備考	
S001	壁穴部	161E21・22・23, 13C10, 16C1・2・3・6・7・8	隅丸長方形	台形状	N40°・W	7.84+	7.00+	0.28	最上～床直上	3.98	SK03>S001	1次切<2次切	削形表面に粘土塊2個有り。石積形?有り
									貼床～削形	SK36>SK42>S001			
									S01>P436				
	1次切	削形	16C2・7	不整形方形	弧状		0.85	0.60	0.15	3.70			
		礎上範囲	16C2・7	不整形方形	弧状		0.60	0.37	0.07	3.64			
		削形	16C2・7	円形	弧状		0.37	0.36	0.13	3.72			
		石調巾	16C2・7	方形	—		0.28	0.29	0.25	3.67			
		石 (I)	16C2・7										
		石 (II)	16C2										
		石 (III)	16C2										
		石 (IV)	16C2・7										
		礎上範囲	16C2・7	方形?	弧状		0.38	0.30	0.04	3.68			
		屋内土成	16C1・6	方形	階段状		1.59	1.39	0.48	3.40	屋内土成 <SK03		
		南東柱穴	161E21・22	円形	台形状		0.50	0.45	0.45	3.53			
	南西柱穴	16C3・161E23	楕円形	V字状		0.56	0.45	0.40	3.55				
	北東柱穴	16C6	楕円形	台形状		0.64	0.49	0.40	3.59				
	北西柱穴	16C13	(楕円形)	(台形状)		0.32+	0.24+	0.20+	3.48			簡易掘削時に上部埋滅	
S002		15 C 6～14	隅丸方形	台形状	N14°・E	6.00+	4.00+				SK48<S002		
										最上～床直上			
										0.20	4.02		
										貼床～削形			
										0.20	3.91		
S003		13C12～14	隅丸方形	台形状	N20°・E	2.70+	1.55+						
										最上～床直上			
										0.20	4.04		
										貼床～削形			
										0.16	3.95		

遺構観察表 (平地建物)

遺構 No.	構成員	位置	方位	平面形	断面形	長軸 (m)	短軸 (m)	溝幅 (m)	深さ (m)	底面標高 (m)	切り合い	備考
S004	SD03	13E18～20, 23～25, 15C3～5	真北方向	長方形	半円～台形状	4.40	4.00	0.40	0.20	3.95	SD03<SK05, SK33>SD03<SK06, SD03<P425	
S005	SD07	15E3～5, 7～10, 12～14	真北方向	長方形	半円～台形状	4.80	4.00	0.40	0.30	3.93	P23<SD07, (SD07～P213・P278・P409)?	北壁と東壁の溝の一部が途切れる SD11と一連?
S006	SD05	14E20, 23～25, 15B16・21	N34°・E	長方形?	半円～台形状	4.90	3.20+	0.20	0.30	3.97	SD24<SD05<SD12・SK03	南壁の溝は途切れる 西壁は不明
	SD13	13C4・5・9・10, 14C6・11						0.50	0.30	3.95	SD14<SD13 (P329との新旧不明)	
	SD21	14B16・17, 21～23						0.50	0.20	4.11	SD21<P610, P166・P165・P161<SD21	
	SD22	13E25, 14B16・21	N9°・E	長方形	半円～台形状	6.00	4.80	0.40	0.30	4.01	SD22<P29・SK34	
	SD23	14E23, 14C2・3・6・7						0.50	0.40	3.89	P388<P389<SD23<SK28・P133・P400・P401・P73	
S008	SD28	13E15・20, 14B16～18, 23	N82°・E	長方形?	半円～台形状	6.90	1.40+	0.20	0.20	4.10	SD28<P25・P40・P67・P130・SK20	
	SD18	13E10・15, 14B6・11						0.25	0.13	4.17	P56<SD18<P115	
	SD19	13E14・19	N10°・E	コの字形	半円～台形状	5.00	3.60	0.25	0.10	4.18	SD19<P128	3本の独立した溝から成る
	SD20	13E・18・19						0.25	0.20	4.07	SD16<SD20<P141	
S010	SD09	13E21・22・23, 13C3・4・8	N79°・W	長方形?	半円～台形状	6.20	2.80+	0.40	0.20	4.00	P294<SD09<P123, P385<SD09	東壁の溝は途切れる 北壁は不明
S011	SD33	14B1・3・6・7	?	長方形?	半円～台形状	4.10+	3.80+	0.80	0.25	4.06	SD34<SD33<SD08<P294, SD33<P275・P276・P280・P615, SD33<SK28<P400	今令掘削を早する
S012	SD34	13E4・9・10・14B1・2・6	N14°・E	長方形?	半円～台形状	5.00	3.80+	0.50	0.20	4.10	SD43<SD34<SD33, SK30・P179・P415, P386・P616	
	SD35	13E3・8・9						0.35	0.15	4.15	SD43・P86<SD35	
	SD43	13E4・5	N40°・E	長方形?	半円～台形状	3.20+	2.80+	0.40	0.15	4.12	SD43<SD35・SD34	2本の溝から成る

造構觀察表

遺構觀察表 (掘立柱建物)

遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間	切り合い							
SH01	N-70°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	21.5m	5.5m	3.9m	SB09						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P128	13013-14-18-19	無	円形	44	28	楕円	16	4.12	P128-P130	3.00	SK32		
P130	13012	無	円形	60	40	U字状	70	3.61	P130-P170	2.54	SB01		
P270	13096	無	隅丸長方形	42	32	U字状	60	3.55	P625-P335	2.76	▲		
P625	1303-4	無	楕円形	37	30	?	43	3.87	P335-P128	3.62	P306		
P335	1309-10	無	円形	53	46	風状	61	3.65			P26		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH02	N-80°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	18.6m	5.8m	3.2m	SB08						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P140	14020	無	円形	40	29	楕円	24	4.06	P140-P127	3.04	SU24		
P227	14013	無	円形	30	25	U字状	30	3.70	P227-P160	2.80	P169		
P160	14097	無	円形	38	38	U字状	50	3.83	P334-P180	3.20	▲		
P334	1404-9	無	円形	34	34	U字状	57	3.79	P180-P340	3.20	▲		
P180	14010-1506	無	円形	79	36	V字状	54	3.76			SB06		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH03	N-80°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	21.6m	5.6m	4.4m	SB25						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P20	14C-4	無	円形	32	20	U字状	60	3.70	P20-P102	2.70	SU24		
P102	14023	無	円形	30	45	U字状	28	3.94	P102-P165	3.00	▲		
P165	14022	無	円形	40	34	U字状	23	3.99	P165-P53	4.44	SB03		
P53	14013	無	円形	51	48	風状	29	3.99	P53-P26	2.80	▲		
P26	14014-19	無	円形	50	40	U字状	34	3.26	P26-P622	3.00	SB06		
P622	14020	無	円形	28	26	?	35	3.82	P622-P20	4.27	SB07		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH04	N-84°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	20.7m	5.6m	3.7m	SK27						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P231	13025-13023	無	円形	46	36	U字状	37	3.62	P331-P332	2.76	SB00		
P331	14C-1	無	円形	42	22	U字状	40	3.79	P331-P611	2.80	SB14		
P611	14C-8	無	円形	33	30	U字状	34	3.61	P596-P99	2.80	SK34		
P596	14C-11	無	楕円形	41	35	楕円	19	3.78	P99-P331	3.66	▲		
P99	13C9-10	無	楕円形	36	40	U字状	97	3.17			SB04		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH05	N-78°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	21.2m	5.5m	3.9m	SB02						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P13	14025	無	円形	63	50	U字状	34	4.17	P13-P106	2.74	SB06		
P402	15021	無	円形	52	44	風状	15	4.08	P402-P426	2.90	P168		
P426	15C-2-3	無	楕円形	32	12	楕円	44	3.56	P426-P624	3.84	▲		
P624	15C-11-12	無	円形	28	25	?	25	3.54	P624-P70	2.68	SB05		
P70	14C-10	無	円形	40	20	楕円	82	3.52	P70-P175	2.64	▲		
P175	14C-4	無	円形	47	45	U字状	60	3.61	P175-P13	3.90	SK12		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH06	N-82°-W	3間×1間	長方形/懸柱構造	31.2m	7.4m	4.3m	SB07						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P257	16011	無	円形	32	32	楕円	27	3.27	P257-P250	2.26	SB47		
P250	15010-15	無	不整形	80	40	楕円	74	3.35	P250-P96	2.46	▲		
P96	15008-9	無	円形	47	40	楕円	78	3.38	P96-P286	2.60	SB06		
P286	15002	無	円形	45	40	楕円	80	3.42	P407-P257	4.30	▲		
P407	16 B-2	無	円形	36	36	U字状	69	3.48			▲		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH07	N-90°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	25.5m	6.0m	4.2m	SB07						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P808	16018-19	無	円形	39	28	U字状	28	3.54	P408-P383	3.12	SB07		
P383	16017	無	楕円形	25	15	V字状	40	3.52	P383-P281	2.94	▲		
P281	16011	無	楕円形	28	30	V字状	33	3.59	P381-P285	4.14	SK33		
P285	1601	無	楕円形	36	33	U字状	49	3.68	P285-P423	2.80	▲		
P423	16008	無	楕円形	36	34	U字状	35	3.63			▲		
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH08	N-88°-W	3間×2間	長方形/懸柱構造	主層:15.5m 落層:5.1m	5.0m	3.6m	SB08						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P483	19018-23	無	不整形	32	42	57	57	3.25	P483-P485	2.24	SB08		
P485	19017	無	隅丸長方形	45	41	68	3.20	P485-P487	2.06	▲			
P487	19016	無	円形	44	40	77	3.16	P487-P402	1.74	▲			
P492	19011	無	円形	43	35	46	3.44	P492-P564	1.70	SB08			
P564	19006-7	無	円形	38	37	33	3.24	P564-P563	2.10	▲			
P563	19012-13	無	円形	32	34	53	3.26	P563-P565	2.10	SK45			
P562	19013-14	無	円形	34	34	48	3.25	P562-P571	1.74	▲			
P571	19018	無	円形	33	23	10	3.53	P571-P483	1.94	▲			
P565	19006	無	円形	V字状	22	45	3.34	P487-P488	1.50	▲			
P483	18013	無	円形	V字状	33	17	3.38	P488-P503	1.54	▲			
P488	18015-20	無	円形	楕円	40	34	38	3.54	P503-P565	1.72	▲		
											P565-P564	1.30	▲
遺構 No.	方位 (桁行)	構造	床面積	桁行	壁間 <td>切り合い</td>	切り合い							
SH09	N-87°-W	2間×1間	長方形/懸柱構造	21.2m	5.0m	4.0m	SB09						
構成ビツト	位置	柱間	平面形	長径(cm)	短径(cm)	断面形	深さ(cm)	底面標高(m)	ビツト間隔(m)	備考			
P545	19C-8	無	隅丸長方形	40	34	楕円	32	3.53	P545-P495	2.14	▲		
P495	19C-2	無	円形	37	34	U字状	40	3.52	P495-P309	2.52	▲		
P509	18C-3-19C-1	無	円形	30	25	U字状	72	3.15	P509-P486	4.00	▲		
P486	19016	無	円形	43	40	楕円	62	3.29	P486-P484	2.48	▲		
P484	19017	無	円形	36	35	楕円	61	3.28	P484-P482	2.68	▲		
P482	19021-24	無	円形	40	36	不整形	56	3.28	P482-P545	4.26	▲		

遺構観察表(土坑)

遺構No	位置	方位	平面形	断面形	長さ(m)	幅径(m)	深さ(m)	底面標高(m)	切り合い	備考
SK01	14B19・20・24・25、14C4・5・9・10	N-17°-W	楕円形	台形状	2.67	1.54	0.33	4.09	P01・P08・P09<SK01	近世の土坑
SK02	16B7・8・12・13	N-79°-W	不整形	弧状	2.90	1.96	0.29	3.86	SK02<SK49	
SK03	15C5・10、16C1・6	N-39°-E	不整形	弧状	2.65	1.94	0.28	3.85	S101<SK03	
SK04	15C2・3・7・8	N-52°-W	不整形	弧状	2.40	1.30	0.28	4.02	P224<SK04<P426/S105	SD37と一連か
SK05	15B11・23	N-72°-E	楕円形	弧状	1.64	1.06	0.42	3.81	SD03/S101<SK05	
SK06	13B19・20・24・25	N-27°-E	楕円形	平円状	1.70	0.91	0.10	3.94	SK33<SD03/S104<SK06	
SK07	14C5・10	N-25°-E	楕円形	平円状	1.95	0.93	0.30	3.94	P345<SK07	SD37と一連か
SK08	14B13・14	N-86°-W	不整形	弧状	1.30	0.90	0.26	4.07		
SK09	15B8・9・13・14	N-77°-W	円形	平円状	1.55	1.30	0.38	3.82	SK29<SK09	
SK10	15B11・16・17	N-32°-E	不整形	弧状	1.10	0.90	0.10	4.17		
SK11	15B11・16・17	N-25°-W	不整形	弧状	1.00	0.80	0.18	4.23		
SK12	14B25、15B21、14C5、15C1	N-26°-E	楕円形	弧状	1.85	0.95	0.30	4.00	P402/S105<SK12	
SK14	16B18	N-49°-E	不整形	平円状	0.90	0.60	0.26	3.86	SD17・SK49<SK14	
SK15	14C1・2・6・7	N-76°-W	円形	平円状	1.80	1.20	0.40	3.90		
SK16	14B17	N-13°-W	楕円形	弧状	1.10	0.65	0.20	4.12		
SK17	13C9	N-78°-W	楕円形	弧状	1.06	0.52	0.24	3.97	SK17<P124	
SK18	13B24・25、13C4・5	N-85°-W	不整形	弧状	1.40	1.24	0.22	4.08	SK18<P88	
SK19	16B8・9	N-72°-E	円形	弧状	1.30	1.10	0.26	3.81		
SK20	14B17・22	N-7°-W	楕円形	平円状	0.75	0.62	0.48	3.82	SD28/S108<SK20	
SK21	13B14	N-11°-E	楕円形	弧状	0.82	0.56	0.10	4.22		
SK23	13B10	N-5°-E	隅丸方形	平円状	0.66	0.60	0.25	4.05		
SK25	13B14・15	N-5°-W	円形	弧状	0.75	0.60	0.20	4.12		底面から粘土塊出土
SK26	13C15	N-50°-W	楕円形	弧状	0.90	0.40	0.16	3.97		
SK27	13C9・14	N-1°-W	楕円形	弧状	2.03	1.26	0.16	3.96	SK27<P99/S104	
SK28	14B1	N-10°-E	楕円形	平円状	1.10	0.79	0.25	3.85	SD33/S111<SK28<P400	
SK29	14C3	N-65°-E	円形	弧状	0.70	0.40	0.15	4.15	SD23/S107<SK29	
SK30	13B4	N-53°-E	楕円形	平円状	1.08	0.65	0.20	3.95	SD34/S112・SD49<SK30	
SK31	14B4・5	N-44°-W	楕円形	弧状	0.96	0.86	0.23	4.12		SD48と一連か
SK32	13B8・9	N-12°-E	隅丸方形	平円状	0.98	0.72	0.20	4.10	SK32<P335(S101)<P336	
SK33	15B15・20、16B11・16	N-15°-E	楕円形	弧状	2.96	1.11	0.10	3.94	SK37<SK33、SD46<SK33、SK33<SD30<SK06、P381/S107<SK33	
SK34	13B25、13C5、14B21、14C1	N-25°-E	円形	弧状	3.17	3.05	0.40	3.92	SD14・SD22/S107<SK34	
SK35	13C1・2	N-57°-E	不整形	弧状	3.18	1.18	0.15	4.06	SK35<P137	
SK36	16B17・18・22・23	N-72°-W	長方形	台形状	2.08	1.40	0.26	3.54	S101<SK42<SK36	
SK37	16B16	N-81°-E	楕円形	台形状	1.57	0.88	0.47	3.69	SK37<SK33、P429<SK37	
SK38	13B5	N-56°-W	円形	平円状	0.85	0.70	0.28	4.03		遺構内から粘土塊出土
SK39	15B8・13	N-71°-W	円形	平円状	0.77	0.66	0.18	3.95	SK39<SK09	
SK40	12B10・15、13B6・11	N-13°-E	隅丸方形	平円状	1.85	1.39	0.20	3.79		
SK41	16C2・3	N-73°-W	円形	台形状	0.66	0.65	0.31	3.65	S101<SK41	
SK42	16B22・23	N-81°-W	楕円形	平円状	2.21	1.03	0.26	3.67	S101<SK42<SK36	
SK43	19B13・18	N-14°-W	楕円形	台形状	1.90	0.88	0.24	3.57	P571/S108<SK43	
SK46	19C4	N-29°-E	不整形	V字状	1.26	1.06	0.30	3.54	P628<SK46	
SK47	19B23・19C3	N-88°-W	楕円形	台形状	1.05	0.61	0.40	3.43		
SK48	15C6・7	N-30°-E	不整形	弧状	2.16	0.70	0.30	4.00	SK48<S102	
SK49	16B17・18・23	N-82°-E	長方形	台形状	2.76	1.40	0.42	3.58	SK02<SK49、SD17・SK49<SK14	SD17と一連か

© SK13・22・24・43・44は矢香

遺構観察表

遺構観察表 (溝)

遺構 No.	位置	方位	断面形	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	底面標高(m)	切り合い	備考
SD03	→ SD04								
SD04	13B2 ~ 5, 7 ~ 10, 12 ~ 15, 17 ~ 20, 22 ~ 25, 12C2 ~ 5, 7 ~ 10, 13C6 ~ 11	N-21°-W	台形状	13.10	0.72	1.80	2.40		
SD05	→ SD06								
SD06	15 B 19・20	N-80°-E	台形状	2.10	0.69	0.29	3.85	SD06<SK33	
SD07	→ SD05								
SD08	14B2・3・7・8・12・13	N-19°-W	半円状	5.25	0.63	0.20	4.10	SD03(S111)<SD08<P294・619	
SD09	→ SD10								
SD10	14B14・15	N-33°-E	半円状	1.90	0.35	0.15	4.10	P16<SD10	
SD11	15B5	N-85°-E	半円状	0.95	0.50	0.20	3.98		SD05(SD07)と 一連か
SD12	14B25, 15B16・21	N-68°-W N-23°-E	弧状	1.90	0.68	0.15	4.15	SD05<SD12	SD08とセットか
SD13	→ SD07								
SD14	13C5・10・15, 14C6・11	N-53°-W N-37°-E	弧状	4.50	1.00	0.35	3.90	SD14<SD13<SK34	
SD15	13B24	N-65°-E	半円状	0.77	0.28	0.15	4.03		SD16とセットか
SD16	13B24・25	N-65°-E	半円状	1.30	0.30	0.10	4.17	SD16<SD20<P141	SD13とセットか
SD17	16B13・18	N-83°-E	台形状	1.05+	1.10	0.09	3.93	SD17・SK49<SK14	SK49と一連か
SD18	→ SD09								
SD19	→ SD09								
SD20	→ SD09								
SD21	→ SD07								
SD22	→ SD07								
SD23	→ SD07								
SD24	14B23, 14C3・4・7・8	N-11°-E	半円状	4.26	0.50	0.40	3.94	SD25<SD24<SD05(S106)・P91・P273・P417・P102(S103)・P608, SD24<P611(S104)	SD00とセットか
SD25	14B23・25	N-7°-W N-85°-E	半円状	3.35	0.40	0.30	3.99	SD25<SD24・P102(S103)・P608・SK01	
SD27	13B15	N-55°-E	弧状	2.25	0.55	0.15	4.15		
SD28	→ SD08								
SD29	13B18・19	N-31°-W	半円状	1.40	0.25	0.10	4.19		
SD30	14C8・9・13	N-83°-W	弧状	2.60+	1.15	0.35	3.94	P21<SD30<SD40, SD30<P604・605	SD24とセットか
SD31	14C11・12	N-90°-W	弧状	1.85+	0.50+	0.40	3.92	SD32<P420<SD31	
SD32	14C12・13・17・18	N-33°-W	弧状	1.50+	1.80+	0.30	3.97	P602<SD32<SD31・P603	
SD33	→ SD11								
SD34	→ SD12								
SD35	→ SD13								
SD36	14B3・4・8・9	N-28°-W	半円状	1.22	0.25	0.15	4.10		
SD37	14C3・10, 15C1・2・3・7・8	N-60°-W N-40°-E	弧状	5.80	1.00	0.50	3.85	P404<SD37	SK07・SK04と一連か (周溝の一部の可能性もある)
SD38	14C5	N-16°-E	半円状	1.50	0.30	0.10	4.20	SD38<P286	SD12とセットか
SD39	14B3	N-21°-W	半円状	0.75c+	0.30	0.15	4.18		
SD40	14C8・9	N-9°-W	半円状	1.40	0.35	0.45	3.81	SD40<P46	
SD41	14C10	N-47°-W	半円状	0.70+	0.35	0.20	4.09		
SD43	→ SD13								
SD44	13B1・2・6	N-73°-W N-2°-E	弧状	2.60+	1.25	0.15	4.16	SD46<SD44	
SD45	15B2・8	N-75°-E	不明	0.86	0.34		4.08		
SD46	14B5, 15B1・2	N-8°-W N-83°-E	弧状	2.65	0.95	0.10	3.96	SD46<SD44・P341	周溝の一部の可能性もある
SD47	15B2・6・7・11・12	N-31°-E	弧状	4.70	1.05	0.24	4.07	SD47<P286(SB06)	周溝の一部の可能性もある
SD48	14B4	N-5°-W N-76°-E	弧状	1.90+	1.00	0.16	4.15	SD48<P232	SK31と一連か
SD49	13B4	N-50°-W N-18°-E	V字状	1.24+	0.38+	-	-	SD49<SD43<SD34(S112)<SK30	
SD50	14C3・8	N-66°-W	台形状	2.80+	0.46+	0.17	3.89	SD50<SD24<P91	

※ SD01・02・26・42は欠番

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (2)

報告 No.	出土位置 遺物名	形状	種類	器 種	分 類	法量 (cm)			残存 部分	残存 率(%)	胎土(器物種: m)			色調		調整		その他			
						口径	底径	高さ			外面	内面	外面	内面	外面	内面					
31	S301 15C15 16C11	中 直筒	土	器	II	8.8	-	(5.5)	口縁部～ 胴部上段	6	01-1	△	△	△	△	灰黄	に淡 黄	受へうびき(不明瞭) 脚へうびき(不明瞭)	受へうびき? 器ナテ	透かし穴2個のみ残存	
32	S301 16B22 16C3	上下	土	器	C2	15.4	-	(13.4)	口縁部～ 胴部中位	12	01-1	△	△	△	△	灰黄	に淡 黄	口ココナテ 胴・胴めのハケメ	口ココナテ 胴・胴面あるいは胴 めのハケメ		
33	S301 16B23	床直上F 上	土	器	C3	16.0	-	(9.5)	口縁部～ 胴部上段	0.5	02-1	△	△	△	△	に淡 黄	灰黄	口ココナテ 胴・ハケメ	口ココナテ 胴・ココナテ		
34	S301 16C6	床直上	土	器	C1	21.0	-	(2.4)	口縁部	3	01-1.5	△	△	△	△	に淡 黄	灰白	ハケメ→ココナテ	ハケメ→ココナテ	(小片) やや粉→淡・胎土	
35	S301 16C8	上・中・F	土	器	C1	19.4	-	(5.0)	口縁部～ 胴部上段	14	05-1.5	△	△	△	△	に淡 黄	灰黄	口ココナテ 胴・ハケメ(やや不明瞭)	口ココナテ	外面スス付着	
36	S301 16C8	F	土	器	C3	23.2	-	(6.7)	口縁部～ 胴部上段	1	05-2	△	△	△	△	に淡 黄	黄	口ココナテ→ココナテ 胴・胴めのハケメ	口ココナテ→ココナテ	胴土中に海綿骨目・ 角質がこくわすかに 含む。外面スス付着	
37	S301 16C6	床直上	土	器	C2	17.0	-	(3.6)	口縁部	3	01-2.5	△	△	△	△	浅黄	浅黄	ココナテ	ココナテ?	やや粉→淡・胎土	
38	S301 16C1	床直上	土	器	C1	16.2	-	(2.8)	口縁部	4	05-1.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ココナテ	ココナテ	(小片)	
39	S301 16C6	F	土	器	C3	14.2	-	(3.2)	口縁部	4	05-1.5	△	△	△	△	灰白	灰白	ハケメ→ココナテ	ハケメ→ココナテ	(小片) やや粉→淡・胎土	
40	S301 16B23	床直上	土	器	C3	13.8	-	(3.3)	口縁部～ 胴部上段	6	02-1.5	△	△	△	△	浅黄	灰白	口ココナテ→ココナテ 胴・ハケメ	口ココナテ		
41	S301 16C2.6	床直上	土	器	-	-	2.2	(4.0)	胴部下段～ 底部	17	02-1.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	胴めのハケメ	胴ナテ	底部小さな平底 外面スス付着	
42	S301 16C7	F	土	器	-	-	2.0	(3.7)	胴部下段～ 底部	36	02-2	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ハケメ(右回転)	ハケメ	底部小さな平底 外面スス付着	
43	S301 16C3	床直上	土	器	-	-	2.0	(3.0)	胴部下段～ 底部	36	01-0.5	△	△	△	△	黄	黄	ハケメ(右回転)	ハケメ(左回転)	底部小さな平底	
44	S301 16C3	F	土	器	-	-	3.2	(2.4)	胴部下段～ 底部	36	01-2	△	△	△	△	に淡 黄	黄	ナテ?(不明瞭)	ヘラナテ	底部平底 (ややススめ)	
45	S301 16C8	F	土	器	-	-	2.4	(2.0)	胴部下段～ 底部	36	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ヘラナテ(表面に年状 光沢あり)	ハケメ(左回転)	底部小さな平底	
46	S301 16B23	F	土	器	A2	12.4	-	(2.7)	口縁部～ 胴部	4	01-2	△	△	△	△	浅黄	浅黄	ココナテ	ハケメ→上方ココナテ	やや粉→淡・胎土	
47	S301 16B22 4.9 15C5	上・中・ 下座 F, B a, B b, B c	土	器	-	-	6.2	(20.1)	胴部～ 底部	36	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ハケメ→胴めのヘラミギ キ	ココナテ下方ナテ, 底部 ハケメ	全体に厚手。胴部下 方に赤褐色に黒2か所 あり。胎土に黒い点 を含む。	
48	S301 16C7	床直上	土	器	-	-	6.2	(2.2)	底部	36	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	黄	黄	ハケメ(左回転)	焼成良好(黄褐色) 底部輪付技法	
49	S301 16B18 16C3	上・中・F	土	器	D	14.8	-	(9.3)	口縁部～ 胴部中位	17.5	01-1.5	△	△	△	△	浅黄	浅黄	口ココナテ→ココナテ 胴・ハケメ→ヘラミギ キ	口ココナテ→ヘラミギ キ	胴土中に角質にわす かを含む。	
50	S301 16C1	床直上	土	器	-	-	8.2	(4.6)	胴部下段～ 底部	36	01-1.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ハケメナテ	ハケメ(回転下)	底部輪付技法(中央 凹む)。胎土中に海綿 骨の圧縮あり。 底部外面に黒い点 较多く付着。 やや粉→淡・胎土	
51	S301 16B23	F	土	器	-	-	7.4	(2.9)	底部	36	01-1	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ヘラミギキ	ナテ	底部平底(中央付 足含む)	
52	S301 16C6	床直上	土	器	-	-	(3.0)	つまみ足 - 体部上手	36	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ヘラミギキ, 赤部	ナテ	つまみの土層厚み ます平手。外面赤部		
53	S301 16C2	床直上	土	器	D1	8.2	-	(4.6)	口縁部～ 体部下位	9	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	ナテ→ハケメ	ヘラナテ	器破りに薄く黄	
54	S301 SK36 16B23	F	土	器	E	-	-	(4.1)	口縁部(赤部 含む)～ 体部上段	-	01-0.5	△	△	△	△	灰白 (赤部 赤部)	に淡 黄	ヘラミギキ, 赤部	ヘラミギキ	小型丸足形の器なか	
55	S301 16C4 16C9	F, B b, B a, B b, B c	土	高 林	D	13.9	19.3	12.25	口縁部～ 胴部	口18 胴4.5	01-3.5	△	△	△	△	黄	に淡 黄	杯: ココヘラミギキ 脚: ココヘラミギキ 胴: 中位 ハケメ下方 ナテ	杯: ココヘラミギキ 脚: 中位 ハケメ下方 ナテ	4方溝が1 (ほぼ正三角形配置だ が、3個がやや偏る)	
56	S301 16C7	F	土	高 林	-	-	-	(3.3)	胴部上手 (1段)	-	01-1	△	△	△	△	黄	黄	不明瞭	杯: 不明瞭 透かし穴3つ残存 器→胎土	杯: 不明瞭 透かし穴3つ残存 器→胎土	3方溝あり。 透かし穴2つ残存 器→胎土
57	S301 16C3	F	土	高 林	-	-	11.8	(3.7)	胴部	7	01-0.5	△	△	△	△	灰黄	黄	ヘラミギキ(単位不明 瞭)	ハケメ→ナテ	透かし穴2個のみ残 存。透かし穴の内側 狭らばり付部。	
58	S301 SK3 13C13 16C19	F～下座 土 編土編製	土	高 林	-	-	12.2	(6.35)	胴部	18	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	タテ・胴部・ヘラミギ キ	ハケメ	透かし穴残存部には 認められない。器穴同 士の遺構輪付あり	
59	S301 16C13	床直上	土	器	A?	-	-	(4.8)	受部下 ～胴部	-	01-0.5	△	△	△	△	に淡 黄	に淡 黄	受: 胴めのヘラミギキ, 下座ココヘラミギ キ。胴め→ココヘラミギ キ。ヘラミギキ	受: 下方にハケメ(右回 転)不明瞭。上方ヘラミギ キ。器→ナテ	受部下透かし穴 (内6個の透かし穴 残存)。胎の凹み	

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (3)

報告 No.	遺物名	出土位置	器別	器種	分壺	口径	口径	底高	法量(cm)	残存部位	残存率	胎土(磁物性: m)			色調		調査		その他
												長	寸	角	厚	外面	内面	外面	
60	S301	16C1	16B21	縁下	土	器	B?	-	(18)	受皿下平(脚部)	-	01-05	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	灰	土 黒→ヘラミダキ 赤彩(厚底不明)	灰 黒→ヘラミダキ 赤彩(ヘラミダキ 黒→ヘラミダキ)	貫通した部品の組合 ない(湾曲技法)	
	SK49	15B20	上→下	土	器	B?	-					01-05	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	灰	土 黒→ヘラミダキ 赤彩(厚底不明)	灰 黒→ヘラミダキ 赤彩(ヘラミダキ 黒→ヘラミダキ)		
	SK36	16B23	上	土	器	B?	-					01-05	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	灰	土 黒→ヘラミダキ 赤彩(厚底不明)	灰 黒→ヘラミダキ 赤彩(ヘラミダキ 黒→ヘラミダキ)		
61	S301	(原内 土坑)	16C1	15C3	上, 中, 上→中	土	壺	C2	25.8	-	(15.2)	口縁部→ 胴部中位	10	01-1	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ハクメ	白: ハクメ→ヘラミダキ 黒: ハクメ	外面スス付着
	SK49	15B20	上→下	土	壺	C2	25.8	-	(15.2)	口縁部→ 胴部中位	10	01-1	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ハクメ	白: ハクメ→ヘラミダキ 黒: ハクメ	外面スス付着		
62	S301	(原内 土坑)	16C1	15C3	上, 中	土	壺	D	17.4	-	(20.0)	口縁部→ 胴部下位	9	01-15	灰黒	灰黒	白: ハクメ	白: ハクメ	外面スス付着
63	S301	(原内 土坑)	16B22	16C1	中 層内 土坑上	土	壺	C1	12.2	-	(7.4)	口縁部→ 胴部上位	35	01-05	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: 濃いヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	白: 濃いヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	胎土中に角礫石多く 含む
	SK49	15B20	上→下	土	壺	C1	12.2	-	(7.4)	口縁部→ 胴部上位	35	01-05	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: 濃いヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	白: 濃いヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	胎土中に角礫石多く 含む		
64	S301	(原内 土坑)	16C1	6・F	土	壺	B	12.0	-	(6.0)	口縁部	3	01-1	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	不明	不明	やや赤→濃い 黒土	
65	S301	(原内 土坑)	16C1	上	土	高杯	D	11.0	-	(4.8)	杯部	7	01-03	に濃い 黄緑	赤	黒いヘラミダキ, 下方不 明瞭, 赤彩	黒いヘラミダキ, 赤彩		
66	S301	16C7	貼床	土	壺	A2	-	-	(4.6)	口縁部(厚底 欠損)→ 胴部	1	01-05	浅黄緑	に濃い 黄緑	不明	不明	赤→濃い 黒土		
67	S301	16C7	貼床	土	鉢	C	19.3	-	(3.9)	口縁部	4	01-25	に濃い 黄緑	灰黄緑	ヘラミダキ	ヘラミダキ			
68	S301	16B23	彫形 貼床	土	器	H?	7.8	-	(4.5)	口縁部→ 胴部上半	16	01-05	黄灰	に濃い 黄緑	ヘラミダキ?	受: ヘラミダキ? 脚: ナテ?	透かし穴残存せず や赤→濃い 黒土		
69	S302	15C7	床直上	土	壺	C2	21.6	-	(4.2)	口縁部→ 胴部上位	2	01-2	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ハクメ	白: 濃いヨコナテ 黒: ハクメ	小片のため目録不 完全		
70	S302	15C7	上	土	壺	A	13.8	-	(5.3)	口縁部→ 胴部上位	4	01-15	黒	明黄緑	白: ヨコナテ 黒: ハクメ	白: 不明 黒: 不明(輪痕み 不明)	口縁部下位が変容状 に発着する		
71	S302	15C7	中	土	鉢	D2	10.9	-	(5.3)	口縁部→ 体部中位	3	01-03	に濃い 黄緑	出	白: ヨコナテ 黒: ハクメ→ヘラミダキ?	白: ヘラミダキ? 黒: ヘラミダキ?	(小片)		
72	S302	15C7	覆土	土	壺	3	5.2	-	(2.9)	脚部	4	01-05	赤 黄緑	受: ヘラミダキ, 赤彩 脚: ヘラミダキ, 赤彩	受: ヘラミダキ? 脚: ヘラミダキのナテ	脚部に透かし穴1個 残存			
73	S303	13C13	縁上, 中	土	壺	C1	14.6	-	(10.6)	口縁部→ 胴部中位	9	05-3	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ハクメ	露部つま上げ 外面スス付着		
74	S303	13C13	上	土	壺	C3	13.5	-	(7.7)	口縁部→ 胴部中位	6	02-1	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: 不明	白: ヨコナテ 黒: ハクメ			
75	S303	13C13	上	土	壺	C2	16.8	-	(6.0)	口縁部→ 胴部上位	5	05-2	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ハクメ	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ヨコナテ	外面スス付着		
76	S303	13C13	上	土	壺	C2	18.0	-	(4.3)	口縁部	5	02-15	浅黄緑	浅黄緑	白: ヨコナテ 黒: ハクメ	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: 不明	外面スス付着		
77	S303	13C13	上	土	壺	C3	13.3	-	(6.2)	口縁部→ 胴部上位	1	05-1	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	白: ハクメ→ヨコナテ 黒: ハクメ			
78	S303	13C13	上	土	壺	F	17.8	-	(2.1)	口縁部	2	05-25	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	ヨコナテ, ナテ	ナテ			
79	S303	13C13	縁上	土	壺	-	1.0	-	(5.1)	口縁部→ 胴部	36	05-15	赤赤 黄緑	黒灰	胴心のハクメ(左側)	ハクメ(左側)	底部変形(わずかに 小さな平面)		
80	S303	13C13	縁上	土	壺	-	1.0	-	(5.0)	胴部下位→ 底部	36	02-05	赤赤 黄緑	浅黄緑	ハクメ(左側)	ハクメ(左側)	底部丸底(やや赤 灰緑)		
81	S303	13C13	縁上, 上	土	壺	-	1.0	-	(4.8)	胴部下位→ 底部	36	02-05	灰黄緑	黒	不明	不明	底部丸底(やや赤 灰緑)		
82	S303	13C13	縁上, 上	土	壺	C1	13.6	-	(7.8)	口縁部→ 胴部上位	15	05-1	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: ヨコナテ 黒: ハクメ→ヘラミダキ	白: ナテ?(不明) 黒: ハクメ→ヘラミダキ			
83	S303	13C13	縁上, 上	土	壺	-	6.0	-	(3.9)	胴部下位→ 底部	32	05-1	に濃い 黄緑	灰黄緑	ナテ	ハクメ	底部平底		
84	S303	13C13	縁上	土	壺	-	5.2	-	(1.9)	底部	36	05-15	に濃い 黄緑	黒灰	ナテ	ナテ(部分的に工具 痕)	底部平底		
85	S303	13C13	縁上	土	壺	B	11.8	-	(11.6)	口縁部→ 体部中位	7	01-02	赤, に濃い 黄緑	赤, に濃い 黄緑	白: ヘラミダキ, 赤彩 脚: ヘラミダキ?, 赤彩	白: ヨコナテ 黒: ハクメ→ヘラミダキ			
86	S303	13C13	上	土	鉢	F	19.5	-	(3.5)	口縁部	8	01-02	に濃い 黄緑	に濃い 黄緑	白: 胴心のヘラミダキ 黒: ヘラミダキ	ヘラミダキ	胎土中に角礫石 含まれる		
87	S303	13C13	縁上, 上	土	高杯	C	16.9	11.46	(13.5)	口縁部→ 脚部	17 或8	01-02	浅黄緑	浅黄緑	灰: 胴心のヘラミダキ 脚: 胴心のヘラミダキ 赤彩のヘラミダキ	灰: ヘラミダキ 脚: ハクメのナテ			
88	S303	13C13	縁上	土	器	H?	-	-	(2.3)	脚部	-	01-02	に濃い 赤	浅黄緑	ヘラミダキ, 赤彩	ハクメ			
89	S303	13C13	床直上	土	壺	C2	14.8	-	(8.8)	口縁部→ 胴部中位	11	05-2	に濃い 黄緑	灰白	白: ヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	白: ヨコナテ 黒: ヨコナテ	外面スス付着		
90	S303	13C13	床直上	土	壺	C3	15.2	-	(7.8)	口縁部→ 胴部中位	6	05-1	黒灰	黒灰	白: ヨコナテ 黒: 胴心のハクメ	白: ヨコナテ 黒: ハクメ	外面スス付着		

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (4)

報告 No.	遺物名	出土位置 アゾド 層位	種類	器 分	法量(cm)			残存 部分	残存 寸法	胎土(器物径: mm)			色調		調整		その他
					口径	底径	高さ			内径	外径	厚	表面	内面	表面	内面	
91	S303	13C13	F	土	葉	C2	15.8	-	(3.9)	口縁部一 個器上位	24.5	0.5 ~ 2	浅黄緑	浅黄緑	白:ヨコナテ 製(ハケム不明)	白:ヨコナテ 製(調整のため不明)	外面スス付着 粉っぽい胎土
92	S303	13C13	F	土	葉	C3	13.35	4.0	12.6	口縁部一 底部	12.25 底36	0.1 ~ 2.5	灰黄	浅黄緑	白:不明 体:不明	白:不明 体:不明	やや粉っぽい胎土
93	S303	13C13	V	土	葉	C1	14.4	-	(6.4)	口縁部一 個器上位	-	0.5 ~ 1	にがい 黄緑	にがい 黄緑	白:ヨコナテ 製(割のハケム)	白:ヨコナテ 製(ハケム→ヨコナテ)	外面スス付着
94	S303	13C13	F	土	葉	C1	17.5	-	(3.5)	口縁部	-	0.5 ~ 1.5	浅黄緑	浅黄緑	ヨコナテ	ヨコナテ	
95	S303	13C13	床面上	土	葉	C2	18.2	-	(4.5)	口縁部一 個器上位	4.5	0.5 ~ 2.5	にがい 黄緑	灰白	白:ヨコナテ 製(ハケム)	白:ハケム→ヨコナテ 製(ハケム)	口縁部外面の一部に 粉状残存 外面スス付着
96	S303	13C13	床面上	土	葉	C3	16.6	-	(4.8)	口縁部一 個器上位	6	0.2 ~ 1	灰黄緑	にがい 黄緑	白:ハケム→ヨコナテ 製(ハケム)	白:ハケム→ヨコナテ 製(ヨコナテ)	
97	S303	13C13	F	土	葉	C2	18.8	-	(4.8)	口縁部	7	0.5 ~ 1.5	黄	黄	ヨコナテ?	ヨコナテ?	口縁部外面、 下部縁台状明瞭 粉っぽい胎土
98	S303	13C13	F	土	葉	-	-	2.0	(4.2)	胴部下位 一底部	17	1 ~ 2.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	割のハケム	上方ハケム 下方ハケム	底部小さな平底
99	S303	13C13	F	土	葉	-	-	7.2	(2.6)	底部	36	0.5 ~ 1	浅黄緑	黒	ハケム	ハケム	底部平底 底面はハケムあり
100	S303	13C13	F	土	葉	-	-	6.0	(2.9)	底部	26	0.5 ~ 1.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ナテ、下方ハケム残	ハケム(左側縁)	底部黄
101	S303	13C13	F	土	葉	F	9.3	-	(2.6)	受部	3	0.1 ~ 0.2	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ヨコナテ	ハラミ	
102	S304 (S303)	15C3 4	上～下中	土	葉	C3	19.3	-	(2.9)	口縁部	6	1 ~ 1.5	灰白	にがい 黄	ヨコナテ	ヨコナテ	外面スス付着
103	S304 (S303)	15C4	中	土	葉	-	-	5.8	(2.6)	底部	8	0.5 ~ 1	灰白	灰白	ハケム、ハラミナテ状工具 痕	ハケム	底部平底
104	S304 (S303)	15C4	上	土	葉	A? 9	14.0	-	(4.8)	口縁部一 体部中位	2	0.5 ~ 1.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	白:ヨコナテ 体:ハケム(不明)	白:ヨコナテ 体:ナテ	内外スス付着
105	S304 (S303)	15C20	F	土	高林	A	-	-	(3.1)(4残存)	杯部下手 (1)(4残存)	-	0.1以下	灰黄緑	灰白	上:ヨコナテ 下:ハケム→ハラミ	上:ヨコナテ 下:ハラミ(単位不明)	胎土中、赤茶(厚0.1 mm以下)多数に含む
106	S304 (S303)	15C2	上	土	葉	-	-	-	(4.2)	脚部上手	-	0.5 ~ 2	灰白 黄緑	灰白 黄緑	ハラミ赤赤	受:ハラミ赤赤 脚部:通かし穴あり (1個残存)	通かし穴残存せず
107	S304 (S303)	15C4	上	土	葉	-	-	-	(4.5)	脚部上手	-	0.1 ~ 0.5	灰白 黄緑	灰白 赤	ハラミ赤赤	受:ハラミ赤赤 脚部:ナテ	通かし穴残存せず
108	S305 (S304)	15C3 8+4	Ⅱa、b、 上、下、 Ⅱb	土	葉	B	13.8	1.8	(17.0)	口縁部一 底部	17.6 底36	0.2 ~ 1.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	白:ヨコナテ 製(割のハケム)	白:ヨコナテ→ハラミ 製(ハケム)	
109	S305 (S304)	15B14	F	土	葉	C1	21.8	-	(4.1)	口縁部	4	0.1 ~ 1	にがい 黄緑	にがい 黄緑	白:ヨコナテ 製:不明	白:ヨコナテ 製(ハケム)	胎土中に顔かへ石 多量を含む 外面スス付着
110	S305 (S304)	15B4 15B14	上、中、下	土	葉	-	-	25.7	(6.0)	口縁部	3 (4個 中)3	0.1 ~ 2	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ハケム→ヨコナテ	ヨコナテ→ハラミ	
111	S305 (S304)	15B9 15B14 1636	中 上～下 Ⅱa直上	土	葉	A2	17.0	-	(6.1)	口縁部	0.5	0.5 ~ 1.5	にがい 黄緑	黒	ハケム→ヨコナテ	ヨコナテ、下方ヨコナテ	
112	S305 (S304)	16323	上、下	土	葉	-	-	-	-	口縁部	3.5	0.1 ~ 0.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ヨコナテ→ハラミ	ヨコナテ→ハラミ	
113	S305 (S304)	15B7 SK13	F	土	葉	A2	13.9	-	(4.7)	口縁部	3.5	0.1 ~ 0.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ヨコナテ→ハラミ	ヨコナテ→ハラミ	
114	S305 (S304)	15B14	中	土	高林	A2	-	-	(8.4)	口縁部 端部欠損	-	0.2 ~ 1.5	黄	黄	ハケム→ハラミ (割い、不明)	ヨコナテ?	粉っぽい胎土
115	S305 (S304)	15B14	F	土	高林	-	-	12.8	(6.1)	脚部	6	0.1 ~ 1.5	黄	黄	不明	ナテ?	通かし穴2個残存 胎土に顔かへ石 多量を含む 粉っぽい胎土
116	S306 (S305)	15B16	I	土	葉	C3	9.8	3.1	(13.0) (底元)	口縁部一 底部	17 底36	1 ~ 2	にがい 黄緑	黄緑	白:ヨコナテ 製(ハケム)	白:ヨコナテ 製(ハケム)	底部平底(明)
117	S306 (S305)	15B16	I	土	葉	-	-	2.8	(3.9)	胴部下手 一底部	36	0.5 ~ 1.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ハケム(左側縁)	ハケム	底部小さな平底
118	S306 (S305)	15B16	I	土	葉	-	-	11.8	(7.7)	杯部下手 一脚部	5	0.1 ~ 0.5	浅黄	黄	受:不明 脚:不明	受:不明 脚:不明	4方通かし (変形的な4方通)
119	S306 (S305)	15B16	上	土	葉	-	-	-	(5.4)	脚部上手 (1個)	-	1 ~ 2	にがい 黄緑	にがい 黄緑	割のハケム (組合部ヨコナテ)	受:不明 脚:不明	通かし穴2個残存 (1方通かし?)
120	S307 (S304)	14C2	上	土	葉	C3	15.1	-	(3.3)	口縁部	1.5	0.1 ~ 0.2	にがい 黄緑	にがい 黄緑	ヨコナテ	ヨコナテ	胎土中に顔かへ石 多量を含む
121	S307 (S304)	14C6	上	土	葉	C2	18.8	-	(3.2)	口縁部	7.5	0.2 ~ 1	にがい 黄緑	黄	白:ハケム→ヨコナテ	白:ヨコナテ 製(ハケム)	外面わずかにスス付 着
122	S307 (S304)	14C6	上	土	葉	C3	22.2	-	(3.7)	口縁部	3	0.2 ~ 1.5	黄	明赤	ヨコナテ	ヨコナテ	外面スス付着 やや粉っぽい胎土
123	S307 (S304)	14B22	上、中	土	葉	G2	-	0	(6.5)	口縁部一 底部	36	0.1 ~ 0.5	にがい 黄緑	にがい 黄緑	白:ハラミ 体:ハラミ赤赤	白:不明 体:ナテ	胎土に赤茶多量含む

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (5)

番号 No.	遺物名	出土位置 アソビ	層位	種類	器形 分類	法量(cm)	口径	底径	高さ	残存部位	残存 率(%)	胎土(産物産): ml			色調		調整		その他				
												灰	砂	角	面	外	内	外		内			
123	S307 (S302)	14C7	中	土 壺?	-	11.0	-	(1.6)	口縁部	6	△	○	△	○	01 ~ 03	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	ヘラシガキ (調整のため不明)	高江系?		
124	S307 (S302)	14C7	中	土 壺?	B?	-	-	(1.6)	受部下 手(小)	-	-	-	-	-	03 ~ 05	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	ヘラシガキ	磨がっていた可能性 がある		
125	S110 (S300)	13022	上	土 壺	C3	18.8	-	(2.4)	口縁部	3	△	○	△	○	05 ~ 20	黄緑	黄緑	黄緑	黄緑	ヨコナデ? (不明)	不明	(小片)	
126	S110 (S300)	13022	上	土 壺	A	17.0	-	(3.5)	口縁部	2	△	○	△	○	01 ~ 02	灰黄	灰白	灰黄	灰白	ヘラシガキ? (不明)	ヘラシガキ, 上層ヨコナ デ	有段ノコ	
127	S110 (S300)	13022	上	土 壺	-	-	-	(4.3)	脚部上 手(1層)	-	-	-	-	-	01 ~ 05	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ヘラナデ	3方連か1 連か穴? 駒残存		
128	S111 (S303)	14183	1	土 壺	C3	15.4	-	(3.8)	口縁部	35	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	ハケメ	ハケメ (部分的に肌 状に施される)		
129	S111 (S303)	14186	上～下	土 壺	C3	15.5	-	(3.6)	口縁部	2	△	○	△	○	05 ~ 2	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	11:ハケメ→ヨコナ デハケメ	ヨコナデ, ヘラナ デ	磨りかや粗肌 外面スス付着	
130	S111 (S303)	14183	1	土 壺	A1	20.8	-	(7.7)	口縁部 南(4層) 西(5層)	-	-	-	-	-	05 ~ 1.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	不明	やや磨った 土		
131	S111 (S303)	14183	1	土 壺	D1	9.2	4.6	6.9	口縁部 → 底部	12 或5	△	○	△	○	01 ~ 1.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	不明	不明		
132	S111 (S303)	14183	1	土 壺	-	25.8	-	(6.7)	口縁部	4	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	ハケメ→ヘラナ デ	不明	大型ノコ	
133	S112 (S304)	13810	上～下	土 壺	A2	20.7	-	(4.2)	口縁部	4	△	○	△	○	05 ~ 2	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	不明	磨滅 (調整) 美しい 磨った土		
134	S12 (S304 P83)	14181 14182	1 上～下	土 壺	H	-	-	(4.3)	胴部 約1/4層	-	-	-	-	-	01 ~ 0.3	灰白	灰白	灰黄	灰黄	ヘラシガキ 変型上は疑わしい 磨りかや粗肌	ヘラナデ, 駒残存も 下方一部ハケメ残	変型ハケメ	
135	S12 (S304)	14181	1	土 壺	H	9.8	-	(2.5)	受部下 手?	7	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	ヘラシガキ, 赤彩	ハケメ, 赤彩		
136	S13 (S305)	13814	上～下	土 壺	B?	-	-	(2.1)	受部下 手	-	-	-	-	-	01 ~ 02	灰黄 12.0% 赤彩	灰黄 12.0% 赤彩	灰黄	灰黄	ヨコナデ, 赤彩	ヘラシガキ	露部上下にやや突出	
137	S301 (F30)	13810	1	土 壺	D	18.6	-	(4.5)	口縁部	2	△	○	△	○	01 ~ 0.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	ヨコナデ	ヨコナデ (下方ハケメ 残)	ヨコナデ			
138	S301 (F30)	13812	不明	土 壺	-	2.6	(2.1)	底部	36	△	○	△	○	01 ~ 1.0	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	黄緑	黄緑	ヘラナデ, ナデ	ハケメ (右回転)	底部小さく平底 (中心やや窪)		
139	S301 (F30)	13812	不明	土 壺	-	3.9	(1.9)	底部	21	△	○	△	○	05 ~ 2	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	粗灰	灰黄	ハケメ (左回転)	ハケメ	底部平底 → 底部外周にもハケメ		
140	S301 (F30)	13814	不明	土 壺	-	12.4	(4.2)	脚部下 手?	5	△	○	△	○	01 ~ 0.2	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ヘラシガキ (赤彩)	ヘラナデ	透かした 駒残存 外周赤		
141	S303 (F30)	14C4	1	土 壺	C3	13.5	0.8	(16.1)	口縁部 → 底部	111 或36	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	11:ハケメ→ヨコナ デ	11:ハケメ→ヨコナ デ	11:ヨコナデ→ハケ メ	11:ヨコナデ	底部丸 外面スス付着	
142	S303 (F30)	14C4	1	土 壺	C3	14.0	-	(7.6)	口縁部 → 胴部中位	7	△	○	△	○	01 ~ 2.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	11:ハケメ→ヨコナ デ	11:ハケメ→ヨコナ デ	11:ヨコナデ	11:ヨコナデ	磨りかや粗肌 土	
143	S304 (F30)	13C3	1	土 壺	C3	19.5	-	(3.5)	口縁部	4	△	○	△	○	02 ~ 1.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ハケメ→ヨコナ デ?	ハケメ→ヨコナ デ?	磨った 土	
144	S304 (F30)	14C11	中	土 壺	C3	18.4	-	(3.5)	口縁部 → 胴部上位	6	△	○	△	○	01 ~ 0.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	外面スス付着	
145	S304 (F30)	14C11	中	土 壺	C3	17.8	-	(4.8)	口縁部 → 胴部上位	5	△	○	△	○	05 ~ 1.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	磨りか 土	
146	S305 (F35)	14C4	1	土 壺	-	-	-	(5.2)	体部下 手→ 底部	36	△	○	△	○	05 ~ 2	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	斜めのハケ メ	ハケメ (左回転)	底部丸 外面スス付着	
147	S306 (F22)	16011	F	土 壺	-	3.5	(1.4)	つま部	36	1	-	-	-	1 ~ 2	黄灰	灰	灰	灰	ナデ (上面磨ら か)	ナデ			
148	S306 (F26)	16023	中	土 壺	-	-	-	(4.8)	脚部上 手	-	-	-	-	-	01 ~ 0.5	灰黄	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	ヘラシガキ	変(ヘラシガキ?) (不明) 磨りかや粗肌	4方連か? (高さ 不明)	
149	S308 (F60)	19187	上	土 壺	C2	11.4	-	(3.4)	口縁部	5	△	○	△	○	01 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	磨りか 土	
150	S308 (F60)	19123 23122	上, 中, 下, II, V, 直上	土 壺	-	4.0	(11.5)	胴部中位 → 底部	36	△	○	△	○	01 ~ 3	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	斜めのハケ メ	ヘラナデ, 底面付 瓦	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	底部平底, 底部外 周にハケメ 残
152	S3.40	13186	中, 上, 下	土 壺	C2	17.0	-	(4.8)	口縁部 → 胴部上位	33	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	11:ヨコナ デ	外面スス付着	
153	S3.40	13186	上	土 壺	E	15.4	-	4.75	口縁部	7	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	ヘラシガキ	ヘラシガキ	ヘラシガキ	底部磨滅		
154	S3.40	13186	上	土 壺	F	8.1	-	(1.9)	受部	4	△	○	△	○	01 ~ 0.2	粗灰	灰黄	不明	不明	不明	不明	受部わずかに磨滅 赤彩	
155	S3.35	13C2	上	土 壺	C1	16.8	-	(4.5)	口縁部	23	△	○	△	○	05 ~ 1	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ハケメ→ヨコナ デ	ヨコナ デ	ハケメ→ハケ メ	
156	S3.35	13C2	中	土 壺	-	2.3	(2.8)	胴部下 手→ 底部	36	△	○	△	○	1 ~ 3	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ハケメ→ヘラシ ガキ?	ヘラナ デ?	(小片)		
157	S3.35	13C2	上, 最上	土 壺	-	2.6	(1.9)	受部	36	△	○	△	○	05 ~ 1.5	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ヘラナ デ	ヘラナ デ	不明	不明	底部平底 → 底部外周にハケ メ残
158	S3.35	13C2	上	土 壺	C	-	-	(4.3)	受部下 手(約1/4層)	-	-	-	-	-	01 ~ 0.2	12.0% 黄緑	12.0% 黄緑	不明	不明	ヘラシガキ (不明)	ヘラシガキ (不明)	透かした 駒残存 今や磨りか 土	

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (6)

報告 No.	遺物No.	出土位置 アゾビ 層位	種類 器種	分集 口徑 底径 高さ	法量(cm)	残存部位	残存 率(%)	胎土(産物産地: m)			色調		調整		その他		
								厚 [mm]	内 径 [mm]	外 径 [mm]	外面	内面	外面	内面			
139	SK21	13B14	土壺	H	-	(27)	体部	-	01 ~ 02	12.0%	12.0%	黄褐色	赤褐色	ヘラビギキ	ヘラビギキ	やや粉っぽい粘土	
140	SK18	13C4	甕	G1	-	3.0 (5.4)	口縁部 口縁下部 体部下位	12	01 ~ 03	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヘラビギキ (調整のため不明)	ヘラビギキ (調整のため不明)		
141	SK23	13B4 13B10 15	中～下 土	C1	17.1	-	口縁部 胴部下位	32.5	05 ~ 1	12.0%	12.0%	灰黄褐色	灰黄褐色	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	外面スス付着	
142	SK23	13B10 15	H	C1	15.2	-	口縁部 胴部上位	12	02 ~ 05	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ヨコナテ→ハケメ 胴部上のハケメ	[1]:ハケメ→ヨコナテ 胴部上のハケメ	外面スス付着	
143	SK23	13B9 13B14 15	中～下 土	C1	15.7	-	口縁部 胴部上位	9	05 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:不明瞭 (ヨコナテ)	[1]:不明瞭		
144	SK23	13B9	中～下	C2	19.9	-	口縁部 胴部上位	18.5	05 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭	粉っぽい粘土	
145	SK23	13B9 13B15	中～下	C3	14.6	-	口縁部 胴部上位	17	05 ~ 1.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ハケメ→ヨコナテ 胴部上のハケメ	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	口縁部やや歪む 外面スス付着	
146	SK23	13B15	上～下	C3	15.3	-	口縁部 胴部上位	8.5	05 ~ 1	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ		
147	SK23	13B9 13B15	中～下	C3	18.8	-	口縁部	26	02 ~ 1	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ヨコナテ→ヨコナテ 胴部上のハケメ	[1]:ハケメ→ヨコナテ 胴部上のハケメ	外面スス付着	
148	SK23	13B15	1	C1	-	1.0 1.9	底部	36	05 ~ 1.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ハケメ	ハケメ(左側縁)	底部ほぼ完成	
149	SK23	13B15	1	C1	A1	17.4	-	口縁部 胴部	17	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭	粉っぽい粘土
150	SK23	13B10 15	1, 4	C1	D	12.2	-	口縁部 胴部	13	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:不明瞭 胴部ハケメ	[1]:不明瞭 胴部ハケメ	
171	SK34	13B25	最下, 下	C2	17.8	-	口縁部	5	05 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ハケメ→上方ヨコナテ	[1]:上方ヨコナテ→ハケメ	粘土中に細かい金泥 層多量含む 外面スス付着	
172	SK34	14C1	F	C2	16.2	-	口縁部	4	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヨコナテ→ハケメ	ヨコナテ→ヨコナテ	(小片) 粘土中に細かい 金泥層多量含む 外面スス付着	
173	SK34	13C5 14C1	上中	C2	16.2	-	口縁部 胴部	5	02 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ		
174	SK34	14B21	中	C2	F?	13.3	-	口縁部	2	05 ~ 1.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	(小片) 口縁部変形時に陥る
175	SK34	14B21	中	C3	15.0	-	口縁部 胴部上位	7	02 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	[1]:ヨコナテ 胴部上のハケメ	外面スス付着 やや粉っぽい粘土	
176	SK34	14B1	上	C3	14.8	-	口縁部 胴部上位	2	02 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:不明瞭 胴部ハケメ	[1]:不明瞭 胴部ハケメ	やや粉っぽい粘土	
177	SK34	13C25	上	C3	14.1	-	口縁部 胴部上位	24	01 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:不明瞭 胴部ハケメ	[1]:不明瞭 胴部ハケメ	粉っぽい粘土	
178	SK34	14C21	中	C1	-	2.0 (2.2)	底部	36	05 ~ 2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ハケメ(左側縁)	ハケメ	小さな平底 外面スス付着	
179	SK34	13B25	F	C1	-	5.8 (2.3)	底部	12	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭	底部輪台技法	
180	SK34	13C5	F	C1	-	7.6 (2.8)	底部	7	01 ~ 1	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヨコナテ	ハケメ(内)	底部平底	
181	SK34	14B1	最下	C1	-	2.9 (3.6)	胴部下位 底部	36	1 ~ 3	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ナテ?	ナテ?	底部平底(中央やや 歪む)縁部陥む	
182	SK34	13C5 14C1 14B21	F, 最下	A1	17.6	-	口縁部 胴部上位	4	01 ~ 0.2	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	[1]:ヘラビギキ 胴部ハケメ	[1]:ヘラビギキ 胴部ハケメ	同上販売	
183	SK34	13C5	最下	A1	21.6	-	口縁部	1	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヘラビギキ(単位不明 瞭)	ヘラビギキ	外面部に陥みあり	
184	SK34	14C21	F	E	11.8	-	口縁部	4	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ハケメ→ヨコナテ, 赤 彩?	ハケメ→ヨコナテ	(小片)	
185	SK34	14C1	F	G2	-	(3.3)	口縁部 胴部下位 体部中位	-	01 ~ 0.3	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭	(小片)	
186	SK34	14B21	上	E	11.2	-	口縁部 胴部上位	2	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭	(小片)	
187	SK34	13C5	最下	D2	10.0	-	口縁部	4	05 ~ 1	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	不明瞭	不明瞭	(小片) やや粉っぽい粘土	
188	SK34	13B25	最下	E	11.0	-	口縁部	5	01 ~ 0.3	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヘラビギキ	ハケメ→ヘラビギキ? 赤 彩?	調整層に陥れ 奥側右多量に含む	
189	SK34	13B25	中	E	-	(1.6)	片口部	-	05 ~ 1.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ナテ?	ナテ?	(小片) やや粉っぽい粘土	
190	SK34	13C25	F	C	19	-	体部	2.5	02 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	赤 彩?	ヘラビギキ赤彩	やや粉っぽい粘土	
191	SK34	14B21 13C5	F, 最下	C	-	(5.2)	脚部上半	-	01 ~ 0.3	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	ヘラビギキ赤彩	ハケメ縁部不明瞭	透か穴1つのみ残 存	
192	SK34	13C5	上	E	-	(5.0)	脚部上半 1周	-	01 ~ 0.5	12.0%	12.0%	黄褐色	黄褐色	斜めのヘラビギキ赤彩	ハケメ→ヘラビギキ	4方透かし (底片埋配座) やや粉っぽい粘土	

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (7)

報告 No.	遺物No.	出土位置	種類	器 形	分輪	法量(cm)	口径	底径	器高	残存部位	残存 率(%)	胎土(産物種: ml)			色調		調整		その他	
												灰	砂	角	外面	内面	外面	内面		
193	SK15	14C1.6	上	土	葉	F	15.1	-	(18)	口縁部	0.5	△	△	△	△	△	△	△	△	
194	SK15	14C2	上	土	葉	C1	20.7	-	(23)	口縁部	3	△	△	△	△	△	△	△	△	外面スス付着
195	SK15 P327 14B10 上～下 S307 (S325)	14C2 F 14C7	上	土	壺	H	-	-	(46)	胴部上位	-	○	○	○	○	○	○	○	○	第四層5本 胎土中に海貝殻多 く含む
196	SK15	14C1	上	土	器 台	-	-	-	(50)	胴部 (底部欠損)	-	○	○	○	○	○	○	○	○	遺小(穴)と胎土 層(ハタメ)
197	SK28	13B5	上～下	土	葉	-	2.4 ～ 2.8	(2.4)		底部	36	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
198	SK26	13C15	上～下	土	葉	C3	21.0	-	(26)	口縁部	3	△	△	△	△	△	△	△	△	厚手の口縁部 外面スス付着
199	SK16	14B17	上	土	壺	A1	14.6	-	(5.1)	口縁部	1	△	△	△	△	△	△	△	△	(小片)
200	SK28	14B1	縦上	土	葉	C2	17.2	-	(3.6)	口縁部	4	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
201	SK28	14B1- 2 14B15	上～下	土	壺	-	5.8	(12.6)		胴部中位～ 底部	36	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
202	SK28	14B1	上	土	葉	-	1.6	(2.4)		胴部下位～ 底部	9	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
203	SK28	14B1- 2	上	土	壺	-	18.5	(5.0)		口縁部	2	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
204	SK08	14B14	上～下	土	壺	-	13.4	(2.0)		口縁部	5	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
205	SK08	14B14	上～下	土	葉	-	-	(2.7)		胴部 (底部欠損)	-	○	○	○	○	○	○	○	○	胎土小(平)底 部(胎土)
206	SK08	14B14	上～下	土	器 台	H	8.7	(5.2)		受部～ 胴部上手	10	△	△	△	△	△	△	△	△	遺小(穴)と胎土 層(ハタメ)
207	SK27	13C14	上	土	葉	B	14.8	-	(3.5)	口縁部	1.5	△	△	△	△	△	△	△	△	遺小(穴)と胎土 層(ハタメ)
208	SK27	13C14	上 縦上	土	壺	A1	20.0	-	(9.3)	口縁部	8	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
209	SK27	13C14	縦下	土	壺	A	25.0	-	(6.1)	口縁部	6	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
210	SK27	13C14	上	土	器 台	-	19.0	(2.0)		口縁部	3.5	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
211	SK31	14B5	上～下	土	葉	C3	16.5	-	(3.4)	口縁部～ 胴部上位	5	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
212	SK31	14B5	上～下	土	葉	B	12.6	-	(5.3)	口縁部～ 胴部	3	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
213	SK07	14C10	中	土	葉	-	-	(3.9)		内部上端 仕込	-	○	○	○	○	○	○	○	○	胎土小(平)底 部(胎土)
214	SK07	14C10	中 上～下	土	葉	-	4.2	(3.8)		胴部下位～ 底部	31	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
215	SK10	15B11	上	土	葉	-	6.1	(2.2)		底部	23	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
216	SK10	15B11	上	土	葉	-	5.1	(4.2)		胴部下位～ 底部	10	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
217	SK11	15B16	上～下	土	葉	C3	19.6	-	(2.9)	口縁部	4	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
218	SK11	15B16	上～下	土	葉	C3	16.6	-	(2.2)	口縁部	2.5	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
219	SK48	15C6	F	土	葉	C3	12.0	-	(2.7)	口縁部	3	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
220	SK48	15C7	F	土	葉	C3	16.6	-	(7.2)	口縁部～ 胴部上位	4	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
221	SK09	15B9.9 15B8.9	上～下	土	葉	C2	16.4	-	(2.6)	口縁部	2	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
222	SK09 S305 (S306)	15B8.9- 9 上～下 中	上～下	土	葉	C3	14.5	-	(3.2)	口縁部	8.5	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
223	SK09	15B13	上	土	葉	-	14.2	(3.7)		口縁部	4.5	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
224	SK09	15B14	上	土	葉	C	14.6	-	(4.3)	口縁部	3	△	△	△	△	△	△	△	△	胎土小(平)底 部(胎土)
225	SK09	15B14	上	土	器 台	A	-	(3.8)		受部上手 (底部欠損)	-	○	○	○	○	○	○	○	○	胎土中に角閃石多 く含む 受部三角部の遺小 穴(2)も胎土

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (8)

報告 No.	遺物No.	出土位置		種類	器種	分輪	法量(cm)			残存部位	残存 率(%)	胎土(産物): ml			色調		調整		その他
		場所	層位				口径	底径	器高			具	角	底	外	内	外	内	
226	SK12	15821 15C1-2	屋下, 中	土	C3	15.6	-	丸底	23.0	完形	127 底36	1~3	灰黄緑	12.5 黄緑	11:ヨコナデ 体→底:斜めのハケメ	11:ヨコナデ 体→底:ヨコナデ→斜 めのハケメ	底面丸底 外面スス付着		
227	SK12	15821 15C1	中,F	土	C3	16.9	-	(306)		口縁部→ 底部付着	27.5	1~3	灰黄	相灰	11:ヨコナデ 体→底:斜めのハケメ	11:ヨコナデ→腹面 体→底:ヨコナデ, 斜 めのハケメ	外面スス付着		
228	SK12	15821 15C1	中,F	土	C2	14.6	-	(135)		口縁部→ 胴部中央	21	1~2	12.5 黄緑	相灰	11:ヨコナデ 胴:斜めのハケメ	11:ナデ 胴:斜めのハケメ	外面スス付着		
229	SK12	15821	上	土	C3	19.7	-	(59)		口縁部	2	1~2	灰黄緑	12.5 黄緑	11:ハケメ→ヨコナデ 胴:斜めのハケメ	11:ハケメ→ヨコナデ 胴:不明	外面スス付着		
230	SK12	15821 15C1	上,中, 下	土	C3	19.0	-	ほぼ 丸底	25.8	完形	118 底36	0.5~1	12.5 黄緑	12.5 黄緑	11:ヨコナデ 胴:上へ付着, 下底→ 斜めのハケメ	11:ヨコナデ 胴:上へ付着, 下 手へ付着(?) 底面ハケメ	内外面にヘラツケの 外面スス付着		
231	SK12	15821 15C1	上,中, 下	土	C2	16.2	-	(214)		口縁部→ 胴部下手	26.5	0.5~2	灰黄緑	相灰	11:ヨコナデ 胴:ハケメ胴上へ付 着(?)	11:ヨコナデ 胴:ハケメ	外面スス付着		
232	SK12	15C1	中	土	C3	16.7	-	(104)		口縁部→ 胴部中央	35	1~1.5	12.5 黄緑	12.5 黄緑	11:ヨコナデ? 胴:ハケメ?	11:ヨコナデ? 胴:ハケメ?	内外面黄緑美しい		
233	SK12	15821	上,中	土	C3	18.25	-	(104)		口縁部→ 胴部中央	7	1~3	12.5 黄緑	12.5 黄緑	11:ヨコナデ 胴:ハケメ中に近い斜 めのハケメ	11:ヨコナデ(一部ヘラ ツケ付直前) 胴:ヨコナデ	胴は内へ粘土		
234	SK12	15821 15C1	上,中, 下,上→ 屋下	土	C1	15.6	-	(137)		口縁部→ 胴部下手	21	1~1.5	灰黄緑	12.5 黄緑	11:上層ヨコナデ, 体ハ ケメ→ヨコナデ 胴:斜めのハケメ	11:ハケメ上→下ヨ コナデ 胴:ハケメ	外面スス付着		
235	SK12	15821	中, 上→下	土	C2	14.0	-	(144)		口縁部→ 胴部下手	31	0.1~0.5	相灰	相灰	11:ヨコナデ 胴:斜めのハケメ	11:ヨコナデ 胴:斜めのハケメ	外面スス付着		
236	SK12	15821 15C1	中,F	土	C2	16.0	-	(149)		口縁部→ 胴部下手	4	0.5~1.5	灰黄	灰	11:ヨコナデ 胴:目的他ハケメ→ 斜めのハケメ	11:ヨコナデ 胴:斜めのハケメ, ヨコ ナデ	外面スス付着		
237	SK12	15821 15C1	上,中,F	土	C1	14.0	4.9	27.1		底元宛形	118 底10	0.5~1	12.5 黄緑	相灰	11:ヨコナデ 胴:斜めのヘラツギキ	11:ヨコナデ 胴:斜めのハケメ			
238	SK12	15821 15C1	上,中→ 屋下	土	B	9.6	-	(106)		口縁部→ 体部下手	8	0.1~0.5	赤	12.5 黄緑	11:ヨコナデ→中 体:斜めのヘラツギキ, 赤影	11:ヨコナデ→中, 赤影 体:ヘラツケ	胴は内へ粘土		
239	SK12	15821	中	土	B	8.15	-	(70)		口縁部→ 体部中央	24	0.1~0.5	灰	灰	11:不明 体:ヘラツギキ	11:不明 体:ハケメ	内外面黄緑美しい (赤影の有無不明)		
240	SK12	15821	上,中	土	F?	18.63	3.8	6.9		底元宛形	115 底36	1~2	12.5 黄緑	12.5 黄緑	ハケメ→ナデ? 赤影	ハケメ→ナデ?	底面外面赤影		
241	SK12	15821	中	土	B2	-	-	(57)		脚部→胴 (底面丸底)	-	0.1~0.5	12.5 黄緑	相灰 灰黄緑	ヨコナデ付キ, 赤影	胴:ヘラツギ 膝:ナデ, ヘラツケ	脚部中央, 外面赤影		
242	SK06	15820	F	土	D	17.5	-	(54)		口縁部	6	0.2~1	12.5 黄緑	12.5 黄緑	11:斜めのハケメ 胴:ハケメ	11:ハケメ 胴:ハケメ→ナデ?	外面スス付着		
243	SK06	15825	F	土	C2	11	-	(75)		口縁部→ 胴部中央	3	0.2~0.5	明黄緑	相	11:ヨコナデ 胴:斜めのハケメ	11:ヨコナデ 胴:斜めのヘラツケ			
244	SK06	15825	屋下	土	F	10.4	-	(39)		口縁部→ 胴部中央	8	0.5~1.5	灰(黄 影)	12.5 黄緑	11:ヨコナデ 体:ヨコナデ→ヘラツケ	ヨコナデ	後面外面一部斜線の 跡あり		
245	SK06 SD1 SK06	15820 15825 15820	上, 中,F, 屋下	土	C	21.7	6.1	17.7		口縁部→ 底部	14 底5	1~2	12.5 黄緑	相	ナデ→斜めのハケメ	上:ヨコナ 下:ヘラツケ?			
246	SK04	15C2- 7	F	土	C3	16.9	-	20.8		口縁部→ 底部	117 底29	0.2~2	灰黄緑	12.5 黄緑	11:ヨコナデ 胴:ヘラツケ付(明影)	11:ヨコナデ 胴:ハケメ(一部ハケ メ)胴:ヘラツケ?	外面ヘラツケ?多量 外面スス付着		
247	SK04	15C7	上,中	土	C3	19.7	-	(39)		口縁部→ 胴部上位	15	0.2~0.5	12.5 黄緑	12.5 黄緑	11:ハケメ→ナデ? 胴:不明	11:ハケメ→ナデ? 胴:ハケメ	口縁部黄緑美しい 外面スス付着		
248	SK04	15C7.2	上,中	土	D2	15.6	-	(35)		口縁部→ 体部中央	55	0.1~0.2	12.5 黄緑	12.5 黄緑	11:ヨコナデ 体:斜めのハケメ→ヨコ ナデ	ヨコナデ	249と同一小		
249	SK04	15C3 16C14	中,F	土	F	-	4.3	(1.0)		底部	20	0.1~0.5	灰	12.5 黄緑	ハケメ, ヘラツケ	ヘラツギキ	248と同一小		
250	SK04	15C25	中	土	B	-	-	(53)		脚部→胴 (底面丸底)	-	0.1~0.5	12.5 黄緑	12.5 黄緑	ヘラツギキ(単体不明 赤影), 赤影	胴:不明, 赤影 膝:ハケメ(左斜線)	3方通し, 通し穴3個残存		
251	SK04	15C3	F	土	B	-	-	(44)		脚部上手 (1.2残)	-	0.1~0.2	灰白	灰黄	不明	胴:ヘラツギキ? 膝:ナデ	通し穴1個残存		
252	SK04	15C2	上	土	B	7.8	12.1	7.4		受部上→ 脚部	受3 脚6	0.1~0.5	灰黄緑 明赤	12.5 黄緑	受:ヘラツギキ, 赤影 膝:ヘラツギキ, 赤影	受:不明, 赤影 膝:ハケメ	3方通し, 通し穴3個残存		
253	SK04	15C2	上,F	土	B	8.0	11.0	7.1		受部→ 脚部上手 脚部下手	受15 脚11	0.5~1	浅黄 赤	12.5 黄緑	受:ヘラツギキ 膝:不明, 赤影	受:不明 膝:ヘラツギキの工具 痕あり	通し穴1→出土状態 の写真では2つは閉 鎖できる		
254	SK04	15C8 2.7	上,F	土	B	8.7	-	(58)		受部→ 脚部上手	32	0.5~1	浅黄 赤	12.5 黄緑	受:ヘラツギキ, 赤影 膝:ヘラツギキ	受:ヘラツギキ, 赤影 膝:ヘラツギキ	脚部6方通し? (通し穴3個残存)		
255	SK04	15C7	F	土	B	-	-	(57)		脚部上手 (1.4残)	-	0.1~0.5	浅黄 赤	12.5 黄緑	ヘラツギキ, 赤影	ヘラツケ	通し穴2個残存 (長方配位置)		

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (10)

番号 No.	遺物名	出土位置		種類	器形	法量(cm)			残存部位	残存 率(%)	胎土(磁物性: ml)				色調		調整		その他
		アソビ	層位			分集	口径	底径			器高	具	石	土	質	色	外面	内面	
285	SK-37	16916	F	土	壺	-	-	5.0 (1.7)	底部	36	△	△	△	△	△	△	不明	不明	底面平流,胎土粒子 粗い
286	SK-33	16916	F	土	壺	-	-	4.8 (3.1)	底部	36	△	△	△	△	△	不明	不明	底面平流	
287	SK-37	16916	上,中	土	鉢	D1	9.8	4.1 (7.2)	口縁部～ 底部	15 底32	△	△	△	△	△	不明	不明		
288	SK-37	16916	裾下	土	壺	-	-	(4.4)	脚部	-	△	△	△	△	△	不明	不明	3方造か。	
289	SK-02	16978	上,上～ 下	土	壺	C3	19.1	- (4.2)	口縁部	3	△	△	△	△	△	不明	不明	内外スリ付着	
290	SK-02	1697	上,上～ 下	土	壺	C3	17.9	- (5.3)	口縁部	1	△	△	△	△	△	不明	不明	表面磨しい 今や磨のはい(胎土)	
291	SK-02	1697	中,下	土	壺	C3	17.1	- (3.4)	口縁部	3	△	△	△	△	△	不明	不明		
292	SK-02	1698	中,下	土	壺	-	-	(4.3)	胴部	-	△	△	△	△	△	不明	不明	養生土器?	
293	SK-02	1698	上～下	土	高杯	-	-	(2.0)	脚部上半	-	△	△	△	△	△	不明	不明	小型高杯 もしくは「ニチュウ か」	
294	SK-02	16912	F	土	高杯	-	-	(5.2)	脚部上半	-	△	△	△	△	△	不明	不明	透し穴1個残存	
295	SK-02	1697	中,下	土	壺	F	7.8	- (1.7)	受部	10	△	△	△	△	△	不明	不明		
296	SK-02	1698	上～下	土	壺	-	-	(4.0)	脚部上半	-	△	△	△	△	△	不明	不明	透し穴2個残存 (長方形配置)	
297	SK-02	1697	裾下	土	壺	-	-	(6.8)	脚部上半	-	△	△	△	△	△	不明	不明	透し穴1個残存 磨の胎土	
298	SK-19	1698	上,中, 上～下	土	壺	C3	15.3	- (3.8)	口縁部	14	△	△	△	△	△	不明	不明	内外スリ付着	
299	SK-19	1698	F	土	壺	-	-	2.1 (1.7)	底部	36	△	△	△	△	△	不明	不明	表面小さな平底 (貫通)	
300	SK-19	1698	上,中	土	壺	-	-	0.6 (3.1)	底部	36	△	△	△	△	△	不明	不明	底面完成段の丸流	
301	SK-19	1698	F	土	壺	-	-	4.6 (1.9)	底部	15	△	△	△	△	△	不明	不明	底面平流	
302	SK-19	1698	F	土	壺	-	-	5.4 (2.6)	底部	21	△	△	△	△	△	不明	不明		
303	SK-14	16918	上,中	土	壺	C3	15.5	-	(9.3)	口縁部～ 胴部中段	16.5	△	△	△	△	△	不明	不明	口縁部下方に突起状 の隆起あり 外面スリ付着
	SD17	16913	上																
	SK-49	16912 16917	上～下, 下																
304	SK-14	16918	中	土	壺	-	-	4.0 (2.8)	底部	18	△	△	△	△	△	不明	不明	底面平流の要	
305	SK-42	16923	彫形 甕上中	土	壺	A2	17.0	- (4.5)	口縁部	2	△	△	△	△	△	不明	不明	(小片)	
306	SK-42	16923	床直上	土	壺	-	-	5.0 (2.8)	胴部下段～ 底部	36	△	△	△	△	△	不明	不明	底面輪付技法。 植物の圧痕あり	
307	SK-49	16912 16913 16912, 13	中,中～ 下,下	土	壺	C1	15.9	- (22.2)	口縁部～ 胴部下段	2	△	△	△	△	△	不明	不明		
308	SK-49	16917 16912	F	土	壺	E	15.5	- (3.9)	口縁部	22	△	△	△	△	△	不明	不明	内外スリ付着	
309	SK-49	16912 13 16912	上	土	壺	C3	17.4	- (34.4)	口縁部～ 胴部中段	13	△	△	△	△	△	不明	不明	角四多角含む	
310	SK-49	16912	F	土	壺	C2	18.0	- (6.7)	口縁部～ 胴部上位	6	△	△	△	△	△	不明	不明		
311	SK-49	16912	上	土	壺	-	-	2.4 (2.6)	胴部下段～ 底部	36	△	△	△	△	△	不明	不明	底面中央が窪む	
312	SK-49	16912	裾下	土	壺	B	-	(7.6)	口縁部 (環状突起)	-	△	△	△	△	△	不明	不明		
313	SK-49	16912	裾下	土	壺	E	-	(5.1)	口縁部	-	△	△	△	△	△	不明	不明	今や磨のはい(胎土)	
314	SK-49	16912	裾下	土	壺	-	-	6.4 (3.7)	胴部下段	13	△	△	△	△	△	不明	不明	調整不明	
315	SK-49	16913	中	土	壺	A	13.6	- (3.2)	口縁部	17	△	△	△	△	△	不明	不明	今や磨のはい(胎土)	
316	SK-49	16916	上～下	土	壺	-	-	(1.9)	つまみ部 1周	-	△	△	△	△	△	不明	不明	底面平流 (中央部今や磨む)	

土器観察表（弥生時代～古墳時代）（11）

報告 No.	遺物 No.	出土位置 アソビ 層位	種類 器種	形状 分佈	法量(cm) 口径 底径 高さ	残存部位	残存 率(%)	胎土(底物径: mm)				色調		調整		その他	
								真直	平	厚	角	外面	内面	外面	内面		
317	SK-09	16012	椀下	土	高林 C	-	(34)	杯部下半	-	01 ~ 05	黄	黄	ハナシガキ	ハナシガキ			
318	SK-09	16012	上～下、 椀上	土	高林*	-	(48)	脚部上半	-	01 ~ 05	黄	黄	ナチー筋心のハナシガキ (筋面付)	ハナシガキ		透かし穴なし	
319	SK-09 SK23	16012 16C18 1608	椀下 上～下	土	高林 B	-	(100)	杯部 (底面欠損)～ 脚部上半	-	01 ~ 1	黄	黄	杯(ハナシガキ) 脚(ハナシガキ赤彩)	杯(ハナシガキ赤彩) 脚(ナチガキ)		4方透かし (長方肌配)	
320	SK-09	16012 13	下 椀下	土	高林 B	-	(37)	受部下半 (底面欠損)	-	01 ~ 30	黄	黄	ハナシガキ赤彩	ハナシガキ赤彩		透かし穴型並6割中 3割残存	
321	SK-09	1608 13	上～中	土	高林*	-	(77)	脚部一帯 (底面欠損)	-	01 ~ 05	黄	黄	ハナシガキ赤彩	ハナシガキ赤彩		4方透かし (長方肌配)	
322	SK-36	16023	上	土	葉 C1	21.7	(81)	口縁部～ 胴部上位	5	01 ~ 03	黄	黄	不明	不明		やや磨しい胎土	
323	SK-36 S801	16023 16222 16C19	上 中 下	土	葉 C1	22.9	(42)	口縁部	12	02 ~ 15	黄	黄	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ		磨しい胎土	
324	SK-36	16023	F	土	葉 C3	19.2	(47)	口縁部～ 胴部上位	2	01 ~ 1	黄	黄	11:ヨコナデ下方ハケ メハケ	11:ヨコナデ 胴(ハナシガキ)		胎土中に角四石多く 含む	
325	SK-36 S801	16023 16222	上	土	葉 D	19.2	(42)	口縁部	8	02 ~ 4	黄	黄	ナチ、ハナシガキ上方に 筋面付	ハナシガキ		口縁部ヨコナデせず 筋面調整	
326	SK-36	16018	椀下	土	葉 C3	25.8	(68)	口縁部	15	02 ~ 2	黄	黄	ヨコナデ下方ハケ	ヨコナデ一部ハケ		残存少量含む 内外面スス付着	
327	SK-36	16023 16C1	中	土	葉*	-	13.1	(36)	口縁部	132	01 ~ 15	灰白	灰白	不明	不明		磨しい胎土
328	SK-36	16023	中	土	葉 F	15.2	(47)	口縁部～ 体部上位	5	01 ~ 03	黄	黄	11:体～磨かしいハナシ ガキ赤彩	11:体～磨かしいヨコ ナデ赤彩			
329	SK-36 S801	16023 16022	上～中 中～下	土	葉 E	11.15 0	6.1	口縁部～ 体部下位	28	01 ~ 15	黄	黄	11:ヨコナデ 体(ナチ)	11:ヨコナデ 体(ナチ)		胎土中に角四石多く 含む	
330	SK-36	16023	上	土	高林*	-	15.4	(60)	脚部	8	01 ~ 05	灰黄	灰黄	ハナシガキ(やや不明)	ヨコナデナチ		透かし穴1個のみ残存
331	SK-36	16023	上	土	高林*	-	(59)	脚部上半 (底面欠損)	-	01 ~ 05	黄	黄	不明	不明		透かし穴2個残存 (長方肌配)	
332	SK-03	15C3 16C1	上、中、 椀下	土	葉 C3	17.5	2.6	(24.1)	口縁部～ 底面	906	01 ~ 25	黄	黄	11:ハケメ 胴(ハナシガキ(不明 含む)) 下半 ハケメ(筋面が多 い)	11:ヨコナデ(筋面付) 胴(ナチ、ヨコナデ(目 付なし)) 下半 ハケメ		胎土中に角四石多く 含む 内外面スス付着
333	SK-03	15C5	上、中、 上下	土	葉 C3	13.7	2.3	(22.9)	口縁部～ 底面	0105 底36	02 ~ 2	灰	灰	11:ヨコナデ下 胴(不明) 底(ハケメ(不明))	11:ハケメ→ヨコナデ下 胴(不明)		筋面なし やや磨しい胎土
334	SK-03	15C5	上、中	土	葉 C2	20.0	(20.9)	口縁部～ 胴部下位	11	01 ~ 1	黄	黄	11:シノケ→ナチ 胴(磨しいハケメ)	11:ナチ、磨しいハケ メ、筋面ありなし筋 面ハケメ		内外面スス付着	
335	SK-03	16C1 15C10	上、中、 上直	土	葉 C3	24.0	(102)	口縁部～ 胴部上位	25	02 ~ 1	黄	黄	11:磨かしいハケメ 胴(ハケメ一部筋面 の跡あり)	11:不明 不明		外面スス付着 磨しい胎土	
336	SK-03	16C1	上	土	葉 C3	23.7	(54)	口縁部～ 胴部上位	3	01 ~ 1.5	黄	黄	11:ヨコナデ 胴(磨しいハケメ)	11:ヨコナデ 胴(ハケメ)		外面スス付着	
337	SK-03	15C5	上、中、 椀上	土	葉 C1	18.0	(19)	口縁部	14	01 ~ 1.5	黄	黄	ヨコナデ	ヨコナデ		胎土中に角四石わず かに含む 外面スス付着	
338	SK-03	15C5	上、中	土	葉 C3	17.2	(51)	口縁部～ 胴部上位	105	02 ~ 1.5	黄	黄	11:ハケメ→ヨコナデ 胴(ハケメ)	11:ハケメ→ヨコナデ 胴(ハケメ)		胎土中に角四石わず かに含む 外面スス付着	
339	SK-03	15C5	上、中	土	葉 C3	18.4	(49)	口縁部～ 胴部上位	16	05 ~ 1	黄	黄	11:不明 不明	11:不明 不明		外面スス付着 やや磨しい胎土	
340	SK-03	15C3 16C1	上	土	葉 C3	18.6	(36)	口縁部	12	01 ~ 1	黄	黄	11:上、ヨコナデ(胎 土筋面のみ) 下、ハケメ	11:ヨコナデ 胴(ハケメ)		胎土中に角四石多く 含む 外面スス付着	
341	SK-03	15C5		土	葉 C2	15.5	(25)	口縁部	75	01 ~ 2	黄	黄	ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ		胎土中に角四石ごく わずかに含む 外面スス付着	
342	SK-03	15C5	中	土	葉 C2	15.7	(70)	口縁部～ 胴部上位	4	01 ~ 2	黄	黄	11:ヨコナデ 胴(ハケメ)	11:ヨコナデ 胴(ハケメ)		外面スス付着	
343	SK-03	15C5	上	土	葉 D	17.7	(39)	口縁部～ 胴部上位	65	05 ~ 2	黄	黄	11:筋面付帯で磨けつ 胴(不明)	11:ハケメナチ 胴(ハケメ)		口縁部ヨコナデで波 打つ外面スス付着	
344	SK-03	15C5	椀下	土	葉 C3	16.6	(46)	口縁部	45	02 ~ 1.5	黄	黄	11:ハケメ→ヨコナデ 胴(ナチ)	11:ヨコナデ 胴(ハケメ)		口縁部筋面付帯で 丸く配	
345	SK-03	15C5	中	土	葉*	-	1.9	(29)	胴部中位 ～底面	36	02 ~ 1	黄	黄	ハケメナチ	ハケメナチ		底面小さな平底
346	SK-03	15C5 16C1	中	土	葉*	-	7.0	(67)	胴部中位 ～底面	255	05 ~ 2	黄	黄	胴(ハケメ) 底部外面(ハケメ)	ハナシガキ底面ハケメ		底面大きな平底
347	SK-03	15C5	上、中	土	葉*	-	24	(67)	胴部中位 ～底面	36	05 ~ 2	黄	黄	ハケメ(不明)	ハケメ		筋面磨き出し(底 面付)
348	SK-03	16C1	上	土	葉*	-	11.7	(60)	口縁部	6	01 ~ 0.5	黄	黄	上:不明 下:ヨコナデ	上:ヨコナデ 下:ナチ		山脈系

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (12)

番号 No.	遺物名	出土位置 アゾビ	方位	種類	器形 分類	法量(cm) 口径 底径 器高	残存部位	残存 率(%)	胎土(器物径: mm)			色調		調整		その他
									01	02	03	外面	内面	外面	内面	
319	SK03	16C1	中	土壺	-	6.6 (39)	胴部下位 ~底部	36	01 ~ 1.5	灰青	浅黄緑	ナデ(部分削ハケメ)	ナデ			底部輪台状凹存
320	SK03	16C1	中	土壺	-	6.8 (28)	底部	12	02 ~ 1.5	浅黄緑	浅黄	ナデ	ナデ			底部平底 (中央やや膨らみ凹存)
331	SK03	16C1	中	土壺	-	(22)	つまみ部 (口縁)	-	02 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミギギキ(不明瞭)	ナデ			
332	SK03	16C1	上	土鉢	-	(6.1)	口縁部 (7片)	-	01 ~ 1.5	灰白	浅黄緑	ヘラミギギキ?	ヘラミギギキ			
333	SK03	15C5	上	土器	-	(4.1)	脚部上手	-	01 ~ 0.5	浅黄緑	浅黄緑	ヘラミギギキ(単位不明瞭)	受ハケミギギキ 削ハケメ(左側削)			4方浅か (長短約4~5方角)
334	SK03	16C1	上	土器	-	(4.5)	脚部上手	-	01 ~ 1	灰青	灰青	受ハケミギギキ 削ハケメ	削ハケミギギキ 削ハケメ			脚部透かし穴確認で ぎやや膨らみ凹土
335	SK45	19B13	中上 縁上	土壺	C2	37.96 -	口縁部 ~胴部下位	25	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:ヨコナデ 削ハケメ(下方削ハ ケメ)	11:ヨコナデ 削ハケメ			胎土中に角閃石多く 含む
336	SK45	19B18	縁上	土壺	C3	17.7 -	口縁部	8	01 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヨコナデ	ヨコナデ			
337	SK45	19B18	上中	土壺	C3	17.2 -	口縁部 ~胴部中段	9	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:ヨコナデ 削ハケメ(下方削ハ ケメ)	11:ヨコナデ 削ハケメ(下方削ハ ケメ)			外面スス付着
338	SK45	19B18	縁上	土壺	C3	12.5 -	口縁部	11	01 ~ 2.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ→ヨコナデ	ヨコナデ			胎土中に海綿骨付 ずらに含む
339	SK45	19B18	縁上	土器	F? Y	15.2 -	口縁部	5	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヨコナデ	ヨコナデ			(小片) 外面スス付着
340	SK45	19B18	上	土壺	A2	12.0 -	口縁部	6	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:上→ナデ→ヘラミギ ギキ→不明瞭	ナデ→削ハケミギギキ			
341	SK45	19B13	中	土壺	-	5.0 (2.6)	胴部下位 ~底部	13	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ	不明瞭			底部平底
342	SK46	19C4	下	土壺	A1	17.0 -	口縁部	7	01 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:上→ナデ→ヨコナデ 削ハケメ(胎土削合前 削)	11:上→ヨコナデナデ →ナデ			内面に割ちたはるの 筋跡
343	SK47	19B23	中	土壺	C2	14.4 -	口縁部 ~胴部中段	7	01 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:ヨコナデ 削ハケメ(胎土削合前 削)	11:ヨコナデ 削ハケメ→ヨコナ デ			外面スス付着
344	SK47	19B23	上	土器	D	9.3 -	口縁部	6	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	上:ヨコナデ下:ヘラミ ギギキ(単位不明瞭)	上:ヨコナデ 下:ヘラミギギキ(単位 不明瞭)			底良好彫刻
345	SD14	13C10	中	土壺	A	19.0 -	口縁部	5	02 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:ヨコナデ 削ハケメ	11:ヨコナデ 削ハケメ			外面わずかにスス付 着
346	SD14	14C11	上 下	土壺	C1	14.4 -	口縁部	6	02 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ	削ハケメ			外面スス付着
347	SD14	13C10	上	土壺	C2	14.8 -	口縁部	9	02 ~ 1.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヨコナデ→削ハケメ	11:削ハケメ→ヨコナ デ削ハケメ			
348	SD14	14C6	F	土壺	C2	17.3 -	口縁部	7.5	05 ~ 1.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヨコナデ→削ハケメ	削ハケメ→ヨコナデ(下 方に削ハケメ残る)			外面わずかにスス付 着やや膨らみ凹土
349	SD14	13C10	中	土壺	A	2.0 (1.5)	底部	36	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ	削ハケメ			底部小さな平底
350	SD14	13C10	中	土壺	A	2.0 (2.2)	底部	36	03 ~ 2	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ	削ハケメ			底部小さな平底 外面にスス付着
351	SD14	13C10	F	土壺	A	2.8 (1.8)	底部	21	1 ~ 2.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ	削ハケメ			底部小さな平底 内面に凹化物付着 跡に凹土
352	SD14	13C10	上	土壺	A1	-	口縁部 ~胴部中段	-	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケミギギキ	不明瞭			胎に凹土
353	SD14	13C10	上中 下、皿	土壺	C2	19.8 -	口縁部	19.5	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	上:ヨコナデ 下:削ハケメ→ヘラミ ギギキ	ヘラミギギキ			口縁部断面凹し
354	SD14	13C10	上	土壺	A	5.0 (2.5)	底部	13	02 ~ 1.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケメ	ナデ			底部平底
355	SD14	14C11	上	土壺	A	17.8 -	底部	5	01 ~ 0.3	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミギギキ(不明瞭)	ヘラミギギキ			
356	SD14	13C10	中	土鉢	-	9.2 -	口縁部	8.5	01 ~ 0.2	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミギギキ	ヨコナデ→ヘラミギ ギキ			
357	SD14	14C7	F	土鉢	C	9.4 -	口縁部	5	03 ~ 2	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	削ハケミギギキ	ヘラミギギキ(不明瞭)			
358	SD14	13C10	中	土器	G	8.1 -	受皿上手	5	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミギギキ(削ハ ケメ)	ヘラミギギキ(削ハ ケメ)			
359	SD14	13C10	上	土器	-	13.4 (6.2)	脚部	19	01 ~ 0.2	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミギギキ(単位不明 瞭)	削ハケメ→ナデ			透かし穴3箇所残存。 底面約2.4方角?
360	SD21	14C3	上→下	土壺	C3	14.5 -	口縁部 ~胴部上位	2	05 ~ 2	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11:ヨコナデ 削ハケメ	11:ヨコナデ 削ハケメ			(小片)胎土中に細か い凹凸含む 外面スス付着
361	SD30	14C8	I	土壺	-	15.6 -	口縁部	8	01 ~ 0.5	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	不明瞭	削ハケメ			胎に凹土

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (13)

報告 No.	出土位置	種別	器形	分輪	法量(cm)	残存部位	残存 率(%)	胎土(底物性: ml)			色調		調整		その他
								厚	内	外	外面	内面	外面	内面	
SD02	14C12	Ⅰ	上	土	C2 14.6	- (60)	口縁部～ 胴部上位	5	0.5 ~ 2.5	にじみ 黄	にじみ 黄	11: 黒コナテ 製ハケメ	11: 黒コナテ 製ハケメ		
SD02	14C12	上～下	土	土	C2 13.4	- (37)	口縁部	3	0.2 ~ 2.5	にじみ 黄	にじみ 黄	コナテ	ナテ?	外面スス付着	
SD02	14C12	3	上	土	- - 2.4 (22)	底部	21	0.5 ~ 1.5	にじみ 黄	にじみ 黄	ハケメ(弱い)	ナテ→一部ハケメ		小さな平底, 中央が窪 む, 内面スス付着	
SD02	14C12	3	上	土	- - 丸底 (1.5)	(39)	胴部下位 ～底部	36	0.1 ~ 1.5	にじみ 黄	赤	ヘラミダキ(不明瞭), 赤 影	11: 黒コナテ→ハケメ?	ハラナテ	やや膨らんだ胎土
SD02	14C12	上～下	土	土	- - 丸底 (1.5)	(39)	胴部下位 ～底部	36	0.1 ~ 1.5	にじみ 黄	赤	ヘラミダキ(不明瞭), 赤 影	11: 黒コナテ→ハケメ?	ハラナテ	やや膨らんだ胎土
SD47	15B7	上	土	土	C2 21.9	- (33)	口縁部	25	0.1 ~ 2	黄灰	黄灰	コナテ→下方ハケメ	コナテ? (不明瞭)		
SD47	15B7	中	土	土	C1 12.0	- (47)	口縁部～ 胴部上位	3	0.2 ~ 1.5	黄灰	にじみ 黄	11: 黒コナテ→ハケメ 製ハケメ	11: 黒コナテ→ハケメ?		
SD47	15B11	中	土	土	B 9.1	- (67)	口縁部	7	0.1 ~ 0.5	黄	黄	ハケメ→ヘラミダキ?	ナテ?	遺物埋没合	
SK36	16B23	上	土	土	- - 6.1 (30)	胴部下位 ～底部	16	0.2 ~ 1.5	にじみ 黄	にじみ 黄	ハケメ→ナテ?	ヘラナテ		底部は多少平直	
SD47	15B6 4.1	上, 中, 下	土	土	- - 14.7 (40)	胴部中央 ～胴部上位	45	0.1 ~ 1	にじみ 黄	にじみ 黄	ヘラミダキ(単位不明 瞭)	ヘラミダキ			
SD47	15B11	下	土	土	- - - (45)	脚部上半	1	0.1 ~ 0.5	灰黄緑	灰黄緑	ヘラミダキ	赤(不明瞭) コナテ			
SD07	15C5	上～下	土	土	F 18.8	- (29)	口縁部	3	0.1 ~ 1	黄灰	黄灰	コナテ 製ハケメ	コナテ	やや膨らんだ胎土	
SD07	14C5	上～下	土	土	C1 16.0	- (32)	口縁部	7	0.1 ~ 1.5	にじみ 黄	にじみ 黄	ハケメ→コナテ	コナテ	外面スス付着	
SD07	15C1	上～下	土	土	C1 14.0	- (26)	口縁部	3	0.1 ~ 1.5	にじみ 黄	にじみ 黄	ハケメ→コナテ	ハケメ→ナテ?	角隠しわずかに含む	
SD07	15C1 4.3, 5.9	上～下	土	土	D 13.9	外周 (15)	胴部～ 脚部	15	0.1 ~ 0.3	黄灰	黄灰	赤(ヘラミダキ(不明瞭) 製ハケメ)	赤(不明瞭) 脚ハケメ	胴部上方に反り上 がる	
SD07	15C1 13C10	F	土	土	E1 - - (60)	脚状残片	-	0.1 ~ 0.5	にじみ 黄	にじみ 黄	上: 黒コナテ? (単位不明 瞭)	脚ハケメ		柱状部, 筋土製 脚ハケミダキ	
SD11	15B5	横下	土	土	C1 15.5	- (28)	口縁部	7	0.1 ~ 1.5	にじみ 黄	にじみ 黄	ハケメ→コナテ	コナテ	細か～含む	
SD17	16B13 18	上～下中	土	土	- - 5.8 (19)	底部	20	0.5 ~ 1	にじみ 黄	にじみ 黄	ナテ?	ハケメ(弱形状)		底部平直	
SD17	16B18	上	土	土	A - - (39)	受部下半 (1.5)含む	-	0.5 ~ 1	灰白 明赤	灰白 明赤	ヘラミダキ(不明瞭)	ヘラミダキ(不明瞭)		底部6方透かし? (透かし穴3個残存) やや膨らんだ胎土	
SD27	13B15	上～下	土	土	- - 9.9 - (27)	口縁部	2	0.1 ~ 0.2	にじみ 黄	灰黄緑	不明瞭	ハケメ→ナテ?	(小片)		
SD08	14B13	上～下	土	土	- - 2.0 (53)	胴部中央 ～底部	26	1 ~ 2	赤	赤	ヘラミダキ(単位やや不明 瞭), 赤影	不明瞭		底部外面まで赤影	
SD06	16B15	下	土	土	C3 20.7	- (56)	口縁部～ 胴部上位	15	0.5 ~ 1	黒	黄灰	11: 黒コナテ 製ハケメ	11: 黒コナテ 製ハケメ		胎土中に角隠し多量 を含む
SD06	15B20	上～下	土	土	C4 14.85	- (25)	口縁部	45	0.5 ~ 1	にじみ 黄	にじみ 黄	コナテ, 下方ハケメ	コナテ		
SD06	15B20	上, 中	土	土	C2 26.0	- (41)	口縁部	35	1 ~ 2	にじみ 黄	明灰	ハケメ→コナテ	コナテ→ヘラミダキ		
SD04	12B25 13C5	横上, 中	土	土	C3 15.8	- (79)	口縁部～ 胴部上位	4	0.5 ~ 1.5	にじみ 黄	にじみ 黄	11: 黒コナテ→コナテ 製ハケメ	11: 黒コナテ→コナテ 製ハケメ(輪痕も黄 灰)		外面スス付着
SD04	12C4	横上	土	土	- - 丸底 (24)	底部	18	0.2 ~ 2	にじみ 黄	にじみ 黄	不明瞭	ナテ		底部丸底	
SD04	12B10	上	土	土	- - 3.2 (25)	底部	36	0.1 ~ 0.3	にじみ 黄	にじみ 黄	ナテ	ナテ		底部平直(やや窪む)	
SD04	12B24	上	土	土	D 12.0	- (60)	口縁部～ 胴部上位	5	0.1 ~ 0.3	にじみ 黄	にじみ 黄	不明瞭	ヘラナテ		
SD04	12C7.8	横上	土	土	- - 7.0 (27)	底部	18	0.5 ~ 2.5	黄灰	黄灰	ナテ, ヘラミダキ	ナテ		底部輪台状 やや膨らんだ胎土	
SD04	12C13	横上	土	土	- - 6.7 (29)	底部	23	0.2 ~ 2	灰黄	灰黄	不明瞭(ナテ?)	不明瞭(ヘラナテ?)		底部平直	
SD04	12B20	上	土	土	- - 11.1 (74)	脚部	5	0.1 ~ 0.3	にじみ 黄	にじみ 黄	ヘラミダキ→ヘラミダキ (不明瞭)	赤(不明瞭)		胴上部や中輪痕に伸 びる, 或る部に透かし 穴痕残存せず	
SD04	12B9	上	土	土	- - - (44)	脚部上半 (1.5)	-	0.1 ~ 0.5	にじみ 黄	赤	赤	不明瞭		透かし穴3個残存, 黄灰着色	
SD04	12B9	上	土	土	B? - - (18)	受部下半	-	0.1 ~ 0.5	黄灰	灰白	不明瞭	不明瞭		透かし穴3個残存, 赤(不明瞭)	
SD04	13B10	上	土	土	- - (16)	脚部上半 (1.2)含む	-	0.1 ~ 0.5	灰黄緑	灰黄緑	ハケメ→ヘラミダキ, 赤 影	ハラナテ		透かし穴3個残存, 3.5含む	
SD04	12B25 13C4	上～下	土	土	- - 11.7 (315)	脚部下半	22	0.1 ~ 0.5	にじみ 黄	にじみ 黄	ハケメ→ヘラミダキ	ハケメ→胴部コナテ		外面スス付着	
SD04	11B	5	土	土	C2 19.2	5.5 26.75	口縁部～ 底部	535	0.1 ~ 2	にじみ 黄	灰黄緑	11: ナテ? 製ハケメ	11: ハケメ→ナテ? 製ハケメ		外面スス付着 2-A区西側出土

遺物観察表

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (14)

番号 No.	遺物名	出土位置		材質	器種	分輪	法量(cm)			残存部位	残存率(%)	胎土(産物種: m)			色調		調整		その他
		層位	層位				口径	底径	高さ			片	角	面	外面	内面	外面	内面	
417	SD04	12918A, 18, 19	砂埋	土	葉	-	3.0	(23)		底部	36	02 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ハケメ		ハケメ・ヘラナデ		底部小さな平底(中央窪)。 焼成良好(厚緑)
418	SD04	12918, 19	砂埋	土	葉	A1	19.7	-	(40)	口縁部	25	01 ~ 02	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミダギキ, 赤彩		ヘラミダギキ, 赤彩		底部窪
419	SD04	12918, 19	砂埋, 埋	土	葉	B	-	-	(49)	腹部上平(1/2高)	-	01 ~ 03	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミダギキ, 赤彩		ヘラナデ(輪縁のみ)口縁部下縁まで赤彩		焼成良好(厚緑)
420	SD04	12910, 15	川底	土	器台	E	8.5	-	(47)	口縁部～ 脚部上平	30	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 赤黒	不明	赤彩不明	不明	赤彩	器種不明
421	SD04	12C8	川底	土	器台	H	8.0	-	(53)	口縁部～ 脚部上平	19	01 ~ 03	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	受: 下方→ハケメ→ヘラミダギキ 上方→粗なヘラミダギキ 斜: 斜めのヘラミダギキ		受: 下方ハケメ→ヘラミダギキ 斜: ヘラナデ		遺小穴1個残存。 焼成良好(厚緑)
422	SD04	12C10	墓下	土	器台	-	-	-	(80)	脚部	2	01 ~ 03	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ナデ・ヘラミダギキ→下方コバヒダギキ		ハケメ・ヘラナデ		4方溝か(長方形配置)。 焼成良好(厚緑)
423	P329	13C10	中	土	葉	C3	16.2	-	(50)	口縁部～ 脚部上段	7	03 ~ 15	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: 3コナデ 脚: ハケメ		11: 3コナデ 脚: ハケメ		
424	P329	13C10	F	土	葉	C2	17.0	-	(28)	口縁部	45	02 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	短尺 短尺		ハケメ(調整用)		外面スス付着
425	P329	13C10	F	土	葉	C3	15.2	-	(42)	口縁部	105	02 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ハケメ(→1線縁部削り越)		ハケメ		SD14に隣り側縁部外 面スス付着
426	P329	13C10	F	土	葉	-	-	-	(38)	脚部下段～ 底部	36	03 ~ 2	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ハケメ(右側)		ハケメ(右側)		底部小さな平底。 内面に炭化物(おこげ?)の付着
427	P329	13C10	中	土	鉢?	-	10.6	-	(80)	口縁部～ 脚部中段	65	02 ~ 15	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミダギキ, 赤彩		11: ヘラミダギキ, 赤彩 脚: ヘラナデ		口縁部外面下方にハケメ状工具痕
428	P06	15B16	I	土	器台	-	-	-	(51)	脚部一周(高さ欠)	-	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	赤彩 ナデ・ヘラミダギキ→下方コバヒダギキ		ナデ(胎土も巻き上げ わずかに残る)		4方溝か。 (長方形配置)
429	P06	15B16	I	土	器台	-	-	-	(37)	脚部下平	33	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミダギキ(単反不明)		3コナデ, ナデ		4方溝か。 (長方形配置)
430	P594	14C11 13C10	F 墓下	土	葉	C3	15.0	-	(57)	口縁部	11	05 ~ 15	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: 3コナデ 脚: ハケメ		11: 3コナデ 脚: ハケメ		外面スス付着
431	P594	14C11	F	土	葉	C3	13.6	-	(53)	口縁部	6	1 ~ 25	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: 3コナデ 脚: ハケメ		11: 3コナデ 脚: ハケメ, 輪縁のみ		外面スス付着
432	P594	14C11 13C10	F 墓下	土	葉	C3	16.4	-	(60)	口縁部～ 脚部上段	11	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: 鋭い3コナデ 脚: ハケメ		11: 3コナデ 脚: ナデ		外面スス付着
433	P299	13B1	中	土	葉	D	18.9	-	(27)	口縁部	35	05 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ハケメ→ヘラナデ		ハケメ		外面スス付着
434	P299	13B1	上～F	土	葉	-	-	-	(26)	底部	36	05 ~ 25	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラナデ, 工具痕		ヘラナデ		底部丸底に深い
435	P104	15B11	I	土	葉	C2	18.2	-	(48)	口縁部～ 脚部上段	5	01 ~ 15	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: ハケメ→3コナデ 脚: ハケメ(不明)		11: 3コナデ 脚: ナデ		やや粉っぽい胎土
436	P104	15B11	I	土	葉	?	-	-	(43)	底元定形	36	1 ~ 15	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ナデ		ナデ		上から見るややや粉 目が見 やや粉っぽい胎土
437	P58	14B12	I	土	葉	C3	30.9	-	(49)	口縁部	11	03 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: ハケメ→3コナデ 下方にハケメ2つ(残る)		3コナデ		外面スス付着
438	P57	14B6	I	土	葉	B	18.7	-	(38)	口縁部	6	02 ~ 10	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ハケメ→3コナデ, ヘラナデ		ハケメ→3コナデ		
439	P379	15B22	上～F	土	葉	C1	15.2	-	(53)	口縁部～ 脚部上段	105	01 ~ 02	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: 3コナデ→下方ハケメ 脚: ハケメ		11: 3コナデ 脚: ナデ		角隅わずかに含む 外面スス付着
440	P435	15B25	F	土	葉	(C2)	17.0	-	(71)	口縁部	185	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	赤下平: 3コナデ 11: 脚部: ハケメ→ヘラミ ダギキ		ヘラミダギキ(不明)		養生土部 やや粉っぽい胎土
441	P75	15B8	I	土	葉	A2	16.7	-	(49)	口縁部	2	01 ~ 15	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	11: ハケメ→3コナデ(狭い) 脚: ハケメ		11: 3コナデ→下方ハケメ		頸部のみ
442	P512	20B23 22C3	F 首直上	土	葉	-	-	-	(36)	脚部下段～ 底部	36	01 ~ 25	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	斜: 3 斜: 斜めのハケメ		ヘラナデ		底部輪付技法。 輪縁部ハケメ。胎土中に石炭 海綿質多量含む
443	P403	14B2	墓下	土	高杯	B	19.0	-	(68)	口縁部	4	05 ~ 1	12.5% 黄緑	12.5% 赤	斜め: 斜めのヘラミダギキ, 赤彩		3コナデミダギキ, 赤彩		
444	P380	15B10	墓上	土	器台	-	-	-	(79)	脚部下平	21	02 ~ 05	12.5% 赤	12.5% 赤	斜め: 斜めのヘラミダギキ, 赤彩		ナデ		4方溝か。 (長方形配置) やや粉っぽい胎土
445	P145 S803	13C12 13C13	上～F 上	土	葉?	-	11.3	-	(35)	口縁部	6	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	短尺 短尺		不明		遺構不明
446	P174	14B23	I	土	蓋	-	-	-	(22)	つまみ部(1個)	-	01 ~ 05	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	上面: ヘラミダギキ? 輪縁: ナデ		ナデ		つまみ上面は滑まない
447	P295	14B3	I	土	器台	H	8.3	-	(20)	受部	1	01 ~ 02	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミダギキ		ヘラミダギキ		
448	P56 P405	14B11 14B8	F 上～F	土	高杯	-	-	-	(28)	脚部下平	125	01 ~ 02	12.5% 黄緑	12.5% 黄緑	ヘラミダギキ(赤彩)		ヘラナデ		

土器観察表 (弥生時代～古墳時代) (15)

報告 No.	遺物名	出土位置		種類	器 形	分輪 口径	法量(cm)	口径	底径	器高	残存部位	残存 率(%)	胎土(器口径: mm)			色調		調整		その他		
		高さ	厚										内角	外角	厚	外面	内面	外面	内面			
449	P18	14C4	腹土	土	器台	-	12.25	(6.3)			脚部上手 ～脚部底	3.5	0.5 ~ 1			灰白	浅黄緑	不明瞭	赤彩	ナナ?	(不明瞭)	透かした2個残存 (長方形板状下), 断面は胎土
450	弥生 土器 集中	23C6.7	Ⅳ～Ⅴ	弥生	鉢	-	17.4	3.5	(14.7)		口縁部～ 底部	12.25 底36	0.1 ~ 3			12.25 黄緑	12.25 黄緑	11: 腹帯5本 脚: 不明瞭	赤彩	不明瞭	不明瞭	透かした2ヶ所, 1個は腹帯2本, 底部は平直
451	弥生 土器 集中	23C6	Ⅳ～Ⅴ	弥生	器	-	13.0	-	(8.1)		口縁部	15	0.1 ~ 1			12.25 黄	12.25 黄	不明瞭		不明瞭	胎土は胎土	
452	弥生 土器 集中	23C6.7	Ⅳ～Ⅴ	弥生	高 杯	-	-	-	(4.0)		脚部下 部(下部)	-	0.1 ~ 0.3			12.25 黄緑	12.25 黄緑	不明瞭	一部赤彩残存	ハケメ→スビオキエ, 凹凸する	断面形状の変遷が 出る程の胎土か? やや胎土は胎土	
453	弥生 土器 集中	23C2	Ⅳ～Ⅴ	弥生	高 杯	-	26.8	-	(4.2)		杯底	3	0.1 ~ 0.3			12.25 黄	12.25 黄	不明瞭		不明瞭	弥生土器 口縁部 水平な胎土の面 部は胎土	
454		16B19	Ⅱb, Ⅲa, Ⅲb	土	壺	C1	17.4	-	(18.5)		口縁部～ 胴部下位	25.5	0.1 ~ 2.5			12.25 黄緑	12.25 黄緑	11: 腹帯10本 脚: 胎土の低い目的 ハケメ→角筒が斜め のハケメ		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
455		16B10	Ⅱb	土	壺	C1	17.3	-	(6.9)		口縁部～ 胴部上位	8	0.5 ~ 1.5			黄白	12.25 黄	11: ハケメ→ヨコナデ ハケメ 脚: ハケメ		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
456		16B6, 11	Ⅲ直上, Ⅲb	土	壺	C3	19.6	-	(36.2)		口縁部～ 胴部下位	5.5	0.1 ~ 2.5			灰黄緑	12.25 黄緑	11: ヨコナデ 脚: 胎土→チチハケ →ハケメ		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
457		14B14 14C14	Ⅲa, Ⅲb, Ⅲ直	土	壺	-	9.9	(9.0)		胴部下位 ～底部	36	0.1 ~ 2			12.25 黄緑	12.25 黄緑	ハケメ		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土	
458		15B1 15B13	Ⅲ直上, Ⅲ直	土	壺	A1	-	(7.4)		口縁部 (胴部欠)	-	-	0.1 ~ 2			12.25 黄緑	12.25 黄緑	上: ヨコナデ 下: 胎土のハケメ		不明瞭	不明瞭	内外両面にハケメ 調整
459		16B11 15B10	上～下 Ⅲa, Ⅲb	土	壺	A2	24.0	7.4	34.5		口縁部～ 底部	11.5 底27	0.2 ~ 2			12.25 黄緑	12.25 黄緑	11: 上: ヨコナデ→ヘラ ミダ 下: ハケメ残存 脚: ハケメ		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
460		13C14	Ⅲ直 開	土	壺	A2	14.0	-	(4.8)		口縁部	8	0.1 ~ 2			浅黄緑	浅黄緑	上: ヨコナデ 下: ハケメ		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
461		16C14 16C13- 14	Ⅲa開 Ⅲb開	土	壺	A2	17.7	-	(6.5)		口縁部	6	0.1 ~ 1.5			12.25 黄	12.25 黄	ヨコナデ		不明瞭	不明瞭	口縁部に歪みあり
462		15B15	Ⅲ直上	土	壺	B	12.8	-	(5.7)		口縁部	5	0.2 ~ 2			灰黄緑	12.25 黄	不明瞭		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
463		16B24	Ⅲb開	土	蓋	B	15.7	6.2	つまみ 径4.7		つまみ ～ 口縁部	3	0.1 ~ 1			灰黄	12.25 黄	ハケメ→ナデ		不明瞭	不明瞭	つまみ部上面両面が 胎土に異なるが, 中央部は平直
464		13C10	Ⅱb	土	高 杯	B	13.7	-	(5.6)		口縁部～ 大部下位	15	0.1 ~ 1			黄	浅黄緑	11: ヘラミダ 杯: 不明瞭		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
465		16C9	Ⅲa開	土	高 杯	C	-	(6.7)		杯部下手 ～脚部上手 (胴部欠)	-	-	0.1 ~ 0.5			12.25 黄	12.25 黄	杯: ヨコナデ赤彩 脚: ヨコナデ		不明瞭	不明瞭	杯部内外両面滑 しい
466		16C9	Ⅲb開	土	高 杯	-	-	(6.1)		脚部上手 (上部)	-	-	0.1 ~ 1			浅黄	浅黄	ヘラミダ		不明瞭	不明瞭	脚部内面に胎土が つばに付く 透かした1ヶ所 やや胎土は胎土
467		15B15	Ⅲ直上	土	高 杯	-	9.6	(4.2)		脚部	15	0.1 ~ 1			12.25 黄緑	12.25 黄緑	ヘラミダ赤彩		不明瞭	不明瞭	脚部内面胎土が やや平直である やや胎土は胎土	
468		12B25	Ⅲ直上	土	高 杯	-	-	(3.8)		脚部上手 (上部)	-	-	0.1 ~ 0.5			灰黄	灰黄	ヘラミダ赤彩		不明瞭	不明瞭	脚部内面に胎土が 入り残る
469		14C12	Ⅲ直上	土	高 杯	K2	-	(5.0)		脚部上手 (上部)	-	-	0.1 ~ 0.5			12.25 黄	12.25 黄	ヘラミダ赤彩		不明瞭	不明瞭	胎土が胎土
470		13B22	Ⅲ直上	土	高 杯	-	7.9	(5.0)		脚部	13	0.1 ~ 0.5			12.25 黄	12.25 黄	不明瞭		不明瞭	不明瞭	脚部中にやや胎 土のハケメ やや胎土は胎土	
471		13C8	Ⅲ直上	土	高 杯	K2	-	(7.7)		脚部1周 (胴部欠)	-	-	0.1 ~ 0.5			灰黄	灰黄	ヨコナデ		不明瞭	不明瞭	柱状部、腹帯 調整ハケメ
472		15B12	I-Ⅱb	土	蓋	-	2.9	-	(1.4)		つまみ部	36	0.1 ~ 0.5			12.25 黄	12.25 黄	ナデ		不明瞭	不明瞭	上面両面わずかに 胎土
473		15C2	Ⅲa	土	器 形	-	3.75	0 丸丸	4.5		定形	36	0.1 ~ 0.2			12.25 黄	12.25 黄	スビオキエ		不明瞭	不明瞭	口縁部滑りつ
474		16C4- 9	Ⅱb, Ⅲa, Ⅲb, 開	土	器台	A	-	(1.9)		受部下手 ～脚部	-	-	0.1 ~ 1			12.25 黄	12.25 黄	ヘラミダ		不明瞭	不明瞭	三角形の透かした 2個残存
475		15B13	上	土	器台	H	9.8	-	(2.9)		受部	8.5	0.1 ~ 1			12.25 黄	12.25 黄	ヘラミダ(不明瞭)		不明瞭	不明瞭	胎土は胎土

遺物観察表

土器観察表（弥生時代～古墳時代）（16）

報告 No.	遺物名	出土位置		種類	器 形	分輪	法量(cm)			残存 部位	残存 率(%)	胎土(底物径: mm)			色調		調整		その他
		ア/P	B/P				口径	底径	器高			底径	口径	底径	器高	表面	内面	外面	
476	16C4・ 9	墓b, V上 墓b, 陶土	土	器 形	-	-	-	-	(5.7)	脚部上平	-	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ 赤彩	11:ヨコナ 赤彩	受:不明 穴:不明	残存部位に透心穴 なし	
477	2093	V M	土	器 形	-	-	19.6	5.2	(22.0)	口縁部～ 脚部上段 脚部中段 ～底部	口7 底3.5	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	11:ヨコナ 赤彩	11:ヨコナ 赤彩	受:不明 穴:不明	受:1口(脚部)穴3 本人 底部平底 やや膨らんだ土	
478	23C8 22921	V直上 V	土	器 形	-	-	18.6	4.4	23.15	口縁部～ 底部	口6.5 底34	0.2 ~ 3	12.5 黄	12.5 黄	11:ヨコナ 赤彩	11:ヨコナ 赤彩	受:不明 穴:不明	1口縁部外側に及ぶ 肥厚する底部平底 やや膨らんだ土	
479	2096	V直上 V下	土	器 形	-	-	19.6	-	(7.9)	口縁部～ 脚部上段	3	0.1 ~ 1.5	12.5 黄	12.5 黄	11:ヨコナ 赤彩	11:ナ 赤彩	受:不明 穴:不明	口縁部底・胎土中に 海綿骨付わずかに含む やや膨らんだ土	
480	22934 22919	V直上 V	土	器 形	C1	15.7	-	(5.9)	口縁部～ 脚部上段	5	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	ハケメナ 赤彩	ハケメナ 赤彩	受:不明 穴:不明	胎土中に海綿骨付わ ずかに含む やや膨らんだ土		
481	2082	M上	土	器 形	-	-	11.6	5.0	18.9	口縁部～ 底部	1192 底35	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	11:ナ 赤彩	11:ナ 赤彩	受:不明 穴:不明	全口縁部～底部輪 台技法 やや膨らんだ土	
482	2292	V	土	器 形	-	-	4.8	(18.4)	脚部上段 ～底部	36	0.5 ~ 2.5	12.5 黄	12.5 黄	斜めのハケメナ 赤彩	ハケメ ナ	受:不明 穴:不明	底部平底だが中央が 窪む		
483	2096	V下	土	器 形	F	23.9	-	(11.2)	口縁部～ 脚部上段	3	0.2 ~ 5	12.5 黄	12.5 黄	不明	不明	受:不明 穴:不明	排状浮文2個1対4 の間に取入 膨らんだ土		
484	2293 2292	V	土	器 形	-	-	-	-	(13.1)	脚部	-	0.1 ~ 0.5	不明	不明	不明	不明	受:不明 穴:不明	不明	
485	24B 脚部 25B 25B	M	土	器 形	-	-	17.6	8.9	(14.3)	口縁部～ 脚部下平	口9 脚30	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	杯:ヘラズギキ(単位不 明)	杯:ヘラズギキ(やや不 明)	受:不明 穴:不明	古墳時代中期の短形 高杯 膨らんだ土	
486	2098	V下	土	器 形	E1	-	-	(8.3)	脚部1周 (上平)	-	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ(不明)	ナ	受:不明 穴:不明	柱状屈脚状中央		
487	21B12	V直上	土	器 形	E1	-	-	(8.5)	脚部1周 (上平)	-	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ(不明)	ナ	受:不明 穴:不明	柱状屈脚状中央(や や膨らんだ土) 胎土中に海綿骨付わ ずかに含む		
488	18B25	V直上	土	器 形	E2	-	-	(6.8)	脚部1周 (上平)	-	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	不明	不明	受:不明 穴:不明	胎・柱状中央		
489	22B	V	土	器 形	E2	-	-	(6.4)	脚部1周 端部尖頭	-	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ(不明)	ナ	受:不明 穴:不明	胎土中に海綿骨付わ ずかに含む		
490	20925	V下	土	器 形	つ ま み り 2.5	-	-	(1.5)	つまみ り部 (上平)	-	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	ナ	ナ	受:不明 穴:不明	上面窪みや膨ら む		
491	23C10	M上	土	器 形	-	-	3.0	(2.5)	脚部下段～ 底部	36	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	ナ	ナ	受:不明 穴:不明	底部平底(ややや凸) やや膨らんだ土		
492	22915	V下	土	器 形	-	-	-	(4.5)	脚部上平 (上段)	-	0.1 ~ 1	12.5 黄	不明	不明	不明	不明	受:不明 穴:不明	3方透心 透心穴3個残存 膨らんだ土	
493	2098	V直上	土	器 形	-	-	-	(3.2)	脚部上平 (上段)	-	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ 赤彩	杯:不明 脚:ナ	受:不明 穴:不明	透心穴3個残存 やや膨らんだ土		
494	2298	V	土	器 形	-	-	-	(3.6)	脚部上平 (上段)	-	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ 赤彩	受:不明 穴:不明	受:不明 穴:不明	3方透心 透心穴3個残存		
496	22919 V下 22914 22917	V直上 V	土	器 形	-	-	19.2	-	(26.6)	口縁部～ 脚部下段	2	0.2 ~ 2.5	12.5 黄	12.5 黄	11:ヨコナ 赤彩	11:ナ 赤彩	受:不明 穴:不明	胎土中に海綿骨付わ ずかに含む やや膨らんだ土	
497	22C5	M～M V下	土	器 形	-	-	14.0	-	(4.3)	口縁部	3	0.1 ~ 1	12.5 黄	12.5 黄	ヘラズギキ(胎)	ヘラズギキ(胎)	受:不明 穴:不明	内面黒色処理	
499	23C4・ 5	V, V下 V直上	土	器 形	-	-	12.6	6.3	4.2	口縁部～ 底部	6.3	0.1 ~ 0.5	12.5 黄	12.5 黄	コソナ 赤彩	コソナ 赤彩	受:不明 穴:不明	5周輪 底部扁平ヘラ	

土器・陶磁器観察表 (古代～中・近世)

種別 No.	出土位置		種類	器種	分類	法量(cm)			残存部位	残存率(%)	胎土(属物径: mm)			色調		調整		その他
	遺物名	アソビ				層位	口径	底径			器高	目	石	骨	角	泥	外面	
496	19C5	V	上	壺	-	5.3	(1.0)	底部	11	0.1 ~ 0.5	灰白	灰白	灰白	灰白	ナデ	ナデ	右回転 底部縁(赤切)	
500	19B6	V	頂	瓶	?	20.8	-	口縁部～ 底部中位	25	0.1 ~ 1.5	灰白	灰白	灰白	灰白	ナデ	ナデ	胎土中に草色泥物多 く含む 口縁部内面自然釉	
501	14B25	B a	珠	壺	-	35.5	-	口縁部	3	0.1 ~ 1.5	灰	灰	灰	灰	ナデ	ナデ	胎土中に草色泥物多 く含む 口縁部内面自然釉	
502	15C2	B	片 口 鉢	片 口 鉢	-	40.4	-	口縁部	2	0.1 ~ 1.5	灰白	灰	灰	灰	ナデ	ナデ	右回転口縁部上面 に黄鉄粉	
503	P155	13C15	覆土	珠	片 口 鉢	-	-	片口部	-	0.1 ~ 0.2	灰黄	灰黄	灰黄	灰黄	ナデ	ナデ	口縁部内面黄鉄粉 一部おろし目残存	
504	15C・ 2	B	珠	片 口 鉢	-	33.6	-	口縁部	3	0.1 ~ 4	青灰	青灰	青灰	青灰	ナデ	ナデ	口縁部内面黄鉄粉 おろし目(単位不明)	
505	19B	B直上	珠	片 口 鉢	-	130	-	胴部下位 ～底部	6	0.1 ~ 1	灰	灰	灰	灰	ナデ	ナデ	左回転か底部停止 赤切り海鏡管針わず かに含む	
506	21B (1-A) 19C17 (9型)	B b 層下	青 釉	青 釉	-	11.8	-	口縁部	2		灰 オリーブ	灰 オリーブ	-	-	-	-	(小片)編者青	
507	19C7 (北型)	B下	青 釉	青 釉	-	12.0	-	口縁部	4		灰 オリーブ	灰 オリーブ	-	-	-	-		
508	11B	1 C	青 釉	青 釉	-	6.5	(2.8)	底部	2	0.1 ~ 0.3	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	-	-	-	-	釉薬 表面断面面灰白色	
509	23C	B b	か き ぎ ぎ	か き ぎ ぎ	-	5.1	(1.0)	底部	17	0.1 ~ 0.2	灰黄	灰黄	灰黄	灰黄	ナデ	ナデ	表面断面赤切 右回転	
510	5B	B a 中	越 丸 鉢	越 丸 鉢	-	10	-	口縁部～ 体部下部	8	0.1 ~ 2	明赤釉 に灰黄	明赤釉 に灰黄	-	-	-	-	灰黄～17C 内又は 内へ移行する?	
511	8B	1 C 層下	越 丸 鉢	越 丸 鉢	-	4.6	(1.1)	底部	13	0.1 ~ 2	明赤釉 に灰黄	明赤釉 に灰黄	-	-	-	-	灰黄～17C前半	
512	20B	B a	唐 皿	唐 皿	-	12.6	3.6	3.4	口縁部～ 底部	16 或21	0.1 ~ 0.3	灰黄	灰黄	-	-	(見込)胎土目割	起滑律式 灰黄～17C 粉 面 (大粒)多量	
513	20C	B a	唐 皿	唐 皿	-	10.3	4.3	2.9	口縁部～ 底部	12 或31	0.1 ~ 2	灰黄	灰黄	-	-	(見込)胎土目割	灰黄～17C 粉 面 目割付付着 目割付付着	
514	20B	B a	唐 皿	唐 皿	-	10	3.9	2.8	口縁部～ 底部	15 或25	0.1 ~ 4	灰黄	灰黄	-	-	(見込)胎土目割	灰黄～17C 粉 面 目割付付着	

土製品観察表

種別 No.	出土位置		種類	器種	分類	法量(cm)			残存部位	残存率(%)	胎土(属物径: mm)			色調		調整		その他
	遺物名	アソビ				層位	口径	底径			器高	目	石	骨	角	泥	外面	
495	S008 (P&S)	19B23	中	土 練	(1) 2.0	(7) 3.1	5.3	全体の 約1/2	18	0.1 ~ 0.5	灰白	灰白	灰白	ナデ	ナデ	穴の内面黄鉄粉	管状 器に灰白～胎土	
496	22B1	B直上	上	土 練	(1) 3.1	3.4	5.0	全体の 約2/3	-	0.1 ~ 1	灰白	-	-	ナデ	ナデ	管状 器に灰白～胎土		

金属製品観察表

種別 No.	器種	出土位置		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
		グリッド	層位					
525	棒竹 首首	18B	B a	6.7	1.7	2.1	14.2	
526	棒竹 吸口	20B	B a	6.3	1.0	0.9	3.7	縦割あり

銭貨観察表

種別 No.	銭貨名	銭方	書体		裏文字	加工	鋳口	凸	王字	初鑄年 (西暦)	出土位置		外径 (mm)	外径横 (mm)	内径 (mm)	内径縦 (mm)	銭厚 (mm)	重さ (g)	備考
			縦	横							グリッド	層位							
525	聖元元寶	〇	〇	〇	—	—	—	—	—	北安 1101	25B	B b	24.1	24.2	20.05	21.0	1.6	2.5	
526	不 明	〇	—	—	—	—	—	—	—	—	16B11	B	24.2	24.2	19.0	19.5	1.1	2.0	
527	皇宋通寶	〇	〇	〇	—	—	—	—	—	北安 1039	3916	1 a	24.3	24.0	17.6	17.5	1.1	2.0	一部縦割
528	元豐通寶	〇	〇	〇	—	—	—	—	—	北安 1078	483	1 e上	24.9	24.6	18.2	19.1	1.1	3.5	
529	宣和通寶	〇	〇	〇	文	—	—	—	—	—	483	1 c上	25.1	25.2	20.5	20.0	1.1	3.8	
530	宣和通寶	〇	〇	〇	—	—	—	—	—	—	483	1 c上	22.8	22.8	18.0	19.1	1.1	2.7	
531	宣和通寶	〇	〇	〇	—	—	—	—	—	—	11A	1 c層下	23.0	23.0	18.2	18.3	0.9	1.7	
532	宣和通寶	〇	〇	〇	文	—	—	—	—	—	15C10	—	24.8	25.0	20.0	20.0	1.0	2.5	
533	宣和通寶	〇	〇	〇	文	—	—	—	—	—	21B	B a	25.3	25.2	20.5	20.5	1.1	3.0	
534	宣和通寶	〇	〇	〇	—	—	—	—	—	—	7B	1 c層下	21.5	21.6	16.9	16.8	0.9	1.5	

石器・石製品観察表(1)

報告 No.	No.	出土位置	遺構	部位	類別	分期		石材	法量			備考
						分期1	分期2		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
527	16C2	S01	床面上	勾玉	B類	8類	板状石A	2.30	1.30	0.70	300	
528	16C2	S01	中	勾玉未成品	B類	215	緑色石英	2.15	1.40	0.52	240	
529	16C8	S01	竪上	勾玉未成品	A類	7類	滑石B	1.30	0.85	0.30	050	
530	16C6	S01	下	勾玉未成品	A類	7類	滑石B	0.95	0.65	0.30	020	
531	16C6	S01	船体内	勾玉未成品	A類	6類	滑石B	1.15	0.85	0.40	070	
532	16B22	S01	船体内	勾玉未成品	A類	6類	滑石B	1.55	1.10	0.45	130	
533	16B22	S01	中～下	勾玉未成品	A類	6類	板状石B	1.20	0.75	0.50	060	
534	16C2	S01	中	勾玉未成品	A類	6類	滑石B	1.25	0.85	0.40	070	
535	16C1	S01	床面上	勾玉未成品	A類	6類	板状石B	1.25	0.80	0.25	040	
536	16B21	S01	中	勾玉未成品	A類	6類	滑石A	1.05	0.80	0.20	040	
537	15C10	S01	上～下	勾玉未成品	A類	6類	板状石A	1.40	0.80	0.35	060	
538	16C3	S01	上	勾玉未成品	A類	6類	板状石A	1.00	1.25	0.55	080	
539	16C1	S01(屋内土坑)	上	勾玉未成品	A類	5類	板状石A	1.70	1.00	0.55	100	
540	16C2	S01	船形覆土	勾玉未成品	A類	5類	滑石A	1.55	0.90	0.35	080	
541	16B23	S01	上	勾玉未成品	B類	5類	板状石A	2.10	0.90	0.55	200	
542	16C1	S01	船形覆土	勾玉未成品	A類	5類	滑石A	1.40	1.40	0.75	230	
543	16B22	S01	中～下	勾玉未成品	4類		ヒスイ	2.00	1.70	1.10	720	
544	16C8	S01	中	勾玉未成品	4類		ヒスイ	2.05	1.90	1.30	740	
545	16C1	S01(屋内土坑)	上	勾玉未成品	4類		ヒスイ	2.30	2.20	1.55	980	
546	16B23	S01	中	勾玉未成品	4類		ヒスイ	3.95	4.70	2.20	8810	
547	16B23	S01	中	勾玉未成品	3類		ヒスイ	2.70	1.80	1.00	620	
548	15C10	S01	竪上	勾玉未成品	3類		ヒスイ	2.80	1.80	1.50	610	
549	16C2	S01	中	勾玉未成品	3類		ヒスイ	2.90	1.50	1.10	610	
550	16C6	S01	船体内	勾玉未成品	3類		ヒスイ	5.00	3.10	1.40	2480	
551	16C8	S01	下	勾玉未成品	3類		ヒスイ	4.30	3.10	2.20	4350	
552	16C8	S01	上	勾玉未成品	3類		ヒスイ	2.90	2.20	1.05	1470	
553	16B18	S01	上～中	勾玉未成品	3類		ヒスイ	3.10	2.30	1.35	1120	
554	16C8	S01	上	勾玉未成品	2類		ヒスイ	6.40	5.00	2.20	9760	
555	16B23	S01	上	勾玉未成品	2類		ヒスイ	5.65	2.45	2.15	4380	
556	16C2	S01	中	勾玉未成品	2類		ヒスイ	6.50	5.85	2.80	1840	
557	16B22	S01	床面上	勾玉未成品	2類		ヒスイ	4.40	2.20	0.90	1140	
558	16C6	S01	竪上	管玉未成品	A類	7類	緑色凝灰石B	1.20	0.60	0.55	060	
559	16C8	S01	中	管玉未成品	B類	7類	緑色凝灰石C	2.00	0.80	0.80	140	
560	16C6	S01	中	管玉未成品	B類	7類	緑色凝灰石A	1.80	0.65	0.60	130	
561	16B23	S01	上	管玉未成品	A類	7類	緑色凝灰石B	0.55	0.40	0.35	010	
562	16C6	S01	船形覆土	管玉未成品	A類	7類	緑色凝灰石B	0.50	0.60	0.55	020	
563	16C6	S01	船形覆土	管玉未成品	B類	6類	緑色凝灰石A	1.80	0.80	0.80	180	
564	16C7	S01	中	管玉未成品	B類	5類	緑色凝灰石B	2.00	0.95	0.70	160	
565	16C7	S01	上	管玉未成品	B類	5類	緑色凝灰石A	2.60	0.90	0.75	240	
566	16B23	S01	中	管玉未成品	B類	5類	緑色凝灰石B	1.85	0.90	0.70	160	
567	16C7	S01	下	管玉未成品	A類	4類	緑色凝灰石A	0.90	0.60	0.60	050	
568	16C2	S01	上	管玉未成品	A類	4類	緑色凝灰石A	1.00	0.60	0.65	060	
569	16C2	S01	船形覆土	管玉未成品	2類		緑色凝灰石C	4.30	2.60	1.80	2640	
570	16B18	S01	竪上	管玉未成品	3類		緑色凝灰石A	4.25	3.30	2.30	9960	817と複合
571	16C3	S01	上～中	管玉未成品	2類		板状石A	0.80	0.50	0.60	030	
572	16C3	S01	下	管玉未成品	B類	3類	滑石B	0.85	0.70	0.65	050	
573	16C3	S01	中～下	管玉未成品	2類		滑石B	0.95	0.60	0.40	030	
574	16C7	S01	下	管玉未成品	2類		板状石A	0.65	0.65	0.50	030	
575	16B23	S01	上	管玉未成品	2類		板状石A	0.80	0.80	0.45	030	
576	16C3	S01	上～下	管玉未成品	2類		板状石A	0.75	0.65	0.40	020	
577	16B18	S01	上～下	管玉未成品	2類		板状石A	0.70	0.65	0.40	020	
578	16B18	S01	上～中	管玉未成品	2類		板状石A	0.70	0.70	0.70	070	
579	16C3	S01	中	管玉未成品	2類		板状石A	0.65	0.65	0.50	030	
580	16C3	S01	床面上	管玉未成品	2類		板状石A	0.75	0.70	0.65	050	
581	16C3	S01	中	管玉未成品	1類		板状石A	1.00	0.75	0.70	090	
582	16C8	S01	上	管玉未成品	1類		板状石A	1.15	0.75	0.65	110	
583	16C7	S01	中	管玉未成品	1類		板状石A	1.00	0.80	0.70	080	
584	16C3	S01	上～下	管玉未成品	1類		板状石A	1.10	0.80	0.75	080	
585	16B22	S01	上	管玉未成品	0.5類		ヒスイ	0.55	0.30	0.20	020	
586	16C1	S01(屋内土坑)	2	内磨礫石	A類	2類	砂石A	21.90	12.80	1.10	13700	
587	16C7	S01	中	内磨礫石	A類	1類	砂石A	9.40	14.00	2.20	30710	
588	16C7	S01	上	内磨礫石	A類	4類	砂石A	4.00	4.90	0.80	2770	
589	16C8	S01	上	内磨礫石	A類	3類	砂石A	9.30	9.80	2.40	26260	
590	16C6	S01	上	内磨礫石	B類		砂石B	9.60	6.30	1.90	9200	
591	16C11	S01	床面上	礫石	A類	1類	砂石B	40.00	25.10	12.30	161000	
592	16C3	S01	上	礫石	B類	1類	砂石B	11.90	11.80	3.60	32300	
593	16C3	S01	上	礫石	A類	1類	砂石B	13.80	11.50	3.20	80860	
594	16B24	S01	下	礫石	A類	1類	砂石A	6.20	7.40	5.25	24570	
595	16B24	S01	上	礫石	A類	2類	砂石B	8.30	7.80	3.90	29680	
596	16B23	S01	上	礫石			砂石A	15.20	7.80	3.25	60700	
597	16C1	S01	床面上	礫石			砂石A	10.70	3.40	3.20	17970	
598	16C6	S01(内北東柱穴)	下	礫石			安山岩	7.70	6.80	5.60	34960	
599	16B22	S01	床面上	礫石			砂石A	23.60	17.40	7.80	46800	
600	16C6	S01	竪上	礫石			ヒ化木	11.50	1.60	0.80	2330	
601	15C14	S02	土柱穴内	勾玉	A類	8類	板状石B	1.50	1.00	0.35	070	北摩精中
602	15C7	S02	上	勾玉未成品	A類	7類	滑石B	1.00	0.70	0.30	030	
603	15C7	S02	竪上	勾玉未成品	A類	6類	板状石A	1.55	0.80	0.60	080	
604	15C7	S02	床面上	勾玉未成品	A類	6類	ヒスイ	1.30	0.85	0.40	070	
605	15C7	S02	床面上	勾玉未成品	4類		ヒスイ	2.60	2.15	1.10	760	
606	15C14	S02	上	管玉未成品	B類	6類	緑色凝灰石A	2.70	1.15	1.00	270	
607	15C7	S02	床面上	管玉未成品	4類		緑色凝灰石A	1.80	1.40	1.00	370	
608	15C7	S02	床面上	管玉未成品	A類	6類	緑色凝灰石B	0.90	0.80	0.70	070	

石器・石製品観察表(2)

報告 No.	タテマ	出土位置		類別	分期	石種	法量			備考
		遺構	層位				分類1	分類2	長さ(cm)	
609	15c-7	S802	上～中	管玉未成品	4期	緑色燧石A	1.70	0.90	0.90	140
610	15c-7	S802	下	燧石	2期	滑石A	0.65	0.75	0.65	140
611	15c-8	S802	中	管玉未成品	2期	軟石A	0.65	0.55	0.50	0.20
612	15c-7	S802	上	管玉未成品	2期	軟石A	0.70	0.55	0.50	0.30
613	15c-12	S802		ガラス	2期	ガラス	0.45	0.45	0.25	0.10
614	15c-7	S802	床面上	内磨砥石	A 2期	砂石A	15.70	7.10	1.10	1460.0
615	15c-15	S802	上	砥石	A 2期	砂石A	20.60	25.30	7.20	860.0
616	13c-13	S803	上	管玉未成品	4期	緑色燧石A	3.30	2.20	1.40	1100
617	13c-13	S803	5	管玉未成品	2期	軟石A	0.60	0.60	0.60	0.10
618	13c-13	S803	床面上	管玉未成品	1期	軟石A	1.00	0.60	0.70	100
619	13c-12	S803	床面上	管玉未成品	1期	軟石A	0.85	0.70	0.70	0.70
620	15B20	S801(S803)	中	管玉未成品	A 2期	滑石A	1.45	1.00	0.30	0.50
621	15B23	S801(S803)	中	管玉未成品	B 5期	滑石B	2.45	1.45	0.45	300
622	15B23	S801(S803)	上	管玉未成品	A 5期	軟石A	1.25	0.85	0.45	0.90
623	15c-4	S801(S803)	F	管玉未成品	A 5期	軟石A	1.15	1.10	0.80	1.80
624	15c-5	S801(S803)	F	管玉未成品	A 7期	緑色燧石B	1.15	0.90	0.45	0.30
625	15c-5	S801(S803)	F	四石	A 7期	砂石A	9.00	7.20	5.00	445.80
627	15B15	S805	上～下	管玉	A 8期	滑石A	1.20	0.85	0.40	0.50
627	15B10	S805	上～下	管玉未成品	A 5期	ヒスイ	1.35	0.85	0.40	0.70
628	15B10	S805	上～下	管玉未成品	4期	緑色燧石B	1.20	0.70	0.70	0.70
629	15B5	S805(SD11)	上	管玉未成品	4期	緑色燧石A	1.50	0.80	0.55	1.10
630	15B4	S805(SD17)	上	管玉未成品	4期	緑色燧石A	3.40	1.65	1.20	730
631	14B4	S807(SD13)	上	管玉	A 2期	砂石A	1.470	1.80	2.50	2120.0
632	13c-10	S807(SD13)	中	管玉未成品	A 5期	ヒスイ	1.70	1.10	0.60	1.80
633	13c-10	S807(SD13)	上～下	管玉未成品	3期	ヒスイ	2.20	1.80	1.25	8.10
634	14c-7	S807(SD23)	中	管玉未成品	3期	緑色燧石A	2.40	1.85	1.20	5.20
635	15c-3	S810	上～中	管玉未成品	A 5期	滑石B	1.35	0.60	0.40	0.60
636	13c-4	S810	上	管玉未成品	A 7期	緑色燧石B	0.80	0.50	0.50	0.50
637	14B14	S803(P26)	上	管玉	B 3期	軟石A	0.60	0.51	0.51	0.20
638	14c-4	S803(P28)	上	砥石	B 2期	流紋岩	8.40	4.90	3.60	1866.0
639	14B22	S803(P165)	上	砥石	B 2期	四稜岩	19.70	10.60	4.70	1650.0
640	13c-2	S835(SX05)	上	管玉未成品	A 6期	ヒスイ	1.20	0.70	0.50	0.70
641	13c-2	S835(SX05)	上	管玉未成品	A 4期	緑色燧石A	4.40	2.30	1.45	17.60
642	13c-2	S835(SX05)	上	内磨砥石	A 1期	砂石A	6.55	10.70	10.0	1256.0
643	13B25	S834(SX04)	上	管玉	A 8期	滑石B	1.70	0.90	0.50	1.20
644	14c-1	S834(SX04)	上	管玉未成品	B 5期	滑石B	2.40	1.30	1.30	4.70
645	14c-1	S834(SX04)	中	管玉未成品	4期	緑色燧石A	3.00	1.80	1.70	10.10
646	13B25	S834(SX04)	上	管玉未成品	A 2期	緑色燧石B	4.30	2.30	0.90	67.80
647	14c-1	S834(SX04)	F	管玉未成品	A 2期	緑色燧石A	8.30	3.80	2.30	722.0
648	14c-1	S834(SX04)	F	管玉	B 2期	軟石A	0.80	0.65	0.65	0.50
649	13B25	S834(SX04)	上	砥石	A 2期	砂石A	1.470	12.10	4.15	1235.0
650	14c-1	S835	上	管玉未成品	A 6期	軟石A	1.25	0.80	0.50	0.70
651	14c-10	S807	上	管玉未成品	B 5期	緑色燧石A	2.15	1.00	0.80	2.10
652	14B14	S808	上～下	管玉未成品	A 2期	滑石A	1.60	0.95	0.60	0.60
653	14B14	S808	上～下	管玉未成品	A 6期	滑石A	1.10	0.70	0.50	0.40
654	14B14	S808	上～下	管玉未成品	3期	緑色燧石B	4.40	1.25	1.10	5.40
655	14B4	S831	上	管玉未成品	C 7期	緑色燧石A	3.10	1.00	1.00	6.20
656	15B21	S812	中～下	管玉未成品	A 5期	軟石A	1.60	1.30	0.50	1.10
657	15B21	S812	下	管玉未成品	A 7期	緑色燧石A	2.25	1.00	0.80	2.20
658	15c-2	S804	上	管玉未成品	A 6期	ヒスイ	1.20	0.80	0.45	0.80
659	15B23	S804	上	管玉未成品	A 6期	軟石A	1.05	0.75	0.45	0.50
660	15c-2	S804	F	管玉未成品	B 5期	軟石A	2.35	1.70	1.00	5.60
661	15c-2	S804	上～下	管玉	A 8期	緑色燧石A	0.40	0.60	0.60	0.20
662	15c-2	S804	上	管玉未成品	A 5期	滑石A	0.65	0.60	0.55	0.60
663	15B19	S809	上～下	管玉未成品	A 6期	滑石A	1.30	0.90	0.20	0.30
664	15B8	S809	上～下	管玉未成品	C 5期	ヒスイ	3.00	2.40	1.10	13.10
665	15B13	S809	上～下	管玉未成品	2期	軟石A	0.65	0.60	0.50	0.40
666	15B18	S805	上	管玉未成品	3期	緑色燧石A	3.15	1.70	1.20	6.70
667	15B18	S805	上	管玉未成品	A 2期	軟石A	0.55	0.60	0.55	0.20
668	15B18	S805	中	管玉未成品	1期	滑石B	1.00	0.75	0.65	1.00
669	16B16	S833(SX02)	上	石核	A 4期	ヒスイ	4.30	8.50	4.40	2366.0
670	15B20	S833(SX02)	上～下	管玉未成品	A 7期	緑色燧石A	1.00	0.60	0.60	0.50
671	16B16	S833(SX02)	中	管玉未成品	2期	軟石A	0.70	0.60	0.60	0.40
672	16B16	S833(SX02)	上～下	白土	B 5期	滑石B	0.50	0.50	0.25	0.10
673	16B16	S833(SX02)	上	内磨砥石	B 4期	砂石A	7.20	11.30	1.40	105.80
674	15B20	S833(SX02)	上	砥石	A 7期	安山岩	15.30	6.80	3.50	728.90
675	15B25	S806	F	管玉	B 8期	滑石A	1.90	1.15	0.55	1.70
676	15B20	S806	F	管玉未成品	A 5期	滑石A	1.30	0.90	0.40	1.00
677	15B20	S806	F	管玉未成品	3期	ヒスイ	3.35	2.25	1.70	17.90
678	15B20	S806	上～下	管玉未成品	A 2期	滑石A	1.50	0.60	0.50	0.30
679	15B25	S806	F	管玉未成品	2期	緑色燧石C	5.70	3.50	2.20	41.90
680	15B20	S806	F	管玉未成品	1期	軟石A	2.00	1.05	0.95	2.20
681	15B24	S806	上	石核	A 7期	安山岩	8.70	7.30	6.60	592.90
682	16B16	S837	中	砥石	A 2期	砂石A	9.40	8.30	4.50	486.80
683	16c-1	S803	中	管玉未成品	A 7期	軟石A	1.10	0.70	0.55	0.30
684	16c-1	S803	中	管玉未成品	3期	ヒスイ	2.80	2.40	1.35	14.50
685	16c-1	S803	中	管玉未成品	3期	緑色燧石B	2.10	1.10	0.75	2.00
686	16c-1	S803	上	管玉未成品	3期	緑色燧石A	3.00	1.10	0.75	2.40
687	16c-1	S803	中	石核	A 7期	頁石	5.05	3.80	2.80	50.30
688	16c-1	S803	中	管玉未成品	2期	軟石A	0.70	0.65	0.55	0.20
689	15c-5	S803	中～下	管玉未成品	2期	軟石A	0.75	1.10	0.55	0.30
690	15c-5	S803	中	内磨砥石	A 4期	砂石A	5.00	4.40	0.80	35.20
691	16c-1	S803	上	砥石	A 2期	砂石A	30.60	21.20	9.60	846.00
692	16B7	S802	中	管玉未成品	4期	緑色燧石B	1.00	0.65	0.65	0.60
693	16B7	S802	上	内磨砥石	A 2期	砂石A	4.50	5.80	2.40	67.00
694	16B8	S819	中	管玉未成品	A 6期	軟石A	1.50	1.00	0.80	0.40
695	16B8	S819	中	砥石	A 2期	砂石B	8.40	8.00	5.80	559.90

上欄に内磨砥石の研磨

石器・石製品観察表 (3)

報告 No.	グランプ 番号	出土位置 遺構	層位	類別	分類 分類1/分類2	石材	重量			備考
							長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	
696	60B12	SK49(SX01)	上～F	勾玉未成品	A類 6個	滑石 A	1.30	0.85	0.25	0.6
697	60B12	SK49(SX01)	上～F	磨玉未成品	2個	靛板石 A	0.71	0.85	0.16	0.6
698	60B13	SK49(SX01)	上～F	磨玉未成品	1個	靛板石 A	0.75	0.52	0.50	0.4
699	60B12	SK49(SX01)	上～F	ガラス	5	ガラス	0.35	0.35	0.25	0.1
700	60B12	SK49	上～F	内磨砥石	A類 2個	砂岩 A	4.50	8.00	1.05	40.0
701	60B23	SK36	F	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 A	0.45	0.55	0.55	0.30
702	60B23	SK36	中	石核	1	鉄石英	4.20	3.00	2.60	34.0
703	60B23	SK36	上	内磨砥石	A類 1個	砂岩 A	3.25	4.30	1.00	13.60
704	60B23	SK36	上	内磨砥石	B類 1個	砂岩 A	6.40	11.60	2.60	183.40
705	60B23	SK36	F	内磨砥石	A類 2個	砂岩 A	6.10	7.40	1.90	94.10
706	60B23	SK36	F	砥石	A類 1個	砂岩 B	11.40	8.90	6.70	730.00
707	60B18	SK36	F	四石	1	砂岩 A	12.00	7.90	6.90	865.70
708	18C4	SK46	上	磨玉未成品	1個	靛板石 A	0.80	0.75	0.75	0.60
709	14C3	SD24	上～F	管玉未成品	C類 5個	緑色凝灰岩 B	2.60	1.40	1.30	8.80
710	14C8	SD30	上～F	管玉未成品	4個	緑色凝灰岩 A	3.50	2.00	1.60	14.00
711	14C8	SD30	上	管玉未成品	3個	緑色凝灰岩 A	3.60	1.30	1.20	4.00
712	14C8	SD30	F～D	管玉未成品	3個	緑色凝灰岩 B	1.60	0.60	0.55	0.60
713	15011	SD47(SK13)	竊上	勾玉未成品	4個	石英質	2.90	1.40	1.90	8.80
714	15011	SD47(SK13)	上～F	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 B	0.90	0.55	0.55	0.60
715	1506	SD47(SK13)	F	管玉未成品	C類 6個	緑色凝灰岩 B	4.00	1.05	0.95	6.60
716	15B11	SD47	F	内磨砥石	A類 1個	砂岩 A	7.40	14.00	2.10	219.90
717	15C2	SD37(SX00)	竊上	管玉未成品	B類 7個	緑色凝灰岩 A	1.25	0.70	0.75	1.60
718	14C10	SD37(SX03)	上	管玉未成品	B類 5個	緑色凝灰岩 A	1.80	0.95	0.95	1.90
719	15C1	SD37	F～D	磨玉未成品	1個	靛板石 A	0.70	0.65	0.70	0.50
720	15C1	SD37(SX03)	上	砥石	1	砂岩 A	13.40	6.30	1.40	60.0
721	14B2	SD08	竊上	勾玉未成品	A類 7個	靛板石 A	3.75	1.00	0.40	0.70
722	15B30	SD06	上～F	磨玉未成品	2個	靛板石 A	0.70	0.65	0.65	0.40
723	15B16	P6	上	勾玉未成品	3個	瑪瑙	2.70	2.00	1.30	7.40
724	16B2	P424	中	勾玉未成品	3個	ヒスイ	4.30	2.90	1.20	32.50
725	14B16	P461	下	管玉未成品	B類 6個	緑色凝灰岩 A	2.50	0.90	0.65	2.50
726	12B8	P75	中	管玉未成品	3個	緑色凝灰岩 A	2.40	1.25	1.00	4.50
727	15C3	P182	上～F	管玉未成品	B類 5個	緑色凝灰岩 B	2.60	1.10	1.10	5.30
728	14C6	P152	竊上	管玉未成品	4個	緑色凝灰岩 B	1.50	0.80	0.80	1.30
729	14B23	P174	竊上	管玉未成品	2個	緑色凝灰岩 A	4.00	4.85	2.50	33.40
730	15B30	P382	上～F	内磨砥石	A類 2個	砂岩 A	5.20	7.70	1.40	70.60
731	13C10	P629	F	砥石	A類 2個	四稜石	13.50	9.30	2.65	401.00
732	12B13	P368	上～F	四石	1	砂岩 A	11.05	7.40	1.90	50.00
733	12C10	SD04	上	勾玉未成品	A類 7個	靛板石 A	0.850	0.50	0.25	0.10
734	12C10	SD04	竊上	勾玉未成品	A類 5個	靛板石 A	1.20	0.65	0.30	0.40
735	12C9	SD04	上	勾玉未成品	B類 5個	滑石 B	2.58	1.60	0.50	3.30
736	12B14	SD04	上	勾玉未成品	A類 5個	靛板石 A	2.00	1.40	0.55	2.30
737	18C3	SD04	竊上	管玉未成品	3個	瑪瑙	3.00	2.65	1.35	12.70
738	12B19	SD04	上	石核	1	ヒスイ	2.30	5.60	3.65	227.00
739	12C4	SD04	竊上	石核	1	ヒスイ	4.65	4.80	3.05	89.80
740	12C10	SD04	上	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 A	1.25	0.60	0.50	0.40
741	12B8	SD04	竊上	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 C	1.55	0.70	0.65	1.10
742	12C9	SD04	上	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 A	1.20	0.75	0.70	1.10
743	12C5	SD04	上	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 B	0.85	0.40	0.40	0.20
744	12C8	SD04	竊上	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 B	0.60	0.45	0.45	0.20
745	12B10	SD04	竊上	管玉未成品	B類 6個	緑色凝灰岩 B	1.95	1.10	1.10	2.70
746	12C10	SD04	上	管玉未成品	4個	緑色凝灰岩 A	1.90	0.75	0.70	1.40
747	12C9	SD04	上	管玉未成品	4個	緑色凝灰岩 C	1.30	0.90	0.65	0.80
748	12C5	SD04	上	管玉未成品	4個	緑色凝灰岩 A	2.85	1.85	1.40	8.40
749	12C9	SD04	竊上	管玉未成品	3個	緑色凝灰岩 B	4.10	1.45	1.00	4.10
750	12B25	SD04	上	管玉未成品	2個	緑色凝灰岩 A	2.75	2.35	2.05	15.10
751	12C5	SD04	上	磨玉	B類 2個	靛板石 A	0.70	0.50	0.50	0.20
752	12C9	SD04	上	磨玉未成品	2個	靛板石 A	0.80	0.65	0.65	0.40
753	12C10	SD04	竊上	磨玉未成品	2個	靛板石 A	0.50	0.65	0.35	0.10
754	12C10	SD04	竊上	磨玉未成品	2個	靛板石 A	0.45	0.45	0.25	0.10
755	12C10	SD04	上	磨玉未成品	1個	靛板石 A	0.90	0.70	0.40	0.40
756	12B34	SD04	上	臼玉	1	滑石 B	0.40	0.40	0.25	0.10
757	12C4	SD04	上	臼玉	1	滑石 B	0.40	0.40	0.30	0.10
758	12C4	SD04	上	臼玉	1	滑石 B	0.40	0.40	0.30	0.10
759	12C10	SD04	竊上	臼玉	1	滑石 B	0.40	0.40	0.30	0.20
760	12C15	SD04	上	臼玉未成品	1	滑石 B	0.60	0.60	0.30	0.20
761	12B24	SD04	上	磨玉未成品	A類 2個	青石	1.65	0.55	0.50	0.30
762	12C3-4	SD04	竊上	砥石	A類 2個	砂岩 B	9.30	7.10	3.35	331.10
763	12B13	SD04	上	横割射石器	1	砂岩 A	10.60	10.05	2.15	241.70
764	60B17		■ b	勾玉	A類 8個	滑石 A	1.60	1.15	0.50	1.30
765	16C7		■ b	勾玉	A類 8個	靛板石 B	1.10	0.65	0.30	0.30
766	16B18		■ b	勾玉未成品	A類 7個	滑石 C	1.30	0.80	0.35	0.40
767	15B30		■ b	勾玉未成品	A類 7個	靛板石 B	1.20	0.40	0.30	0.40
768	15B30		■ b	勾玉未成品	A類 6個	滑石 A	1.15	0.70	0.40	0.60
769	60B23		■ b	勾玉未成品	A類 6個	滑石 A	1.20	0.80	0.40	0.60
770	15C2		■ b	勾玉未成品	B類 6個	靛板石 A	1.85	0.80	0.35	0.90
771	13C7		■ b	勾玉未成品	A類 5個	ヒスイ	1.40	0.85	0.40	0.90
772	16B16		■ b	勾玉未成品	A類 5個	滑石 A	1.05	0.60	0.30	0.20
773	14C7		■ a	勾玉未成品	C類 5個	ヒスイ	4.40	2.05	0.85	13.00
774	15B14		■ a	勾玉未成品	B類 5個	滑石 B	2.00	1.45	0.65	3.80
775	13C3		■ a	勾玉未成品	B類 5個	滑石 C	2.80	1.70	0.70	5.00
776	14C7		■ a	勾玉未成品	B類 5個	滑石 A	3.05	1.70	0.65	5.50
777	15B14		■ a	勾玉未成品	B類 5個	滑石 C	2.25	1.70	0.90	4.90
778	15B13		■ a	勾玉未成品	A類 5個	靛板石 A	1.30	1.30	0.75	2.80
779	60B16		■ a	勾玉未成品	1個	瑪瑙	1.15	0.95	0.80	2.10
780	15C7		■ a	管玉未成品	A類 7個	緑色凝灰岩 B	1.41	0.42	0.45	0.30

石器・石製品観察表 (4)

報告 No.	グレイ No.	出土位置 遺構	部位	種類	分類 分類1 分類2	石材	法量			備考	
							長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm) 重さ(g)		
781	16C12						0.90	0.40	0.35	0.20	緑色燧石 区北東側面
782	16B1		Ⅱb	管玉未成品	A類 7類	緑色燧石A	1.35	0.65	0.60	0.90	
783	16B23		Ⅱb	管玉未成品	B類 7類	滑石C	1.80	0.95	0.95	1.70	
784	15B30		Ⅱa	管玉未成品	A類 7類	緑色燧石C	1.30	0.70	0.70	0.70	
785	14B21		Ⅱa	管玉未成品	B類 6類	緑色燧石A	2.10	0.75	0.71	2.20	
786	14C2		Ⅱa	管玉未成品	B類 6類	緑色燧石C	2.85	1.00	0.70	3.00	
787	16B17		Ⅱa	管玉未成品	A類 6類	緑色燧石A	1.60	0.85	0.70	1.60	
788	13B19		Ⅱa	管玉未成品	C類 5類	緑色燧石C	4.10	1.20	1.25	10.40	
789	15B16		Ⅱb	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	2.35	1.05	1.20	4.00	
790	15C6		Ⅱa	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石C	1.15	1.10	1.10	4.90	
791	15C3		Ⅱb	管玉未成品	C類 5類	緑色燧石A	4.85	1.75	1.45	14.00	
792	14B17		Ⅱa	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	3.15	1.30	1.55	8.00	
793	14B18		Ⅱa	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	2.30	1.10	1.10	3.70	
794	13C3		Ⅱa	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	2.00	1.10	1.20	4.30	
795	16B16		Ⅱb	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石C	2.00	1.10	0.70	2.20	
796	14C7		Ⅱa	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	2.00	0.90	0.80	2.20	
797	13B8		Ⅱb	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石B	2.00	0.95	0.70	1.40	
798	14B22		Ⅱa	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	2.10	1.20	1.20	4.80	
799	14B15		Ⅱb	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石A	1.65	1.15	0.95	2.60	
800	14B23		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	2.70	1.20	1.05	4.20	
801	13C9		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	1.60	1.25	1.10	2.70	
802	13B13		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	1.30	1.10	0.90	1.80	
803	14B21		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	1.55	0.95	1.05	2.20	
804	15B12		Ⅱb	管玉未成品	4類	緑色燧石A	3.05	1.25	0.90	3.80	
805	13B14		Ⅱa	管玉未成品	3類	緑色燧石A	3.25	1.15	1.25	5.50	
806	14B21		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	3.50	2.20	1.55	14.90	
807	15B3-8		Ⅱa, Ⅱb	管玉未成品	3類	緑色燧石B	3.30	1.10	0.80	3.10	
808	12C3		Ⅱa	管玉未成品	3類	緑色燧石A	3.05	1.40	0.80	3.60	
809	14B9		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	3.00	1.50	1.60	10.60	
810	14B5		Ⅱb	管玉未成品	3類	緑色燧石A	2.80	2.05	1.30	10.30	鋼線素材
811	13B10		Ⅱa	管玉未成品	3類	緑色燧石A	3.50	2.10	1.15	9.10	
812	13C1		Ⅱa	管玉未成品	3類	緑色燧石A	3.65	2.20	1.50	9.80	
813	14B21		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	3.35	1.90	1.70	8.70	
814	16C4		Ⅱa	管玉未成品	2類	緑色燧石B	8.50	3.90	4.60	108.60	
815	15B14		Ⅱa	管玉未成品	2類	緑色燧石A	3.30	6.10	1.90	31.20	
816	13B21		Ⅱa	管玉未成品	2類	緑色燧石A	3.40	2.40	2.20	19.90	
817	15B2		Ⅱb	管玉未成品	2類	緑色燧石A	3.50	4.10	3.30	67.80	570上接合
818	14B23		Ⅱa	管玉未成品	4類	緑色燧石A	4.00	3.20	1.65	10.80	819上接合
819	13B16		Ⅱa	管玉未成品	3類	緑色燧石A	3.60	3.30	2.70	15.80	818上接合
820	13B10		Ⅱa	管玉未成品	2類	緑色燧石A	6.70	2.60	2.40	50.80	821・822上接合
821	13B10		Ⅱa	管玉未成品	2類	緑色燧石A	6.50	3.15	2.70	75.90	820・822上接合
822	13B10		Ⅱa	管玉未成品	2類	緑色燧石A	4.50	3.00	2.60	33.70	820・821上接合
823	15B20		Ⅱb	管玉未成品	2類	靑石A	0.75	0.85	0.75	0.80	
824	16B16		Ⅱb	管玉未成品	2類	靑石A	0.75	0.60	0.55	0.30	
825	16B17		Ⅱb	管玉未成品	1類	靑石A	0.60	0.60	0.60	0.60	
826	16C6		Ⅱb	管玉未成品	1類	靑石A	1.20	0.70	0.70	0.80	
827	16B11		Ⅱb	管玉未成品	1類	靑石A	1.30	0.80	0.70	1.20	
828	14B11		Ⅱa	石核		黒石莖	9.90	7.90	5.00	496.80	
829	12B14		Ⅱa	内側砥石	A類 1類	安山岩	9.60	16.50	1.90	421.30	
830	15C7		Ⅱa	内側砥石	A類 4類	流紋岩	4.40	5.40	1.10	25.90	
831	16C11		Ⅱb	内側砥石	A類 4類	砂岩	4.90	6.00	0.90	36.60	
832	13B14		Ⅱa	内側砥石	A類 3類	砂岩	8.40	9.10	1.65	144.10	
833	16C13		Ⅱb	内側砥石	B類	砂岩	6.50	14.10	1.90	232.00	
834	13B8		Ⅱa	砥石	A類 2類	砂岩B	14.20	10.40	8.80	1765.00	
835	13C9		Ⅱa	砥石	B類 1類	砂岩B	11.40	9.50	2.10	248.70	
836	13B24		Ⅱa	砥石	B類 2類	砂岩A	9.20	8.30	3.20	240.00	
837	15C9		Ⅱa	砥石	A類 1類	流紋岩	7.00	7.20	5.50	251.80	
838	13C3		Ⅱa	砥石		ヒスイ	7.30	6.80	4.60	261.30	
839	14C1		Ⅱb	細工彫のある 柄杓		建築瓦葺	3.70	3.20	1.00	9.70	
840	16C13		Ⅱb	内側砥石		安山岩	16.50	7.60	6.10	1179.30	
841	19B11		V	勾玉未成品	A類 7類	滑石A	1.30	0.85	0.45	0.80	
842	18B5		Ⅱ直上	勾玉未成品	A類 6類	靑石A	1.45	1.20	0.60	1.70	
843	21B16		Ⅱ直上	勾玉未成品	A類 5類	ヒスイ	1.65	1.00	0.60	2.50	
844	22B19		V F	勾玉未成品	C類 5類	滑石C	2.70	2.10	0.95	8.80	
845	19B13		V	勾玉未成品	B類 5類	靑石A	2.80	1.80	0.95	4.10	
846	18B19		V	勾玉未成品	B類 5類	靑石A	2.20	1.25	0.90	4.30	
847	19B19		Ⅱ直上	管玉未成品	A類 6類	緑色燧石B	1.10	0.60	0.60	0.60	
848	19B4		V	管玉未成品	A類 5類	緑色燧石A	1.70	1.20	0.90	2.70	
849	18B5		Ⅱ直上	管玉未成品	B類 5類	緑色燧石B	2.95	1.15	1.00	4.50	
850	20B5		V	管玉未成品	4類	緑色燧石B	1.75	1.15	1.05	2.80	
851	19B22		V F	管玉未成品	4類	緑色燧石C	2.80	1.70	1.20	1.150	
852	22B25		Ⅱ直上	管玉未成品	1類	緑色燧石B	11.10	10.00	1.55	443.40	
853	21B18		V F	管玉未成品	A類 3類	靑石A	0.90	0.65	0.65	0.60	
854	19C10		V F	管玉未成品	2類	靑石A	1.00	0.90	0.50	0.70	
855	19B18		Ⅱ直上	管玉未成品	2類	靑石A	0.90	1.00	1.00	1.40	
856	20B23		Ⅱ直上	管玉未成品	2類	靑石A	0.80	0.80	0.80	0.80	
857	19B1		V	管玉未成品	1類	靑石A	0.60	0.90	0.85	1.00	
858	18B5		V F	管玉未成品	1類	滑石B	1.00	0.70	0.70	0.80	
859	18B5		V	管玉未成品	1類	靑石A	0.90	0.70	0.70	0.80	
860	19C4		Ⅱ	管玉未成品	1類	靑石A	0.80	0.90	0.80	1.00	
861	19B15		V	管玉未成品	1類	靑石A	2.00	1.40	1.35	4.50	
862	20B1		V	管玉未成品	1類	滑石B	0.70	0.60	0.30	0.20	
863	21B5		V	石核類		滑石B	4.95	2.40	0.85	7.30	鋼線
864	22B2		V	内側砥石	A類 4類	砂岩	3.30	3.30	1.00	27.50	

石器・石製品観察表 (5)







報告NO.	タテマ	出土位置		層位	種類	分期		石材	法量			備考	
		遺構	部位			分類1	分類2		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		重さ(g)
865	22019		Ⅲ直上		内磨片石	A類	2期	砂岩A	5.00	6.90	1.40	366.00	
866	22022		Ⅲ直上		砥石	A類	2期	砂岩A	10.80	7.80	4.55	556.10	
867	22027		V F		砥石	A類	2期	砂岩A	14.70	9.80	3.60	771.50	
868			V		砥石	A類	1期	凝灰岩	8.50	4.30	4.60	182.50	
869	22C-1		V F		砥石	A類	1期	砂岩A	7.50	6.40	4.50	158.20	
870	19019		Ⅲ		軽石製研磨具			軽石	3.50	4.60	2.60	7.20	
871	22019		V上		軽石製研磨具			軽石	6.00	5.10	3.15	13.40	
872	2201		Ⅲ		磨石盤			安山岩	13.80	9.60	4.00	917.20	
873	24021		V		横刃形石器			砂岩A	6.30	9.50	1.60	103.30	
874	22C1		V		横刃形石器			砂岩A	10.30	15.80	3.20	632.90	
875	2407		V		石鏃			凝灰岩	14.10	6.70	2.50	357.60	
876	1901		Ⅱ b		石鏃			砂岩A	12.60	7.90	4.50	506.00	

木器・木製品観察表

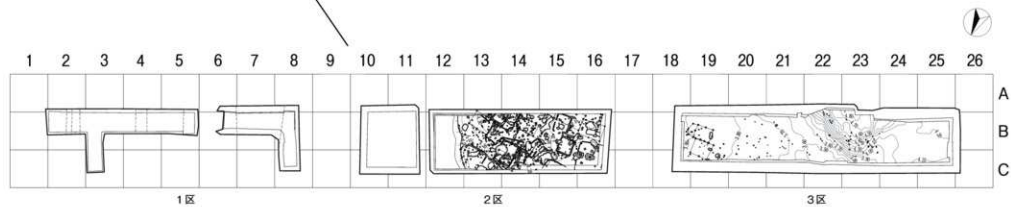
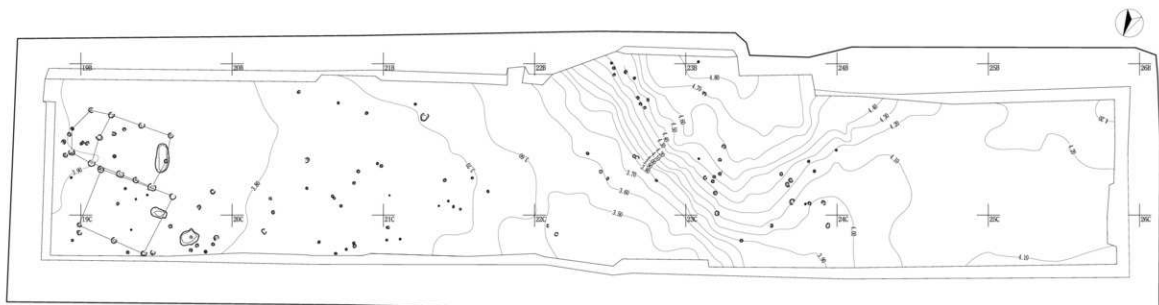
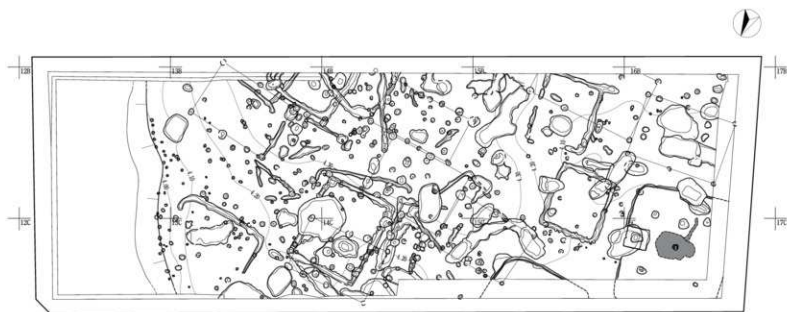
報告NO.	分析番号	分期	器種・形状	材質	未取り	出土位置		長さ・口径 (cm)	幅・口径 (cm)	厚さ・器高 (cm)	備考	
						遺構名	層位					
877	38	-	柱付?	杉	分銅角材		22B25-22C5	V上	1586	10.55	6.4	
878	-	-	不明木製品	楓	板目		22B24	V F	37.5	4.85	2.5	
879	-	-	不明木製品	楓	板目		22C-5	V上	32.2	5.2	2.7	
880	-	-	柱根	杉	分銅材?	PA31	15B5	I	22.5	6.65	2.9	腐蝕して 一部の残存
881	39	-	柄杓	杉	板目		19C	Ⅲ(ゴツゴ)	54.0	13.6	2.7	
882	-	-	皿ノ取	楓	板目		21B10	V F	33.4	16.4	2.45	
883	-	-	板状木製品	楓	板目		21B15-20	V F	21.1	9.8	1.25	
884	-	-	下駄	楓	板目		19C	Ⅱ b	14.3	6.3	1.1	
885	-	-	柄	楓	板目		22B24	V a F	32.35	3.5	3.0	
886	40	-	不明木製品	杉	板目		21B	Ⅲ(ゴツゴ)上	42.9	5.5	2.4	腐蝕?
887	-	-	不明木製品	楓	板目		25B	V	21.05	6.35	1.55	取っ手状
888	-	-	不明木製品	楓	板目		21B	Ⅲ	16.85	4.6	2.7	西側掘削内出土
889	-	-	不明木製品	楓	板目		24C	V直上	23.5	3.2	1.6	3区北壁面内出土
890	-	-	不明木製品	楓	板目		22B19	V F	20.5	3.75	2.0	
891	-	-	不明木製品	楓	板目	S01	16C8	継上	10.9	2.9	0.9	ハケメの塚体? 木炭?
892	-	-	箸状木製品	類出枠			19C9-10	Ⅲ(ゴツゴ)	20.35	0.6	0.45	
893	-	-	箸状木製品	類出枠			23C	Ⅱ b	16.4	0.75	0.5	
894	-	-	箸状木製品	類出枠			18D	Ⅲ(ゴツゴ)	14.05	0.8	0.5	
895	-	-	箸状木製品	類出枠			18D	Ⅲ(ゴツゴ)	12.9	0.65	0.55	
896	-	-	付木	類出枠			20B	Ⅲ(ゴツゴ)	15.8	0.95	0.9	先端付近炭化
897	44	-	曲物底板	杉	板目		22C7	V F	15.4	板厚16.0	0.8	底面孔あり
898	45	-	不明木製品	杉	板目		22B8	V上	20.4	5.3	1.75	片面約2/3炭化
899	-	-	不明木製品	楓	板目		19B	Ⅱ b	9.35	3.35	0.8	タンニン付着
900	-	-	栓	楓	板目		22B	Ⅱ b	5.7	2.95	2.25	
901	33	I C2	杖	杉	ミカン割	杖53-1	22C1	Ⅲ	720	15.2	9.5	
902	34	I C2	杖	杉	ミカン割	杖53-2	22C1	Ⅲ	739	14.0	9.9	
903	31	I C2	杖	杉	分銅材	杖44	22B18	Ⅲ	52.3	15.9	9.8	
904	32	I C2	杖	杉	分銅材	杖76	22B18	Ⅲ	29.5	11.9	7.8	
905		II C1	杖		丸木材	杖74	20C1	Ⅲ	13.7	10.3	9.2	
906		I A3	杖		分銅材	杖65	21B5	Ⅲ	68.2	7.4	4.7	
907		II A2	杖		板目	杖22	23C6	Ⅲ	52.8	2.35	2.2	
908	36	I B2	杖	杉	板目	杖40	22B24	Ⅲ	32.9	4.9	2.0	板目本體炭化 片面炭化
909	37	I B2	杖	杉	板目	杖62	22B17	Ⅲ	22.9	4.85	1.15	板目本體炭化
910	35	I B2	杖	杉	板目	杖29	22B24	Ⅲ	22.3	5.2	1.6	板目本體炭化
911	I B2	杖	楓	板目	杖86	22B24	Ⅲ-Ⅳ	15.9	4.2	2.3	板目本體炭化	
912	I B2	杖状木製品	杉	板目		396	Ⅲ	18.95	4.35	1.5	腐蝕?	
913	I B3	杖状木製品	楓	板目		19C9-10	Ⅲ(ゴツゴ)	13.0	2.5	0.65	板目本體炭化	
914	I A2	杖	楓	板目		396	Ⅲ	25.1	2.65	3.6		
915	I A3	杖	楓	板目	杖71	22B2	Ⅲ直上	35.2	5.8	3.45		
916	I A1	杖	楓	板目	杖68	21B10	Ⅲ	39.2	3.2	3.1		
917	I A4	杖	楓	板目	杖72	22B2	V F	49.0	6.1	5.1		
918	I B3	杖	楓	板目	杖37	22C9	Ⅲ	8.4	1.7	0.95		
919	I B1	杖	楓	板目	杖21	23C6	Ⅲ	14.0	6.6	1.1		
920	I B1	杖	楓	板目	杖57	22B21	Ⅲ	31.75	11.6	1.6	矢板状	
921	I B1	杖	楓	板目	杖70	22B2	Ⅲ直上	36.0	7.6	2.55		
922	I A2	杖	楓	板目	杖15	23C6	Ⅲ	23.9	2.9	2.7		
923	I A3	杖	楓	板目	杖79	22B18	Ⅲ	18.15	1.95	1.6		
924	I A3	杖	楓	板目	杖63	21C9	Ⅲ	25.3	2.9	2.1		
925	I A2	杖	分銅材	杖36	22C9	Ⅲ	29.4	2.35	1.9	背面と左側面炭化?		
926	II B2	杖	楓	板目	杖64	21B4	Ⅲ	30.05	3.9	1.1		
927	II A3	杖	楓	板目	杖85	23C11	Ⅲ	20.9	4.1	3.2		

図 版

凡例

- 1 土器は、須恵器を断面塗りつぶし、土師器・陶磁器を白抜きとした。
- 2 弥生土器・土師器・須恵器に付したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。
 赤彩  黒色処理
- 3 石器・石製品に付したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。
 敲打痕  磨痕  紙面
- 4 木製品に付したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。
 炭化範囲
- 5 木製品の木目は、木取りを表示したものであり、実際の年輪幅とは異なる。
- 6 遺物の写真図版の番号は、図面図版と統一してある。

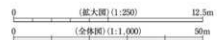


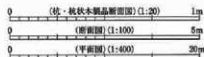
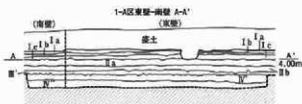
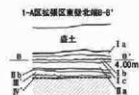
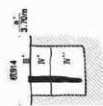
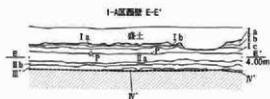
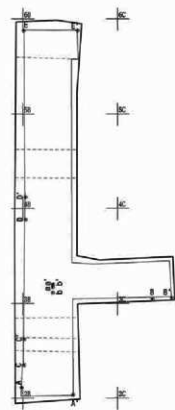
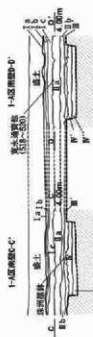
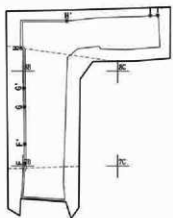
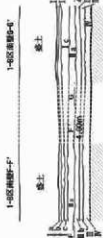
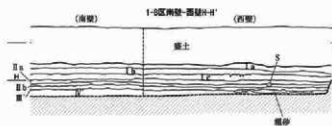


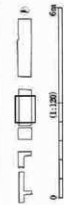
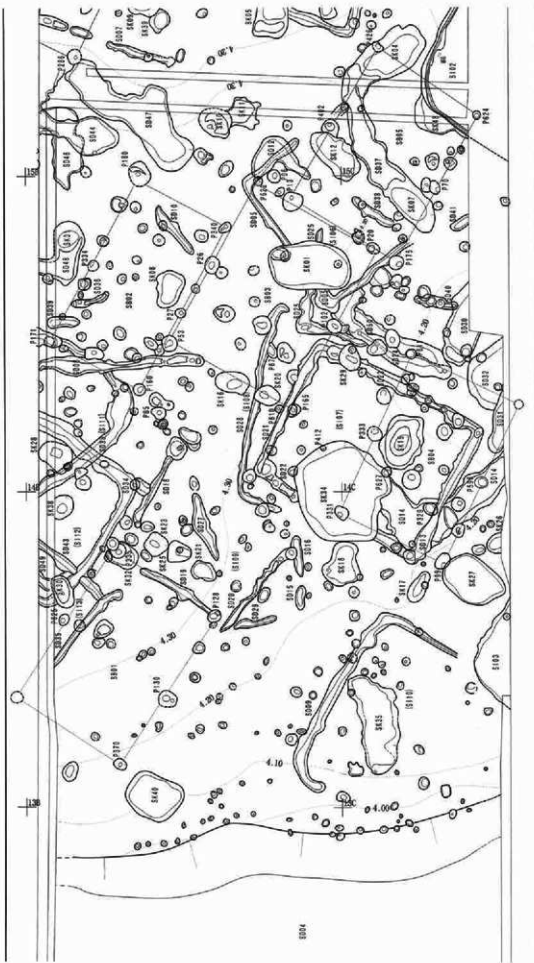
1区

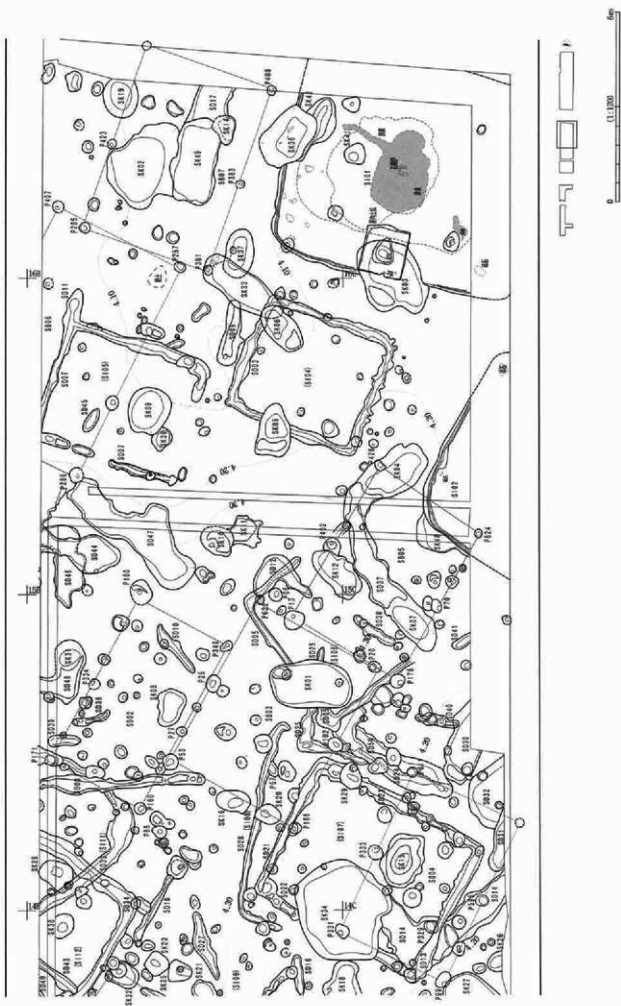
2区

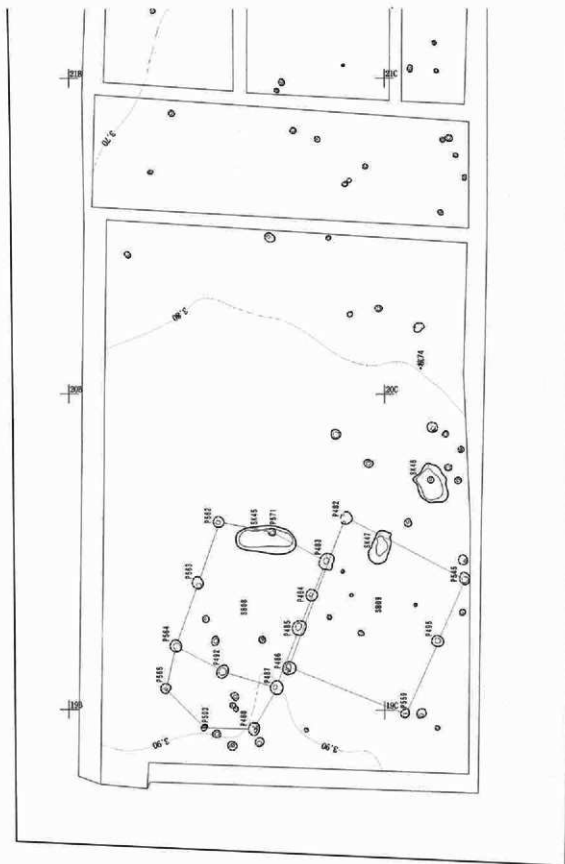
3区

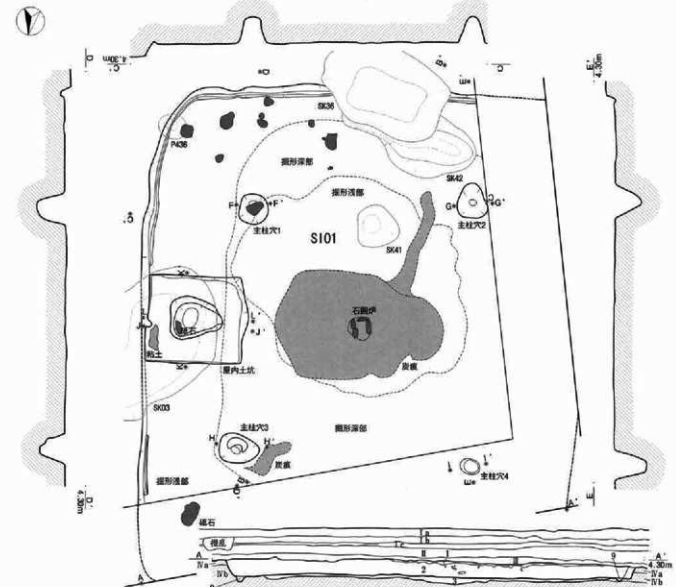




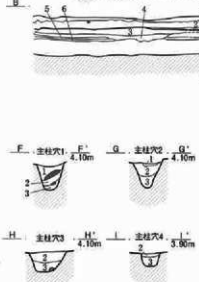




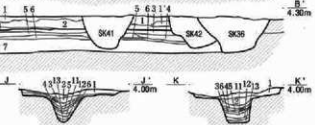




- S101
- 1 褐色粘土 (S101層土)
 - 径1-10mmの炭化物を多く含む。
 - 径5mm前後の白色粒土 (粘土) をごく少量含む。
 - 土層片多量に含む。
 - しまりは強く、粘性弱い。
 - 1' 褐色粘質土
 - 径1mmの炭化物を少量含む。
 - 径5mmのシルトブロックを多く含む。
 - シルトブロックやが多い。
 - 土層片含む。
 - しまりは強く、粘性は弱い。
 - 2 暗灰色粘土 (S101層土)
 - 径1-5mmの炭化物を少量含む。
 - シルトと粘土まだら状。
 - 径10-30mmのシルトブロック非常に多く含む。
 - 土層片含む。
 - 3 オリーブ灰色シルト (S101層土)
 - 土層片・石屑片を含む。
 - 径1-2mmの炭化物をごく少量含む。
 - しまりは強く、粘性はやや弱い。
 - 4 暗灰色粘質土 (S101層土)
 - 土層片・炭多量。
 - 径2-5mmの炭化物を少量含む。
 - 径20-30mmのシルトブロックを非常に多く含む。
 - しまりは中、粘性は弱い。
 - 5 黒山土層 (V層)
 - 6 黒山土層 (V層)
 - 7 黒山砂層 (V層)
 - 8 黒色粘質土 (Bの灰層)
 - 厚さ12cm程度。
 - ヤササとしており、粒が小。
 - しまりは弱く、粘性は弱い。
 - 9 暗赤色土 (S101層土)
 - 径1-2mmの炭化物を多く含む。
 - しまりは中、粘性は弱い。

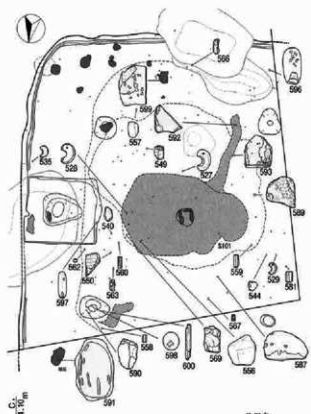
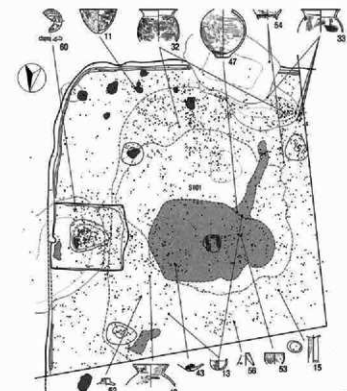


- S101 土坑式
- 1 褐色粘質土
 - しまりは中、粘性は弱い。
 - 2 暗褐色粘質土
 - 径1-2mmの炭化物をごく少量含む。
 - 土層片含む。
 - 3 灰色粘質土
 - 土層の中が小に含む。
 - しまりは弱く、粘性は強い。

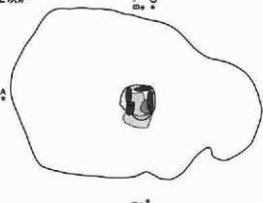


- S101 層内土坑 (図説111L'も含む)
- 1 黄灰色粘質土 (方形溝形層土 (層内土層上層))
 - 土層片含む。
 - 径5-7mmの炭化物 (粘物の類) を多く含む。
 - しまりは強く、粘性はやや弱い。
 - 2 青灰色粘質土 (2段目掘り込み層土 (層内土層中層))
 - 土層片含む。
 - 径5-7mmの炭化物を少量含む。
 - しまりは中や弱く、粘性はやや弱い。
 - 3 灰色粘質土 (灰泥じり層)
 - 全体的に硬い。
 - 径1-2mmの炭化物を少量含む。
 - しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 4 青灰色シルト (暗層)
 - 径1-2mmの炭化物をごく少量含む。
 - しまりは中や弱く、粘性は中。
 - 5 緑灰色粘土 (灰層)
 - 土層片を含む。
 - 石を含む。
 - 全体に泥が非常に多く混じる。
 - しまりは弱く、粘性は強い。
 - 6 青灰色シルト (砂質層)
 - 土層片を含む。
 - 径1-3mmの炭化物をごく少量含む。
 - しまりは弱く、粘性は弱い。
 - 7 暗灰色粘土 (S101層土)
 - 混入物ほとんどなし。
 - 径5-7mmの炭化物を少量含む。
 - しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 8 暗灰色土 (伊からの灰層)
 - 土層片含む。
 - 径0.5-1mmの炭化物を多く含む。
 - しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 9 黄灰色シルト (S101層土)
 - 径1-3mmの炭化物をごく少量含む。
 - しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 10 二色黄色粘土 (V層)
 - 混入物ほとんどなし。
 - しまりは中や弱く、粘性は中。
 - 11 暗青灰色砂質シルト (灰泥じり層)
 - 径5-8mmの炭化物を中や多く含む。
 - 土層片含む。
 - 長さ5cm前後、幅2-3cmほどの自然標識層出土。
 - しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 12 暗青灰色粘土
 - 径1-2mmの炭化物をごく少量含む。
 - 径10-20mmの小石含む。
 - しまりは中や弱く、粘性は強い。
 - 13 暗青灰色粘土
 - 混入物ほとんどなし。
 - しまりは中や弱く、粘性は中。

0 (1:60) 3m



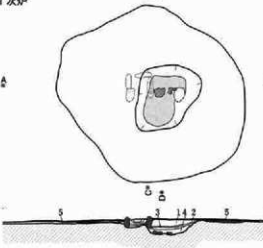
2次炉



B: 4.10m

C: 4.10m

1次炉



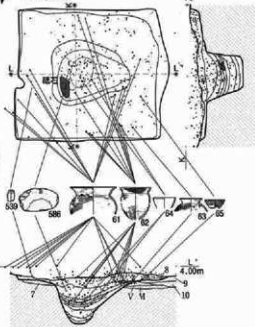
C: 4.10m

D: 4.10m

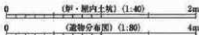
- S101 2次炉
- 1 灰白色泥層
しまりは強く、粘性はなし。
 - 2 褐色泥層
しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 3 灰白色泥層
土砂小片を含む。
しまりは強く、粘性はやや弱い。
 - 4 褐色泥層
しまりは強く、粘性は中。
 - 5 暗褐色粘質土
土砂小片を含む。
しまりは中、粘性は弱い。
 - 6 灰白色泥層
しまりは強く、粘性はなし。
 - 7 褐色泥層
しまりは強く、粘性はなし。

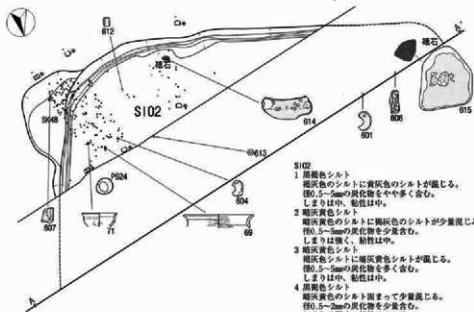
凡例表	
1	埋土 (土砂を含む)
2	土砂 (土砂を含む)
3	灰土 (土砂を含む)
4	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
5	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
6	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
7	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
8	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
9	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
10	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
11	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
12	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
13	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
14	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
15	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
16	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
17	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
18	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
19	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
20	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
21	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
22	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
23	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
24	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
25	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
26	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
27	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
28	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
29	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
30	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
31	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
32	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
33	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
34	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
35	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
36	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
37	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
38	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
39	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
40	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
41	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
42	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
43	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
44	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
45	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
46	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
47	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
48	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
49	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
50	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
51	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
52	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
53	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
54	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
55	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
56	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
57	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
58	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
59	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
60	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
61	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
62	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
63	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
64	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
65	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
66	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
67	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
68	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
69	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
70	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
71	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
72	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
73	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
74	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
75	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
76	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
77	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
78	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
79	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
80	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
81	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
82	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
83	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
84	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
85	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
86	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
87	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
88	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
89	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
90	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
91	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
92	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
93	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
94	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
95	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
96	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
97	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
98	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
99	暗褐色粘質土 (土砂を含む)
100	暗褐色粘質土 (土砂を含む)

屋内土坑

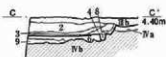
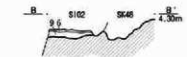


- S101 1次炉
- 1 灰白色シルト (1次炉埋土)
土砂片を含む。
埋土2mの炭化物をごく少量含む。
しまりは強く、粘性はなし。
 - 2 褐色泥層
土砂小片を含む。
しまりは強く、粘性はやや弱い。
 - 3 暗褐色粘質土層
土砂小片を含む。
しまりは強く、粘性はなし。
 - 4 黄褐色粘質土 (80.5~10m)の炭化物をごく少量含む。
しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 5 褐色泥層
しまりは強く、粘性はなし。

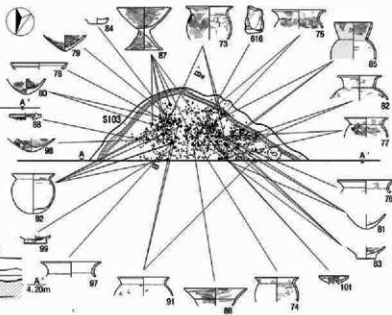
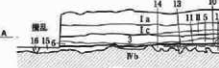
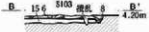
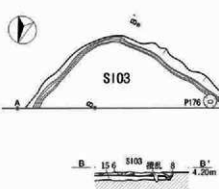
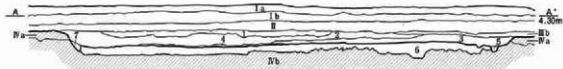




- S102
- 1 黒褐色シルト
暗灰色シルトに黄灰色のシルトが混じる。
径0.5-5mmの炭化物をやや多く含む。
しまりは中、粘性は中。
 - 2 暗灰色シルト
暗灰色シルトに黒褐色のシルトが少量混じる。
径0.5-5mmの炭化物を少量含む。
しまりは強く、粘性は中。
 - 3 暗灰色シルト
暗灰色シルトに暗灰色シルトが混じる。
径0.5-5mmの炭化物を多く含む。
しまりは中、粘性は中。
 - 4 黒褐色シルト
暗灰色シルト混まって少量混じる。
径0.5-2mmの炭化物を少量含む。
しまりは強く、粘性はやや強い。
 - 5 暗灰色シルト (S102層)
暗灰色シルトに灰色の粘質土が少量混じる。
径0.5-5mmの炭化物をやや多く含む。
しまりは強く、粘性はやや強い。



- 6 オリーブ褐色シルト (S102層)
暗灰色シルトに暗灰色シルトが混じる。
径0.5-15mmの炭化物を多く含む。
しまりは弱く、粘性はやや強い。
- 7 暗オリーブ褐色シルト (S102層)
暗灰色シルトに暗灰色シルトが少量混じる。
径0.5-2mmの炭化物を少量含む。
しまりはやや弱く、粘性は中。
- 8 灰黄褐色粘土 (S102層)
炭化物ごく少量含む。
しまりはやや弱く、粘性は中。
- 9 暗灰色粘質土 (S102層)
径0.5-5mmのシルトブロックを非常に多く含む。
土層片含む。
しまりは強く、粘性は弱い。

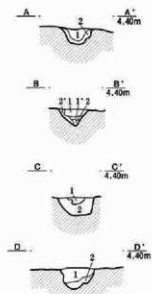
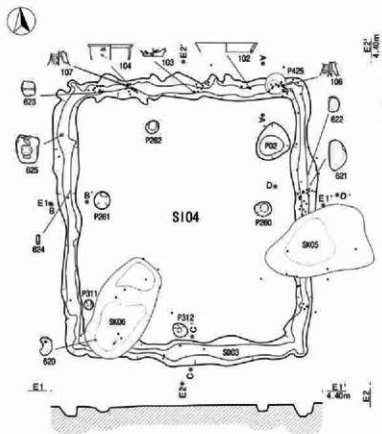


- S103
- 1 黒褐色シルト
暗灰色シルト混まってやや多く混じる。
径0.5-2mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 2 暗オリーブ褐色シルト
暗灰色シルトに黒褐色のシルトが混じる。
径0.5-5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性はやや強い。
 - 3 黒褐色シルト
白色粘土
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性はやや弱い。
 - 4 暗灰色シルト
暗灰色シルトと黒褐色のシルトが入り混じる。
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性はやや強い。
 - 5 黒褐色シルト
暗灰色シルトと暗灰色シルトが混じる。
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性はやや弱い。

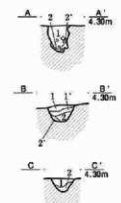
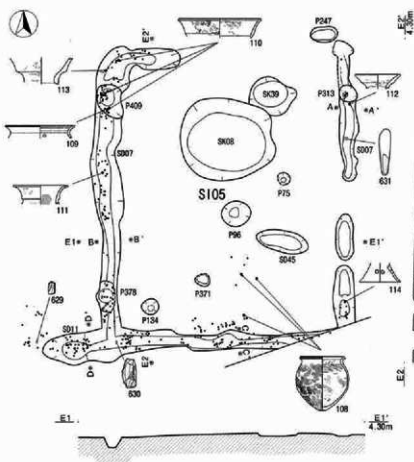
- 6 黒褐色シルト
暗灰色シルトに黒褐色のシルトが混じる。
径0.5-5mmの炭化物を少量含む。
しまりはやや弱い、粘性は中。
- 7 暗灰色シルト
暗灰色シルトに暗灰色シルトが少量混じて混じる。
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性はやや弱い。
- 8 暗灰色シルト (S103層)
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性は中。
- 9 暗灰色シルト (S103層)
暗灰色シルト混まって少量混じる。
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりは中、粘性は中。
- 10 暗灰色シルト
暗灰色シルトやや多く混じる。
しまりは中、粘性はやや弱い。
- 11 オリーブ褐色シルト (S103層)
暗灰色シルトに暗灰色シルトがやや多く混じる。

- 12 暗灰色シルト (S103層)
径0.5-15mmの炭化物を含む。
しまりは中、粘性は中。
- 13 暗灰色粘質土 (S103層)
暗灰色シルトに暗灰色シルト混まって少量混じる。
径0.5mmの炭化物をやや多く含む。
しまりはやや弱く、粘性は中。
- 14 暗灰色粘質土 (S103層)
暗灰色シルトに暗灰色シルトのシルト、灰色の粘質土が混じる。
しまりは中、粘性は中。
- 15 暗灰色シルト (S103層)
暗灰色シルトに炭化微粒子をやや多く混じる。
しまりは中、粘性は中。
- 16 暗灰色シルト
暗灰色シルトに炭化微粒子をやや多く含む。
径0.5mmの炭化物を少量含む。
しまりはやや弱く、粘性は中。





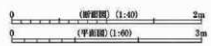
- S104
- 1 暗青灰色粘質土
土器片含む。
径1~5mmの炭化物を多く含む。
しまりは強く、粘性は中。
 - 1' 明青灰色粘質土
1と良く似るが、炭化物の径が5~7mmとやや大きく、
また多く含まれる。
 - 2 青灰色シルト
径1~2mmの炭化物をごく少量含む。
しまりはやや弱い、粘性は強い。
 - 2' 明青灰色シルト
2と良く似るが、2に比べて粘性が弱い。

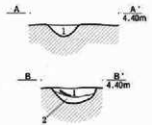
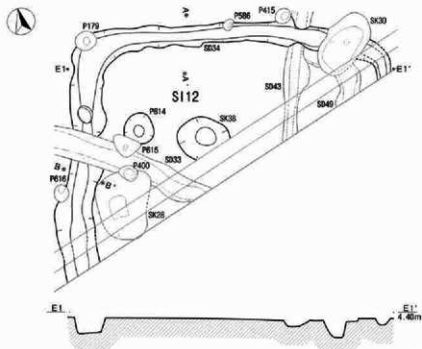


- S105
- 1 暗青灰色粘質土
土器片含む。
径1~7mmの炭化物を多く含む。
しまりは中、粘性は中。
 - 1' 1と良く似るが、炭化物がやや多く含まれる。
 - 2 青灰色シルト
径1~5mmの炭化物を少量含む。
 - 2' 2と良く似るが、粘性が2に比べるとやや弱い。

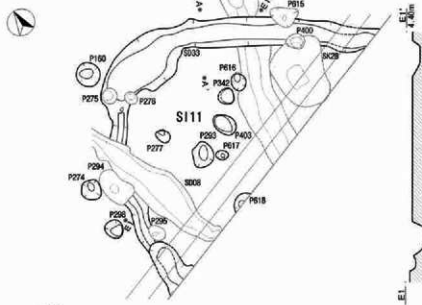


- S011
- 1 暗灰色粘質土
径1~2mmの炭化物を少量含む。
土器片含む。
しまりは強く、粘性は強い。
 - 2 灰色粘質土
径2mmの炭化物をごく少量含む。
土器片含む。
しまりはやや弱く、粘性は弱い。

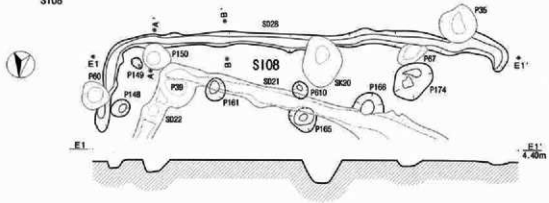




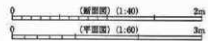
S112
 1 褐色粘土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 2 青灰色シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 しまりはやや弱く、粘性はやや強い。

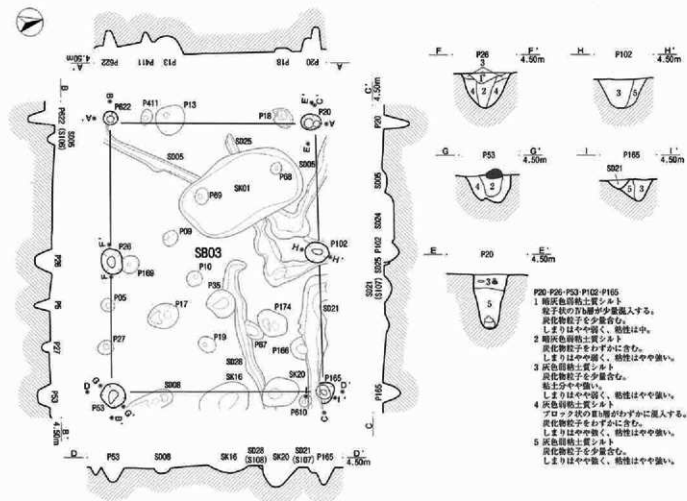


S111
 1 褐色粘土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 しまりはやや弱く、粘性はやや強い。

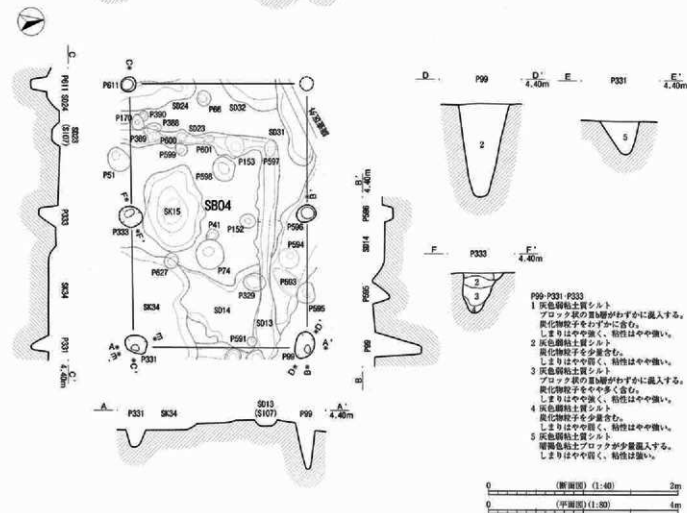


S108
 1 灰色粘土質シルト
 炭化物粒子を少量含む。
 粘土がやや強い。
 しまりはやや弱く、粘性はやや強い。

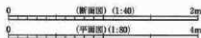


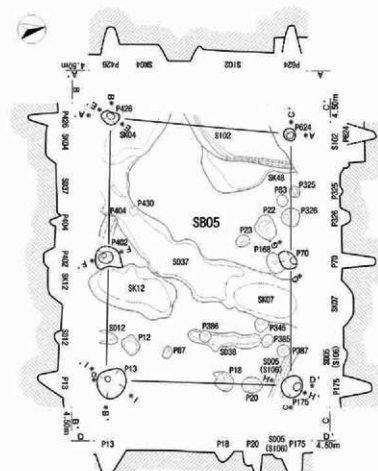


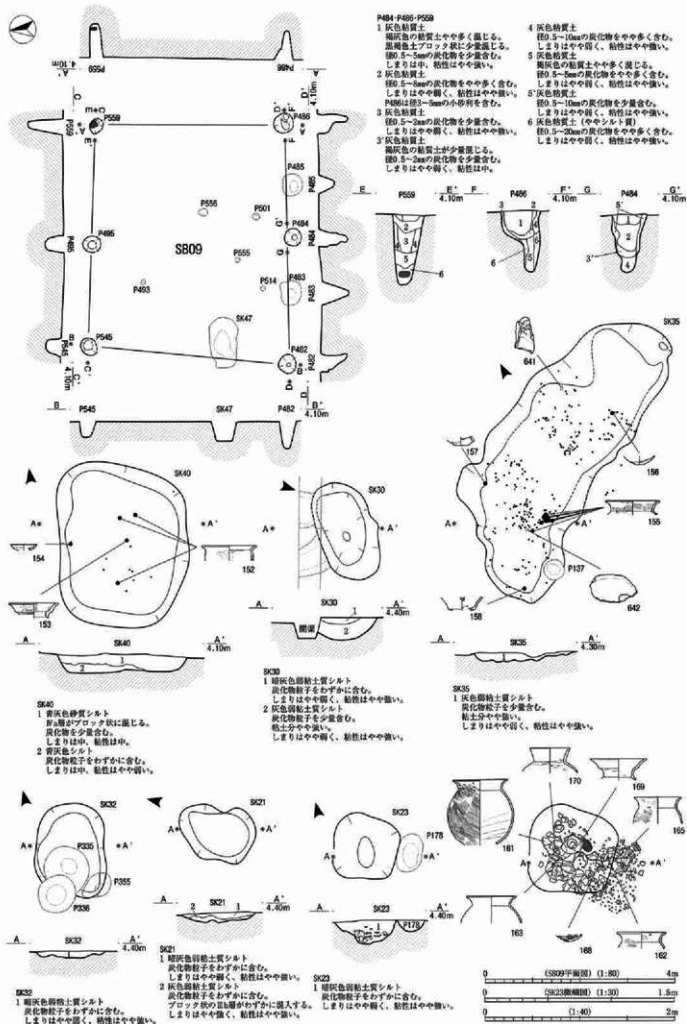
- P20-P26-P23-P102-P105
- 1 褐色前粘土質シルト
塊状の瓦礫が少量混入する。
炭化物粒子を少量含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 2 褐色前粘土質シルト
炭化物粒子をわずかに含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 3 灰色前粘土質シルト
炭化物粒子を少量含む。
粘土分やや強い。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 4 灰色前粘土質シルト
ブロック状の瓦礫がわずかに混入する。
炭化物粒子をわずかに含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 5 灰色前粘土質シルト
炭化物粒子を少量含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。

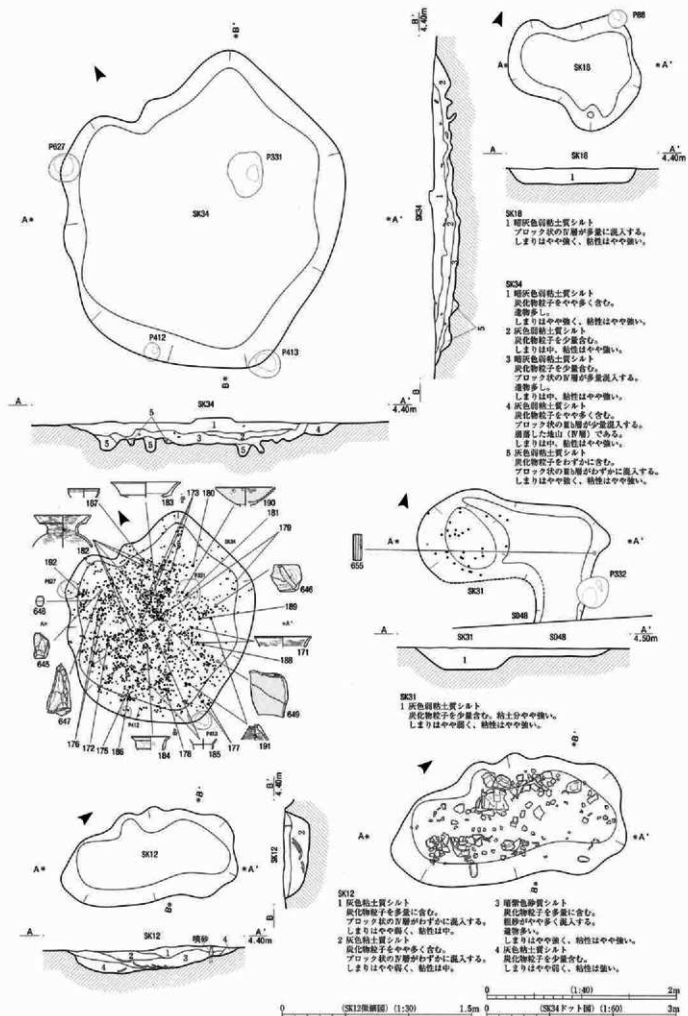


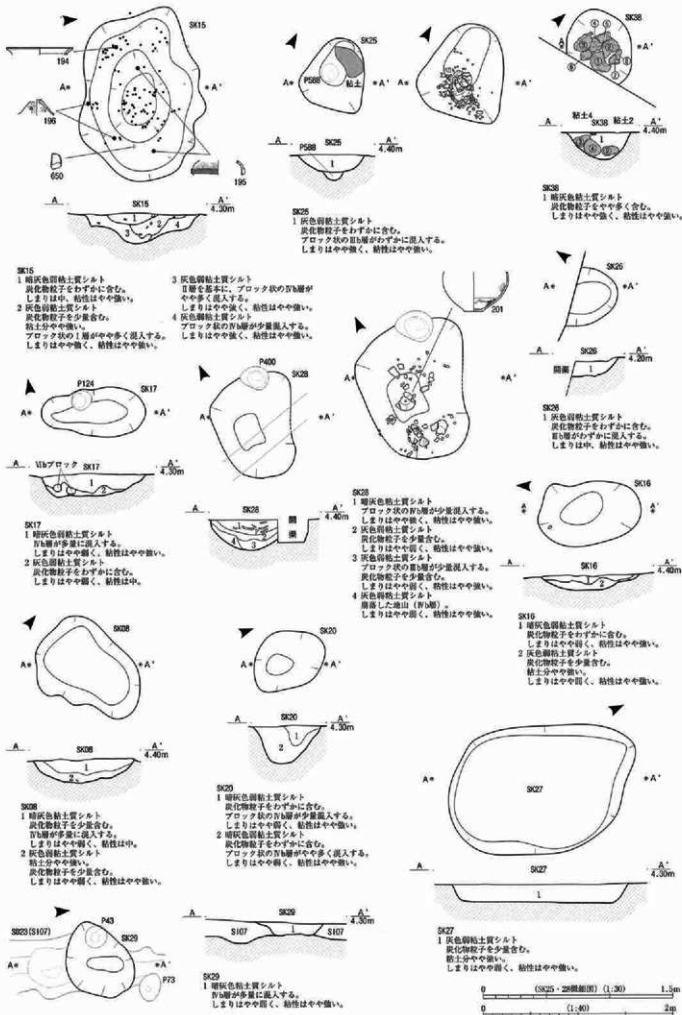
- P09-P331-P333
- 1 灰色前粘土質シルト
ブロック状の瓦礫がわずかに混入する。
炭化物粒子をわずかに含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 2 灰色前粘土質シルト
炭化物粒子を少量含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 3 灰色前粘土質シルト
ブロック状の瓦礫がわずかに混入する。
炭化物粒子をやや多く含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 4 灰色前粘土質シルト
炭化物粒子を少量含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 - 5 灰色前粘土質シルト
層間色粘土ブロックが少量混入する。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。

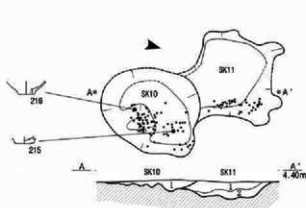






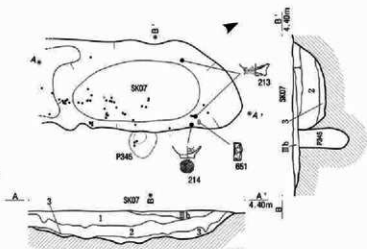




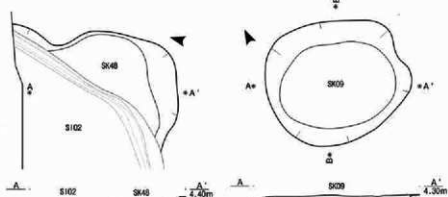


SK10
1 灰色弱粘土質シルト
粘土分やや強い。
灰化物粒子を少量含む。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。

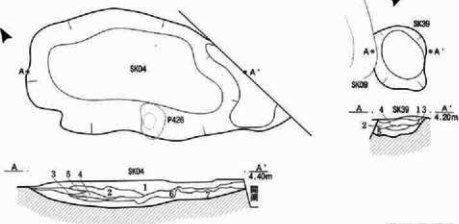
SK11
1 暗灰色粘土質シルト
灰化物粒子をやや多く含む。
ブロック状の礫が少量混入する。
遺物多い。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
2 灰色弱粘土質シルト
粘土分やや強い。
灰化物粒子を少量含む。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。



SK07
1 暗灰色弱粘土質シルト
灰化物粒子少量含む。
ブロック状の礫も少量含む。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。
2 暗灰色粘土質シルト
灰化物粒子少量含む。
粘土分やや強い。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。
3 暗灰色弱粘土質シルト
灰化物粒子わずかに含む。
粘土分やや強い。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。

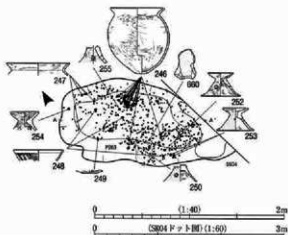


SK08
1 灰色粘土
径10mm前後の灰化物をごく少量含む。
遺物(土器)わずかに含む。
シルトも混じる。
しまりはやや強く、粘性は中。
2 灰黄色粘土
灰化物はほとんど含まない。
遺物很少。
灰化度中やや多い。
しまりは中、粘性はやや強い。

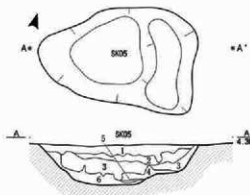


SK30
1 暗灰色土
径2-3mmの灰化物を少量含む。
しまりは強く、粘性はなし。
2 灰色粘質土
中の灰化物混入。
しまりは中、粘性は弱い。
3 黄灰色土
径5mmの灰化物をごく少量含む。
しまりは強く、粘性はなし。
4 黄灰色粘質土
シルトと灰化物粒子を少量含む。
しまりは弱く、粘性は弱い。
5 暗灰色粘土
径7-10mmの灰化物を非常に多く含む。
しまりは中、粘性は中。

SK04
1 暗灰色粘質土
径5mm前後の灰化物をごく少量含む。
土器含む。
しまりはやや弱く、粘性は中。
2 暗灰色粘質土
径5-10mmの灰化物を少量含む。
径10-50mmの粘土、土器片わずかに含む。
しまりはやや強く、粘性は中。
3 暗灰色粘質土
径5mm前後の灰化物を多く含む。
土器多く含む。
しまりは強く、粘性は弱い。
4 暗灰色粘質土
径3-5mmの灰化物を少量含む。
土器含む。
しまりはやや弱く、粘性は中。
5 暗灰色粘質土
径10-20mmの灰化物が固的に層積する。
しまりは中、粘性は中。
6 黄灰色シルト
シルトと灰化物粒子を少量含む。
径1-3mmの灰化物を少量含む。
土器片多く含む。
しまりは中、粘性は中。
7 黄褐色シルト
土器片少ない。
しまりは弱く、粘性は弱い。

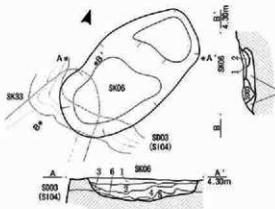
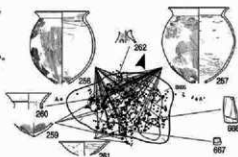


0 (1:40) 2m
0 (SK04 フォト図) (1:60) 3m



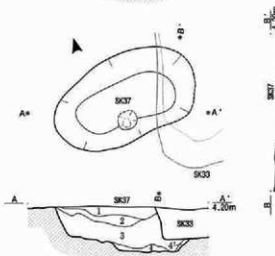
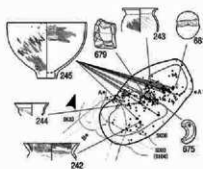
SK05

- 1 暗灰色粘質土
下方に径10cm前後の炭化物をごく少量含む。
しまりは強く、粘性は強い。
- 2 黄灰色粘質土
径5-10cmの炭化物をごく少量含む。
しまりは中、粘性はやや弱い。
- 3 灰色粘質土
径1-5cmの炭化物を多く含む。
土器多く含む。
しまりはやや強く、粘性はやや弱い。
- 4 緑灰色粘土
土器含む。
6層によく似る。
炭化鉄を多く含む。
しまりはあり、粘性はやや強い。
- 5 黒色粘土
炭土体層。
径10cm以上の炭化物を少量含む。
しまりは強く、粘性はやや強い。
- 6 緑灰色粘土
土器ほとんど含まない。
径5-10cmの炭化物をごく少量含む。
しまりは強く、粘性は強い。



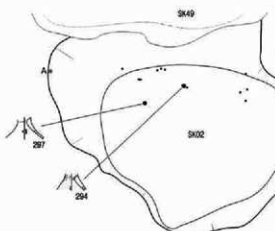
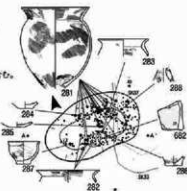
SK06

- 1 暗ナリーブ褐色粘土
炭化鉄多く炭化物少量含む。
しまりは中、粘性は中。
- 2 黒褐色粘土
炭化鉄・炭化物やや多く含む。
しまりは中、粘性は中。
- 3 黒褐色粘土
炭化鉄・炭化物少ない。
地山の土少量混じる。
しまりは中、粘性は中。
- 4 黒褐色粘土
炭化鉄・炭化物多く含む。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。
- 5 黒褐色粘土
黒褐色土と地山の土が入り混じる。
炭化鉄やや多く、炭化物多く含む。
しまりはやや弱く、粘性は強い。
- 6 黒褐色粘土
地山の土に黒褐色土が混じる。
炭化鉄・炭化物少量含む。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。



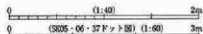
SK37

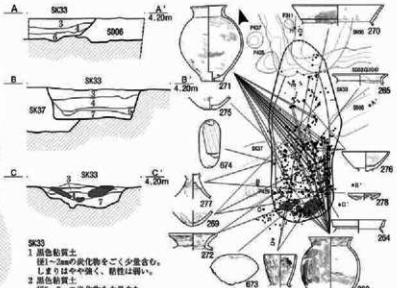
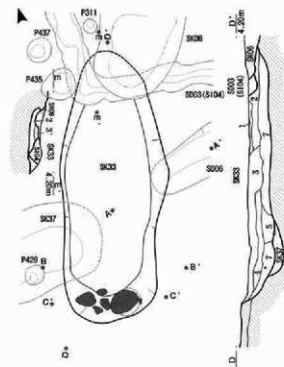
- 1 黄灰色粘土
径10-15cmの炭化物をごく少量含む。
土器含む。
しまりは強く、粘性は強い。
- 2 暗灰色粘質土
径5cm前後の炭化物をごく少量含む。
径10-15cmのシルトブロックを多く含む。
しまりはやや強く、粘性は中。
- 3 暗灰色粘質土
径10-15cmの炭化物をごく少量含む。
径20-30cmのシルトブロックを非常に多く含む。
しまりは中、粘性は強い。
- 4 黄灰色粘土
径5cmの炭化物をごく少量含む。
しまりは中、粘性は強い。
- 5 暗灰色粘土
径5-10cmの炭化物をごく少量含む。
しまりは中、粘性は強い。



SK02

- 1 暗灰色粘土
土器片含む。
しまりは強く、粘性は中。
- 2 灰黄褐色シルト
石が少な。
しまりはやや弱く、粘性はやや強い。
- 3 緑灰色粘土
径5-10cmの炭化物を少量含む。
しまりはあり、粘性は強い。
- 4 暗褐色粘土
炭化物多く含む。
しまりは中、粘性は強い。

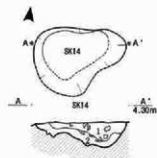




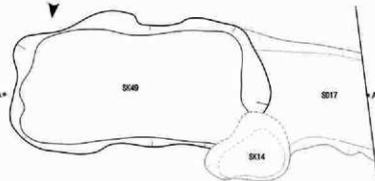
SK33

- 1 黒色粘質土
径1~2cmの炭化物をごく少量含む。
しまりはやや強く、粘性は強い。
- 2 黒色粘質土
径5~7mmの炭化物を少量含む。
しまりはやや強く、粘性はやや強い。
- 3 灰褐色粘土
土層小片含む。
径1~2mmの炭化物をごく少量含む。
しまりは強く、粘性は弱。
- 4 灰褐色粘土、3層に比べ、混入物少ない。
土層片多数含む。
- 5 灰褐色粘土
径1~2mmの炭化物を少量含む。
径20~30mmのシルトブロック多数を含む。
しまりはやや強く、粘性は中。

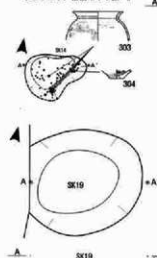
- 5 黒色粘質土
径10~20mmの炭化物を少量含む。
径2cmのシルトブロックをごく少量含む。
しまりは弱く、粘性は中。
- 6 黒色粘土
土層片含む。
径1cm前後の炭化物を多く含む。
径1cm前後のシルトブロックを少量含む。
しまりは弱く、粘性は中。
- 7 灰褐色粘土 灰色シルト
炭化物ほとんど含まない。
しまりは中、粘性はやや強い。



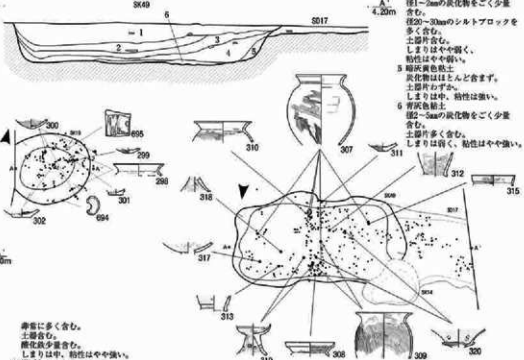
- SK14
- 1 黒褐色粘土
径10~15mmの炭化物を多く含む。
土層多く含む。
しまりは強く、粘性は中。
 - 2 灰色シルト
径2~10mmの炭化物をごく少量含む。
土層片含む。
しまりは中、粘性はやや強い。



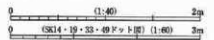
- SK49
- 1 褐色粘質土
径10~15mmの炭化物を
ごく少量含む。
土層片含む。
径10~10mmのシルトブロックを
ごく少量含む。
しまりは中、粘性は中。
 - 2 黒色粘土
径5~8mmの炭化物を多く含む。
シルトブロック(径10mm程度)を
少量含む。
土層片含む。
しまりは中、粘性はやや強い。
 - 3 褐色粘質土
径5~8mmの炭化物を少量含む。
径10~20mmのシルトブロックを
少量含む。
土層片含む。
しまりはやや強く、粘性は強い。
 - 4 灰褐色粘質土
径1~2mmの炭化物をごく少量
含む。
径20~30mmのシルトブロックを
多く含む。
土層片含む。
しまりはやや強く、
粘性はやや強い。
炭化物ほとんど含まず。
土層片わずか。
しまりは中、粘性は強い。
 - 5 褐色粘土
径2~5mmの炭化物をごく少量
含む。
土層片多く含む。
しまりは弱く、粘性はやや強い。

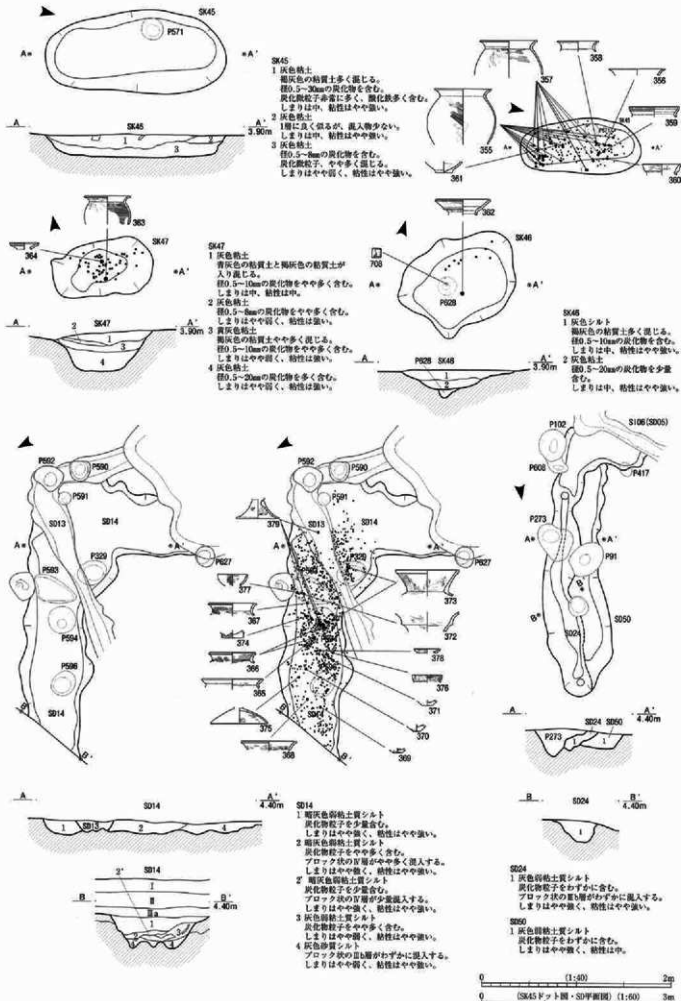


- SK19
- 1 褐色粘質土
径1~5mmの炭化物を少量含む。
土層含む。
下方に炭化物や多い。
しまりは中、粘性はやや強い。
 - 2 灰褐色シルト
径5~8mmの炭化物をごく少量含む。
径30~50mmのシルトブロックを
少量含む。

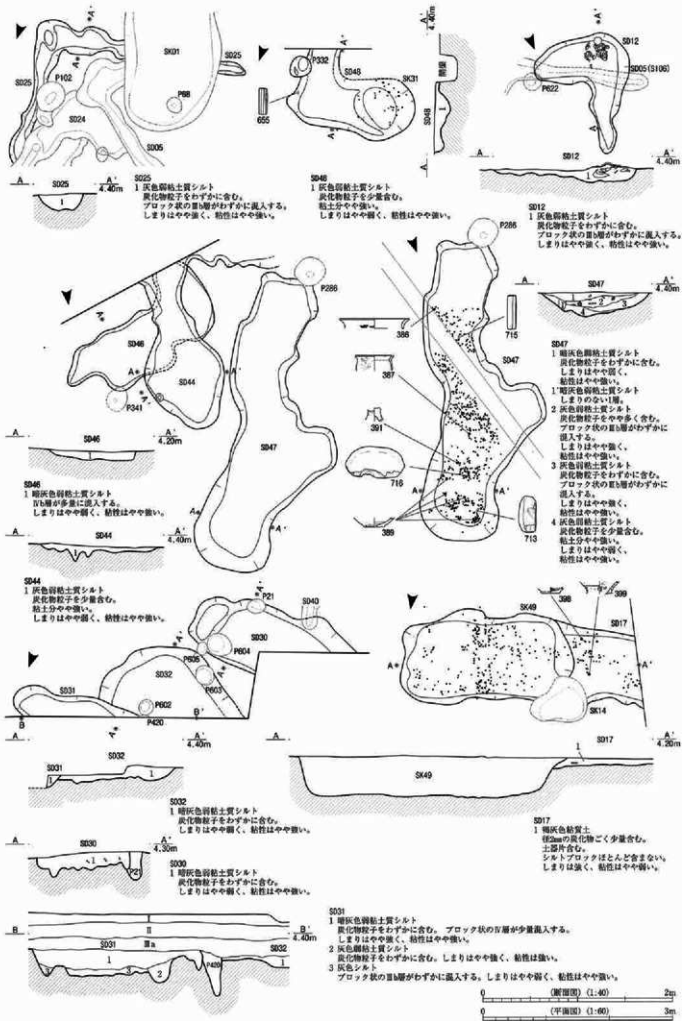


- 5 褐色粘土
炭化物ほとんど含まない。
土層片少ない。
- 6 褐色粘土
径20~30mmの石を含む。
しまりは弱く、粘性はやや強い。





0 1:400 2m
0 SK45ピット面・SD平面図 1:600 3m

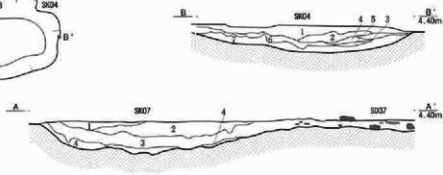




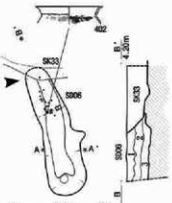
SK27・SK04
 1 褐色粘質土
 径5mm程度の炭化物をごく少量含む。
 土層を含む。
 しまりは強く、粘性は中。
 2 褐色粘質土
 径5～10mmの炭化物を少量含む。
 径10～20mmの土土・土層片わずかに含む。
 しまりはやや強く、粘性は中。
 3 褐色粘質土
 7層ほど炭化物を多く含まない。
 1層に集る。土層含む。
 しまりは強く、粘性は強い。
 4 褐色粘質土
 土層多く含む。
 しまりは強く、粘性は強い。

5 褐色粘質土
 径3～5mmの炭化物を少量含む。
 しまりはやや強く、粘性は中。
 6 褐色粘質土
 径15～20mmの炭化物が固めに堆積する。
 しまりは中、粘性は中。
 7 褐色粘質土
 シルトと混層する。
 土層片多く含む。
 しまりは中、粘性は中。
 径1～2mmの炭化物を少量含む。

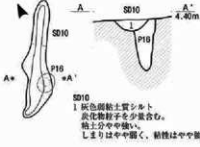
SK37・SK07
 1 灰色粘結土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 ブロック状の黒土層がわずかに混入する。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 2 灰色粘結土質シルト
 炭化物粒子を少量含む。
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 3 褐色粘結土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 4 褐色粘結土質シルト
 土層片少ない。
 しまりは強く、粘性は強い。



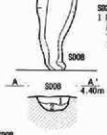
SK07
 1 灰色粘結土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 ブロック状の黒土層がわずかに混入する。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。



SK06
 1 褐色粘質土
 土層片を含む。
 径20～50mmのシルトブロックを多く含む。
 しまりは強く、粘性はなし。
 2 灰色シルト
 径5～8mmの炭化物を少量含む。
 径20～50mmのシルトブロックを多く含む。
 土層片含む。
 しまりは強く、粘性は強い。
 3 褐色粘質土
 径5～10mmの炭化物をごく少量含む。
 土層片含む。
 しまりは強く、粘性はやや強い。



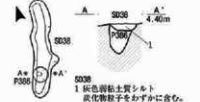
SK10
 1 灰色粘結土質シルト
 炭化物粒子を少量含む。
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。



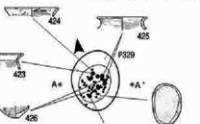
SK08
 1 褐色粘結土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 2 褐色粘結土質シルト
 炭化物粒子を少量含む。
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。



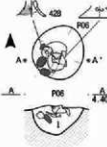
SK12
 1 灰色粘結土質シルト
 ブロック状の黒土層がわずかに混入する。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。



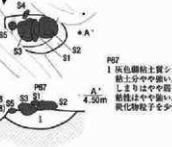
SK38
 1 灰色粘結土質シルト
 炭化物粒子をわずかに含む。
 ブロック状の黒土層がわずかに混入する。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。



SK42
 1 灰色粘結土質シルト
 炭化物粒子を少量含む。
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。



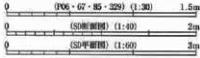
SK06
 1 灰色粘結土質シルト
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 炭化物粒子を少量含む。

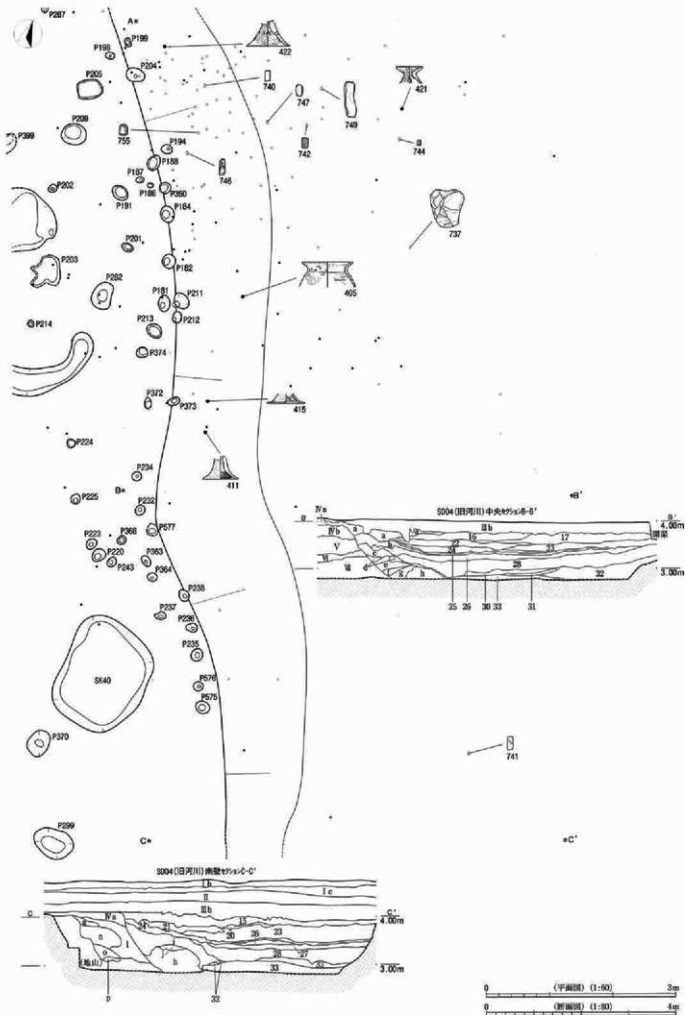


SK37
 1 灰色粘結土質シルト
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 炭化物粒子を少量含む。

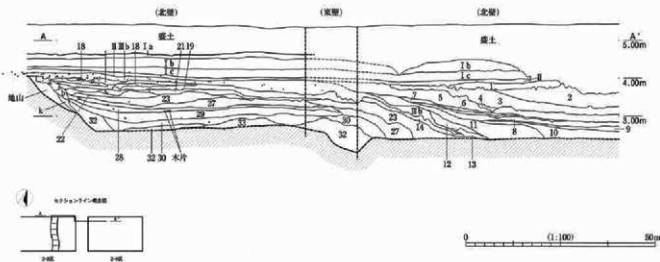


SK39
 1 灰色粘結土質シルト
 粘土分やや強い。
 しまりはやや強く、粘性はやや強い。
 炭化物粒子を少量含む。





5004 (旧河川) 北観セクション-A'

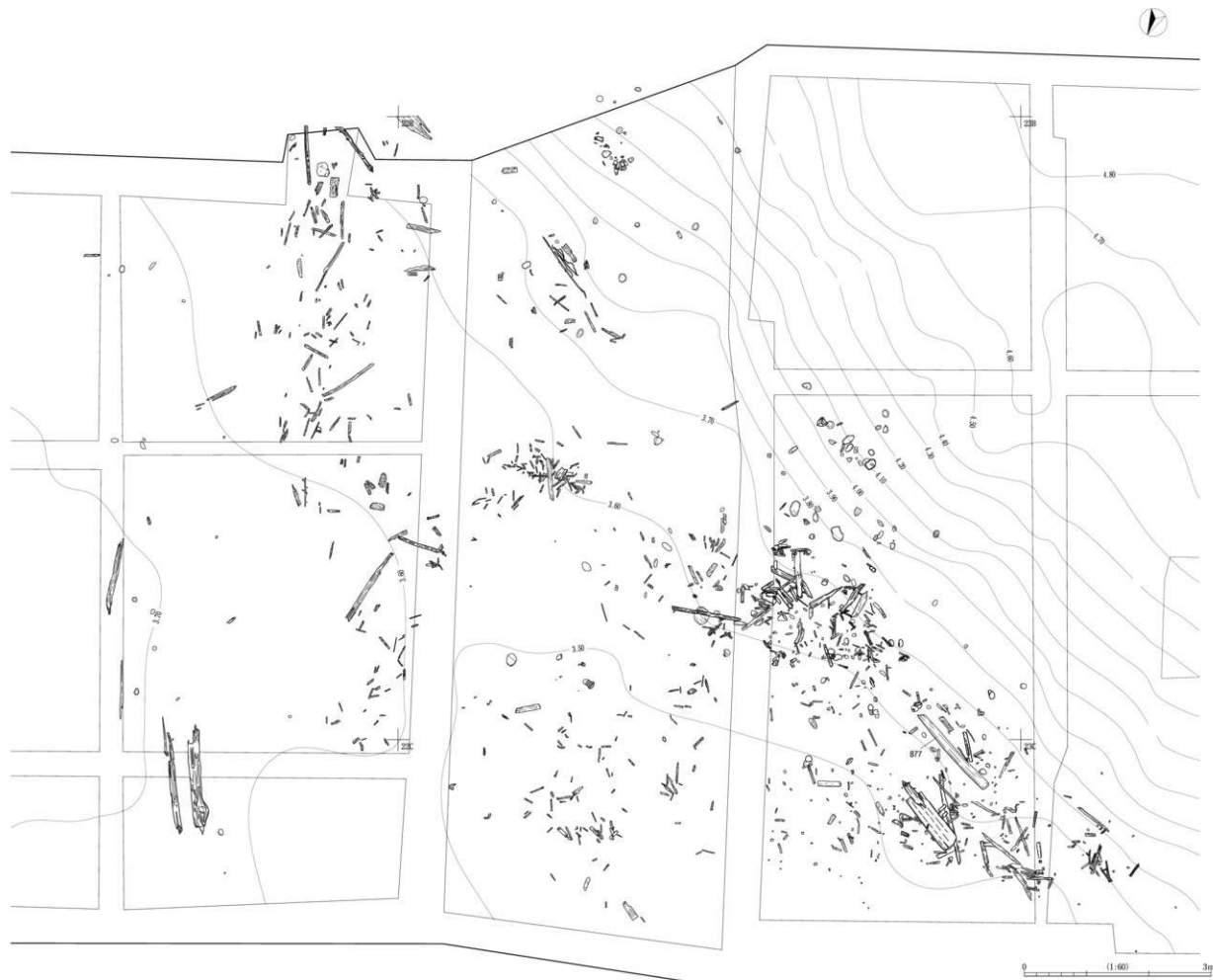


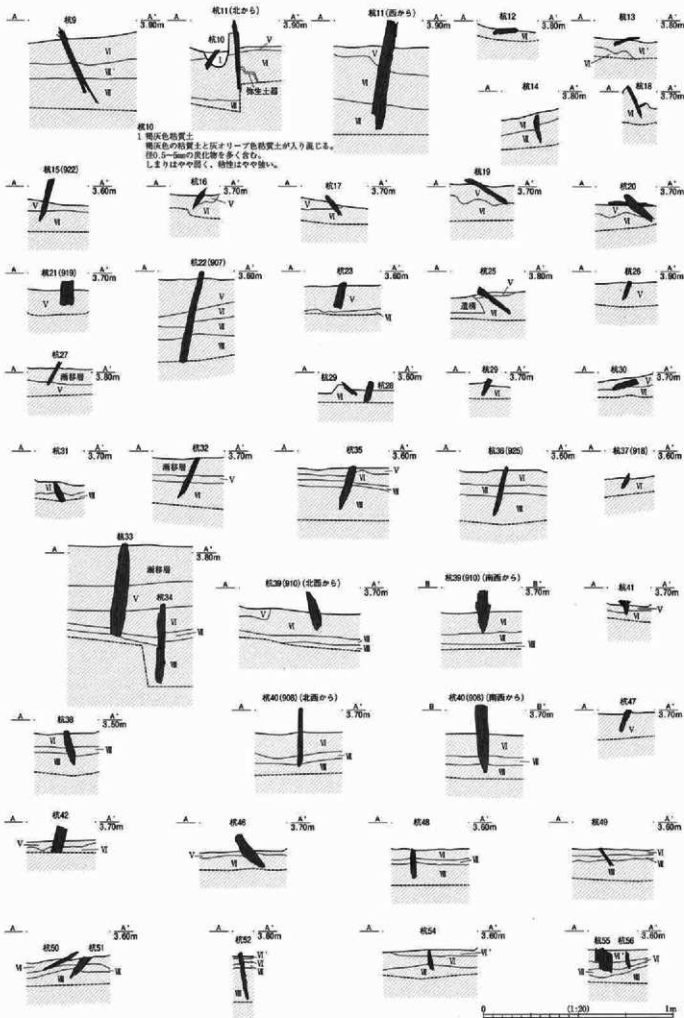
5004 黄土

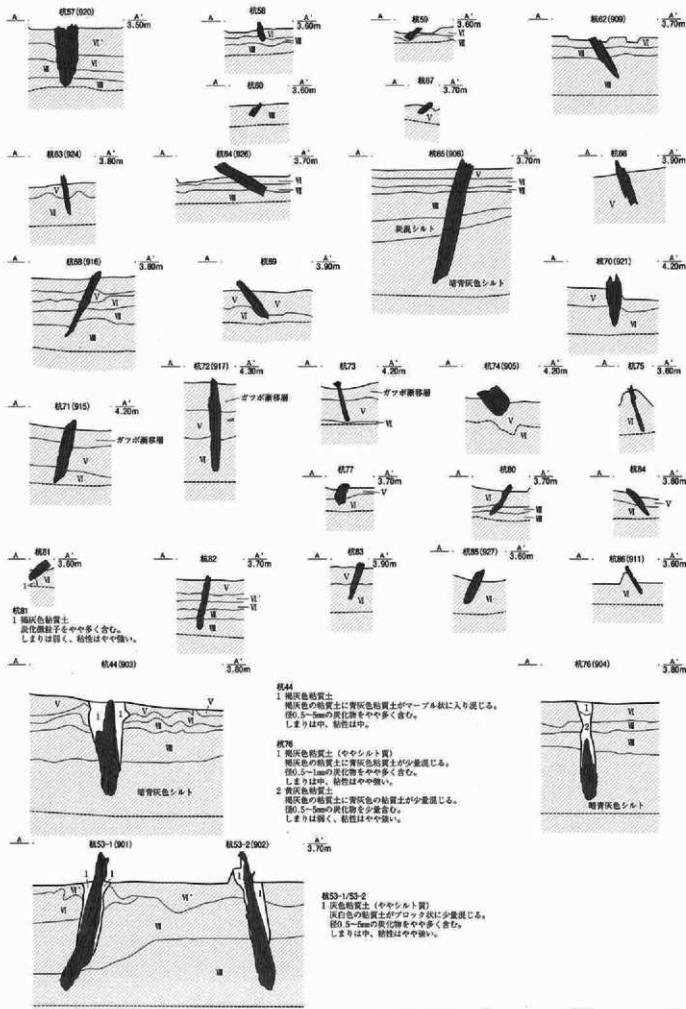
- 1 黒褐色粘質土
黒褐色の粘質土が固まってやや多く混じる。
白色粒子・砂多い。
厚0.5~2mの炭化物をやや多く含む。
しりりは強く、粘性はやや強い。
- 2 灰色粘質土
黒褐色土が固まって多量混じる。
厚0.5mの炭化物を多く含む。
しりりは強く、粘性は強い。
- 3 黄褐色粘質土
2層より黒褐色土が固まって多く混じる。
厚0.5~10mの炭化物を多く含む。
しりりは強く、粘性は中。
- 4 灰色の粘質土に灰色のシルト(粘土層)・
白色粒子を多く含む。厚0.5mの炭化物をやや多く含む。
しりりはやや弱く、粘性は中。
- 5 黒褐色粘質土
青灰色シルトと黒褐色粘質土・黒灰色シルト
(砂っぽい)が入り混じる。
厚0.5~3mの炭化物を多く含む。
グリーンファングを含む。
しりりは強く、粘性はやや強い。
- 6 灰色粘質土
灰色のシルトと灰色の粘質土が入り混じる。
厚0.5~5mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
- 7 黒褐色粘質土
6層よりシルトが多い。
炭化物を非常に多く含む。
しりりは強く、粘性は強い。
- 8 灰色シルト
シルトと灰色の粘土が交互に堆積する。
厚0.5~2mの炭化物を少量含む。
しりりは弱く、粘性は中。
- 9 灰色シルト
灰色の粘質土が少量。炭化粒子がごく少量混じる。
しりりは弱く、粘性は弱い。
- 10 灰色シルト
ほとんど細砂。
青灰色粘質土がブロック状に少量混じる。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
- 11 灰色シルト
灰色のシルトと黒褐色の粘質土が交互に堆積する。
しりりは弱く、粘性は中。
- 12 灰色シルト
灰色の粘質土が固まって少量混じる。
炭化粒子をやや多く含む。
しりりは弱く、粘性は中。
- 13 灰色シルト
黒褐色の粘質土が固まって少量混じる。
厚0.5~10mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性は中。
- 14 灰色粘質土
厚0.5~3mの炭化物を少量含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
- 15 黄褐色シルト
白色粒子をやや多く含む。
厚0.5mの炭化物を少量含む。
しりりは強く、粘性はやや強い。

5004 地山崩落土

- a 黄褐色シルト
厚0.5~3mの炭化物を少量含む。
しりりはやや弱く、粘性は中。
 - b 灰色シルト
厚0.5~5mの炭化物を少量含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
 - c 灰色粘質土
厚0.5~5mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
 - d 灰色シルト
炭化粒子をやや多く含む。
厚0.5~3mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
 - e 灰色シルト
0.5~5mの炭化物をやや多く含む。
しりりは中、粘性はやや強い。
 - f 灰色粘質土
厚0.5~1mの炭化物を多く含む。
しりりは中、粘性は中。
 - g 灰色粘質土
厚0.5~1mの炭化物を少量含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
 - h 灰色シルト
厚0.5~10mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性は中。
 - i 灰色粘質土
黒褐色粘質土をやや多く含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
 - j 灰色シルト
やや粒子粗く砂っぽい。
黒褐色粘質土のブロック状に少量混じる。
しりりはやや弱く、粘性は中。
 - k 青灰色シルト
厚0.5~2mの炭化物をやや多く含む。
しりりは中、粘性は中。
 - l 灰色シルト
黒褐色の粘質土が固まって少量混じる。
厚0.5~10mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性は中。
 - m 黒褐色の粘質土がブロック状に少量混じる。
しりりはやや弱く、粘性は中。
 - n 灰色シルト
灰色の粘質土が固まって少量混じる。
しりりはやや弱く、粘性は中。
 - o 灰色シルト
粘質土が固まって少量混じる。
厚0.5~10mの炭化物を多く含む。
しりりはやや弱く、粘性はやや強い。
 - p 灰色シルト
やや砂っぽい。
しりりは弱く、粘性は中。
- 地山 灰色粘質土
青灰色の粘質土に黒褐色の粘質土が
固まって少量混じる。
厚0.5~10mの炭化物をやや多く含む。
しりりはやや弱く、粘性は中。





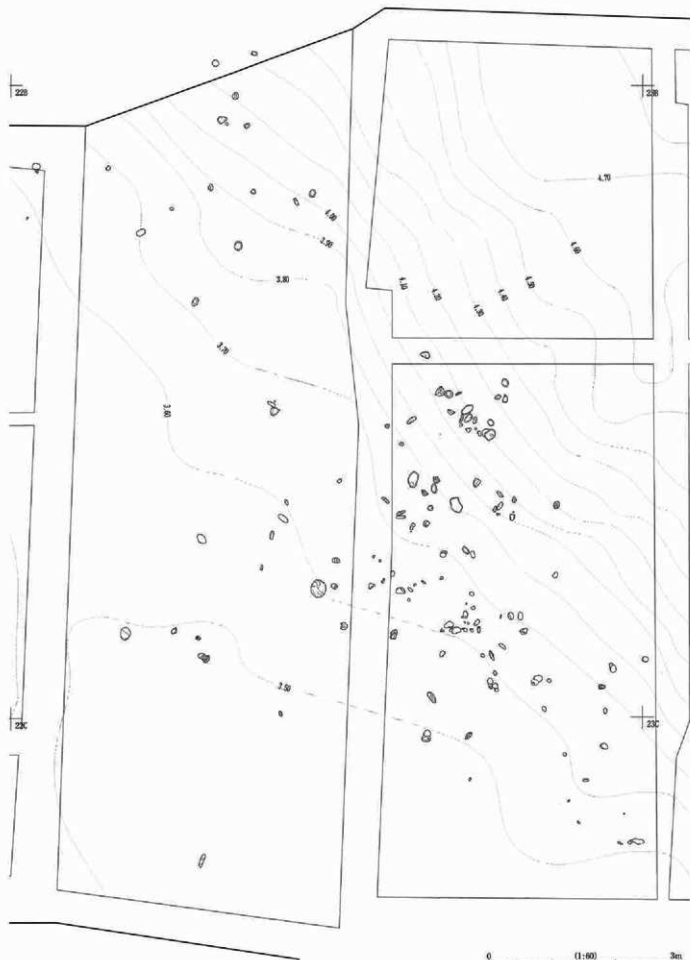


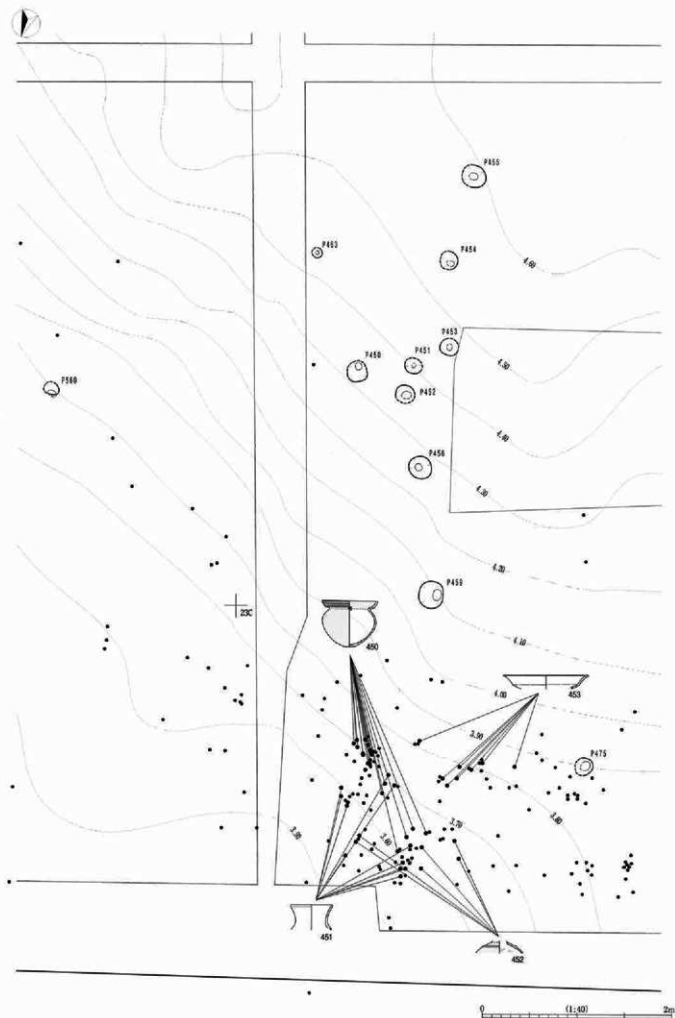
杭81
1 褐色粘質土
炭化黒粒子をやや多く含む。
しまりは弱く、粘性はやや強い。

杭44
1 褐色粘質土
褐色粘質土に青灰色粘質土がワール状に入り混じる。
径0.5-5mmの炭化物をやや多く含む。
しまりは中、粘性は中。

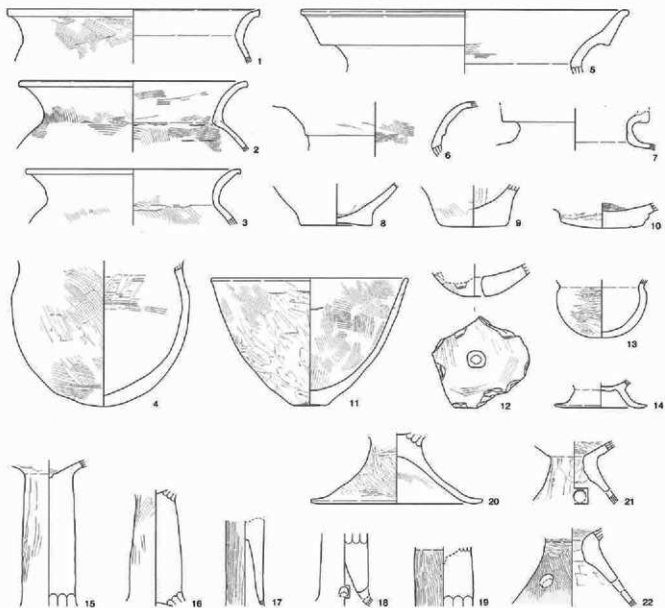
杭76
1 褐色粘質土 (ややシルト質)
褐色粘質土に青灰色粘質土が少量混じる。
径0.5-1mmの炭化物をやや多く含む。
しまりは中、粘性はやや強い。
2 灰白色粘質土
褐色粘質土に青灰色粘質土が少量混じる。
径0.5-5mmの炭化物を少量含む。
しまりは弱く、粘性はやや強い。

杭53-1/53-2
1 灰白色粘質土 (ややシルト質)
灰白色粘質土がブロック状に少量混じる。
径0.5-5mmの炭化物をやや多く含む。
しまりは中、粘性はやや強い。

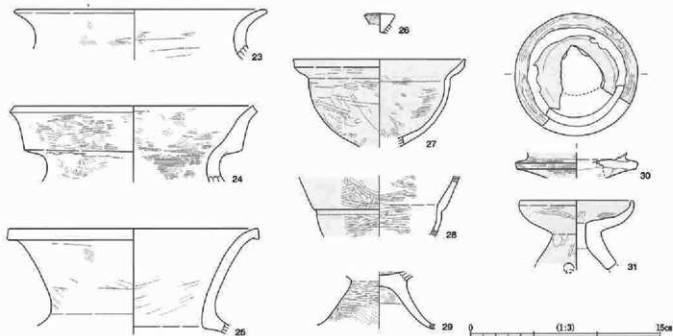




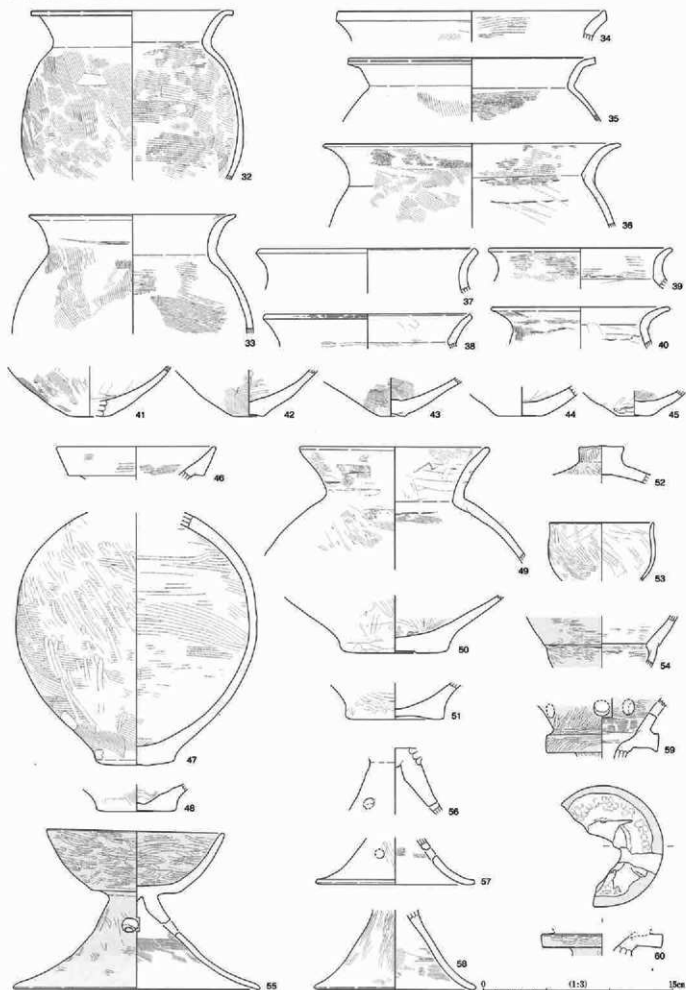
SI01 覆土最上～上層



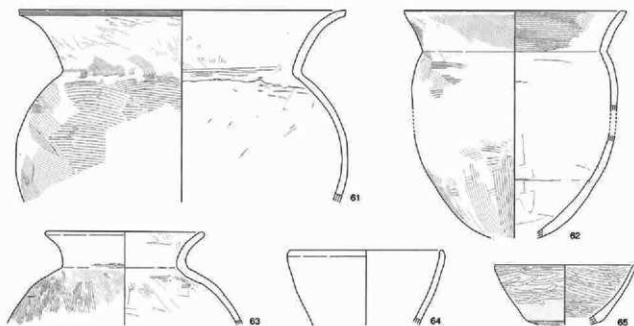
SI01 覆土中位



S101 覆土下層～床面直上



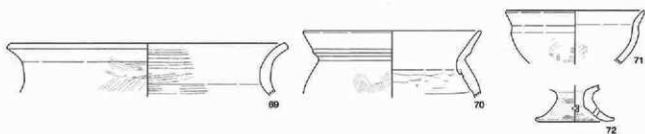
SI01 屋内土坑



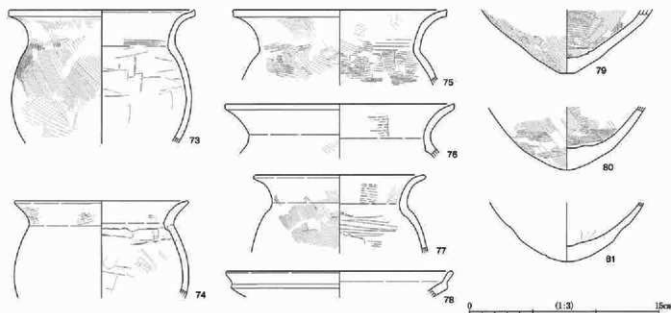
SI01 貼床内～掘形覆土



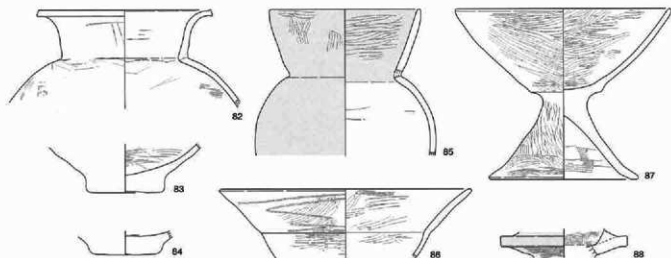
SI02



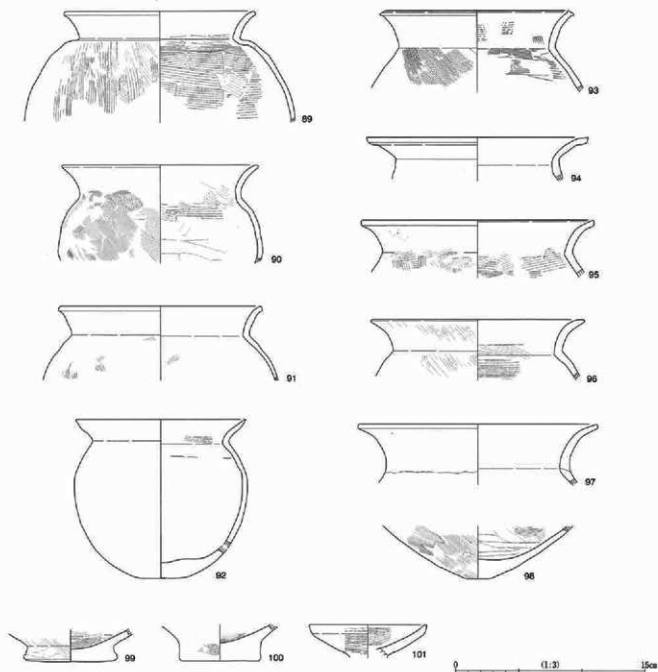
SI03 覆土最上～上層①



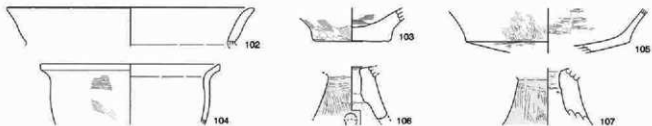
SI03 覆土最上～上層②



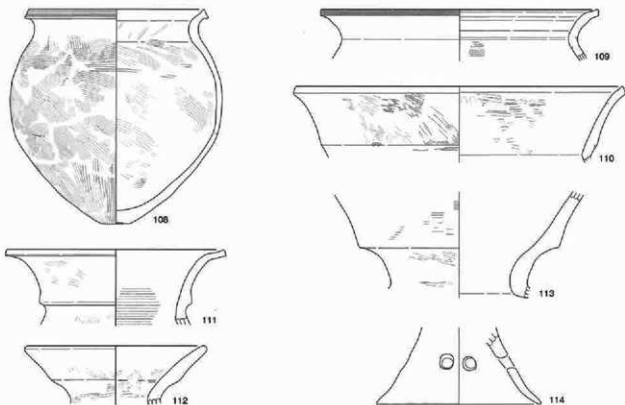
SI03 覆土下層～床面直上



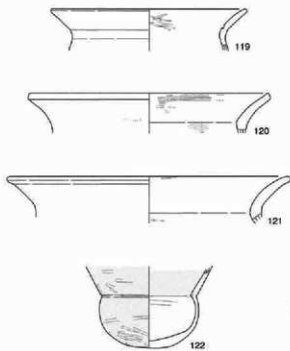
SI04



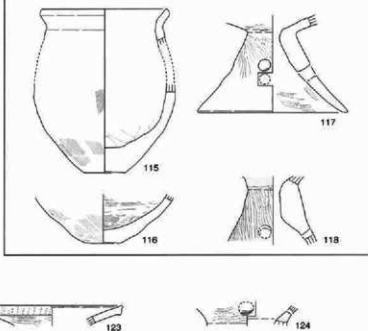
SI05

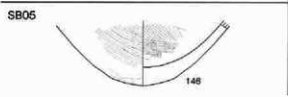
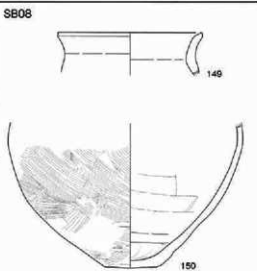
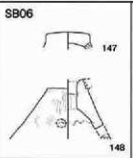
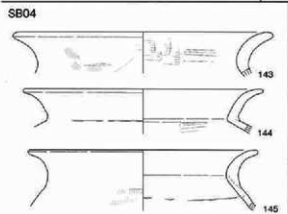
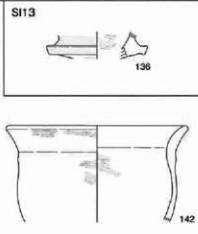
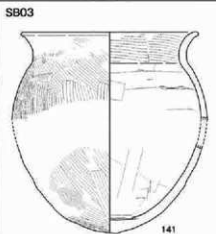
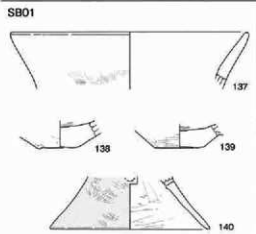
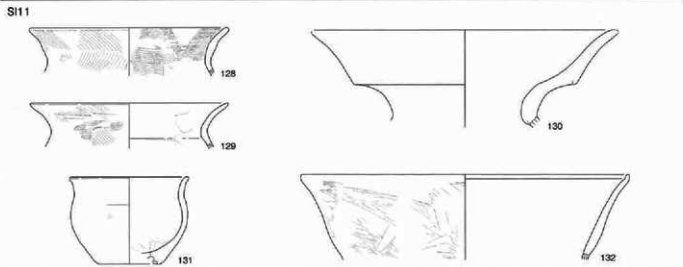


SI07



SI06



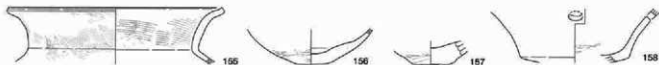


0 (1:3) 15cm

SK40



SK35



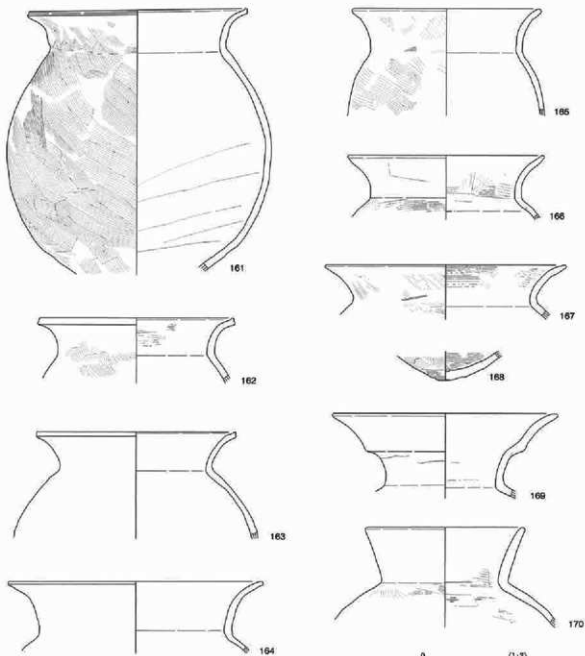
SK21



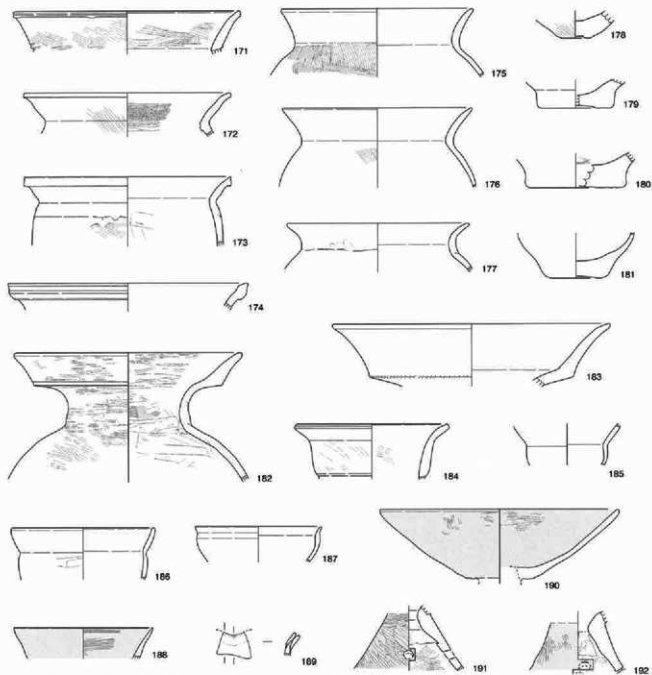
SK18



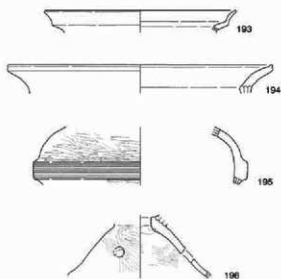
SK23



SK34



SK15



SK38



SK26

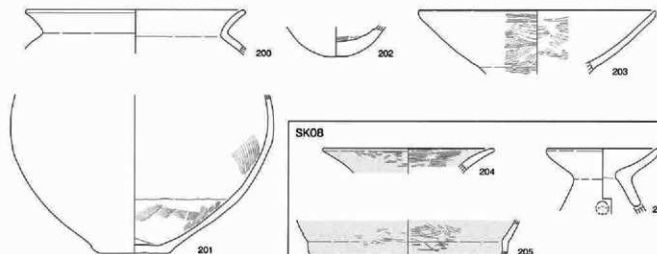


SK16

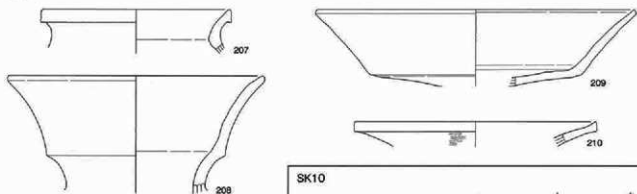


0 (1:3) 5cm

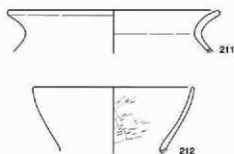
SK28



SK27



SK31



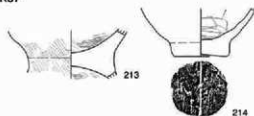
SK10



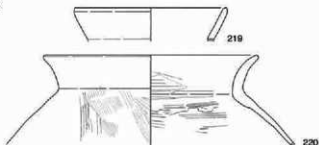
SK11



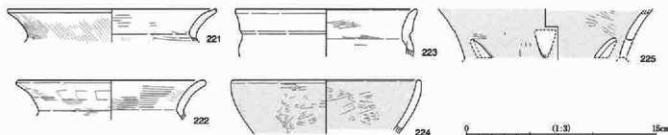
SK07



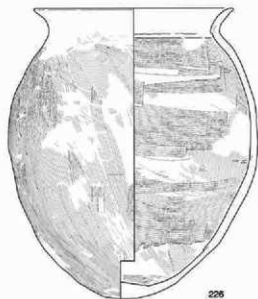
SK48



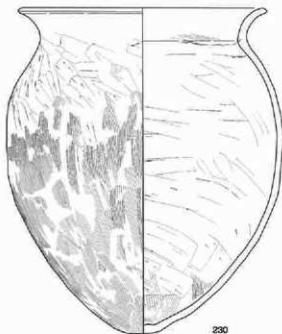
SK09



SK12①



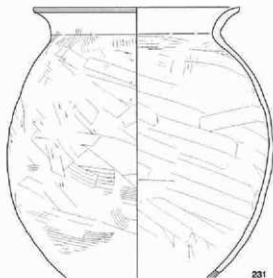
226



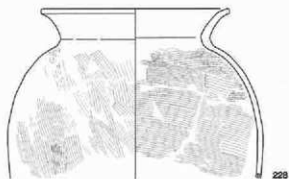
230



227



231



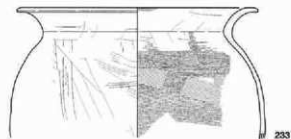
228



232



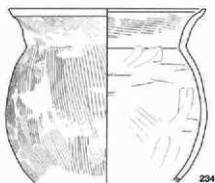
229



233

0 (1:3) 15cm

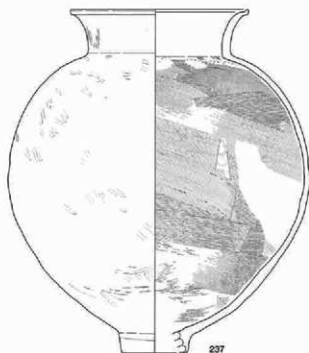
SK12②



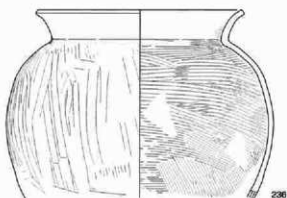
234



235



237



236



238



239

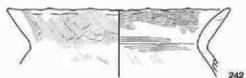


240

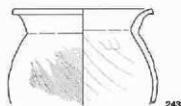


241

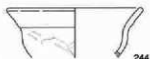
SK06



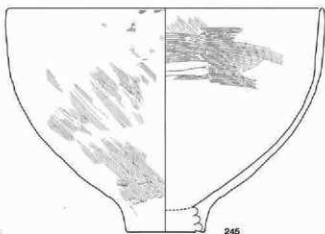
242



243



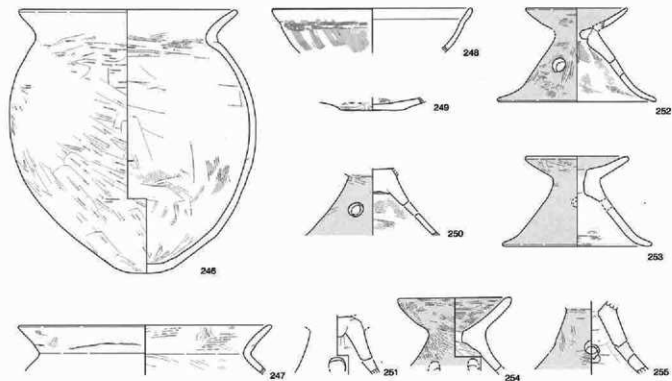
244



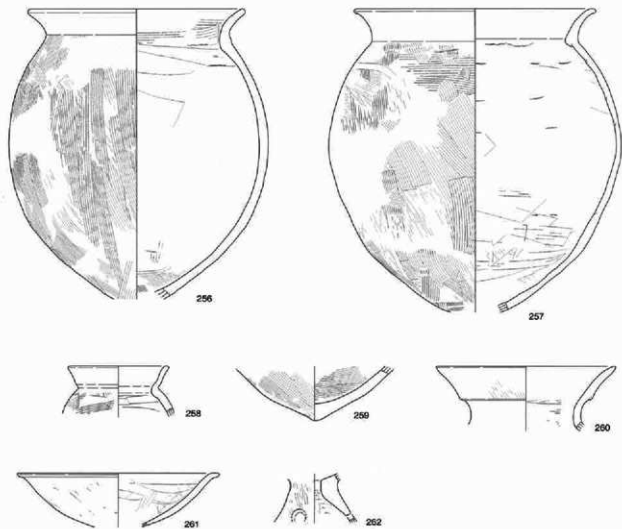
245

0 1:3 15cm

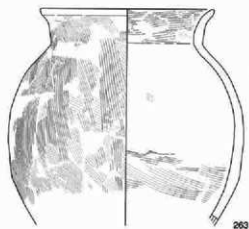
SK04



SK05



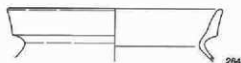
SK33



263



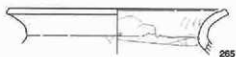
267



264



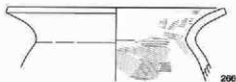
268



265



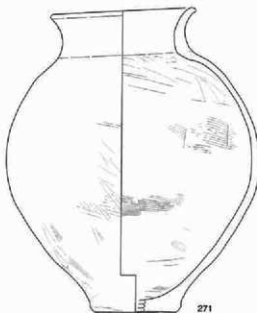
266



269



270



271



272



274



273



276



278



279



275



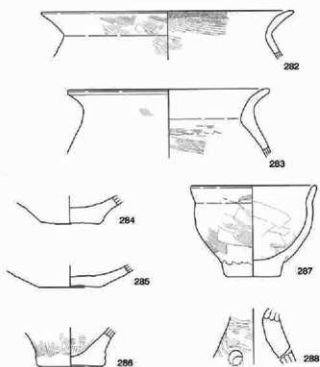
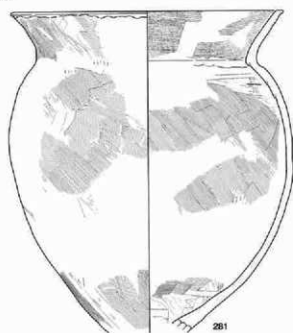
277



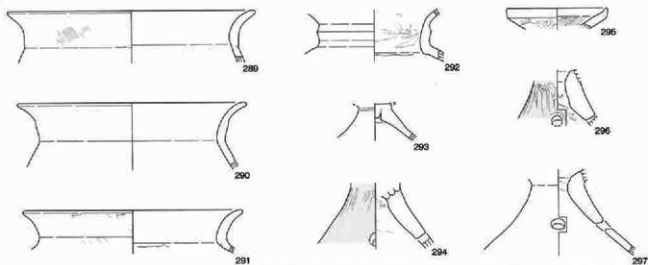
280

0 (1:3) 15cm

SK37



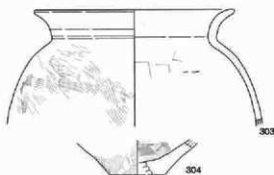
SK02



SK19



SK14

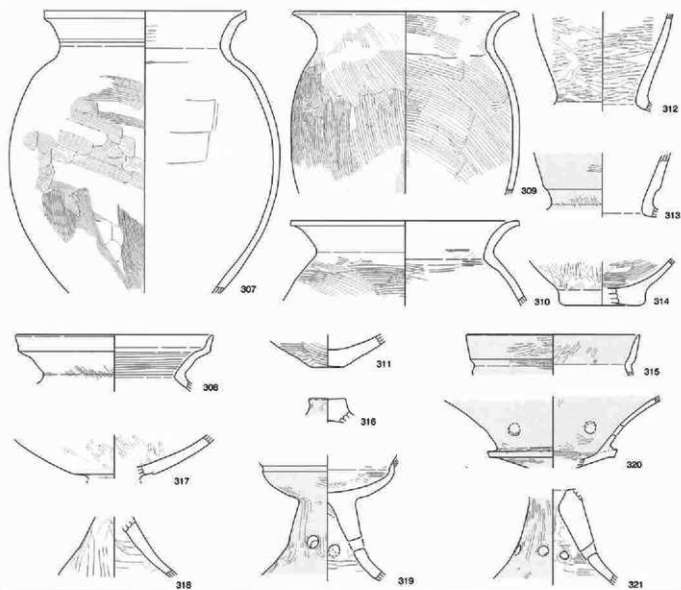


SK42

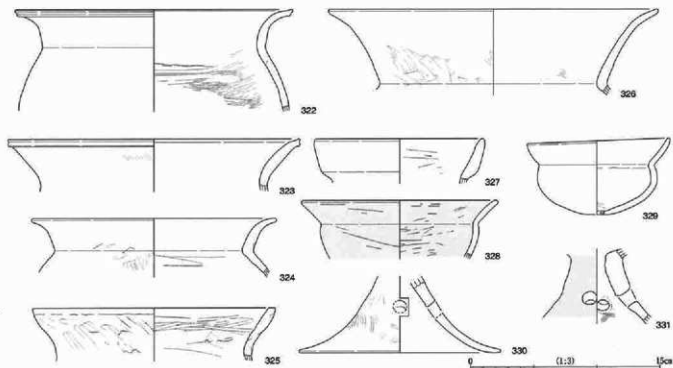


0 (1.3) 15cm

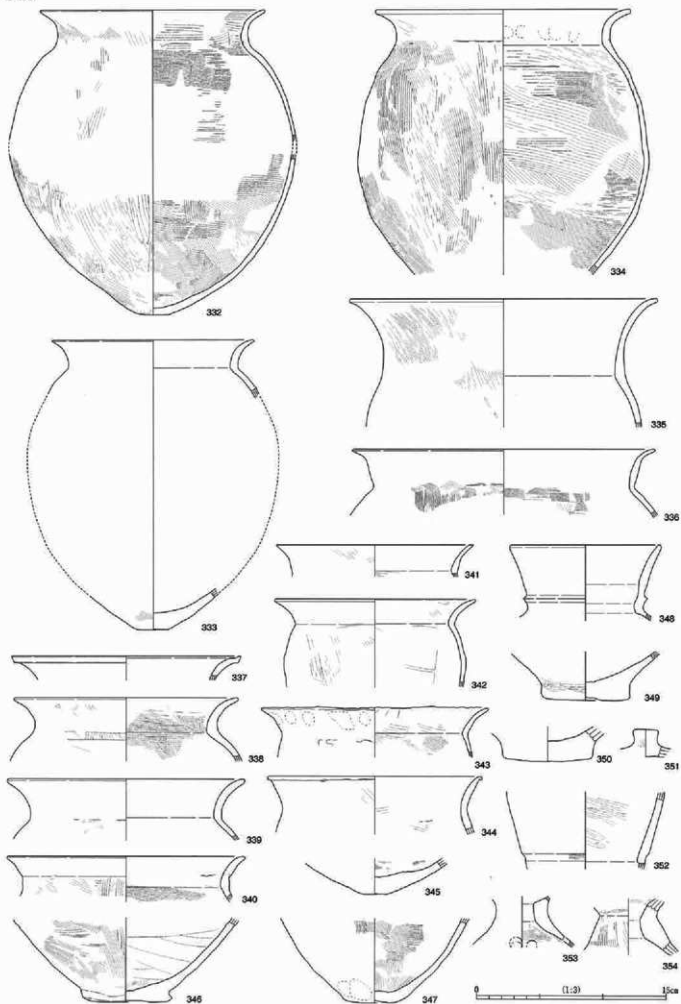
SK49



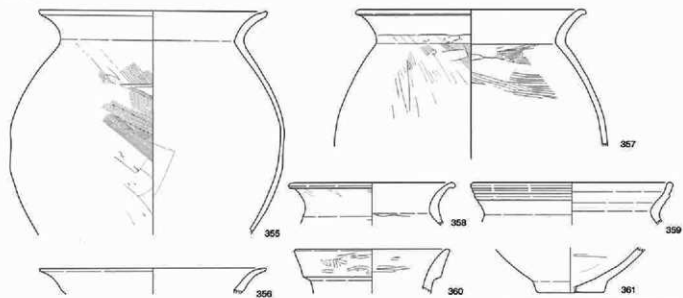
SK36



SK03



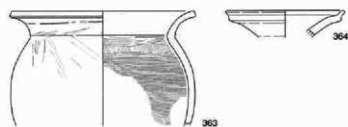
SK45



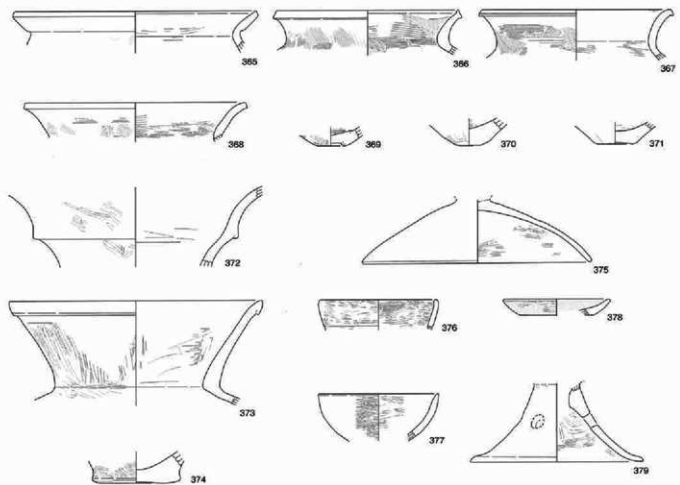
SK46



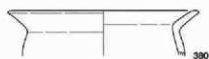
SK47



SD14



SD24



380

SD32



383

SD30



381

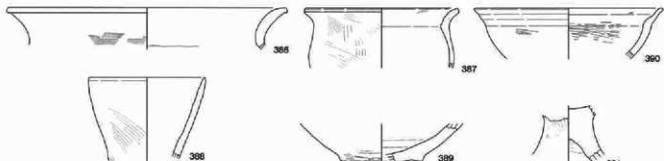


384



385

SD47



386

387

390

388

399

391

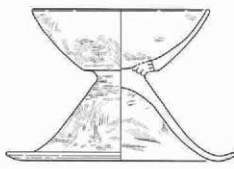
SD37



392

393

394



395



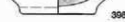
396

SD11



397

SD17



398



399

SD27



400

SD06



402

403

SD08



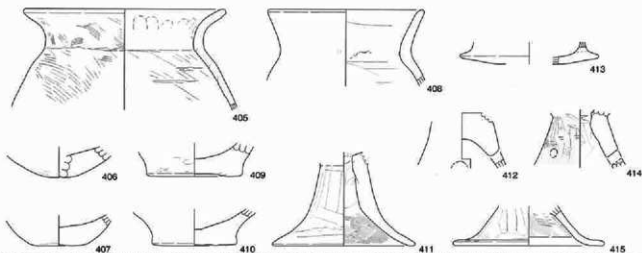
401



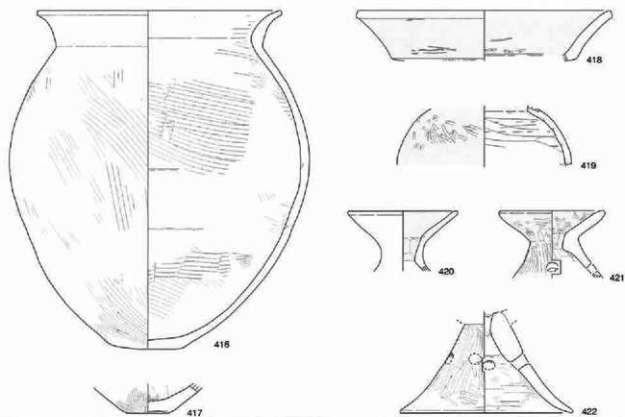
404



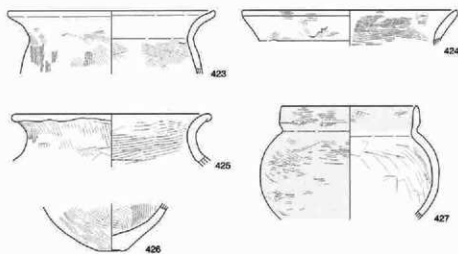
SD04 (旧河川) 覆土最上~上層



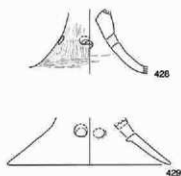
SD04 (旧河川) 川底付近



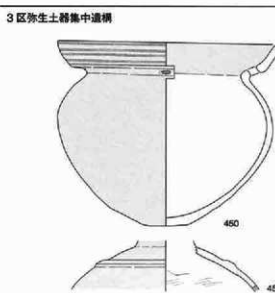
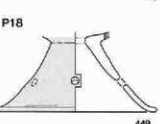
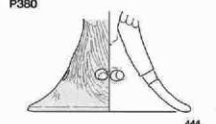
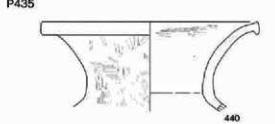
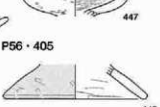
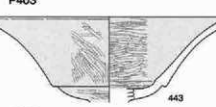
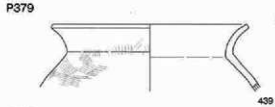
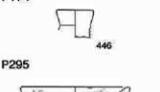
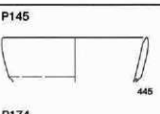
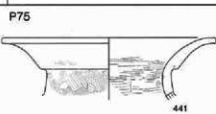
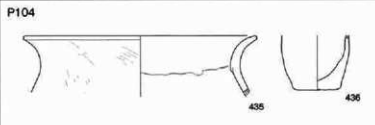
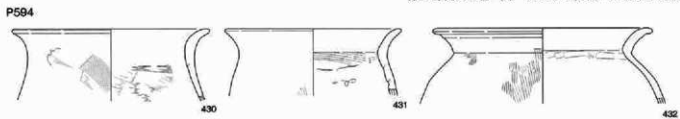
P329



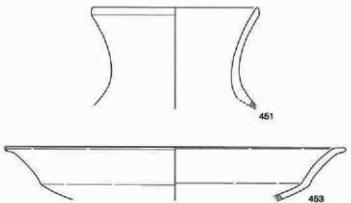
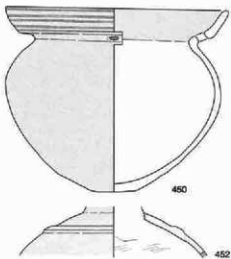
P06



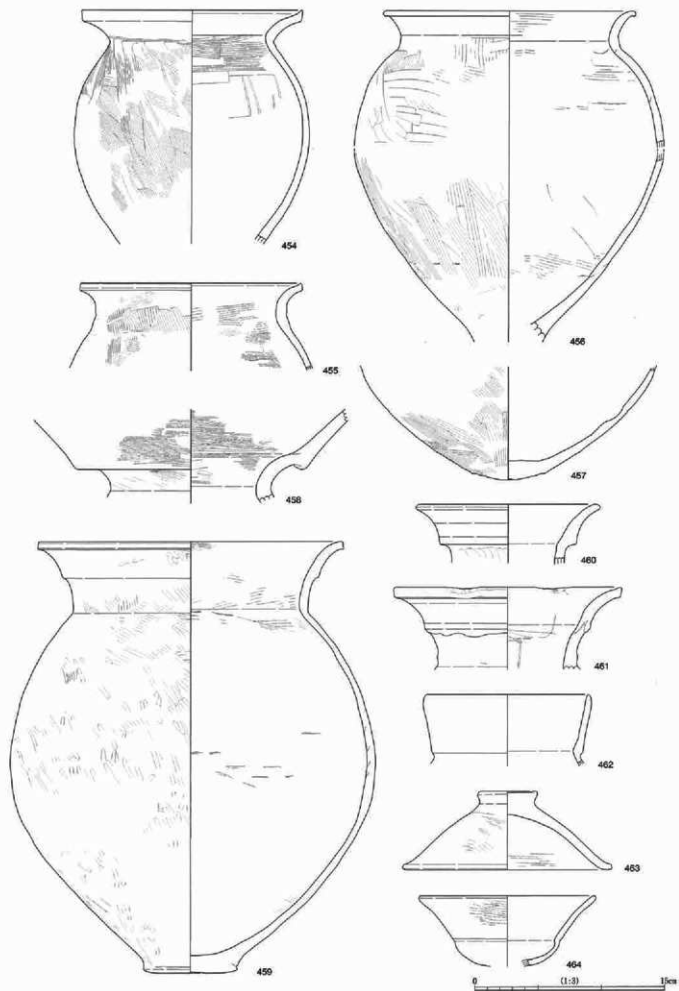
0 (1:3) 15cm



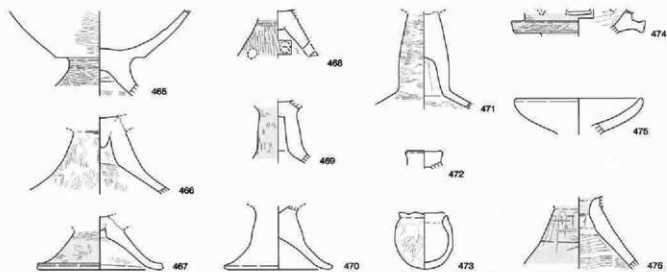
3区弥生土器集中遺構



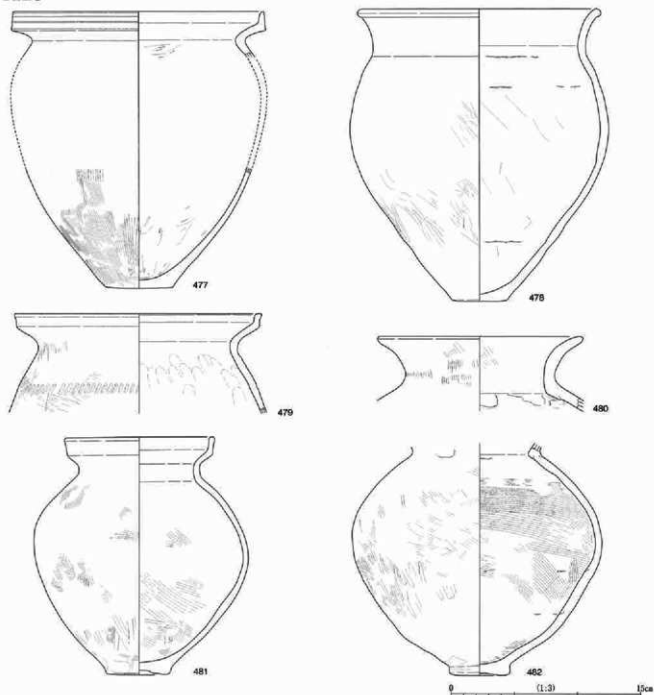
2区包含層①

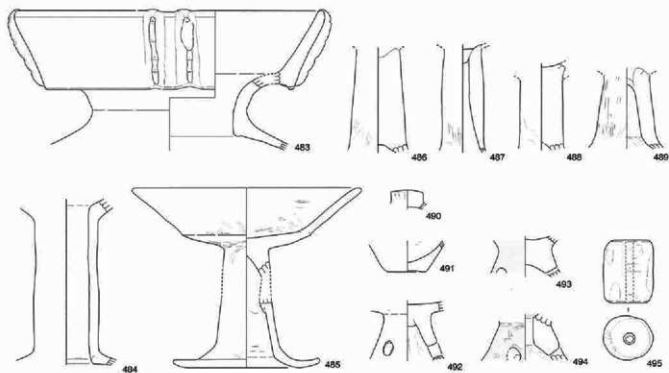


2区包含層②



3区包含層①

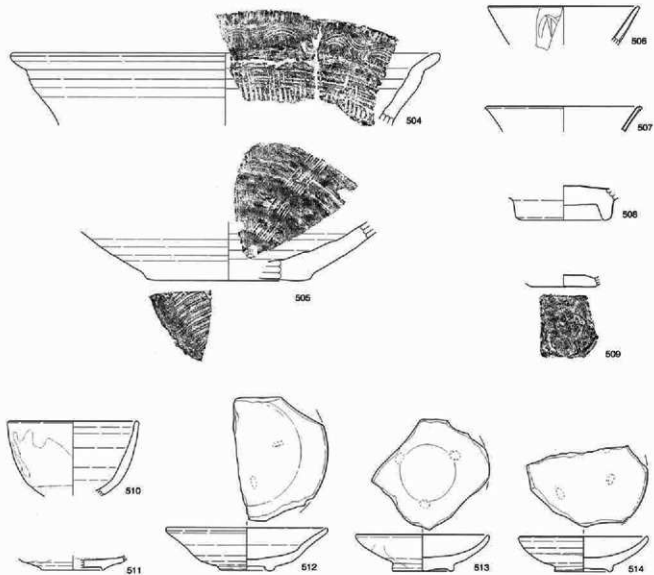




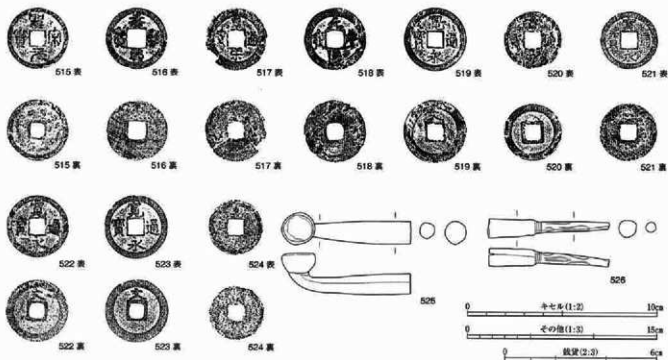
古墳時代後期以降の遺物①

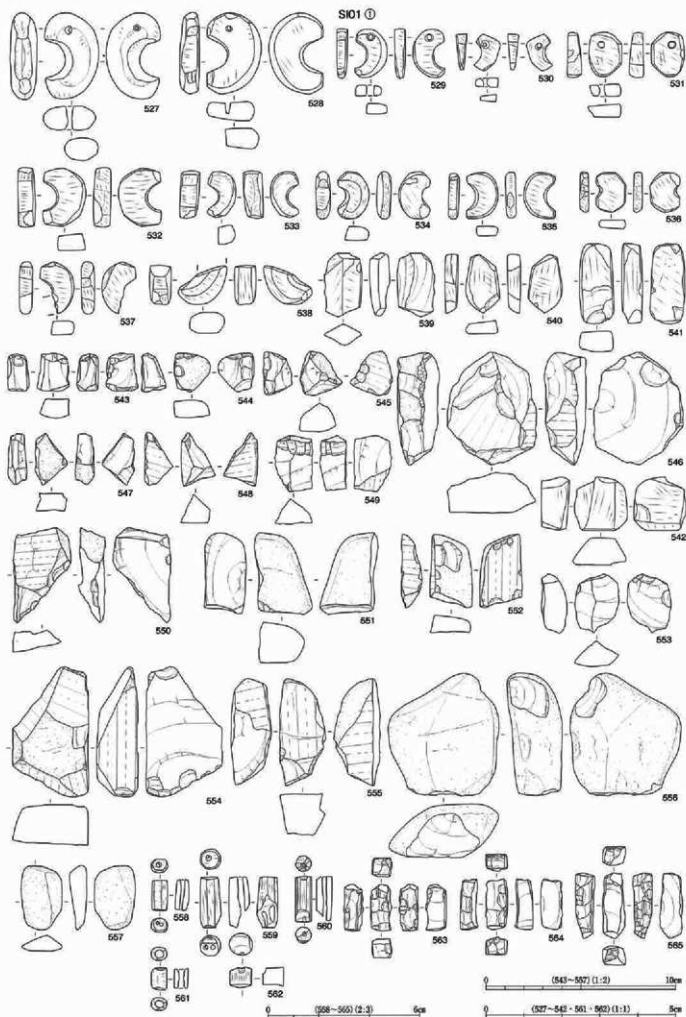


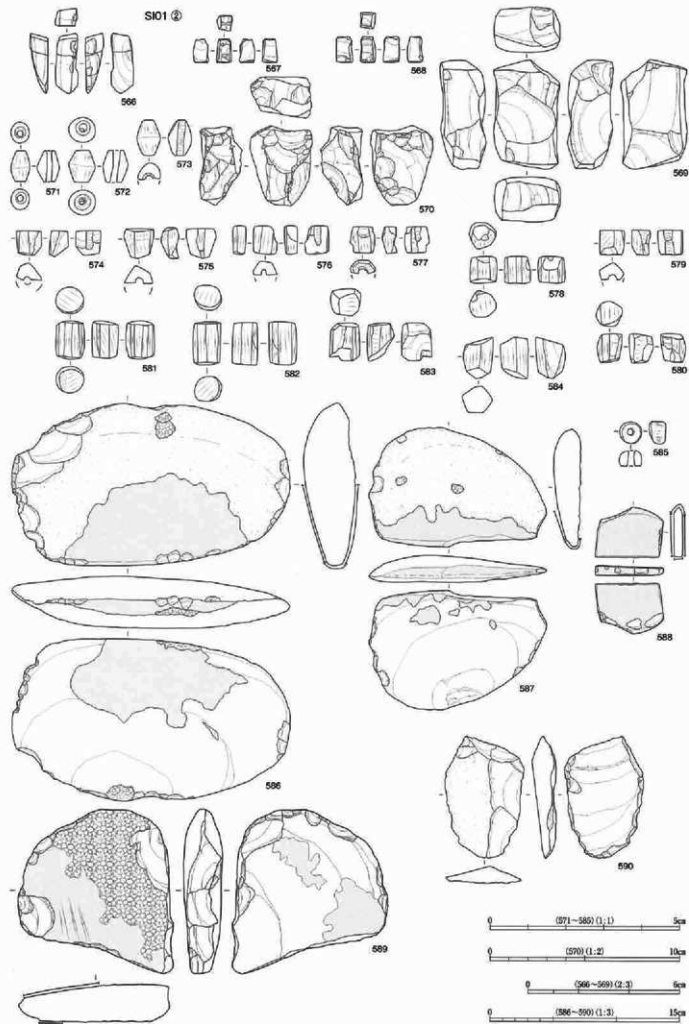
古墳時代後期以降の遺物②

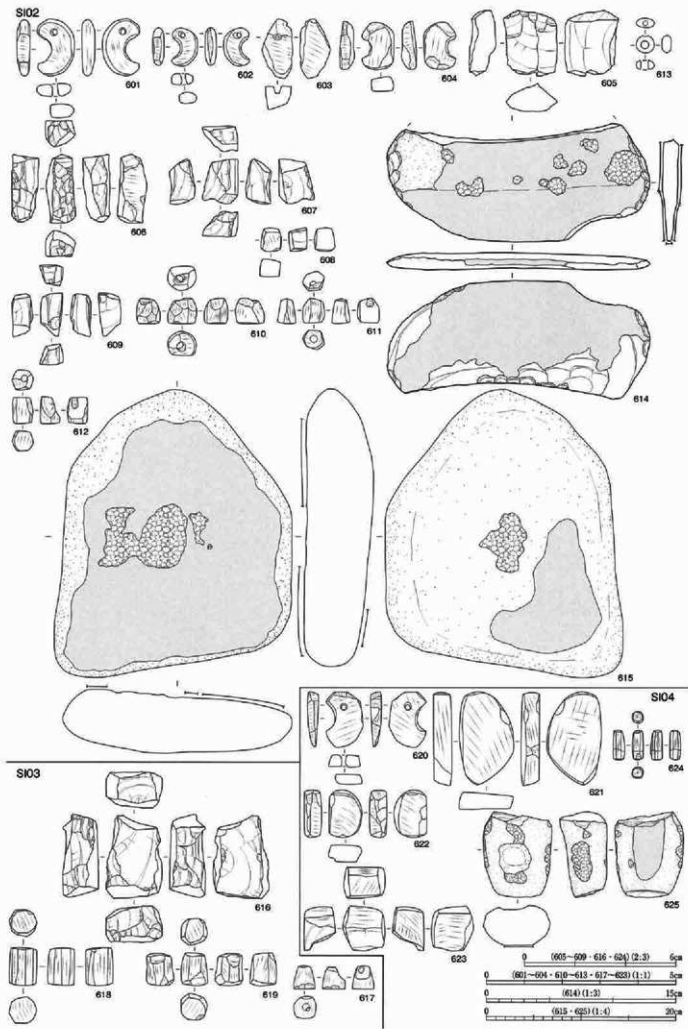


金属製品・銭貨

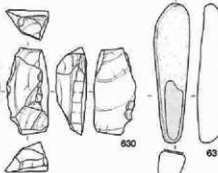
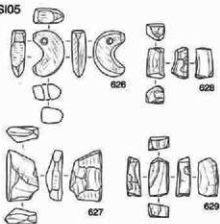




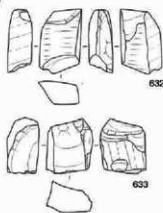




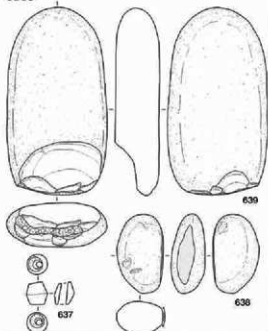
S105



S107



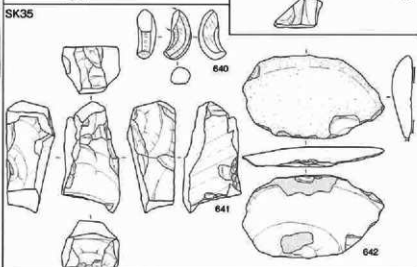
SB03



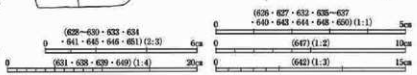
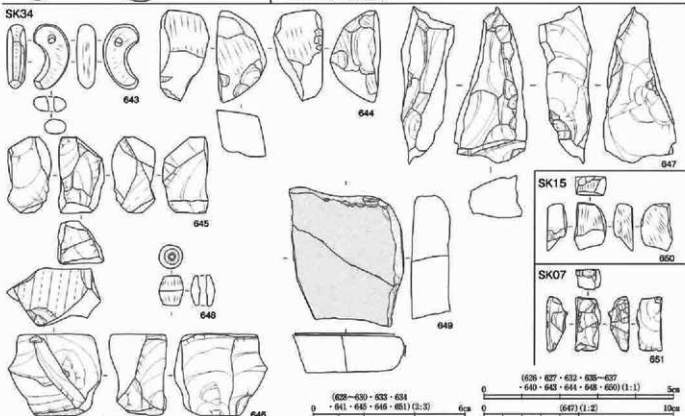
S10

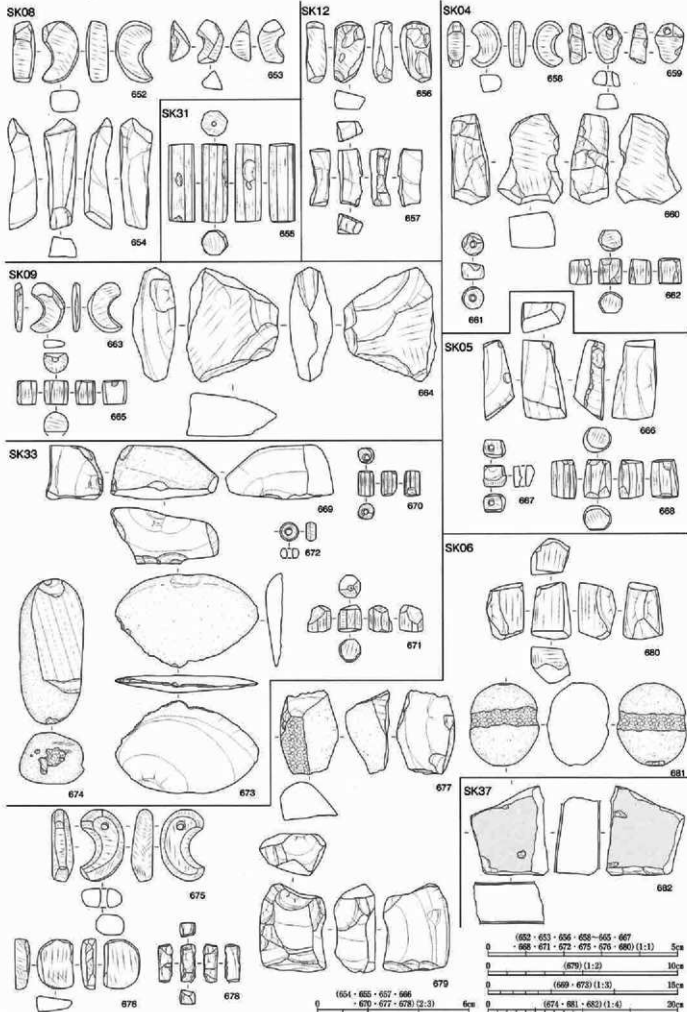


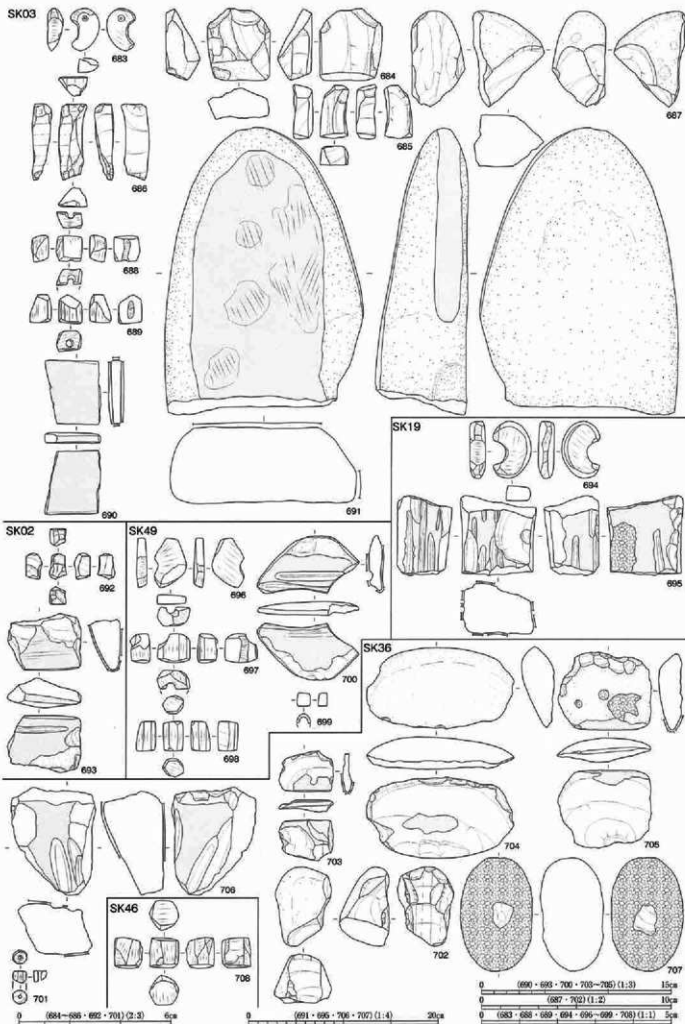
SK35

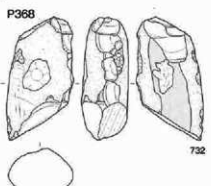
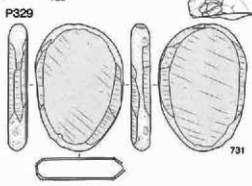
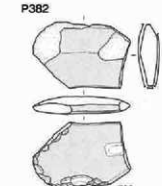
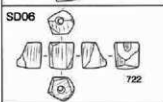
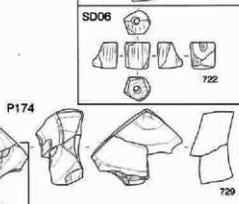
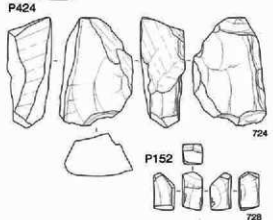
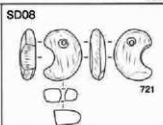
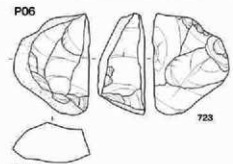
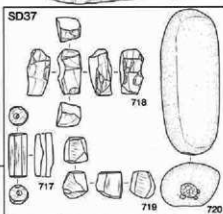
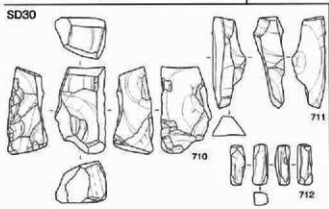
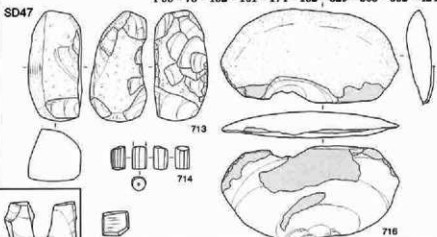
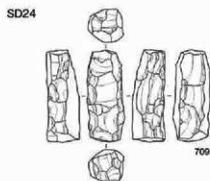


SK34









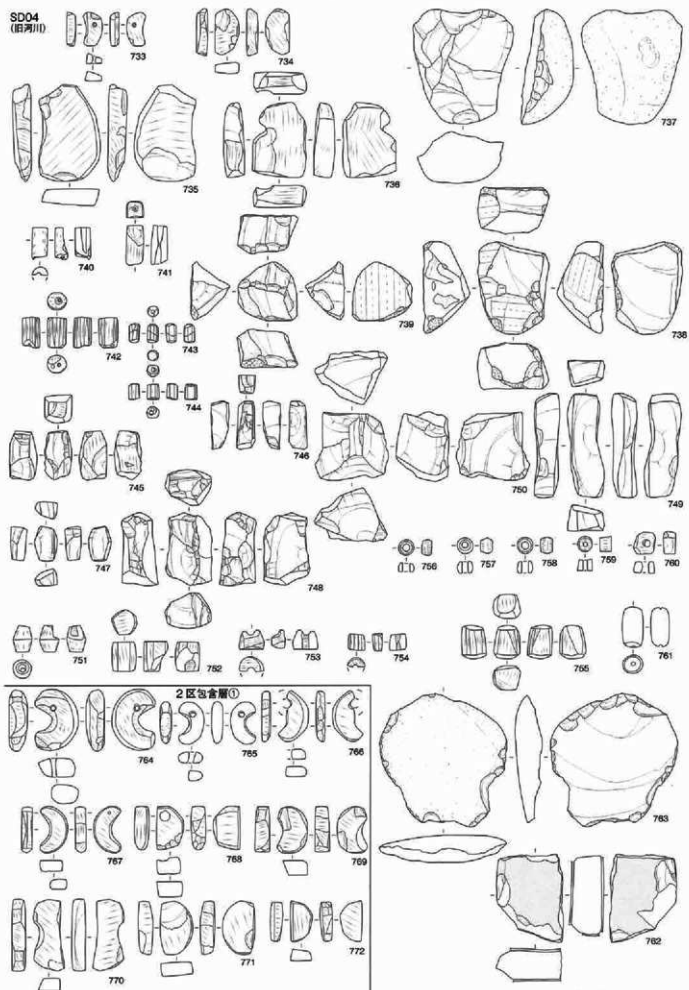
0 6cm (709-712, 714-715, 717-718, 724-726) (2:3)

0 30cm (716-730) (1:3) (720-721, 722) (1:4)

0 5cm (713-719-723) (1:1)

0 10cm (729) (1:2)

SD04
(旧河川)

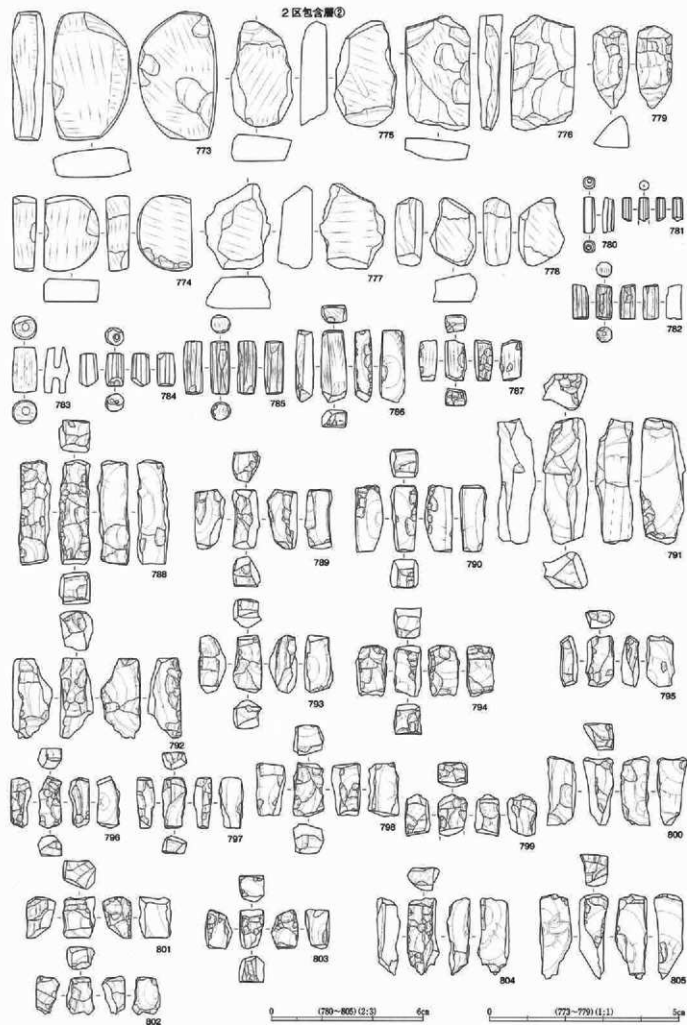


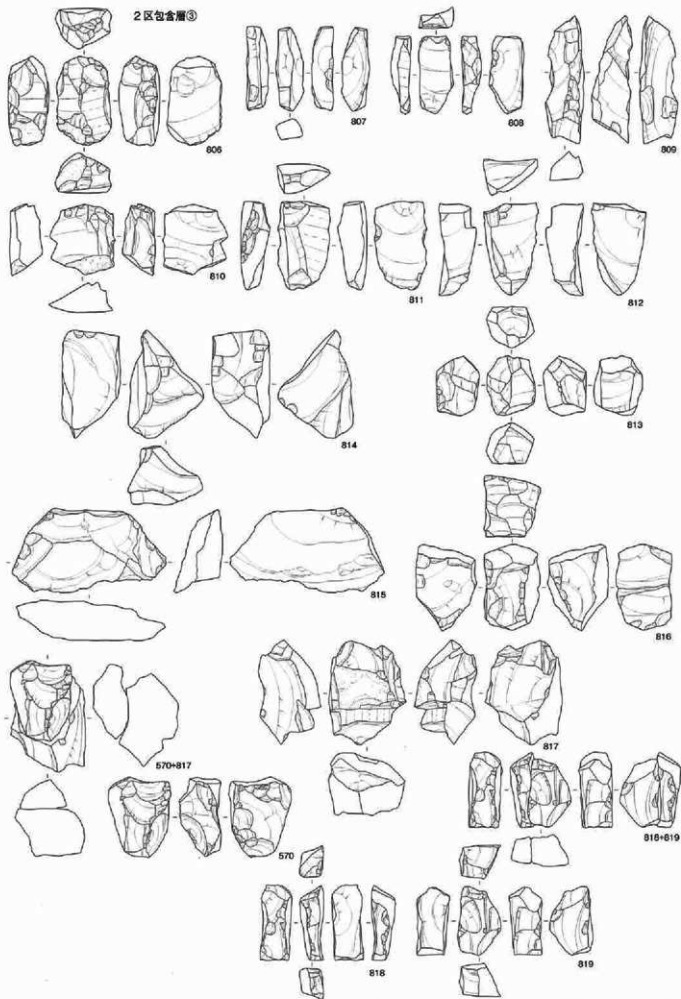
2区包含層①

0 (749-769) (2:1) 5cm

0 (735-739-763) (1:3) 15cm

0 (762) (1:4) 20cm
0 (733-737-750-761-764-772) (1:1) 5cm



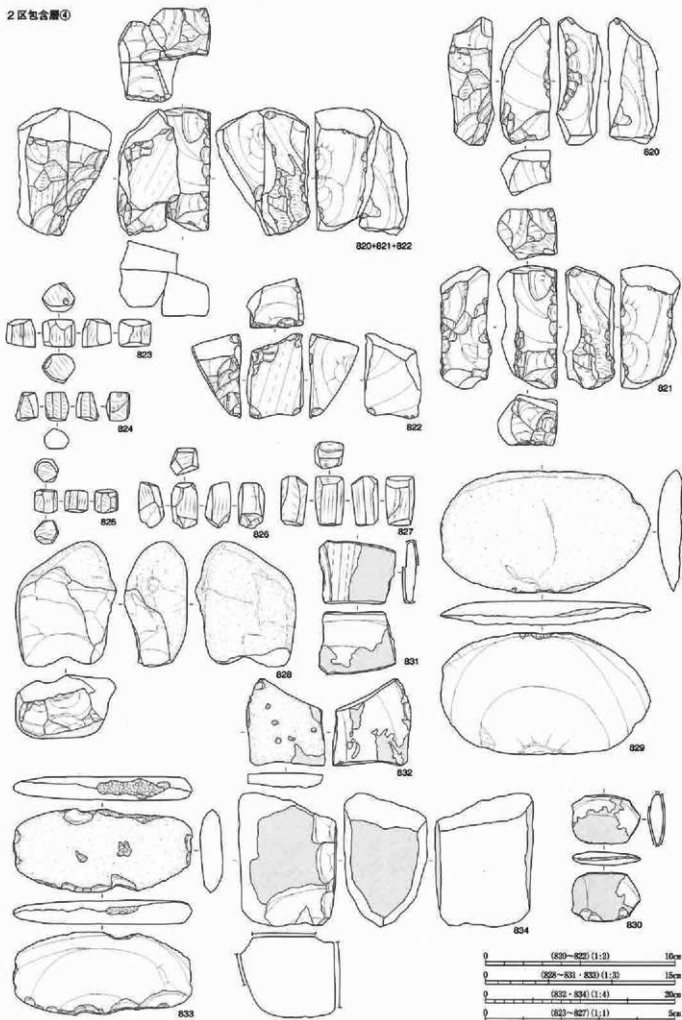


0 (806-813・815・816) (2:3) 6cm

0 (570・817-819) (1:2) 10cm

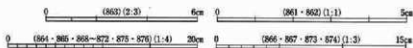
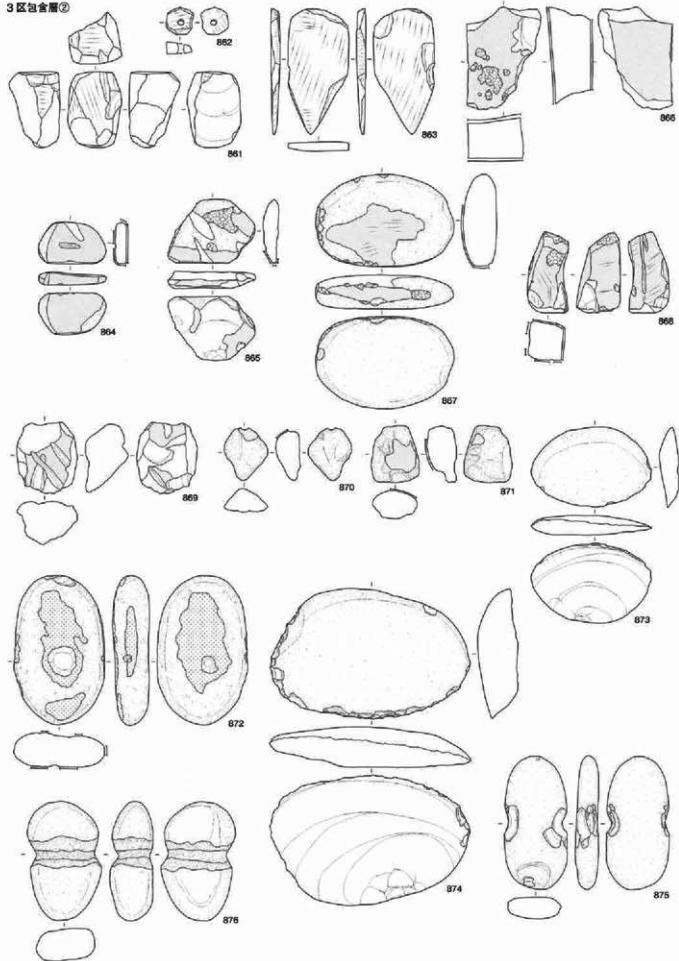
0 (814) (1:3) 15cm

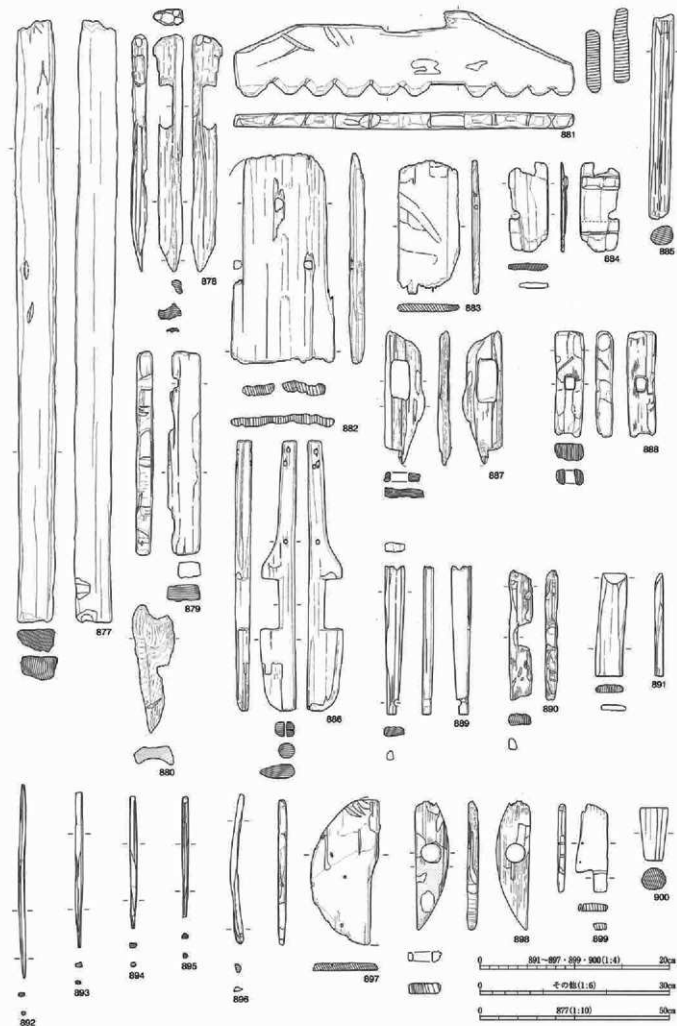
2区包含層④

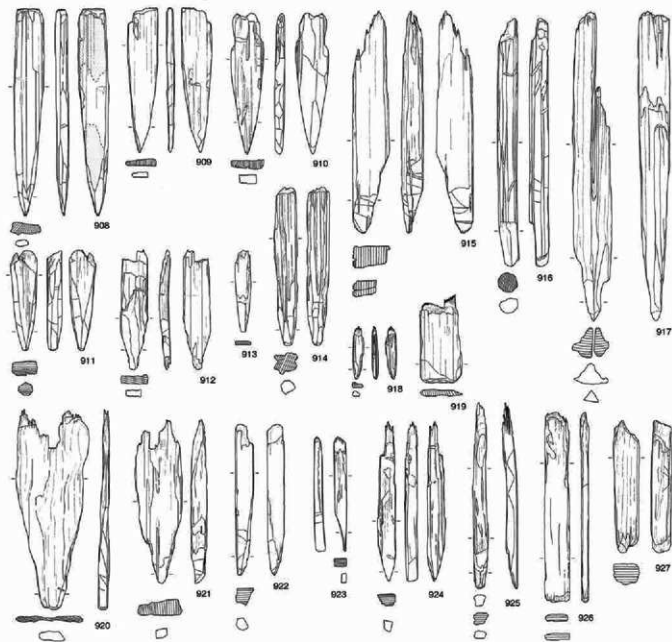
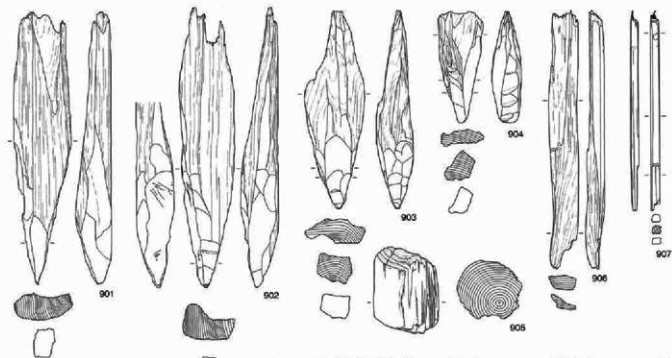




3区包含層②









2区近景 (東から)



2区近景 (西から)



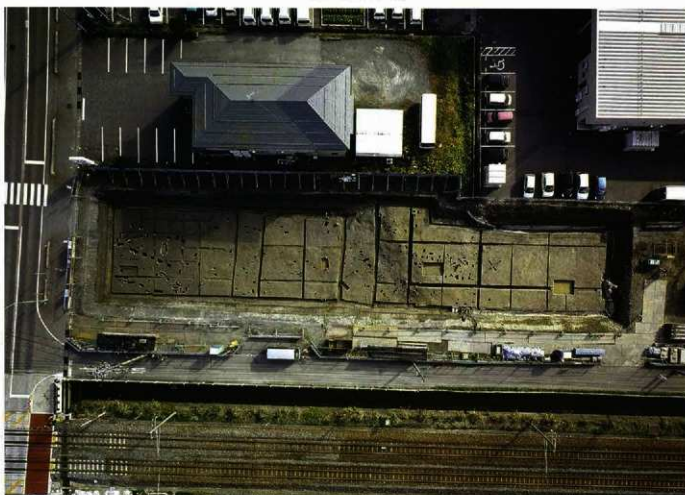
3区近景 (東から)



3区近景 (西から)



2区全景 (上空・北から)



3区全景 (上空・北から)



1区全景 (西から)



SD04 東側拡張区 北壁土層断面 (南東から)



3区包含層 遺物出土状態 (北から)



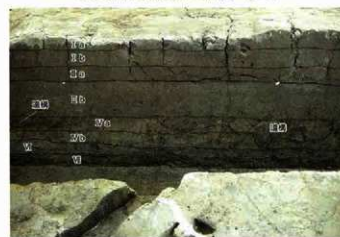
3区低地部 木材等出土状態 (北西から)



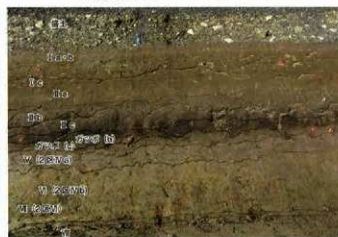
1区基本層序 (中央部南壁土層断面・北から)



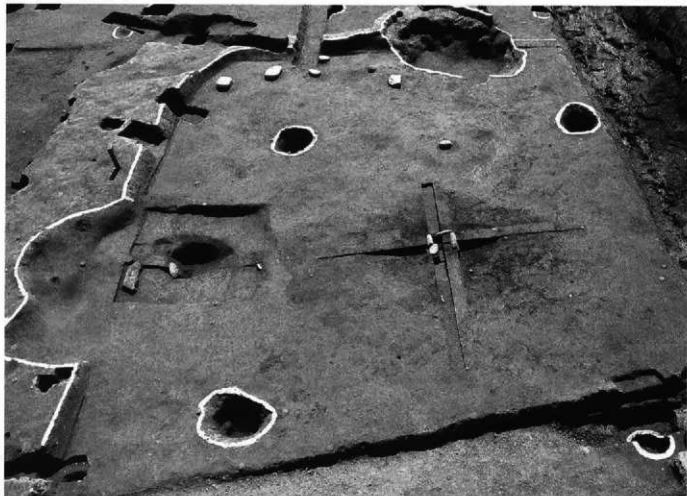
2区基本層序① (2-C・D区間・西から)



2区基本層序② (2-B・C区間・西から)



3区基本層序 (調査区北壁・南から)



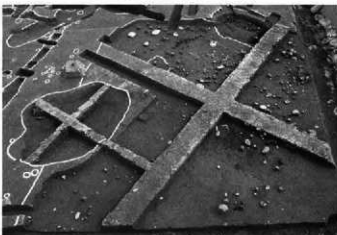
SI01 完備 (北から)



SI01 調査区北壁土層断面 (南から)



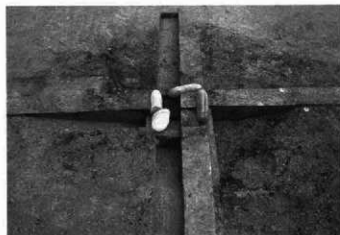
SI01 上層~中層遺物出土状態 (北東から)



SI01 下層~床面直上遺物出土状態 (北から)



SI01 石囲炉 (2次炉) 検出状態 (北から)



SI01 1次炉・2次〔石囲〕伊東西土層断面（北から）



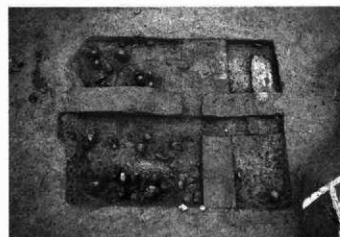
SI01 1次炉・2次〔石囲〕伊南北土層断面（西から）



SI01 石囲伊南北土層断面（近接・東から）



SI01 1次炉形底面粘土塊出土状態（北から）



SI01 屋内土坑1段目遺物出土状態（南から）



SI01 屋内土坑東西土層断面（南から）



SI01 屋内土坑内磨研石（586）出土状態（南から）



SI01 屋内土坑完掘（南から）



SI02 完掘 (北から)



SI02 調査区北壁土層断面 (南西から)



SI03 完掘 (南から)



SI03 遺物出土状態 (下層・南から)



SI04 (SD03) 全景 (南から)



SI04 (SD03) A-A'土層断面 (西から)



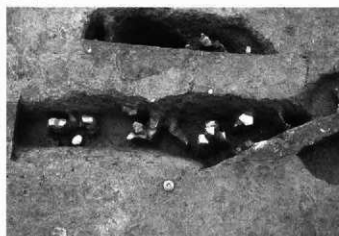
SI04 (SD03) 溝内遺物出土状態 (東溝・北から)



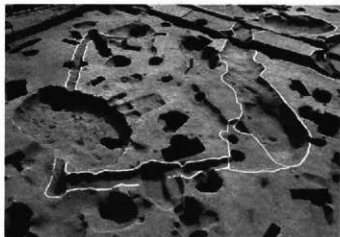
SI05 (SD07) 全景 (南から)



SI05 (SD07) 南部土層断面 (東から)



SI05 (SD07) 溝内遺物出土状態 (東から)



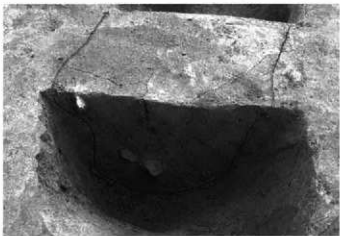
SI06 (SD05) 実撮 (北東から)



SI06 (SD05) 土層断面 (南から)



SI07 (SD13・21・22・23) 全景 (北西から)



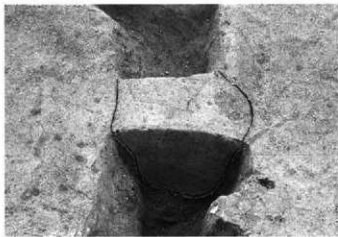
SI07 (SD23) 土層断面 (北から)



SI07 (SD13) 遺物出土状態 (東から)



SI09 (SD18・19・20) 完掘 (北から)



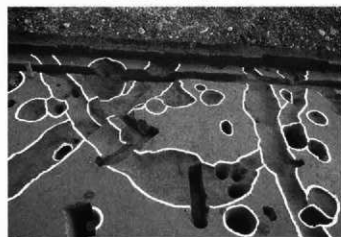
SI09 (SD20) 土層断面 (西から)



SI10 (SD09) 完掘 (北西から)



SI10 (SD09) 遺物出土状態 (西から)



SI11 (SD33) 完掘 (北から)



SI11 (SD33) A-A'土層断面 (北西から)



SI12 (SD34) 完掘 (北から)



SI12 (SD34) A-A'土層断面 (西から)



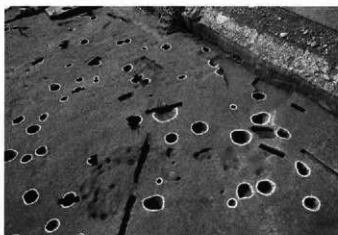
SI13 (SD35) 完掘 (北から)



SI13 (SD35)・P86 切り合い断面 (西から)



2区ビット群 検出状態 (全景・東から)



2区ビット群 近景 (IV層掘削後・東から)



直立柱建物 (SB06) 全景 (北から)



P86 (SB06) 土層断面 (北から)



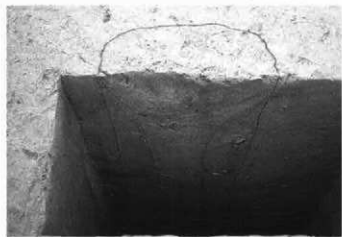
直立柱建物 (SB07) 全景 (北から)



P423 (SB07) 土層断面 (南から)



独立柱建物 (SB08・SB09) 全景 (北から)



P485 (SB08) 土層断面 (南から)



P487 (SB08) 土層断面 (南から)



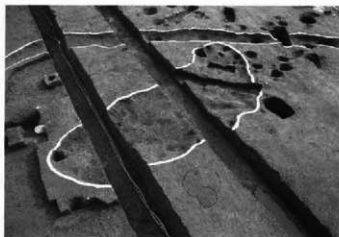
P486 (SB09) 土層断面 (南から)



P559 (SB09) 土層断面 (南から)



SK35 土層断面 (北東から)



SK35 完掘 (北から)



SK23 遺物出土状態 (東から)



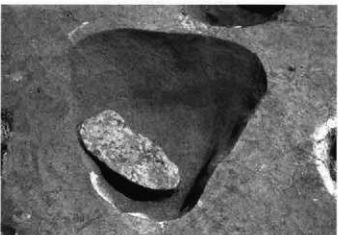
SK23 土層断面 (北から)



SK25 遺物出土状態 (北から)



SK25 土層断面 (北から)



SK25 粘土塊出土状態 (北から)



SK23・SK25 完掘 (西から)



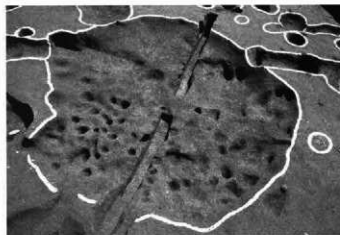
SK34 下層遺物出土状態 (南西から)



SK34 東西土層断面 (南西から)



SK34 南北土層断面 (南東から)



SK34 完備 (西から)



SK12 遺物出土状態 (東から)



SK12 東西土層断面 (南東から)



SK12 南北土層断面 (南西から)



SK12 完備 (南から)



SK38 粘土塊出土状態 (北西から)



SK04 遺物出土状態 (西から)



SK04 土層断面 (南西から)



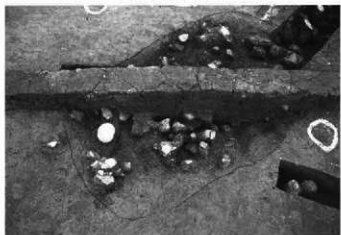
SK04 完掘状態 (南西から)



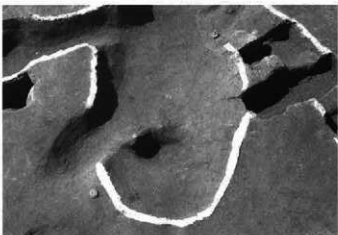
SK05 土層断面 (南から)



SK05 完掘 (南から)



SK06 遺物出土状態 (北から)



SK06 完掘 (北東から)



SK33・SK37 切り合い断面 (北から)



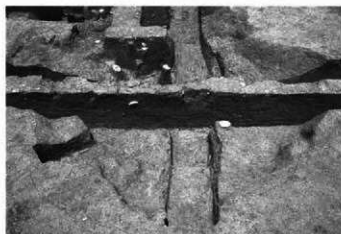
SD06・SK33 切り合い断面 (北から)



SK33・SI04 (SD03)・SK06 切り合い断面 (東から)



SK33 遺物出土状態 (北東から)



SK02 土層断面 (南から)



SK02 完掘 (南から)



SK19 遺物出土状態 (南から)



SK19 完掘 (南から)



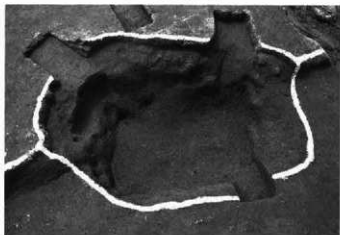
SK49 土層断面 (北から)



SK49 完掘 (北から)



SK36 下層遺物出土状態 (南から)



SK36 完掘 (北から)



SK03 遺物出土状態 (北東から)



SK03 東西土層断面 (南から)



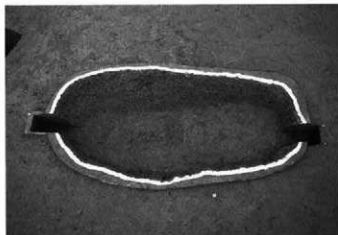
SK03 完掘 (南東から)



SK45 遺物出土状態 (西から)



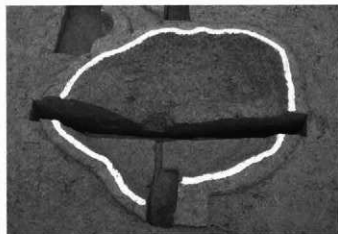
SK45 土層断面 (西から)



SK45 完掘 (西から)



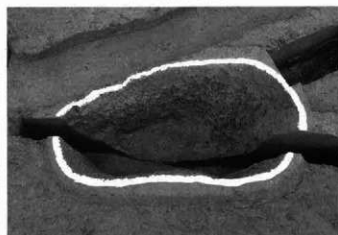
SK46 土層断面 (南から)



SK46 完掘 (南から)



SK47 土層断面 (南から)



SK47 完掘 (南から)



SD14 遺物出土状態 (南東から)



SD14 完掘 (北西から)



SD30 遺物出土状態 (南東から)



SD30 実掘 (南から)



SD37 土層断面 (北西から)



SD37・SK04・SK07 実掘 (北西から)



SD08 土層断面 (北から)



SD08・SI11・SI12 実掘 (北西から)



SD04 調査区北壁土層断面 (南東から)



SD04 東側拡張区北壁土層断面 (南西から)



SD04 中央部南壁土層断面・杭列（北から）



SD04 調査区南壁土層断面（北東から）



P06 遺物出土状態・土層断面（北から）



P85 礫出土状態（北から）



P67 礫出土状態（南から）



P05 土層断面（北から）



P75 土層断面・遺物出土状態（西から）



P431 柱模検出土状態（北から）



木材・杭集中遺構 木材検出状態・土層断面（北西から）



木材・杭集中遺構 遺物検出状態（北西から）



杭 53-1 (901)・53-2 (902) 断面 (南から)



杭 44 (903) 断面 (南東から)



杭 76 (904) 断面 (北から)



杭 65 (906) 断面 (西から)



杭 39 (910)・40 (908) 断面 (南西から)



杭 62 (909) 断面 (南から)



杭 33・34 断面 (南から)



壘・土器・杭 70 (921) 検出状態 (東から)



弥生土器集中遺構 遺物出土状態 (北西から)



弥生土器集中遺構 弥生土器出土状態 (南西から)



円礫集中遺構 礫出土状態 (東から)



2-D区Ⅲa・Ⅲb層 遺物出土状態 (北西から)



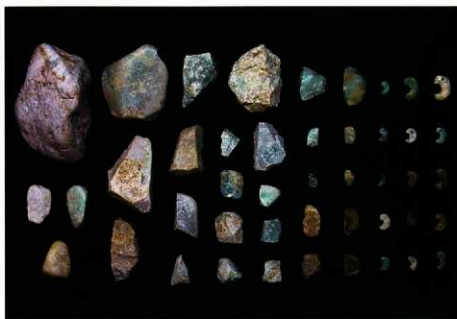
2-D区Ⅳa層面上 粘土・土器出土状態 (東から)



古墳時代前期の土器



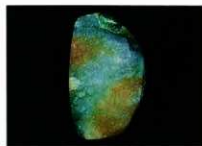
古墳時代前期の玉作資料



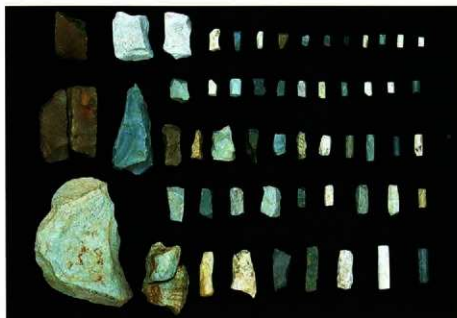
勾玉製作工程品



勾玉 (527・実寸)



勾玉未成品 (773・実寸)



管玉製作工程品



管玉未成品 (655・実寸)



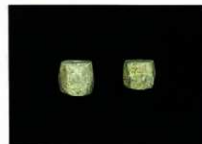
管玉未成品 (788・実寸)



竇玉製作工程品

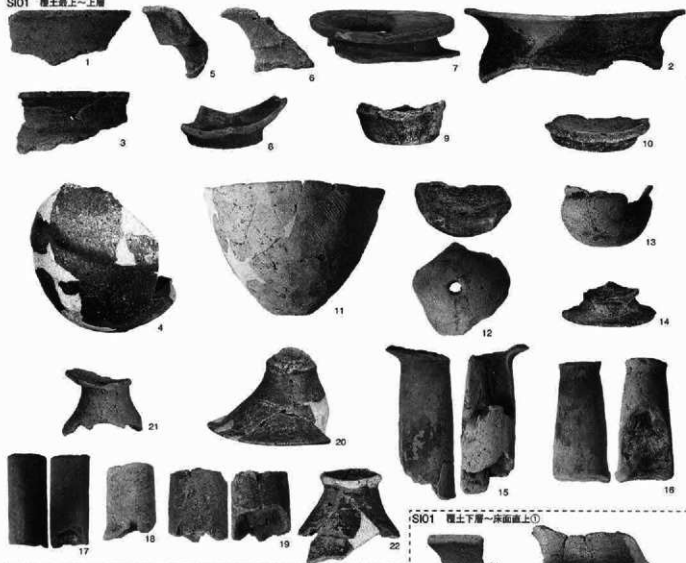


竇玉 (左から 572・571・実寸)

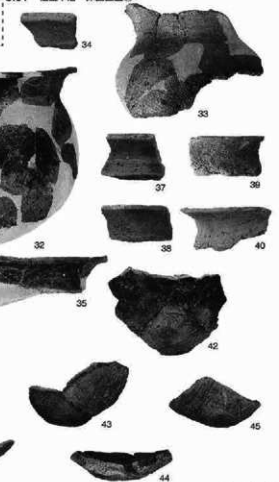


竇玉未成品 (左から 855・860・実寸)

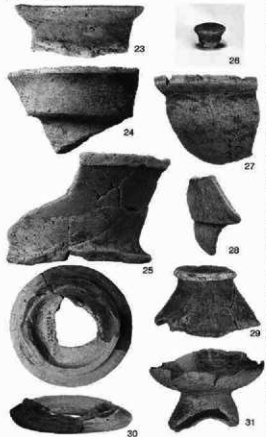
SI01 覆土最上～上層



SI01 覆土下層～床面直上①



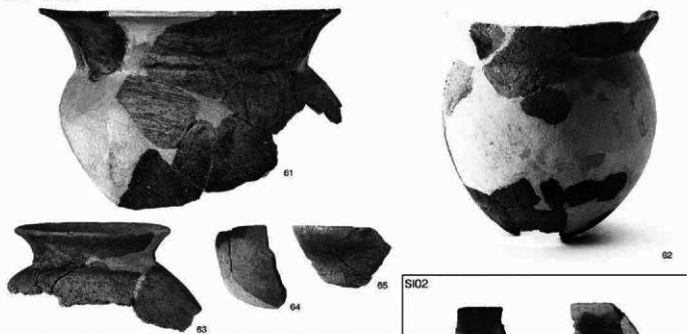
SI01 覆土中位



SI01 覆土下層～床面直上②



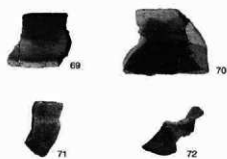
SI01 屋内土坑



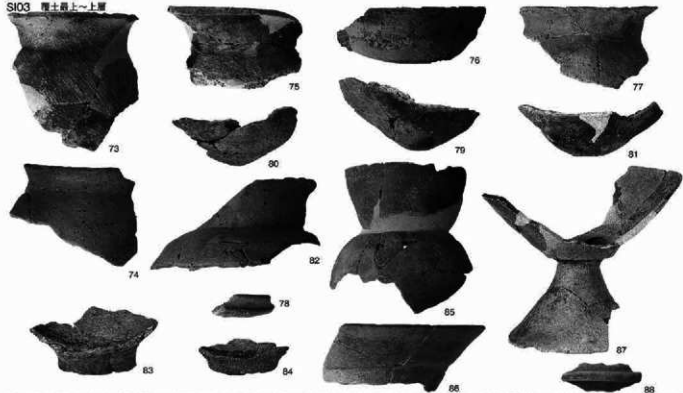
SI01 貼床内～掘形覆土



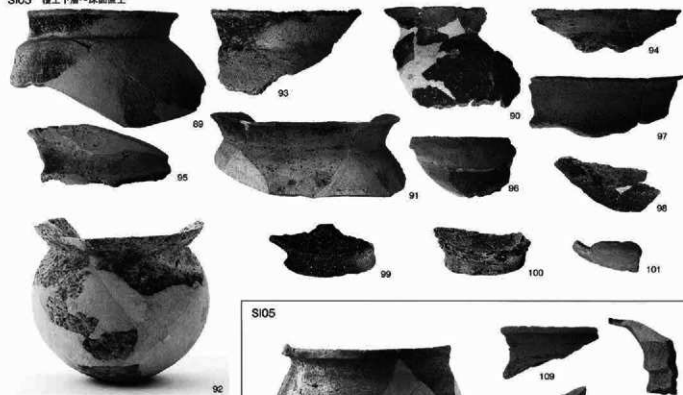
SI02



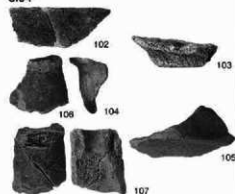
SI03 覆土最上～上層



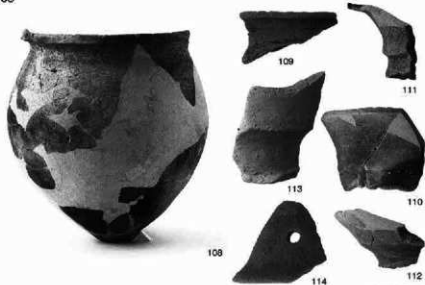
SI03 覆土下層～床面直上



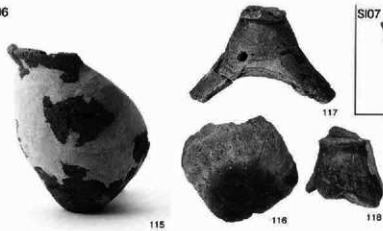
SI04



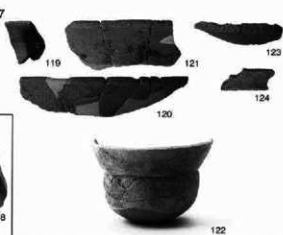
SI05



SI06



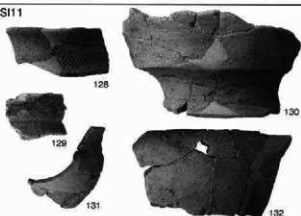
SI07



SI10



SI11



SB03



SI12



SI13



SB01



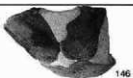
SB04



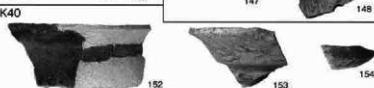
SB06



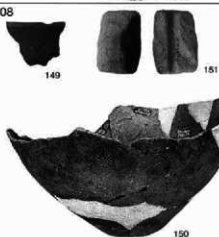
SB05



SK40



SB08



SK35



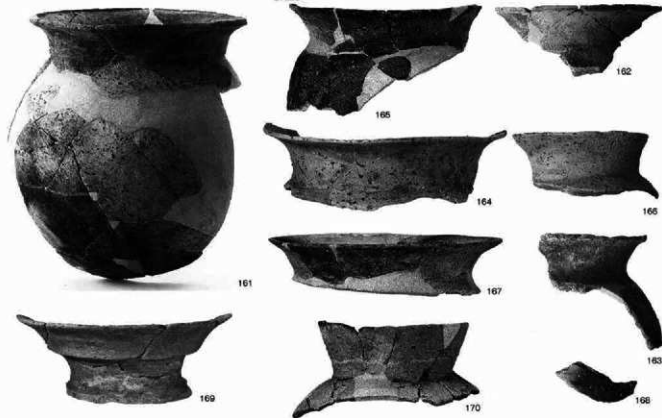
SK21



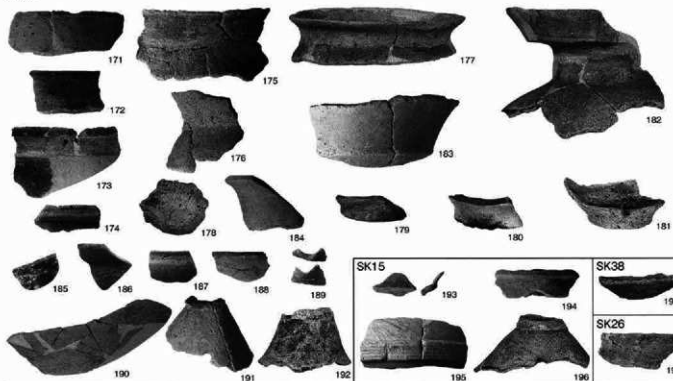
SK18



SK23



SK34



SK15



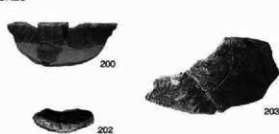
SK38



SK26

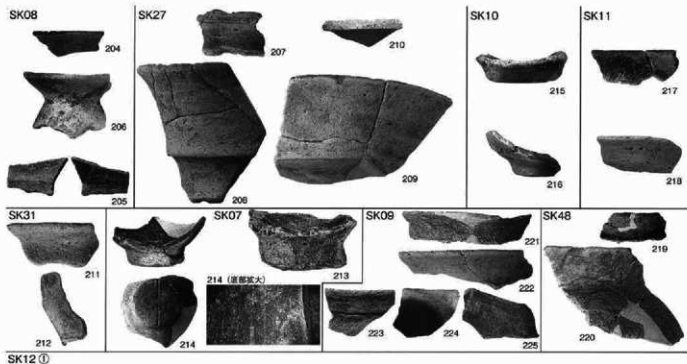


SK28



SK16





226



230

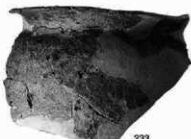


227



231
すべて [1:3]

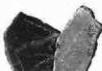
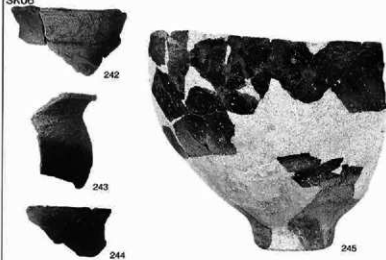
SK12 ③



SK04



SK06

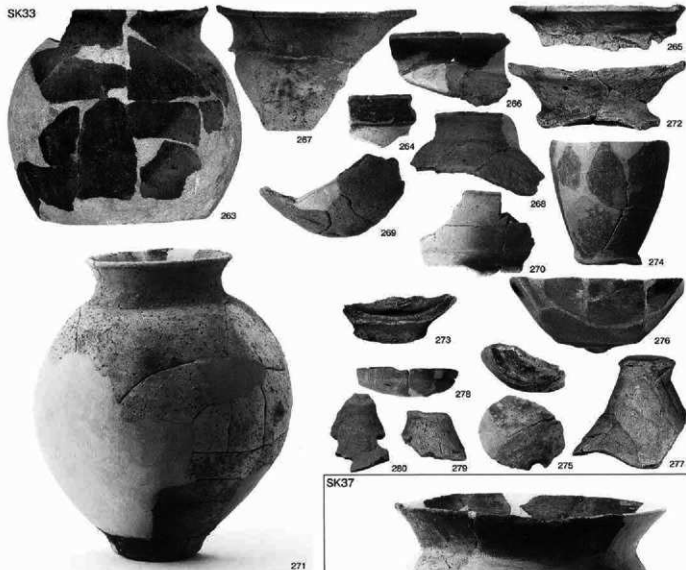


SK05



すべて [1:3]

SK33



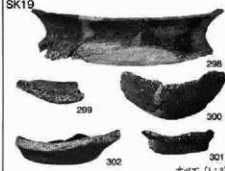
SK37



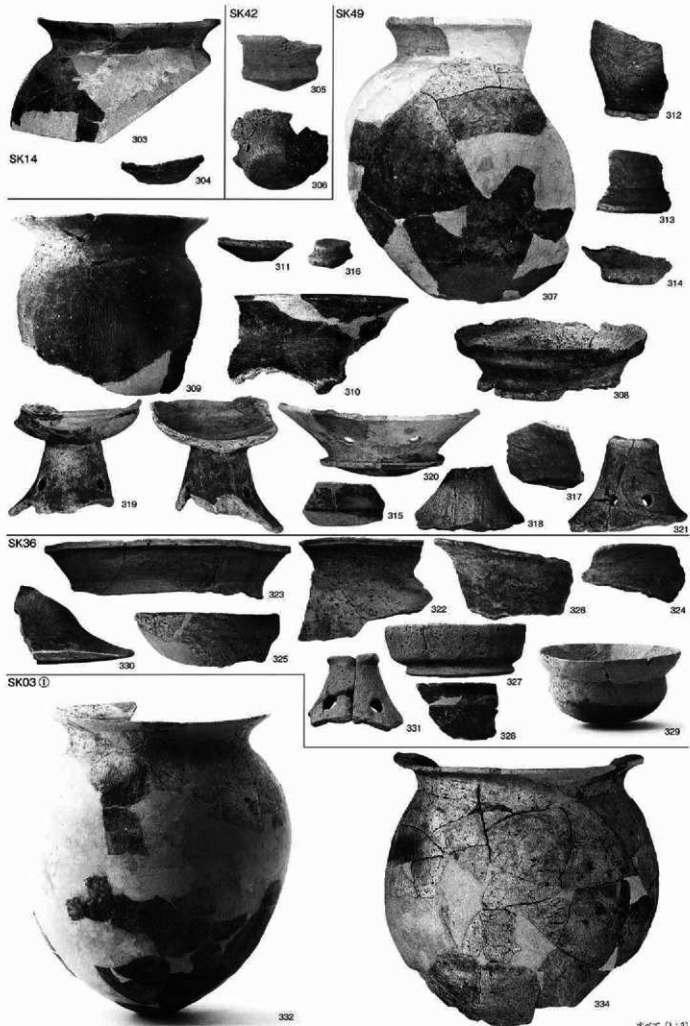
SK02



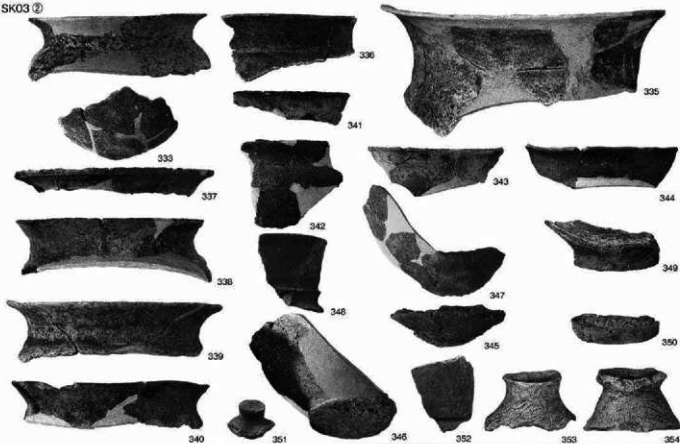
SK19



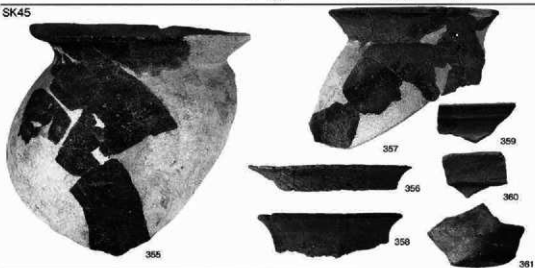
すべて [1:3]



SK03 ㊦



SK45



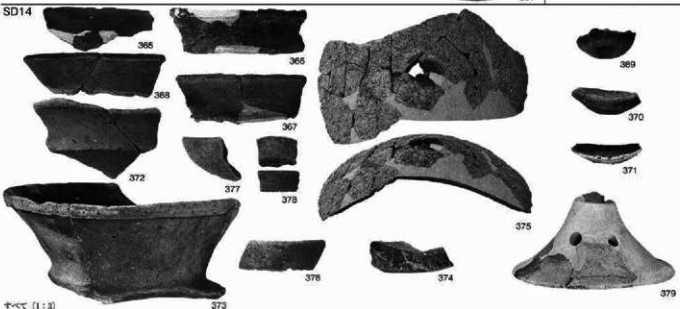
SK46

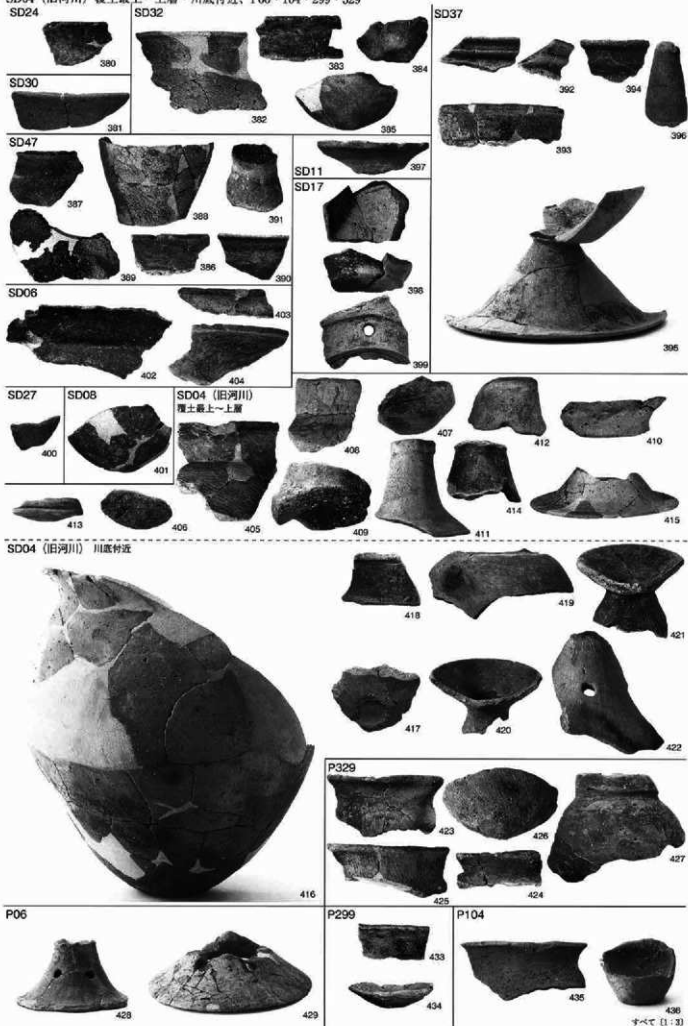


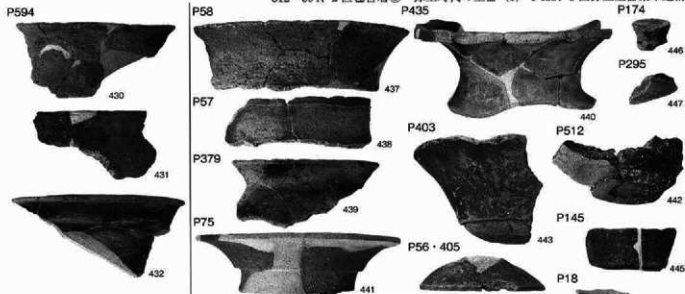
SK47



SD14







3区弥生土器集中遺構



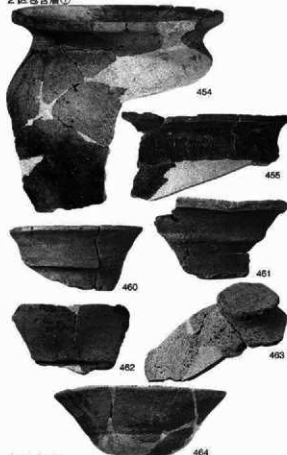
450



P380

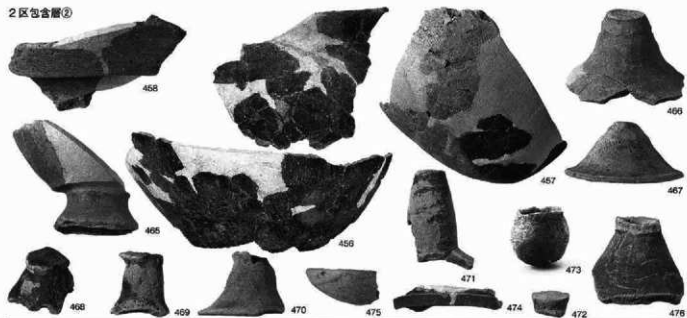
444

2区包含層①



459

2区包含層②

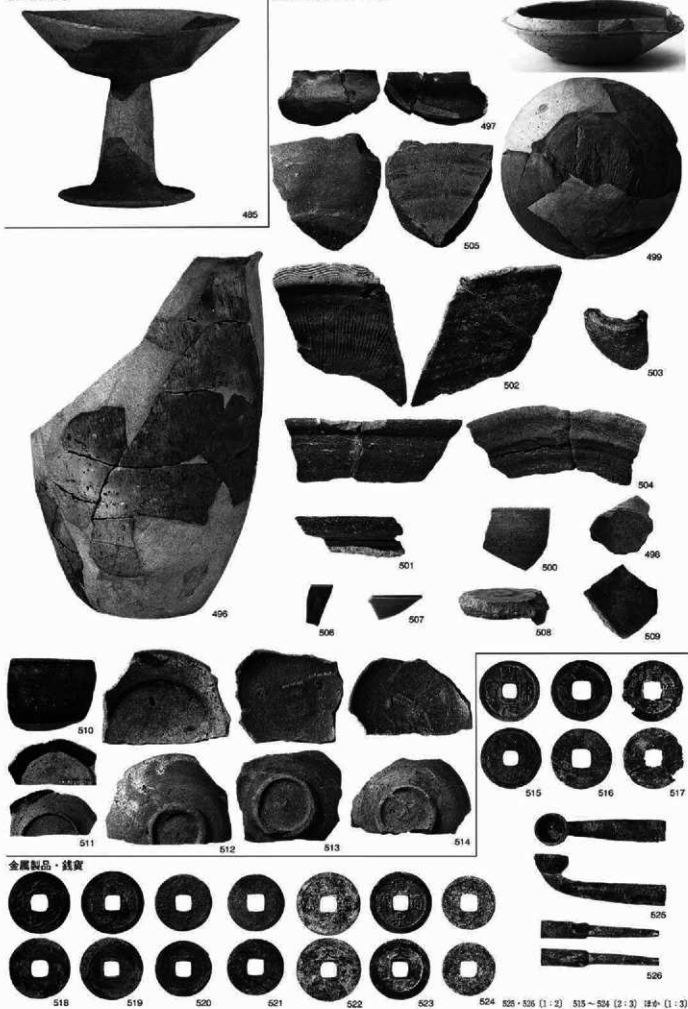


3区包含層①

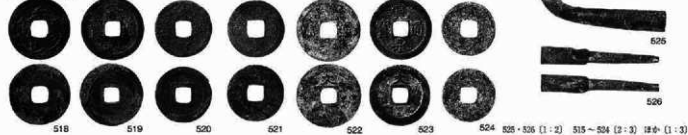


3区包含層②

古墳時代後期以降の遺物

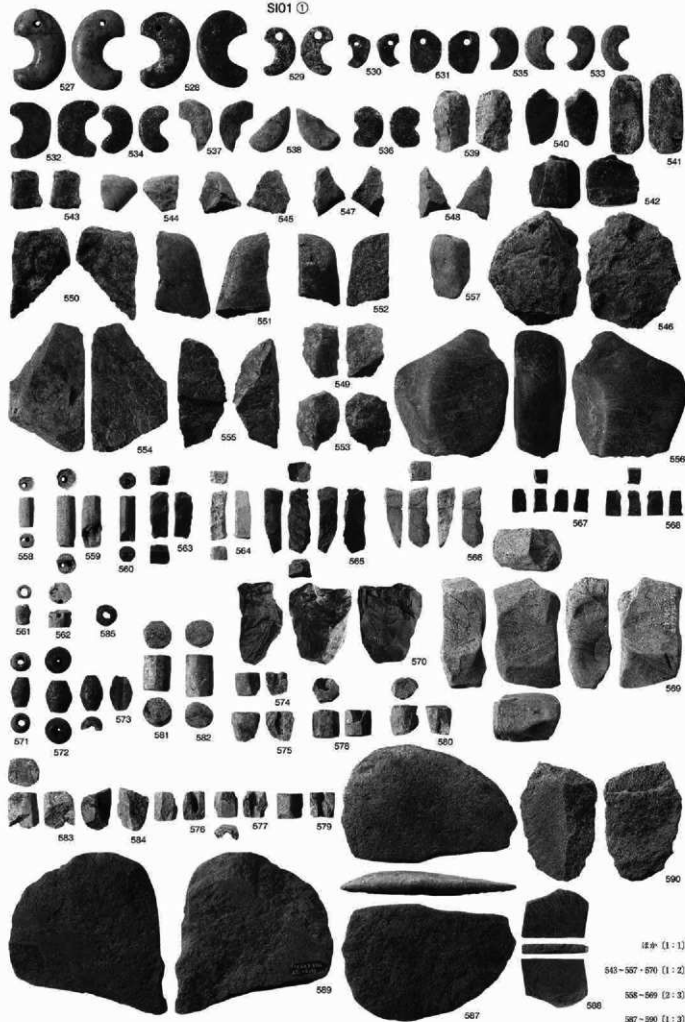


金属製品・銭貨



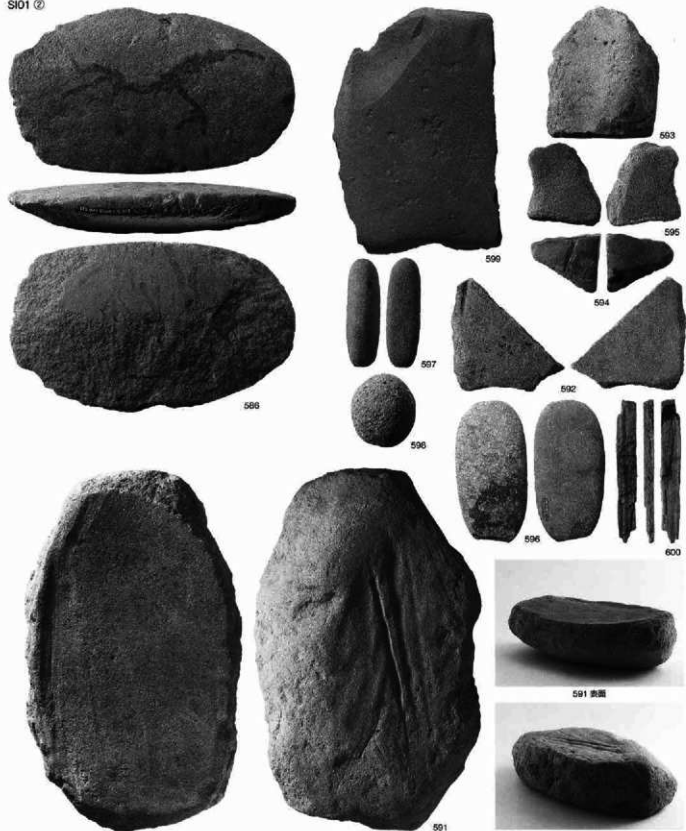
524 525・526 (1:2) 515～524 (2:3) 518 (1:3)

SI01 ①



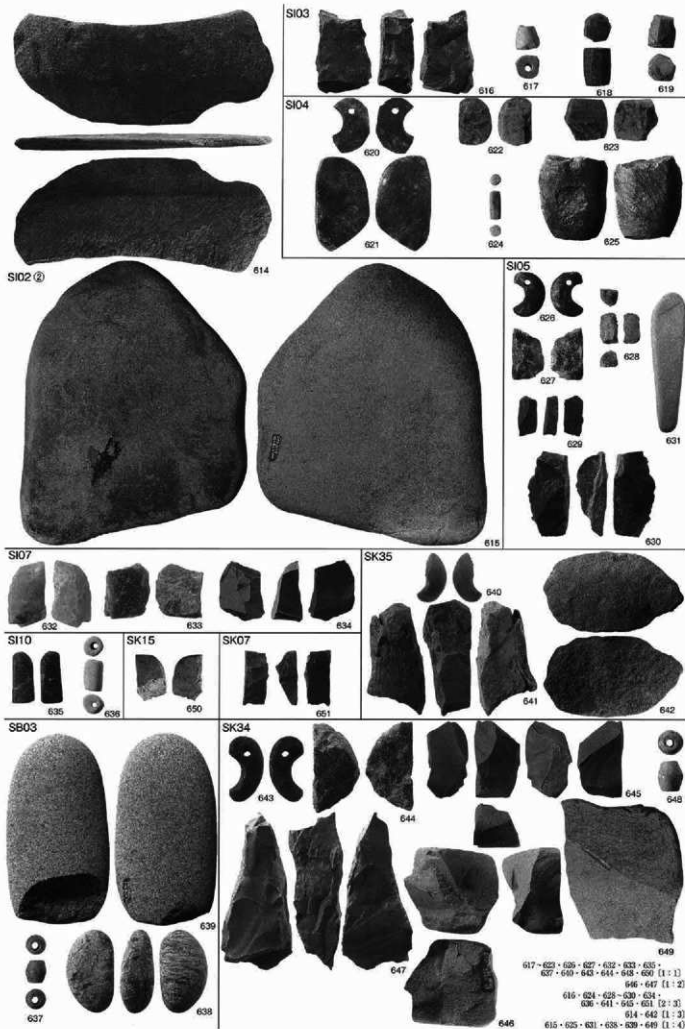
1/1 (1:1)
 543-587-570 (1:2)
 588-589 (2:3)
 587-590 (1:3)

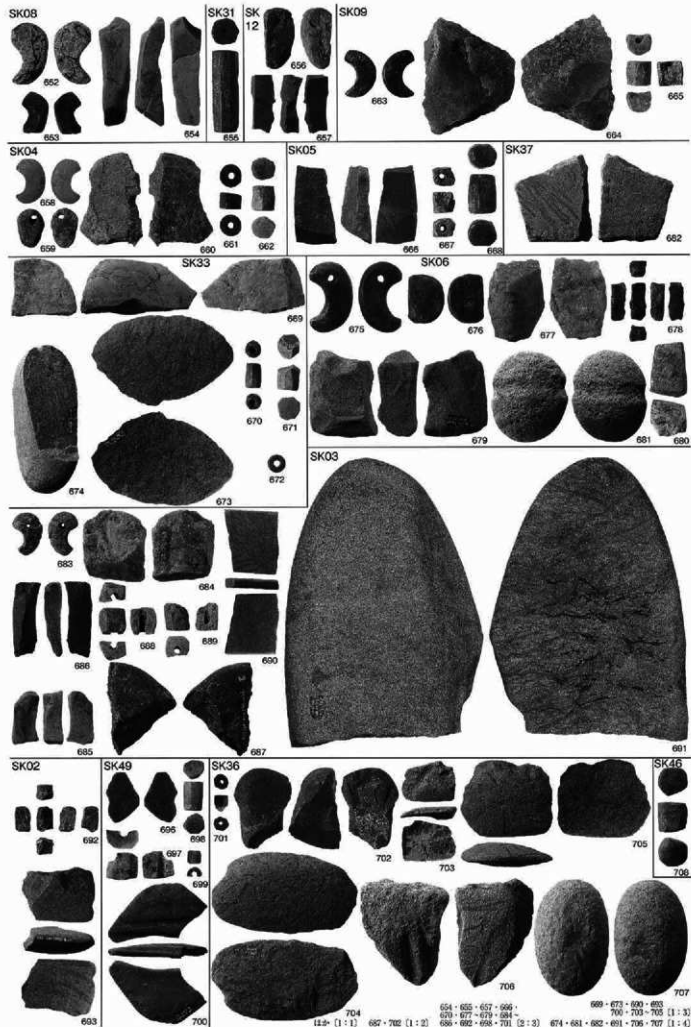
S101 ②



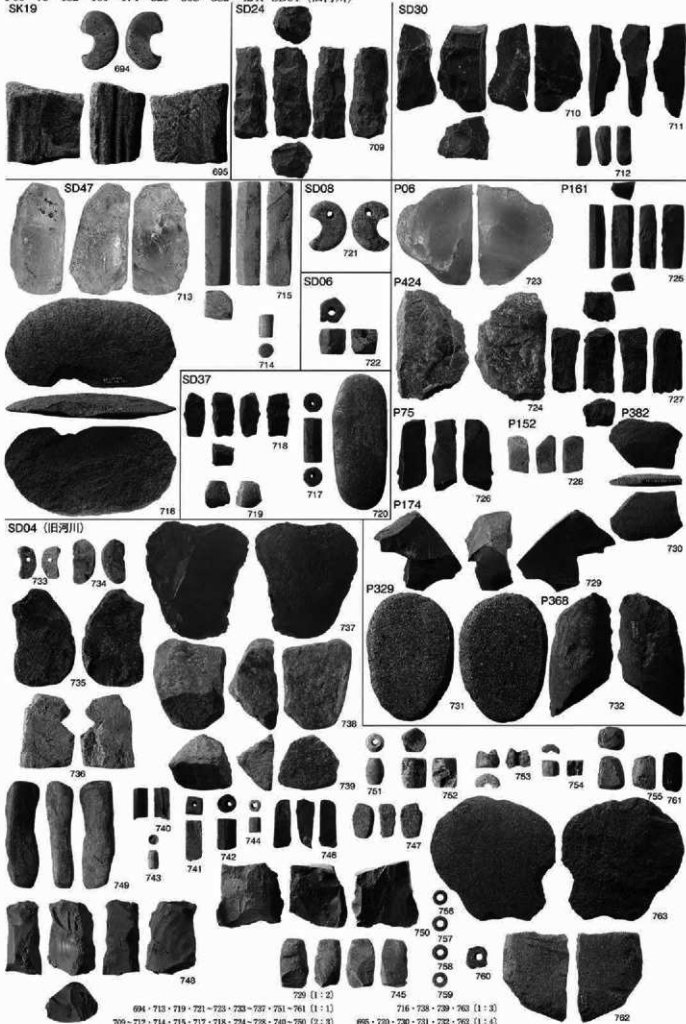
S102 ①







654・655・657・666・693・677・679・684・686・692・696・701 (2:3) 699・673・690・693 700・703・705 (1:1:3) 674・681・682・691・706・707 (1:4) 704 12.5 (1:1) 687・702 (1:2)

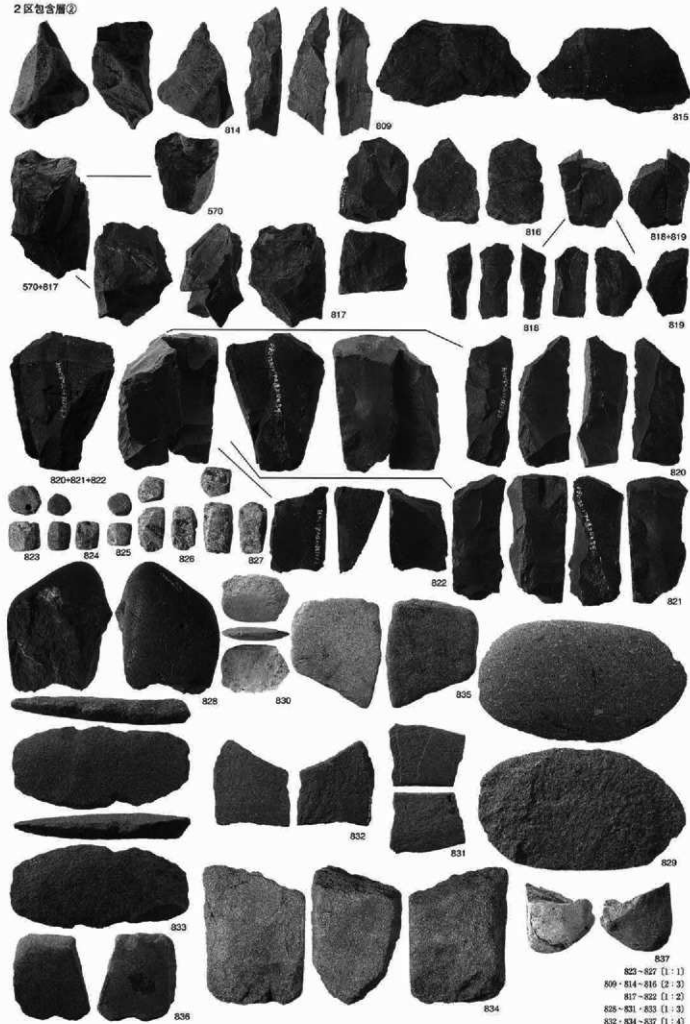


694・713・719・721・723・733・737・761・761 (1:1)
 709・712・714・715・717・718・724・728・740・780 (2:3)
 716・738・739・763 (1:3)
 695・720・730・731・732・763 (1:4)

2区包含層①

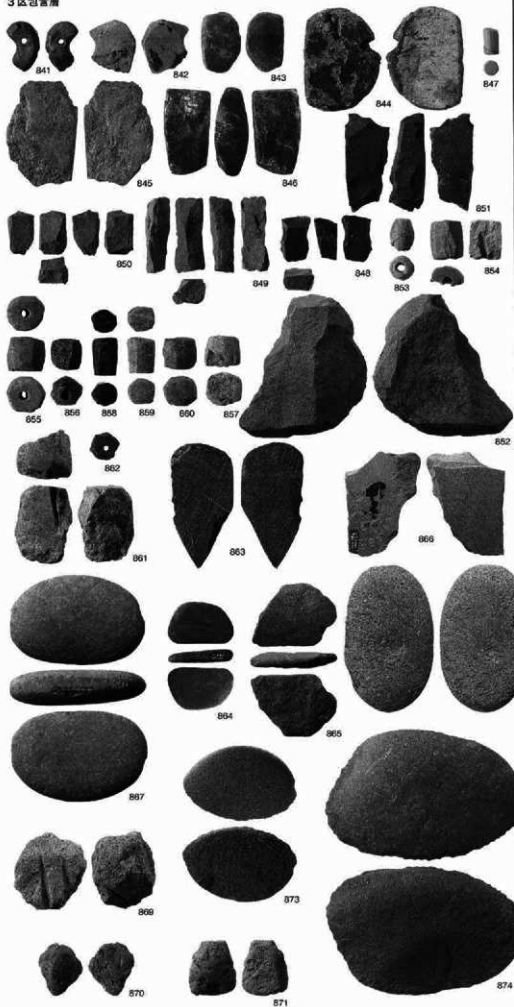


2区包含層②



823-827 (1:1)
 809-814-816 (2:3)
 817-822 (1:2)
 828-831-833 (1:3)
 832-834-837 (1:4)

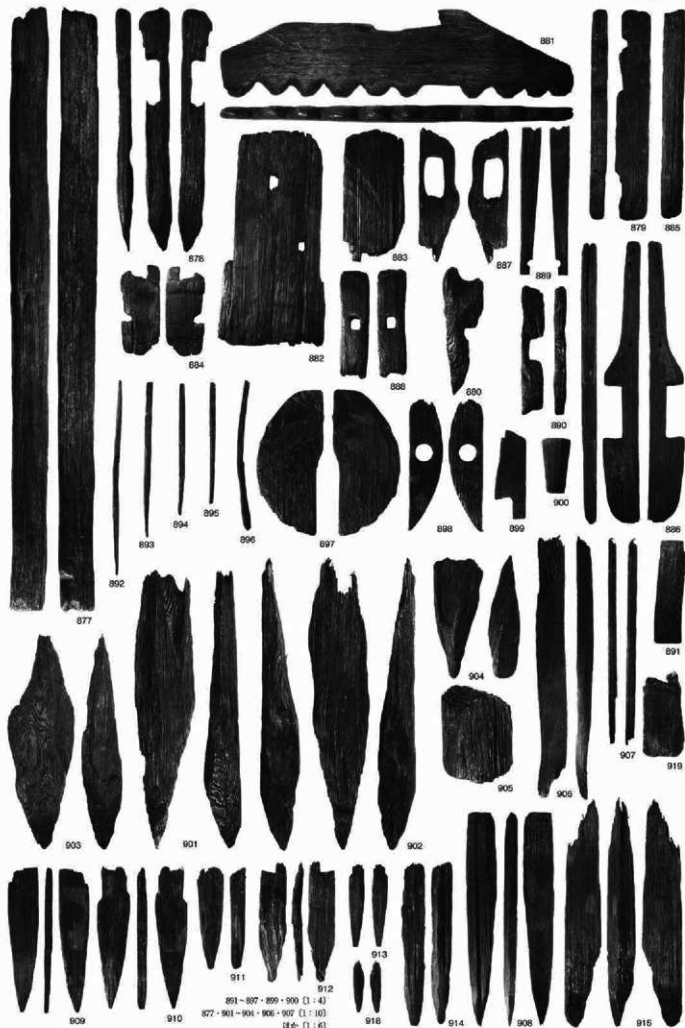
3区包含層



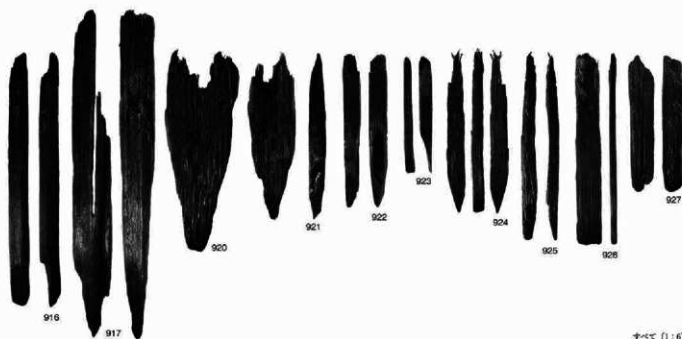
2区包含層③



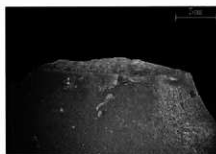
841-846・853-862 [1:1]
 839・847-851・863 [2:3]
 838・852・864・866・873・874 [1:3]
 840・865-872・875-876 [1:4]



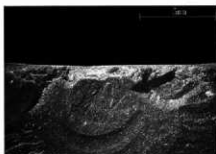
891-897・899・900 [1:4]
 877・901-904・906・907 [1:10]
 [26 [1:6]



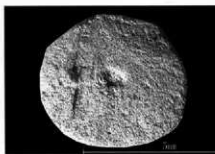
すべて (1:1)



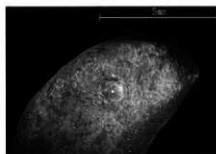
碧玉素材 (810) 打点部拡大



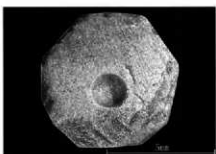
碧玉素材 (820) 打点部拡大



碧玉未成品 (714) 「当たり」裏



碧玉未成品 (767) 「当たり」裏



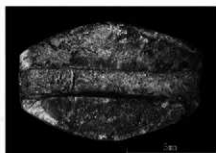
碧玉未成品 (762) 穿孔部



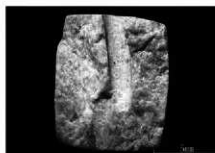
碧玉破損品 (740) 穿孔部断面



碧玉破損品 (659) 穿孔真い違い断面



碧玉破損品 (573) 穿孔部断面



碧玉破損品 (654) 穿孔部断面

報告書抄録

ふりがな	みなみおしあげいせき						
書名	南押上遺跡						
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書						
巻次	XⅧ						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第220集						
編集者名	小池勝典・水落雅明・田代郁夫・有馬多恵子・植木紀子（以上、株式会社 吉田建設） 高橋 敦・齊藤崇人・伊藤良水・馬場健司・矢作健二（以上、パリオ・サーヴェイ株式会社） 藤巻正信・高橋保雄（以上、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）						
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社 吉田建設見附支店						
所在地	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981 株式会社 吉田建設見附支店 〒954-0082 新潟県見附市柳橋町266番地21 TEL 0258 (66) 3003						
発行年月日	西暦2011（平成23）年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みなみおしあげいせき 南押上遺跡	新潟県糸魚川市 大字 南押上2 丁目地内	15216 274	37度 2分 53秒	137度 52分 43秒	20080407 ～ 20081212	4,000㎡	北陸新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
南押上遺跡	集落跡	古墳時代 前期	竪穴建物 3 平地建物 10 掘立柱建物 9 土坑 45 溝 28 ピット 約450	土師器、玉作関連資料 (ヒスイ製・蛇紋岩製・滑石製・ 瑪瑙製の勾玉・未成品、緑色凝灰 岩製の管玉・未成品、蛇紋岩製・ 滑石製の霰玉・未成品、滑石製の 白玉・未成品、 各石材の原石・石核・剥片・チップ 類、砥石・筋砥石・内磨砥石・ 軽石製研磨具・磁石・台石・凹石 等の工具類) ガラス玉、石器（磨石・石錘・横 刃形石器・剥片・石核） 木製品	古墳時代前期中葉～ 後葉の玉作集落。ヒ スイ製勾玉製作遺跡 の空白期を埋める重 要資料。多様な石材 を用いた玉作。建物の 多様性と規則的な 配置。県内初の確認 例となる古墳時代前 期の石圍が、霰玉の 製作工程を迫る玉 作遺跡としても、全 国的に珍しい。		
	遺物 包含地	弥生時代 後期 古墳時代 中～後期 奈良～平安 時代 室町～戦国 時代	弥生土器集中遺 構 ピット		弥生土器、土師器、須恵器、青磁、 珠洲焼、唐津焼、越中瀬戸焼 石器（横刃形石器・剥片・石核）、 石製模造品 木製品（柄皿・曲物・鬚串状木製品・ 箸状木製品・杭・建築部材・不明 木製品） 金属製品、銭貨		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第220集

北陸新幹線関係発掘調査報告書XⅧ

南押上遺跡

平成23年3月30日印刷
平成23年3月31日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250(25)3981

FAX 0250(25)3986

印刷・製本 株式会社 文化

〒954-0057 新潟県見附市新町3丁目6番14号
電話 0258(62)0558